
時と宇宙（そら）を越えて～番外編～

琅來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時と宇宙を越えて（番外編）

【Nコード】

N3881S

【作者名】

琅來

【あらすじ】

これは『時と宇宙を越えて』の番外編 兼 伏線回収編 兼 過去編です。本編の方を読んでからの方が分かりやすいと思います。

序章「曙光の姫君」

父達の、感慨に満ちた瞳に、マリミアンは背筋を伸ばした。彼女に期待されていることは——とても大きく、重い。

けれど、それだけではない高揚感が今、彼女の胸を満たしていた。

「マリミアン……」

祖父である、数年前に引退した前戦祝大臣^{せんしゅくだいじん}、カウサン・ミアーチエ・スウェールに名を呼ばれ、マリミアンはその場に軽く膝を付いた。

カウサンは、感動で軽く瞳を潤ませながらも、マリミアンの額に手を翳す。

これは、儀式だ。

マリミアンにとって——そして、この場に居並ぶスウェール家の者達にとって、とても重要な。

「マリミアン・カナージェ・スウェール。其方はこれより、花鶯^{かおうこく}国第一王子、花雲恭峯慶王子殿下の元に嫁ぐ」

「……はい、御祖父様」

マリミアンは、胸の前で手を組んで答える。

「其方はこれより、峯慶王子殿下の妾^{めかけ}となる。王籍名は——花雲恭由梨^{ゆりあ}亜^{ゆりあし}。由梨^{ゆりあ}亜^{ゆりあし}と、これよりは呼ばれることとなる。心せよ。そして、峯慶王子殿下に心から尽くし、壮健な子を生せ」

「はい。御祖父様。心得ました」

その言葉に僅かな気恥ずかしさが覗くのは、まさに箱入り娘として育てられてきたからか。

もう、二十三歳であるとは思えないような初々しさである。

カウサンが翳していた手を戻すと、マリミアンはゆっくりと立ち上がった。

そして、その立ち上がったマリミアンに、次々と親族達が言祝ぎを与える。

最年長者である曾祖母を筆頭とし、大叔父^{おおおじ}や大伯母^{おおおば}などが、次々とマリミアンに祝辞を述べる。

やがて、その順番が兄弟姉妹達に移り変わった。

マリミアンは、その受け答えをしながらも、どこか頭の芯はぼんやりとしていた。

二十九歳の異母兄^{あに}、シャーウィン・リシエル・スウエール。

二十七歳の異母姉^{あね}、シュメリアン・リシエル・スウエール。

二十五歳の兄^{いもうと}、シャーキヌ・カナージエ・スウエール。

二十歳の異母妹^{いもうと}、シュリエル・ハミシエ・スウエール。

十八歳の異母妹、アミエル・ハミシエ・スウエール。

十七歳の異母弟^{おとうと}、シャーリン・ミシエル・スウエール。

マリミアンは、七人兄弟だった。

けれど、大勢の兄弟というのは、貴族以外には滅多にいない。

それというのも、花鶯国の女性が産める子供の数は、基本的に三人までからだ。

別に法律で定まっている訳でもないし、それ以上産もうと思えば産めるのだが、そうすると身体を壊したり、流産してしまったりする確率が格段に跳ね上がる。

だから、いつの頃からか、花鶯国の女性は二、三人程度しか子供を産まなくなっていたのだ。

何と、数百年程前、『花鶯国人の女性の身体　く過多妊娠・出産のリスク』という本が大ベストセラーになった程、花鶯国人にとってはそれが普通のことであった。

そうすると、一夫多妻制が許されている貴族でなければ、大勢の兄弟というのは持ち得ないのだった。

マリミアンは、いつの間にか、家族達の姿を眺めていた。

マリミアンはこれから、この花鶯国首都シャン克蘭にある王宮、カサミアン宮へ行く。

スウェール家の屋敷もシャン克蘭内にあるが、城と貴族の屋敷では、壁が存在する。

距離は近いけれど、心の、距離が。

これから異母姉達に会うことは、少なくなってしまうのだろう。
シャーウィンはスウェール家を継ぐ貴族として、シャーキヌは貴族出身の官吏として城に仕えているので、もしかしたら会う機会はあるかも知れない。

これは、父達も同様だ。

けれど、異母姉や異母妹達、そして異母弟とは、もうほとんど会えないかも知れない。

ツキリと、胸が痛む。

だが、自分が峯慶に嫁がないという手段はなかった。

現王の花雲恭籐とうれんの妾は、スウェール家が代々戦祝大臣を継いでいるように、代々政財大臣せいざいだいじんを継いでいるシャリク家の娘だ。

先王の花雲恭癒璃ゆりあは元々第二王位継承者で、彼女には異母兄がいた為、本来ならその異母兄と結婚して癒璃ゆりあ后と呼ばれていたはずだった。

けれど、その異母兄が病で亡くなった為、第一王女で第二王位継承者である癒璃ゆりあが王位に即いたのだった。

その影響で、本来なら癒璃ゆりあの異母兄に嫁ぐ予定だったスウェール家の娘は、別の相手と婚姻を結んでいる。

そして、先々代の王にはシャリク家の娘が嫁いでいて、三代前の王には、代々宗賽しゅさいだいじん大臣を継いでいるウレット家の娘が嫁いでいる。歳の見合う娘がいなかったというのは仕方がないことだが、貴族の中で最も位の高いスウェール家なのに、マリミアンの前に王に嫁いだスウェール家の娘は、四代前まで遡らないといけないのだ。

実に、軽く百年以上は経過している。

だから、スウェール家のマリミアンに対する期待は、並外れた物があった。

マリミアンはそれを重荷に感じながらも、心が弾むを感じた。

それは、王家に嫁ぐという名誉からでも、国母になるという野望からでもない。

愛しい人の、傍にいられること。

そして、もしかしたら一生手の届かなかったかも知れない人と心を通わし、子を生じたとしても、決して咎められず、誰からも祝福してもらえろという立場になれるということ。

その二つからだった。

マリミアンは、逸る心を抑えるように、そつと瞳を閉じた。

第一章「出逢い」

マリミアンがその少年と初めて会ったのは、八歳の時のことだった。

相手は十一歳で、まだ八歳だったマリミアンにとってはお兄さんの年齢だった。

普通に考えれば、恋愛の対象にもならないようなお互い。

けれど、二人は会った途端に一目惚れをした。

そして、会ったその日には、二人きりで会話を交わすこともできた。

何故なら、マリミアンが少年——花鶯国第一王子、花雲恭峯慶と会ったのは、大人達がわざわざそのように仕組んだからだ。

峯慶と歳の近いマリミアンが、もし峯慶のことを嫌い、王家に入ることを嫌がった場合、一応婚姻の自由という建前がある以上、別の姫君を婚約者としなければならぬからだ。

その場合、早いうちにそういうことは分かっていた方が、色々と都合がいい。

この頃の峯慶は、マリミアンのように婚約者候補の少女達と会っていた。

普通は妃になる他国の王女、妾になる官封貴族の娘、というように身分の高い方から訪問するのだが、マリミアンは候補の中で最も幼かった為、峯慶と会うのは一番最後だった。

けれど、峯慶の婚約者候補達の中で、最も親族に期待されていたのはマリミアンと言っても過言ではないだろう。

それ程、マリミアンは産まれたその瞬間から、一族の期待を一身に集めていた。

だから、王子と会うのにかなり身構えていた。表情も、相当強張っていたと思う。

けれど、峯慶はそんなマリミアンに微笑み、

『良かったら、少しバルコニーで話しませんか？　ここは堅苦しくていけません』

と言ったのだ。

その途端、マリミアンの肩から力が抜け、自然な笑顔が零れた。のちに語り合った時に、峯慶はその時、かなり心臓がバクバクいて、隠し通すのが大変だったと苦笑していたくらいだった。

二人はそれからバルコニーに出て、一時間程会話を交わした。

峯慶は学校に通わずに、異母^{ていまい}弟妹達と共に家庭教師についていたので、マリミアンの通っている学校の話を知ることができた。

そしてマリミアンは、一度も足を踏み入れたことのない、絢爛豪華な王宮のことを知ることができた。

互いに自分のことや自分の身の周りのことを語り合い、いつの間にか一時間は過ぎていた。

その時間が来た時、峯慶は名残惜しそうに笑った。

そして、微かに頬を染めて、マリミアンに手を差し出したのだ。

『私は、貴女に私の婚約者になってほしいと思います。……貴女は、いかがですか？　……私と、婚約を結んでくれないでしょうか』

それは、たったの十一歳の子供とはいえ、明らかなプロポーズだった。

マリミアンはそれを悟り、同じく頬を染めながら、峯慶の差し出した手に、自分の小さな手を絡めた。

『……はい。わたくしも……わたくしからも、お願いします、峯慶王子殿下。……喜んで、貴方の婚約者にならせて頂きたいですわ』

まだ八歳と十一歳の子供だったが、二人は本気だった。

峯慶が城に帰って以降、マリミアンの口癖が、

『わたくし、早く峯慶殿下と結婚したいです！』

になってしまったのは、言うまでもない。

この頃のマリミアンはかなりのお転婆で、屋敷中を走り回るなど日常茶飯事、庭の木に登ったり、厨房に入り込んで料理をつま

み食いをしたりなどもよくやっていた。

結果、両親や義母達ははや異母兄達あにに怒られることはしょっちゅうで、小さな怪我也よくしていた。

けれど、峯慶と初めて会ったこの後は、それまでとは打って変わって大人しくなってしまった。

いや、峯慶という大好きな人ができたおかげで、より女の子らしいことに強い興味を持つようになった、と言うべきか。

カタン、と音がして、マリミアンは我に返った。

いつの間にか、屋敷の外まで出て来ていたようだ。

マリミアンは、最後に振り返った。

ここから出たら……滅多に、ここには帰れない。

それは、嫁ぐ女性としては当たり前のこと、これからのこともとても心待ちにしているマリミアンだったが、それでも生まれ育ってきた家を出るのは、物悲しさがあった。

微かな胸の痛みを押さえ、マリミアンは目の前の家族達に微笑んだ。

家族達も笑って、マリミアンに行くようにと促す。

マリミアンは気を引き締めると、歩み出した。

初めて足を踏み入れた王宮は、煌びやかな所だった。

マリミアンの生家も、花鶯国では五本の指に入る程豪華で豪華な屋敷だが、ここはその何倍もキラキラしている。

とても強い好奇心が湧いてきたが、マリミアンはそれを抑え込むと、真っ直ぐと前を見詰めて歩みを進めた。

後宮の中を歩くと、恐らく侍女なのだろう女性達と侍従なのだろう男性達が次々に膝を付いていく。

その中をマリミアンは、ゆっくりと進んで行く。

やがて、一つの扉が現れた。

ここが、新しいマリミアンの私室となるのだ。

部屋に入ると、そこにはマリミアンと歳の近い女性達が膝を付いていた。

彼女達とマリミアンは、昔からの顔見知りだ。

何故なら、彼女達上級侍女は、代々その主の従姉妹四人が選ばれる慣習だからだ。

ここにいるのは、二十八歳で母方の従姉、リーシェ・マリヌ・キルテット、二十四歳で父方の従姉、ミリュア・ルリアン・トーチエ、二十歳で父方の従妹、ルーシェ・クリル・フュート、同じく二十歳で父方の従妹、アルア・ルザート・ジョートだった。

この風習は、マリミアン達貴族にとっては何でもない。

大勢の兄弟がいるから、従姉妹はそれこそ数え切れない程いるのだ。

けれど、庶民にとっては違う。

特に、峯慶の最女さいじょとなるミート・シューウエルには、父方と母方の従姉妹は合わせても二人しかいなかったので、特例として再従姉妹が二人選ばれたくらいだ。

マリミアンは、思わずうんざりして目を閉じた。

花雲恭家にまつわる事柄は、どこを向いても慣習、慣習、慣習だらけ。

慣習という言葉で雁字搦めになっている。

しかも、最低でも数百年は続いてきているという、筋金入りの慣習だ。

ここで自分のような小娘一人が、嫌だ、そんな慣習はなくしてしまえと言っても、それでも慣習だからと誰も取り合ってはくれないだろう。

つまり、慣れるか諦めるかしかないのだ。

マリミアンは、溜息を噛み殺した。

そして、目の前で跪く従姉妹達に声を掛けた。

「……久し振りですね、リーシェ、ミリュア、ルーシェ、アルア」
彼女達は上級侍女になる為、先程の場にはいなかった。

だから、この挨拶で間違っではない。

ついこの前までは敬語も何もなしに、気楽に語り合っていた彼女達の様子に、マリミアンは胸が痛むのを抑える。

悲しいのは、自分だけ。

距離が開いて、ちよつとだけ寂しいだけ。

だから――

「……はい。お久し振りに御座います、由梨亜ゆりあしやう妾様。わたくし達は、これより由梨亜妾様の上級侍女として御仕えしてゆくこととなります。どうぞ、これより宜しく御願致します。そして、わたくしリーシェは、由梨亜妾様の筆頭侍女となりますわ」

「ええ。宜しく御願致しますわ、リーシェ」

マリミアンはそう言うと、ルーシェに笑い掛けた。

「ごめんなさいね、ルーシェ。貴女を、旦那様と引き離してしまつて……」

上級侍女は、基本的にずっと後宮で過ごし、年に一、二回のみ里帰りが許される。

けれど、結婚してはならないという決まりも風習も慣習もないので、結婚している者も何名かいる。

このルーシェも、その一人だった。

ルーシェは、従姉が氣遣ってくれたという嬉しさと、主にこんなことを言わせてしまったという焦りに、おたおたと表情を変えた。

「い、いいえ、そんな！ わ、わたくしがマリミー……いえ、由梨亜妾様の上級侍女になるということは、幼い頃より決まっていたことですし、夫も納得した上で、わたくしと婚姻を結んだのですから！ ですから、マ――由梨亜妾様に、御氣遣い頂くことでは御座いませんわ！ そ、それに、わたくしは第二妻ですから、第一妻ならばともかく、特に問題は御座いませんし、それに……ええつと！」

あまりに混乱し過ぎて、既に何を言いたいのかもあやふやになってきた。

第一、第一妻なら駄目で第二妻ならいいという訳でもない。

かなりの混乱状態にあるルーシェを、同い年で最も仲のよい従姉妹同士であるアルアが宥めた。

「落ち着きなさい、ルーシェ。そんなに混乱しなくても、由梨亜妾様は、怒ってなどいないわ」

そして、マリミアンに頭を下げた。

「マリミアン様、改め由梨亜妾様。これより、わたくし達上級侍女、誠心誠意貴女様に尽くす所存に御座います。これより、どうぞ宜しく御願致しますわ」

アルアは、二十歳にしてはとても大人びていて、醒めてもいる女性だ。

だからこそと言うべきか、このような時には、堅苦しい言動が厭味になるくらいに似合っている。

「ええ……わたくしからも、宜しく御願致しますわ」

マリミアンはそう言うのと、笑顔を作った。

これから、彼女達にはずっと『由梨亜妾』と呼ばれ、『マリミアン』と呼ばれることは、もう二度とない。

そして、彼女達が自分に敬語を使わなくなる日も、永遠に来ないだろう。

それ程までに、マリミアンの身分は絶対的であった。

その時、扉が叩かれる。

「……はい。どなた？」

「失礼致します、マリミアン様」

その言葉に、ルーシェ達が眉をしかめるのが見えた。

けれど、マリミアンは苦笑するだけに留める。

「ええ。どうぞ」

「失礼致します」

入って来た初老の女性は、中級侍女の服を身に纏っている。

恐らくは、総下^{そうげ}を介した王家の血を継ぐ庶子、もしくは庶子の子孫。

けれど、ルーシェ達は彼女のことが気に食わないのだ。

理由は、マリミアンのことを『マリミアン』と呼んだから。

それは、『マリミアン・カナージェ・スウェール』という女性が、まだ貴族の身分であることを、妾ではないことを意味する。

だが、マリミアンはまだ峯慶と結婚していないので、貴族のご令嬢という扱いは至極当たり前なのだ。

ただ、リーシェ達の気が早過ぎて、そしてそれだけ強くマリミアンのことを思っていてくれるというだけで。

「これより、峯慶殿下の婚約者方の、御茶を兼ねての親睦会を開くこととなっております。就きましては、その御参加を伺いに参りました次第に御座います」

そう言って頭を下げる女性に、マリミアンは頷いてみせた。

「了解致しましたわ。喜んで、参加させて頂きたく存じます」

「そうですか。それでは、その旨を御伝えして参ります故」

「ありがとうございます。御苦勞様ですわ」

初老の女が出て行くと、マリミアンは思わず溜息をついた。

峯慶の后となる沙樹奈第一王女さきとは一度も会ったことはないが、自国の第一王女だから顔は知っている。

けれど、他の人達は一度も顔すら見たことがなかった。

まあそれは、幼い頃から要らぬ争いをさせない為だとは思うのだが。

それはさておき、さすがに一度も言葉を交わさないまま、同じ峯慶の妻の立場に納まらせる訳にはいかないのだろう。

だからこれから、恐らく峯慶と結婚した後も、こうした妻達のお茶会は開かれることになるのだろう。

まあ、他の王族達も参加することにはなるだろうが。

マリミアンは峯慶のことが好きでよく考えてはいたものの、逆にこうして同じ立場に立つ女性達のことは、考えたことがなかった。

それに、これが真正正銘の初対面だから、彼女達が峯慶のことを、そして自分のことをどう思っているのかも全く分からないのだ。

気が重い。

かなり、憂鬱な気分に陥ってしまう。
マリミアンは、密かに溜息を一つついた。

どこことなく重い気持ちで親睦会へと足を運んだマリミアンだったが、すぐにそれはほとんど払拭された。

既に来ていた沙樹奈に、温かく迎えられたからだ。

「あら？」

沙樹奈はそう言って小首を傾げると、すぐに立ち上がった。

「貴女が、マリミアン・カナージェ・スウェールですね？ 御初に御目に掛かりますわ。わたくしは花雲恭沙樹奈です」

「ええ。初めまして、沙樹奈王女殿下。宜しく御願ひ致しますわ」
マリミアンが簡単な挨拶を返した後、沙樹奈がそれに答える前に、続々と他の女性達も入って来た。

六人が揃って机に付き、侍女達がお茶の準備を終えて退場した後、一応最も身分の高い沙樹奈が口を開いた。

「さて……それでは、自己紹介から始めましょうか。わたくしは、第一王女、第四王位継承者の花雲恭沙樹奈ですわ。二十五歳です。峯慶御異母兄様と婚姻を結んだのちは、沙樹奈后と名乗る予定となっております。つまりは、后ですわね。どうか、宜しく御願ひ致しますわ」

沙樹奈はそう言うと、促すように、いかにも高慢ちきそうな様子で座っている豪奢で見事な金髪の巻き毛を持つ女性を窺った。

「ああ……次は、わたくしですのね」

その女性は、少し気怠げにお茶を口に含むと、ゆっくりと口を開いた。

「わたくしはミオメス国第三王女、ミアン・ストールですわ。ミオメス国では基本的に女性に王位継承権がないので、わたくしには王位継承権はありません。歳は二十四ですわ。王籍名は花雲恭深沙祇みさぎ妃ひとなる予定です」

そしてそのまま、口を閉ざしてしまおう。

その態度は、明らかに友好的ではなかった。

その目付きも、どこか他の女性達を敵対視しているようであった。その中でも、特に――沙樹奈の辺りを。

そんな態度を取っているせいで、思わず場が白けてしまおう。

何とかその場を和まそうと、マリミアンは小さく咳払いをして自己紹介を始めた。

「わ……わたくしは、官封貴族で戦祝大臣職を世襲しているスウェール家の次女、マリミアン・カナージュ・スウェールと申しますわ。歳は二十三歳になります。王籍名は由梨亜となり、妾となりますわ。これから長くなりますが、宜しく御願致します」

丁寧と言ったマリミアンに、微かに場が和む。

続いて、マリミアンの丁度向かいの辺りに座っていた女性が口を開いた。

「わたくしは、イニアス地方を治めている地封貴族、マーモット家の四女のカナザ・アリアン・マーモット、歳は二十五です。王籍名は莉未亜、最貴となる予定ですわ。宜しく御願致します」

カナザは丁寧と言うと、軽く会釈して微笑んだ。

カナザは顔立ちが整っていて、美人と言うよりは可愛らしい。

だから、そんな様子がとてもよく様になっていた。

次に、沙樹奈から一步下がった辺りに座っていた栗色の髪的女性が口を開いた。

「わたくしは、この後宮で中級侍女として勤めて参りました、リオネス・ミシエル・ザートと申します。歳は二十六です。峯慶王子殿下と婚姻を結んだ後は、紗羅瑳と名乗る予定です。そして、最侍となりますわ。これから宜しく御願致します」

その挨拶に、沙樹奈は微笑んだ。

「ええ。リオネス。再従妹としても宜しく御願いね？」

その言葉に、ミアンはギュッと眉根を寄せ、マリミアンは目を瞠った。

「まあ。沙樹奈王女殿下とリオネス様は、再従姉妹だったのですか？」

「ええ。わたくしの母方の御祖父様とリオネスの父方の御祖母様は、異母兄妹なのですわ。また、そのリオネスの御祖母様は、のちに総下として出仕していらっやって、父方の御祖父様——あの偉大なる癒璃^{ゆりあ}御祖母様の夫となった斑都^{はんと}御祖父様との間に子を身籠り、リオネスの御父様を御産みになりました。ですからわたくしにとつてリオネスは、母方の再従姉であり父方の従姉でもあるのですわ。そして、リオネスにとってわたくしは、父方の再従妹であり従妹でもあります」

「まあ……前々から分かっていたことですが、血の繋がりが、やはり少々ややこしいですわね」

まだ自己紹介をしていない——恐らく最女となるだろう女性が呟くように言うと、沙樹奈は更に微笑んだ。

「あら？ 実はこの話にはまだ続きがありまして、リオネスの御母様は、わたくしの御父様の花雲恭藤^{とうれん}とは、王家の血筋で言えば再従姉弟なのです。ですから、わたくし達は三従姉妹でもありますわ。わたくしが詳しく把握しているのはここまでですが、他にも家系図を引っ張り出して探せば、恐らくはもっとあると思いますわ。まあこれは、特にはマリミアンさんとも言えることでしょうけれど。何しろ、スウェール家は歴代の妾のおよそ半分を輩出した家ですからね。我が王家と、深い関わりがなければ可笑しいですわ」

沙樹奈はそう言うと、ころころと笑った。

「さて……ごめんなさいね、後回しにしてしまつて。では、どうぞ？」

沙樹奈に話を振られて、微かに狼狽えながら女性は口を開いた。

「あ、は、はい……わたくしは、国学者の娘のミート・シューウェルと申します。歳は二十六です。王籍名は阿実^{あみ}亜^あとなります。宜しく、御願致します」

毎回最女には官吏や庶民の子女が選ばれているが、それでもそれ

は最女一人だけだ。

王侯貴族に囲まれて、居心地が悪いのだろう。

一応最女に選ばれるくらいだし、父親が国学者ということは、かなりの教育を受けてきているに違いない。

けれど、ここまで凄い人に囲まれることはなかったのだろうか、ガチガチに緊張している。

その様子を見て、マリミアンは思わず微かに笑った。

ミートのその様子は、マリミアンが初めて社交界の場に出た時の様子と類似していたのだ。

だから、思わず昔のことを思い出してしまった。

向こうの方が三歳も年上なのだが、とても緊張してしまっているので、とてもそうとは見えない。

マリミアンは、穏やかにミートに話し掛けた。

「御父上様が、国学者と仰いましたよね？ ミート様の御父上様は、一体どんな分野の御研究をなされているのですか？」

突然話し掛けられて、ミートは目を白黒させながら答えた。

「え、はい……わたくしも、そこまで詳しく把握している訳ではありませんが、確か王家の歴史や伝統文化などを研究していると……」

「まあ、王族のことを？」

「はい」

それに、沙樹奈が感心したように言った。

「ああ、それで先程、あのようなことを仰ったのですね？ それにしても、王族のことを、ですか……それはそれは、学者の中でも素晴らしい権威の方なのでしょうね。花雲恭家は、どちらかと言えば閉鎖的な王家ですし、王家はあっても立憲君主制を執っていますし……余程の方でないと、そもそも『研究』などできませんもの」

「そうですねえ。わたくしも、それは同感ですわ。もう歴史となっっているくらいの昔のことならば、少し規制は緩いようですけれど……それは、本当なのかしら？」

マリミアンが首を傾げると、ミートはこくりと頷いた。

「はい。父も、そのことで度々頭を悩ませていたようです。研究をしていて分からない所があっても、それが規制に触れて研究が終わってしまうことも御座いますから。まあ、父は『仕方がない』と笑っていましたけれど」

「笑って、って……それは、笑うことなのかしら？」

カナザは訝しげに首を傾げた。

「さあ、どうなのでしょう……ですが、明らかにしてもよい物と明らかにされてはならぬ物がありますから、それで宜しいのではないのでしょうか？ 父もそれ程気にはおりませんもの。それに、研究ができなくなれば学者生命が終わりという訳でも御座いませんし。新たな分野を開拓するよりは、今まで明らかになったことを組み合わせ、新しい事実を発見する方が、学術会では余程重要なのですわ。発見して、それで終わりとなつては、明らかにした意味が御座いませんもの」

「まあ、確かにそうですね……わたくし、知りませんでしたわ。そんなに難しい規制があるなんて。わたくし、この後宮で生まれ育つたもので、あまり外のことについて詳しくないのです」

リオネスが目を瞞つて言うと、沙樹奈はそれに苦笑した。

「あら、リオネス。それを言うなら、わたくしはどうなの？ リオネスよりもわたくしの方が、箱入りの御嬢様だわ」

「あら、沙樹奈様。それを言うのなら、箱入りの御姫様ですわ。

沙樹奈様は、正真正銘の姫君であらせられるのですから」

「まあ。それを言うのなら、リオネスだって御姫様だわ。王女としてのわたくしとは、最低でも従兄弟と三従兄弟の血の繋がりがあるのだから」

「いいえ。沙樹奈様。わたくしには王位継承権は御座いませんし、王家の者として認められるのはこれからで、しかもそれは王子殿下の妻、最侍としてですわ」

リオネスの堅苦しい言葉に、沙樹奈は堪らずに吹き出す。

最初は緊張した空気が漂っていたが、だんだんと和やかな空気になってきた。

だが、しかし。

マリミアンは、ちらりとミアンの様子を窺った。

ミアンを除けば、皆気さくな人達で、これから諍わずに仲良くやっっていけそうな気がする。

けれど、ミアン是他国の王族だからか、とても気位が高く見える。有体に言えば、『高慢ちき』という言葉を擬人化したような人物だ。

はつきり言って、他の人達とは真逆の人間なのだ。

もっと言うならば、自分がちやほやされるのが当然と考えているかのような。

先程の会話にも一言も参加していない上に、沙樹奈やリオネスを強く睨み付けていて、何故誰も自分に何も言っていないのか、憤っている様子でもある。

会話に参加して来ないのと、ミアンに誰も話し掛けないのを憤るのは、やはり性格上の問題だからと（無理矢理でも）納得できるが、沙樹奈とリオネスを睨み付けるのは、とてもではないが納得できない。

沙樹奈だけならば、何となく理由も分かるのだ。

例えば、昔からの慣習のせいで、自分が后になれずに妃止まりになってしまったとか。

他国の王族では、花鶯国のように六段階の妻の身分があるというのは珍しい。

多くても、精々后、妃、妾で、大抵の所は后だけなのだ。

確か彼女の生国のミオメス国は、王の第一の妻である妃、もしくは正妃と、それ以外の妾だけだった気がする。

だから、王族である自分が、ミオメス国で言う妾の身分に甘んじることが許せないのだろう。

けれど、それならば何故リオネスも睨んでいるのか。

それが、全く分らない。

もしリオネスにも王位継承権があったり、ミアンよりも地位が高かったりしたら、それは何となく理解できる。

けれど、リオネスには王位継承権はないし、ミアンが第二位の妃の地位になるのに比べ、リオネスは第五位の最侍なのである。

第三位の妾となるマリミアンや第四位の最貴となるカナザよりも王家の血は濃い、社会的に見た地位は貴族と同等か、それよりも僅かに低い。

何しろ『総下』という地位は、后達とは違って、公に認められた王の妻としての地位ではないのだ。

花鶯国以外の国で言えば、それこそ妾や愛人のような存在だ。

いくら昔から続く制度だとしても、あまり公に認められる存在ではない。

マリミアンは、ふと思った。

もしかしたら、それこそがリオネスを睨んでいる原因なのだろうか。

一応花鶯国では、后・妃・妾・最貴・最侍・最女・総下という序列は設けられているものの、総下以外の地位にはそれ程意味がないのだ。

一応何の地位にいるかによって与えられる部屋は違うが、一年で割り当てられる助成費などの王室費は変わらないし、産まれた子供の王位継承権だって、男女母親関係なく、単純に産まれた順なのだ。だから、最女が第一王位継承者を産むことも、后が最下位の第十王位継承者を産むことも、この国では全く珍しいことではない。けれど、聞いた話によると、ミオメス国では全く違うらしい。

妾の子にも王位継承権は与えられるものの、正妃の子の方が王位継承権は高く、そして妾の中でも、母親の身分が高い方が王位継承権は高く、身分の低い方が王位継承権も低い。

つまり、兄弟が産まれるたびに王位継承権が下がるということがあり得る、マリミアンにしてみたらちょっとあり得ない制度を持つ

国なのだ。

そして、女子には王位継承権がない。

王室のあり方としては花鶯国とあまり変わらないものの、それ以外の所では真逆の慣習を持つ国の王女から見れば、親しみにくい所は多々あるだろう。

けれど、それにしてもこの仏頂面は、何とかならないのだろうか。そんな顔をして、そんな態度を取っていたら、こちらも声を掛けにくいし、第一敵対視しているようなその視線を向けられては、仲良くやっていけようもない。

マリミアンは、そっと気付かれないように溜息をついた。

峯慶や沙樹奈達との最高の出逢いと、従姉妹達との少し辛い再会と、ミアンとの不安な出会い。

これから、ちゃんとやっていけるかどうか、マリミアンは不安でならなかった。

最も、これは他の人も同じだろうけれど。

第二章「天佑を得たか、否か」(前書き)

今回、妊娠・出産についての記述が多くあります。苦手な方はご注意下さい。また、もしかしたらその内容に誤りがあるかも知れませんが、それについてはご指摘頂けると嬉しいです。

第二章「天佑を得たか、否か」

マリミアン、もとい由梨亜妾ゆりあしやうは、深い溜息をついた。すると、共にお茶を飲んでいた沙樹奈后さきなこうが首を傾げた。

「あら？　どうかしましたの？　由梨亜妾」

「いえ……その、少し、憂鬱しやうふさじな気分になってしまいました……」
その言葉に、紗羅瑳侍しやらさじが首を傾げた。

「まあ。大丈夫ですよ？　もしかして、妊娠中になるという、あの……何でしたかしら？　ああ、そうそう、マタニティブルーという物ではないのですか？」

紗羅瑳侍は、沙樹奈后と由梨亜妾の軽く膨らんだ腹部を見詰めた。ちなみに、彼女には妊娠の兆しはない。

「まあ、確かにその可能性もあるでしょうけれど……由梨亜妾が憂鬱ふさになっているのは、やはり深沙祇妃みさぎひのことではないのですか？」

沙樹奈后の気遣うような視線に、由梨亜妾は俯いた。

「ええ……。わたくしは、何も望んで妊娠したという訳ではないのに……なのに何故、このような目に遭わねばならぬのでしょうか……」

由梨亜妾の力のない声に、沙樹奈后は力強く首を振った。

「いいえ、由梨亜妾。嘆きたくなる御気持ちは分かりますわ。ですが、御腹の御子までもを否定するようなことは仰らないで下さいまし。その子には、何の責任も御座いませんわ」

沙樹奈后に真剣に見詰められ、由梨亜妾はハッと息を呑んだ。

そして、俯いて呟いた。

「ええ……確かに、そうですね。申し訳御座いませんわ、沙樹奈后。貴女も、妊娠していらっしゃるのに……」

由梨亜妾が呟くと、沙樹奈后はそれを笑い飛ばした。

「いいえ、わたくしは気にしてはおりませんわ、由梨亜妾。それに、たとえどんな事情があろうとも、妊娠するというのは慶ばしいこと

ではありませんか」

「そうですね、由梨亜妾。わたくしは妊娠してはおりませんけれど、貴女方の妊娠は、大変嬉しく思っておりますもの。それに、彼女のように、貴女方に浅ましい妬みなど持つてはおりませんわ。まあ、貴女方が御喜びになられる御姿を拝見して、わたくしも、いずれでよいので御子を授かりたいものだとは、思いましたけれど……。ですが、次代の王家に自らの血を継がせようとか、鶯大臣おうだいじんに子供を就かせようとか、そんなことは望んではおりませんわ。わたくしはただ、誰の子供であつても、ただ健やかに成長してほしいと思つております。わたくしは総下そうげの子供ですらありませんが、この後宮で生まれ育つて来ましたもの。ここが、子供の成長にあまり良くない場所だということは理解しております。ですから、せめて……心だけは、健やかに育つてほしいと、望むのみですわ」

紗羅瑳侍のしんみりとした言葉に、二人は押し黙った。

二人とも、それは最初から分かっているのだ。

ここが、子供に望ましい環境ではないことぐらい。

特に、産まれたと同時に異母兄あにの後あとと定められた――次代の王家にも血を継ぐことが許された沙樹奈后は、身に沁みてそれがよく分かっているだろう。

それに、沙樹奈后、深沙祇妃、由梨亜妾の三人の予定日は、沙樹奈后が最も早く、深沙祇妃が最も遅いのだ。

沙樹奈后の予定日は、三ヶ月後の八月十日。

由梨亜妾がそれに次いで八月の二十一日で、深沙祇妃が最も遅い八月二十九日だ。

つまり、八月中に三人もの異母兄弟きょうだいが産まれることになる。

これは、一夫多妻制を何百年間もの間執つて来た花雲恭家かうきんけにしても類を見ないことで、ちよつとした混乱が引き起こっていた。

もし、このほぼ同時妊娠の前に次代の王とその伴侶が産まれていれば、ここまでの混乱はなかったかも知れない。

けれど、この三人の子供の誰かが王になることはほぼ確定してい

て、その伴侶も産まれて来るかも知れないのだ。

誰が最初に子供を産むのかで、それぞれの後見や後援者達は血眼になり、侍医達に予定日の計算を正確にするように急かした。

だが、あまりそれに意味はないだろうと、沙樹奈后と由梨垂妾は達観している。

いくら技術が進歩して、予定日の計算ができるようになったとしても、それは産まれて来る確率が高いという訳で、絶対ではないのだ。

何しろ、この時期に産まれたら正常だと言われている時期は、ほぼ一ヶ月もあるのだ。

つまり、今計算しても結局は正しい日時なんて分かる訳もなく、この順番が前後する可能性も高いのだ。

だから、今何をしたって無駄、そう割り切っていた。

割り切れていないのは、深沙祇妃と、自分達三人の後見や後援者、そして産まれる子供の後見を狙っている者達だけだ。

また、この者達が胎児の性別確認をするようにと執拗に訴えてきているのも、王の籐聯とうれんの頭を痛くさせているのだった。

数百年前から、花鶯国かおうこくでは胎児の性別検査が可能になって入るが、花雲恭家では余計な争いを防ぐ為に、検査は行ってはならないことになっていた。

何しろ、産まれてからの子供をどうこうするより、産まれる前の子供をどうこうする方が、はつきり言っても簡単なのだ。

しかも――

「嗚呼……全く、峯慶御異母兄ほへいおにごいもあに様に、早く帰ってきて頂きたいですわ……」

そう、峯慶は王太子として外国に外交で行っていて、ここ四ヶ月の間留守にしているのだ。

沙樹奈后の嘆きに、由梨垂妾は深く頷いた。

「ええ。全く、そうですね。深沙祇妃は、一応陛下には敬意を払っておいでですけど、峯慶殿下には及びませんもの。……峯慶殿下

がいらっしゃらないと、自らの子供を王位に近付けられないとでも、御思いなのでしょうかね」

由梨亜妾が沈んだ声で言う、沙樹奈后も眉を寄せた。

「まあ……その可能性も無きにしも非ず、でしょうね。それに、もしかしたら、峯慶御異母兄様が早莉阿后——さりあこう後の息子だということも、一役買っているのではないかと思いますわ」

何しろ、后は妻達の中では最も位が高いのですし——

そう続けた沙樹奈后に、由梨亜妾は渋い顔をした。

「由梨亜妾？ 何か……？」

紗羅瑳侍が不安そうに顔を覗き込んで来るのに、由梨亜妾はハッとして表情を取り繕った。

「い、いえ、特には。ですが……その、沙樹奈后が今仰られた理由は、あり得ないと存じますわ」

由梨亜妾が少し悲しげに言うのに、沙樹奈后と紗羅瑳侍は訝しげな顔をした。

「それは……一体、どういう意味ですの？」

「ええ。先王陛下——ゆりあ癒璃亜陛下には、王子が御二人と王女が御一人いらっしゃいましたが、その梨美亜王女りみあ殿下は外交上の問題で、ユレイド王国に嫁ぎましたでしょう？ ですから峯慶殿下の御母様であらせられる早莉阿后は、癒璃亜先王陛下の弟君の娘御で……つまり、陛下とは従兄妹でいらっしゃいますわ」

「それが……一体、どうか致しまして？」

訝しげに首を傾げている二人に、由梨亜妾はごくりと唾を飲み込むと、深呼吸をした。

「その……深沙祇妃の故国であるミオメス国では、近親婚が非常に制限されているようで、六親等内での婚姻が許可されていないのだとか。……つまり、再従兄弟間であっても、結婚してはならないのだそうですわ」

由梨亜妾が告げた言葉に、沙樹奈后と紗羅瑳侍の表情が固まった。
「え……？」

「ちょ、つと……待って下さい、由梨亜妾。え……？　ということ
は、同世代間での婚姻の場合は、三從兄弟みいとし以上に離れていなければ、
不可能だと……？」

「はい。その……深沙祇妃は、わたくし達と馴れ合う気は更々ない
ようでありつしゃいますが、それにしても、沙樹奈后と紗羅瑳侍に
向ける視線が、あまりにも激しい物で……それで、気になったので
す。そうして、調べてみたら……」

そう言って首を振る由梨亜妾に、沙樹奈后がぎこちない口調で訊
ねた。

「え、ということとは……兄弟間の婚姻——わたくしの場合、異母兄
と異母妹いもとうとの婚姻も、腹違いであっても、法律違反だと？　そう、仰
るのですか？」

「はい。法律違反どころか、むしろ憲法違反のようですわ。昔、再
從兄妹に当たる方が婚姻を結びたくて、あまりにも厳し過ぎると国
を訴えたことがあったそうなのですが、『六親等内での婚姻は違憲
になる』との回答で、最高裁でも敗訴したそうですわ。結局、その
ご夫婦は他国に渡って婚姻を結んだそうですけれど……」

妊娠中の為、胎児に影響がないようにラズベリーリーフ、レモン
バーベナ、レモングラス、ローズを合わせたブレンドハーブティー
が供されていたが、マリミアンはそれを一口すすった。

これを飲むと、何だか少し落ち着くような気がする。

「何でもミオメス国では、昔に血族婚を繰り返してしまったせいで、
五百年程前、出生率が非常に低下してしまったことがあったそうで
すわ。それからミオメス国では、血の近い者同士の婚姻を、厳しく
制限してきたそうです。特に、王族では。ですから、血の近い者同
士の結婚に、嫌悪感を抱いていらつしゃるようですわ。沙樹奈后や
紗羅瑳侍にきつくいらつしゃるのは、恐らくそれが原因ではないか
と思います。またそれ故、深沙祇妃は、峯慶殿下の御両親のことも
あまり好ましく思っていないらつしゃらないのではないかと存じます
わ。勿論、峯慶殿下がいらつしゃらなければ、その……言い方は悪

いのですが、身籠ることも――王族を産むこともないでしょう。けれど、言い換えてしまえば、深沙祇妃は子供を授かる為だけに峯慶殿下に尽くしていらっしゃるのではないかと、わたくし、そう思えてなりませんの」

由梨亜妾が暗い顔で言うと、沙樹奈后と紗羅瑳侍は、顔をぎこちなく強張らせた。

「ま、まさか……そこまで、そのようなことを……」

「ええ。ですから、わたくしの勘繰りでしかありません。けれど、ミオメス国の考えと、深沙祇妃御本人の御態度を踏まえて考えますと、そうとしか考えられないのです。……ただの、詮無きことだと、笑い飛ばせば良かったのですけれど……」

「……何か、おありになったのですか？ 由梨亜妾」

由梨亜妾は、沙樹奈后と暗い視線を交わした。

沙樹奈后と由梨亜妾は、紗羅瑳侍よりも年下だ。

けれど、紗羅瑳侍は、後宮の侍女と侍従の結婚によって後宮に生まれ、勉強もずっと後宮でしてきていて、更に公的にはあまり認められていない総下の子孫だ。

王家の血を色濃く継いでいるものの、沙樹奈后や由梨亜妾と比べて表世界には全くと言っていい程出たことがない。

だから、告げてもいいのかどうか迷ったのだ。

けれど、自分達は子供ではないし、何より向こうは年上だ。

由梨亜妾は、意を決して紗羅瑳侍を見詰めた。

「今、わたくし達の子供は七ヶ月になります。一般的には安定期と呼ばれていて、流産の危険も少ないそうです。ですが、言い換えれば、安定期に入る前の初期の段階であれば、流産しても、それ程可笑しく思われないということですわ」

驚きに目を瞪る紗羅瑳侍に、沙樹奈后は小さく肩を竦めた。

「それは、本当にさり気ないようなことだったので、わたくしも、最初は気付きませんでしたの。ですが、出産経験のある侍女に注意されて、初めて知りました」

「一体……一体、何が……？」

狼狽える紗羅瑳侍に、沙樹奈后はティーカップを持ち上げて見せる。

「これ、ですわ」

「『これ』、って……お茶、ですか？ ……ま、まさか……お茶の中に、毒物が紛れ込んでいたのでは……！」

口元を手で押さえる紗羅瑳侍に、沙樹奈后は小さく笑みを浮かべた。

「いいえ、違いますわ。むしろ、そうやって分かりやすくやってもらえれば、こちらに口実を与えることになりますもの。向こうだって、そんなことは致しませんわ」

「では、一体何を……？」

本気で首を捻っている紗羅瑳侍に、由梨亜妾は助け舟を出すことにした。

「紗羅瑳侍。わたくし達は何度も、こうしてお茶会をしておりますわよね？ わたくし達が妊娠する前も、こうして妊娠した後も」

「……？ ええ、確かに、そうですね……？」

「では、以前は主に紅茶が供されていたのに、わたくし達が妊娠してから、ハーブティーに……それも、特定のハーブは決して使わない物に変わったのを、可笑しくは思いませんでしたか？」

「あっ……確かに、言われてみれば、そうですね……。何故、ですの……？」

その言葉に、沙樹奈后は微笑んだ。

「実は、紅茶やそれと同じ茶葉で作られた御茶は、あまり妊娠中には良くないそうですわ。ああ、確か、珈琲もでしたわね。何でも、カフェインがあまり良くないとか。それと、ハーブの中でも、セージ系やミント、オレガノ、カモミール、ああ、あとタイムやローズマリーやジャスミンやバジル、それとレモンバームやローズやライムなんかもあったかしら？ その辺りも、流産しやすくなったり、ホルモンのバランスが崩れてしまったりするらしいのです。まあ、

他にもあまり摂取してはいけないハーブがあるらしいのですけれど」
ずらずらと並べられたハーブの、あまりの種類の多さに紗羅瑳侍は目を白黒させた。

「ま、まあ……そ、そこまで、あるのですか……？」

「ええ。そうですわ。わたくしも、知った時にはとても驚きましたもの。とても禁忌が多いのだと思いましたわ。ですが、こうした御茶の一杯程度では、大した害もないそうですの。あまり、神経質にならなくてもいいと、異母姉^{あね}に言われましたわ」

由梨亜妾がくすりと笑って言う、紗羅瑳侍は益々混乱したようだ。

「え、では……一体、何が……？」

「確かに、あまり摂取しなければいいのですわ。実際この御茶にだって、僅かにですがローズが入っておりますもの。ですが、それが大量に入っていたら？　それも、このように様々な種類がブレンドされた状態で」

ハッと、紗羅瑳侍が鋭く息を呑んだ。

「しかも、それだけではなくて、料理にも沢山使われていたら？」

その上、それが何日も何日も続いたら？　……誰だって、流産しやすい状態になるでしょうね」

「そ、んな……」

「まあ、さすがにそこまでハーブ尽くしだと、いくら何でも可笑しいでしょう？　それに、わたくし達の周りの全員が、何の知識もないという訳もないですし、すぐに注意が払われましたわ。その御蔭で今もこうしているのですけれど……」

遠慮がちに笑う由梨亜妾に、沙樹奈后が溜息をついて言った。

「あら、由梨亜妾。真実を伝えなくては駄目ですわ」

「真実……ですか？」

「ええ、紗羅瑳侍。あの多量摂取してはならない物尽くしの食事と御茶責めを、何とか防ぐことができたと思ったら、偶然を装ってわたくし達を突き飛ばそうとする者達が出て参りましたのよ。勿論あ

くまでも偶然でしたので、咎めることはできなかったのですけれど」
強く扇子の要^{かなめ}を握り締める沙樹奈后に、由梨亜妾は思わず顔を引き攣らせ、紗羅瑳侍は不安げな顔をした。

「そんな……それでは、御二人の御身体が……！」

「いいえ、恐らくここまで来れば、大丈夫だと思いますわ、紗羅瑳侍」

由梨亜妾は、紗羅瑳侍の不安を宥めるようにゆったりと笑った。

「四ヶ月前に御公務で旅立って行かれた峯慶殿下だって、来月には帰っていらっしますわ。そうすれば、何の不安ありません。深沙祇妃とその後見達は、峯慶殿下の御機嫌を取るので精一杯になりますわ。それよりも、わたくしが気掛かりなのは……」

由梨亜妾が暗い顔で溜息をつくのに、沙樹奈后と紗羅瑳侍が首を傾げる。

「深沙祇妃の身の内に宿っている、御子のことですわ。深沙祇妃の予定日は八月の二十九日で、最も早い沙樹奈后とは十九日も違いますでしょう？　それで、深沙祇妃が最も早くに子を産もうと、わざと出産を早めるような真似をしないかどうか、不安でなりませんの」
「あら。ですが、それで身体を壊したとなれば、本人の責任でしょう？　由梨亜妾には関係ないことですわ」

「ええ、確かにそういった見方もあります。ですが、深沙祇妃が早まった真似を仕出かしたとして、その御子はどうなりましょうか？

万が一にでも障害が残ったとすれば……」

顔を曇らせる由梨亜妾に、沙樹奈后が明るい声で笑った。

「確かにそうですけれど、それは杞憂に過ぎませんわ、由梨亜妾。起こってもしないことを心配して身体に負担を掛けるよりも、峯慶御異母兄様が間もなく帰っていらっしやることを喜びましょう？

そちらの方が、余程身体によいですわよ。由梨亜妾がそのような御様子では、御腹の中の御子まで心配してしまいますわ」
沙樹奈后の冗談に、由梨亜妾は思わず吹き出した。

それにつられて、紗羅瑳侍もくすくすと笑声を漏らす。

いつの間にか、三人は笑い転げていた。

由梨亜妾は、自室に戻ると、ソファ―に身体を預けるようにして座った。

お腹の中の子供が大きくなっていくうちに、何となく腰の辺りがだるくなってきたのだ。

だるいのは辛い、子供が成長している証しだと思えば、それも嬉しい。

けれど。

（嗚呼……本当に、どうして……どうして、沙樹奈后と深沙祇妃とわたくしが、同時期に妊娠しなければならなかったの……？ わたくしは、自分の子供が――峯慶殿下との御子が、ただ元気に、健やかに育ってくれば、それだけでいいのに、どうして、こんな……。もし、この世に神がいるのなら、何て残酷なことをするのかしら。いくら深沙祇妃御自身に問題がありだと言っても、適切な教育を施せば、何の問題もありませんわ。それなのに、どうして、野心のある方と野心のないわたくし達が……。わたくしは、こんなこと、望んでなんかいないのにっ……！）

由梨亜妾の意識を現実に戻したのは、ミリュアとルーシェの声だった。

「由梨亜妾様……由梨亜妾様？ いかがなされましたか？」

「御具合でも、御悪いので御座いますか？」

「いいえ。大丈夫ですわ。ただ、少し疲れてしまっただけです。それに、少し身体がだるくて……」

由梨亜妾がそう言って苦笑すると、ミリュアとルーシェは顔を見合わせた。

「まあ、それは……」

出産経験のないミリュアが不安そうな顔を見ると、二年前に娘を一人産んだルーシェは、にっこりと微笑んだ。

「ええ。そうですわね。確かに妊娠中は、そういうこともありますわ。ですが、由梨亜妾様。わたくしと違って貴女様は、換えのない大事な唯一の御身にあらせられます。ですから、身体に負担を掛けぬよう、無理をしないよう、どうぞ御自愛下さいませ」

微笑みながら、けれど瞳の奥に不安を抱えた従妹の姿に、由梨亜妾は思わず背筋を伸ばした。

「ええ。分かりましたわ、ルーシェ。気を付けます」

「はい、由梨亜妾様。本当に、御身御大事に」

ミリュアとルーシェの不安そうな目に、由梨亜妾は宥めるような視線を返すと、そっと目を閉じ、服を着けていても目立つ腹をそっと撫でた。

（この中には、大事な、とても大事な『生命』が入っているのね……。わたくしと峯慶殿下の、大切な、子供。この子は、無事に大きくなれるのかしら？ どういう子に、育つのかしら？ とても楽しみだけれど、少し不安ね……。早く、産み月にならないかしら？ 産まれたら、わたくしがこの手で抱きかかえて、峯慶殿下に御見せしたいわ。この子が……。わたくし達の、子供。わたくし達の間で、最初に産まれた子供なのだと……）

由梨亜妾は、腹の中で子供が微かに動くのを感じ、そっと微笑んだ。

この時、由梨亜妾は幸せだった。

子供が産まれたその後に起こる一切を、何も知らなかったら。

沙樹奈后、深沙祇妃、由梨亜妾、そして峯慶を巻き込む悲劇を――

その日、共通暦一三〇八年八月十五日は、とても暑い日だった。花鶯国首都シャンクランは緯度が低く、三十度越えをするような日は滅多にない。

年に一、二回、あるかないかだ。

しかし、この日は三十六度まで上がった。

極めて珍しい、記録的な猛暑だった。

けれど、それは『記録』としては面白いかも知れないが、そこに生きる人達にとっては堪らない。

あまりの暑さに職場の機能が落ちたということもあった。

人々は暑さに耐えきれず、屋外を歩くような人はほとんどいなかった。

そして、シャンクランのある北半球では、どこの地域も似たり寄ったりで、その日は熱中症で倒れる人が急増し、中には不幸にも亡くなってしまうお年寄りや子供も数多くいた。

王宮でも状況は同じで、あまりの暑さにその日は公務から早々に解放された峯慶は、沙樹奈后と由梨亜妾が歓談している場に混ざり込むことができた。

二人とも、峯慶にとっては自分の妻だが、王子ではなく個人の人間としては、沙樹奈后は可愛い異母妹で、由梨亜妾は最も愛する大事な人だ。

おまけに二人とも、臨月の妊婦であり、しかもそのお腹の中にいるのは、自らの子供だ。

その意味では深沙祇妃も同じであり、峯慶は特に深沙祇妃を蔑ろにしているという訳ではなかったが、八月に入って以来深沙祇妃はピリピリしていて、彼女の侍女に『あまり御近付きにならないで下さいませ』と頼まれてしまったのだ。

峯慶は、彼女も彼女のお腹の子も心配だったが、深沙祇妃のあまりの気の昂りように、お腹の中の子供の生命を危ぶんだのだ。

それに、心配なのは、沙樹奈后のことだった。

彼女の出産予定日は、八月の十日。

なのに今は、もう八月の十五日だ。

初産の時は、予定日よりも出産が遅れることは多々あるとは侍医から聞いたが、それでも、心配な物は心配なのだ。

だから、この二人の場合、様子を見られる時は来るようにしてい

た。

それに、心配なのは、阿実^{あみ}亜女^{あじょ}のことだ。

昨日から、あまり具合が優れないのだそうだ。

だが、そこまで重い物ではなく、本人は平気だと話しているようだが、どうしても心配になってしまふ。

一応今日、侍医に掛かるように手配はしたが、かなり遠慮深く謙虚な阿実亜女のことだ、本人がそれを断らないかどうか、それだけが心配になる。

けれど、峯慶はそれをおくびにも出さずに、沙樹奈后と由梨亜妾とお茶を楽しんでいた。

ただでさえも二人は臨月で、深沙祇妃のことに對して気を揉んでいると言うのに、これ以上の負担は、異母兄として、夫として掛けられなかった。

だから、にこにここと微笑んで、二人が産まれてくる子供のことや、普段の何気ないことを面白可笑しく話しているのを聞いていた。

と、その時――

「失礼致します」

深沙祇妃の従妹である、ルーミア・ストールが高慢に頭を上げて入って来た。

その様子に、思わず峯慶達は眉根を寄せる。

ルーミアは、確かにミオメス国の王族であり、深沙祇妃が花鶯国に嫁いで来なければ、彼女は王族の一員として、他の国や自国の貴族に嫁いでいただろう。

けれど、ここは花鶯国であり、彼女の花鶯国での身分は、妃^ひに仕える上級侍女だ。

つまり、一貴族出身の由梨亜妾よりも身分は低く、王族出身の沙樹奈后は言うまでもない。

なのに、自分の身分は彼女達よりも高いと言いたげなその様子は、かなりの不快感を覚える。

「ルーミア。ここはわたくしだけではなく、峯慶王子殿下と由梨亜

妾の御前です。身を弁えなさい」

沙樹奈后がぴしゃりと言いつつと、ルーミアは不承不承に頭を下げる。

「……………失礼致しました。峯慶殿下、沙樹奈后様、由梨亜妾様」

「宜しいです。それで、何用ですか？ 其方は深沙祇妃に仕える身でしょう。深沙祇妃についていなくても宜しいのです？」

「そのことで参りましたわ」

間髪を容れずに言葉を発したルーミアに、沙樹奈后は益々不快気な顔をする。

峯慶はそれを抑えるように沙樹奈后へ目を向け、ルーミアに居直った。

「それで？ 其方がわざわざここへ参った理由は？」

「はい。――我が主、深沙祇妃様が、陣痛を御起こしなさいました。それを、皆様に御伝えすべく参りました次第に御座いますわ」

その勝ち誇った表情を見ていたくなくて、峯慶は眉を寄せた。

「そうか。礼を言う。下がってよい」

すると、ルーミアはもっと色好い返事を貰えると思っていたのか、途端に不満気な顔をする。

「ですが、峯慶殿下――」

「ルーミア」

その時、今まで黙り込んでいた由梨亜妾が、口を挿んだ。

「……………何でしょう？」

気を挫かれたルーミアは、引き攣った顔で由梨亜妾を見やる。

「深沙祇妃の、御容体はいかがです？ 深沙祇妃の出産の御予定日は、今月の二十九日でしたよね？ なのに、二週間も早く…………。深沙祇妃は、大丈夫なのですか？」

その言葉に、ルーミアは鼻白んだ顔を見せる。

「大丈夫ですわ。深沙祇妃様は、今第三十八週目に入った所でしたので、正期産のうちに分類されます。もう二週間早ければ、確かに早産ではありましたが、そうではありません。正常な、御分娩に御

座います」

「そうですか……。深沙祇妃と、その御子が御無事ならば宜しいですわ」

「そうですわね。失礼致しますわ」

ルーミアは面倒臭そうに言い放つと、返事を待たずに部屋を出て行った。

そのあまりの態度に、峯慶は眉を寄せ、沙樹奈后は苛立ちを含んだ溜息をつき、由梨亜妾は困った顔をした。

「深沙祇妃……大丈夫でしょうか？　ただでさえも、初産だと言うのに……」

「貴女が、そこまで心配なさる必要は御座いませんわ、由梨亜妾。深沙祇妃には、深沙祇妃の侍女や侍従が付いております。大丈夫ですわよ。侍医は、物慣れた方ですもの。きっと安全な出産になりますわ」

「そう……ですね。きっと、大丈夫ですわよね」

「だが、心配なのは其方も同じだぞ、沙樹奈后。由梨亜妾の予定日はまだ六日後だが、其方の予定日は十日で、もう五日も過ぎているもうそろそろ、四十一週になるだろう？　四十二週を過ぎたら過期妊娠と言って、危険が増すと聞く。まあ、そうなる前に、侍医からは人工分娩を進められるとは思うが……」

眉をしかめる峯慶に、沙樹奈后は笑い飛ばした。

「大丈夫ですわ、峯慶御異母兄様。この子は御腹の中が心地良過ぎて、あまり外に出たくないだけです。心配しなくとも、数日中には産まれます。間違いありませんわ」

「そうか……。其方が言うのなら、そうなのだろうな」

峯慶は、沙樹奈后の自信に満ちた様子に、仕方なさげに苦笑した。前にも似たようなことがあったのだろうか、沙樹奈后もころろと声を上げて笑う。

その異母兄妹の様子が、何となく羨ましくなった。

明らかに、峯慶と共にいる時間は、由梨亜妾よりも沙樹奈后の方

が長いのだ。

血の繋がり故仕方がないと思うが、それでも、羨ましくて堪らなくなった。

「ですが……深沙祇妃の子供が、峯慶御異母兄様の次代の国王になりますのね。これで、深沙祇妃も少しは大人しくして下さると、助かるのですけれど……」

沙樹奈后は、そう嘆息して言った。

「ええ……そうですね。わたくしには、勝敗という思いはないのですけれど、深沙祇妃としては、これで、勝った、と……そう、御思いになられているのでしょうかね。深沙祇妃の御子が、健やかに育ってくれば宜しいのですけれど……」

由梨亜妾がそう言って遠い目を見ると、沙樹奈后にたしなめられた。

「由梨亜妾？ 周りの人間の心配をするのは、貴女的美徳だとは思いますが。けれど、貴女御自身、ただの身では御座いませぬのよ？ もっと御自分のことを気に掛けて下さいな」

「そうだな、由梨亜妾。沙樹奈后の言う通りだ。其方はもっと、自分自身のことを大事にするべきだな。他人の心配ばかりしていたら、いつか足元をすくわれることにもなりかねない」

その言葉に、思わず由梨亜妾は吹き出した。

「まあ……申し訳ありませんわ。峯慶殿下、沙樹奈后。……わたくし、三月前にも、わたくしの上級侍女のルーシェにも、身体を大事にと言われていたのを、忘れておりました」

「まあ……。由梨亜妾ったら。上級侍女にも言われてしまうなんて。やっぱり、気を付けるべきですわ。ただでさえも、貴女はこれから母になるのですから」

沙樹奈后に言われて、由梨亜妾は微笑みを返すと、そっと自らの腹部を撫でた。

すると、大人しめの微かな動きが、掌を通して伝わってくる。その動きに、由梨亜妾は益々頬を綻ばせた。

（大事な、大事な……わたくしの、子供。深沙祇妃に陣痛が御起きになられたというのは、こうして考えてみると、よいことなのかしら……？　少なくとも、わたくしの子供が王になるという可能性は、格段に低まったわ。だから、この子に危険が及ぶ可能性も、きっと低いわね……。だから、大丈夫、よね……。？　後は、ゆっくりと、産まれて来るのを待つだけ、かしら……）

由梨亜妾は、再び腹部を撫でた。

今度は、赤ん坊からの反応は、なかった。

第三章「嬰兒（みどりご）」（前書き）

今回、妊娠・出産についての記述が多くあります。苦手な方はご注意ください。また、もしかしたらその内容に誤りがあるかも知れませんが、それについてはご指摘頂けると嬉しいです。

第三章「嬰兒（みどりご）」

由梨亜妾ゆりあしやうはその日、早めに就寝した。

深沙祇妃みさぎひに陣痛が起きたと聞いて、それまでであった緊張が抜けて、疲れてしまったのだ。

眠りも、比較的深かったと、そう思う。

だから、その夜、突如として目が覚めたことに、強い違和感を覚えた。

ただ鼓動が、バクバクと、強く脈打っているのを感じる。

「……一体……何、かしら……？」

そう、呟いた途端、だった。

今まで経験したことのない、強い痛みが、腹部を襲った。

由梨亜妾は思わず、身を丸めて痛み顔に顔を歪める。

確か、陣痛という物は、少しずつ痛みが襲ってきて、どんどんと強くなってきてから破水するはずだ。

陣痛の最初の痛みは、まだそれ程強くないとも、医師達は断言していた。

だが、由梨亜妾が今感じている痛みは、『それ程強くない』とは言えない程の痛みだ。

それに脈拍は、今までずっと眠っていたとは信じられない程速いし、身体中が、寝汗とは違う汗をびっしりと掻いている。

つまり、『それ程強くない』痛みは、由梨亜妾が眠っている間に来ている、かなり強い痛みになったから目が覚めた、そういうことなのだろうか。

由梨亜妾はぼんやりとそんなことを考えながら、唇を噛んで、必死に痛みを耐えていた。

一体、どれぐらいの時間が過ぎたのだろうか。

気が付くと、痛みが引いていた。

けれど、油断はできない。

陣痛は、間隔を空けて来る物だという。

ということは、再びあの痛みが襲って来るのも、時間の問題なのだ。

もし、独りでいる時に陣痛が来たら、すぐに連絡をして下さいと、上級侍女の四人に頼まれている。

彼女達の部屋まで行って報せることも考えられたが、由梨亜妾のいるこの階は二十階で、リーシェ達上級侍女の部屋は九階なのだ。いくら昇降機があっても、途中で陣痛が来たらと思うと、怖くて行けない。

由梨亜妾は寝台から起き上がって、内線に手を伸ばした。それを使って、再び痛みが襲ってくる前に、連絡を取ろうとしたのだ。

表示された連絡先の中から、リーシェの部屋のを選ぶ。

それを選択した後、由梨亜妾は安堵して力が抜け、床に座り込んでしまった。

由梨亜妾の広い寝室の中に、コール音が鳴り響く。

だが、ふと訝しく思っ、由梨亜妾は顔を上げた。

まだ、リーシェが出ないのだ。

やがて、非情にも、

『ただ今出ることがありませんので、のちほどお掛け下さい』

と、機械で合成された女性の声が流れて、ふつりと途切れた。

由梨亜妾は、思わず大きく喘いだ。

リーシェは、気付かなかったのだ。

由梨亜妾は落ち込む気分を何とか浮上させると、今度はミリュアに内線を掛けた。

彼女達は上級侍女とはいえ、高位の貴族の娘、一人ずつ寝室と居間が与えられているのだ。

だから、一人ずつに掛けなければならない。

（大丈夫……大丈夫。リーシェは駄目だったけれど、ミリュアがいますわ。ミリュアがもし出なくても、ルーシェもアルアもいる。…

…きつと、大丈夫。大丈夫……）
そうして気分を落ち着けていたのに、非情にも、ミリュアも出なかった。

先程と同じように機械が応答し、内線は切れた。

由梨亜妾は唇を噛み締め、今度はルーシェに内線を掛け始めた。
けれど、結果は同じだった。

ルーシェもアルアも気付かず、無情にも内線は切れた。

由梨亜妾は、しばらく呆然と座り込んでいた。

誰も……誰も、気付かなかったのだ。

「こんな、こと、って……」

目の前が、真っ暗になった。

「どうすれば……いいの？ どうすれば……」

やがて由梨亜妾は、昨日のことをぼんやりと思い出していた。

峯慶と沙樹奈后（はなぶき なこう）と一緒に、お茶をしていた時に、深沙祇妃が陣痛を起こしたと聞いた時のことを。

深沙祇妃のことを心配する自分を、沙樹奈后が元氣付けてくれたことを――。

「沙樹奈后……」

由梨亜妾は縋るように呟き、再び内線に向かって手を伸ばした。
非常識だということは、分かっている。

こんな夜中に、それも自分よりも上位の人に掛けるなんて。

けれど、由梨亜妾は切羽詰まっていた。

それに、沙樹奈后と由梨亜妾は、非常に仲がよい。

だから、それに賭けたのだ。

上級侍女達と同じように、何度もコール音が響く。

それは、由梨亜妾にとって、とても長く続いた。

けれど、誰も出ない。

由梨亜妾が諦め掛けたその時、コール音が突如として止んだ。

由梨亜妾は、はっと顔を上げて、端末の画面を見詰める。

やがて、そこから声が聞こえて来た。

『……何ですか？　こんな夜更けに』

こんな時間だからか、やはり由梨亜妾からの内線で起こされたらしく、その声はどこかぼんやりしていて、酷く機嫌が悪そうだった。また、音声だけは聞こえて来るが、映像は映らない。

それでも、由梨亜妾は、心の底から安堵した。

（嗚呼、これで……）

由梨亜妾は息をつくと、掠れた声で言った。

「沙樹奈后……御願いが、御座います」

『御願い……？』

「はい……。どうか、御願い致します。御医師を……御呼び、下さいませ」

『医師、ですって……？』

不意に、沙樹奈后の声に芯が宿った。

『由梨亜妾、貴女、一体何があったというのです？』

「陣痛が……来て、しまいました」

『何ですってっ?!』

突然の大声に、由梨亜妾は思わず顔をしかめた。

「それで……最初は、わたくしの上級侍女に、連絡を取ろうとしたのですが……誰も、出なくて、それでっ……」

由梨亜妾は、突然腹の底に生じた衝撃に、思わず唇を噛んだ。

『――分かりましたわ。由梨亜妾、どうか御氣を確かに御持ちになつて。すぐに医師を呼んで、そちらに向かいますわ!』

沙樹奈后は強く宣言すると、乱暴な音と共に内線が切れた。

それを、半ば呆然と見詰めながらも、由梨亜妾の顔には微笑が浮かんでいた。

何て、沙樹奈后らしいのだろう。

そう、思ったのだ。

けれど、その表情は、苦悶の物に取って代わられる。

思わず前かがみになった由梨亜妾は、視界の端に映った物に目を瞠った。

激痛に耐えながら、身体を移動させる。

すると、先程まで自分の身体があった所に、小さな水溜りができていた。

足の辺りを見ると、夜着が羊水で濡れて纏わりついている。

恐らく、先程の衝撃が『破水』だったのだろう。

由梨亜妾は、苦笑した。

自分も大概、鈍いようだ。

襲い来る陣痛に耐えていた由梨亜妾の耳に、慌ただしい足音が聞こえて来た。

顔を上げると、廊下から、眩い程の光が差し込んだ。

それが、自分の未来を暗示する物であればいいと――何故か、そう思った。

医師が駆けつけてからおおよそ三時間後の、八月十六日午前五時四十八分。

由梨亜妾は、女兒を出産した。

それまで感じていた痛みよりも、強い痛みに苦しみながら産んだ赤ん坊は、元気な産声を上げた。

最も、由梨亜妾がのちにこの出産を思い出した時に、一番印象に残っていたのは産声ではなかった。

確かに産声も、由梨亜妾の心に強い印象を残していったのだが、それ以上に印象が強く残った物があったのだ。

それは、沙樹奈後の怒鳴り声である。

沙樹奈後は、由梨亜妾が助けを求めた後にも部屋に駆けつけ、自身も予定日をとくに過ぎた臨月の妊婦にも拘らず、由梨亜妾が子供を産む間中、ほとんどずっと隣に付いてくれたのだ。

そして、遅ればせながら駆けつけて来た上級侍女達を、職務怠慢だと怒鳴り付けたその声が、強い息みの最中にあった由梨亜妾の耳に強く残ったのだった。

由梨亜妾は、隣に寝かされた赤ん坊を見て、微笑んだ。

身体は疲れ切っていたが、その小さな顔を見ていると、何だか癒されるような気がする。

まだ、産まれてから一時間も経っていない、くしゃくしゃの顔を
した、小さな嬰兒。^{みどりこ}

もう産声を上げてはいないが、何時間かすれば、お腹が空いて泣き出すのだろう。

瞳が開くのはまだ先だろうが、由梨亜妾は、今から楽しみだった。
(髪は……茶色？ それとも、栗色かしら？ 栗色だったら、御母様と同じ色だわ。ああ、早く目が開かないかしら？ 何色の瞳をしているの？ この子は。本当に、楽しみだわ……)
いくら眺めていても、飽くことはない。

そんな由梨亜妾に、沙樹奈后が優しく声を掛けた。

「由梨亜妾、貴女は本当に、よく頑張りましたわ。いつまでも御子を眺めておりたいその御気持ちは、よく分かります。ですが、今は何よりも休息が必要ですわ。由梨亜妾、しばらく御休みなさいな」
「ええ……そう、ですわね……」

由梨亜妾は呟くように言って、瞳を閉じた。
途端に、泥のように深い眠りへといざなわれた。

由梨亜妾が目を覚ますと、そこにはリーシェ、ミリュア、ルーシエ、アルアが揃っていた。

「……由梨亜妾様！」

ミリュアが、由梨亜妾が目を覚ましたことに気付き、声を上げる。すると、リーシェは泣き出し、ミリュアはへたりこみ、ルーシェとアルアが由梨亜妾の枕元に近寄った。

「みんな……？ いかがなされましたの？」

「本当に……本当に、申し訳御座いませんでした、由梨亜妾様……」
泣かないでいたルーシェも、ほろほろと涙をこぼし出す。

アルアも、涙をこぼさぬように唇を噛み締めていたが、その瞳は潤んでいた。

「わ、わたくし達……誰も、誰も、気付かずに……由梨亜妾様が、助けを必要としている時に、ただ、わたくし達は、安穩と眠りこけてっ……！」

泣き出す侍女達に、由梨亜妾の方が慌てた。

「まあ、そんな……。だって、仕方のないことですわ。あんな時間に内線が掛かって来ても、すぐに出られはしないのですもの。コール音が短いのが、最も悪いのですわ」

由梨亜妾は、何の罪もない内線に、罪を押しつけた。

そして、侍女達一人一人に笑い掛ける。

「それに、過ぎたことを今更悔やんでも、どうにもなりませんわ。終わり良ければ全て良し、です。申し訳ないと思っているのであれば、悔むよりも、無事に産まれたこの子のことを、どうか祝福して下さいな」

「は……はい、由梨亜妾様……」

部屋に、暖かな笑いが溢れる。

「――ところで……この子の名前は、何と言うのです？」

由梨亜妾がそう言うと、途端に、部屋に重い沈黙が降りた。

「あら……？　　どうかなさいましたの？」

由梨亜妾が訝しげに眉を寄せると、そこに別の声が割り込んだ。

「それは、私が言おう」

その言葉に、由梨亜妾はぱっと顔を輝かせた。

「まあ、峯慶殿下！　御越し下さいましたの？」

明るく輝く由梨亜妾の顔を見て、何故か、峯慶は寂しげな笑みを洩らした。

「峯慶殿下……？」

不安そうな由梨亜妾の声に、峯慶はそっと微笑んで宥めると、侍

女達に視線を移した。

「私は、由梨亜妾と二人きりで話をしたい。呼ぶまで、部屋を出てもらってもいいだろうか？」

「はい、殿下」

「畏まりました」

リーシェ達は了解し、頭を下げて部屋を出て行く。

「峯慶殿下……。何か、あったのですか？」

由梨亜妾が声を掛けると、峯慶は目を閉じ、言った。

「由梨亜妾、この子の――私と其方の子の名前は、『フミキ』だ」

「まあ、そうですね？ それでは、深沙祇妃の御子の名前は『トフヤ』ですね」

「――いいや、違う」

「え……？」

由梨亜妾は、訳が分からなくなった。

沙樹奈后、深沙祇妃、由梨亜妾の子供達に付けられる名前は、産まれるよりも前に、絞られていた。

産まれたのが女の子であれば、上から『フミキ』、『フルミ』、『リエナ』の順番であり、産まれたのが男の子であれば、上から『トフヤ』、『フウゲン』、『ショウゲン』の順番である。

そして、自分の子供の名前が、峯慶の長女に与えられる『フミキ』なのであれば、自動的に、自分よりも先に子供を産んだ深沙祇妃の子供は男の子であり、『トフヤ』という名を得るはずである。

それが、何故……何故、違うと言うのか。

途惑いと困惑に彩られた由梨亜妾の視線に、峯慶は悲しそうな微笑を返した。

「深沙祇妃の娘の名前は、『フルミ』だ、由梨亜妾」

「え……？ 何故、ですか？ 深沙祇妃の御子が娘であるのであれば、深沙祇妃の娘が『フミキ』であり、わたくしの娘の方が『フルミ』になるはずですよ。……峯慶殿下、御間違えになってはなりません」

由梨亜妾が浮かべるぎこちない笑みに、峯慶は、そつと首を振った。

「いいや。違う。長女である其方の娘が『フミキ』で、次女である深沙祇妃の娘が『フルミ』だ。……深沙祇妃は、其方が子を産んだおよそ二時間後に、女兒を出産したのだ」

由梨亜妾の顔から、血の気が引いた。

「そ、んな……嘘、まさか、そんな！　だって深沙祇妃は、わたくしなどよりもずっと先に、ずっと前に陣痛を御起こしなさったではありませんかっ！　なの……それ、なの……」

由梨亜妾の瞳から、涙が溢れ出した。

「こんな……こんなことって……あり得ませんわ。何て、何て酷いっ……！」

峯慶は、由梨亜妾の身体をきつく抱き締めた。

やがてその泣き声が止むと、峯慶は身体を離し、由梨亜妾の顔を覗き込んだ。

「由梨亜妾。……そのことで、一つ提案がある。——いや、提案ではない。私は、できればそうしたい。だから其方にも、賛成してもらいたいのだ」

「何……でしょうか？」

由梨亜妾が涙に濡れた顔で峯慶を見上げると、峯慶は悲しげな顔をして頷いた。

「由梨亜妾。この娘は——私達の手では、育てない。父上にも、御了承頂いた」

「……………え…………？」

峯慶の言葉が頭に沁み込むと同時に、由梨亜妾の顔から、先程以上に血の気が引いた。

「そんな、どういふことですかっ?!」

「由梨亜妾、落ち着きなさい」

「落ち着いてなど、いられません！　わたくし達の手で育てないとは、どういふことですかっ？　まさか、養子に出すでもっ？　そ

んなこと、堪えられません！」

「違う、養子に出すのではない。……この子は、辺境の国へ送る」

「辺境の、国、ですって……？」

呆然とする由梨亜妾の肩を、峯慶はそっと撫でた。

「そうだ。できるだけ花鶯国かおうこくから遠くて、国交もない国へ、送る。

……その条件に合う国はいくつかあるが、その中でも、宇宙連盟にさえ加盟していない、地球連邦という新興国が、最もよいのではないかと思う。今、人を使って探させている所だが、今日産まれた地球連邦の女兒の中で、最も身分の高い家を選ぶつもりだ。そして……申し訳ないことだが、その夫婦の子供は、別の夫婦の元で暮らせるように、手配するつもりだ。——難しいことだが、高度な魔法を使えば、可能なのだ。だから、其方にも賛成してほしい」

由梨亜妾は、強く峯慶の手を握んだ。

「何ゆえ——何ゆえ、この子を他国へ送らねばならぬのですっ？！
どうして、どうしてわたくし達の手元で育ててはならぬのですか
！」

「私だって、できればそうしたい！」

峯慶の強い言葉に、初めて声を荒げた所を聞いた由梨亜妾は、びっくりと身体を震わせる。

峯慶は、気持ちを鎮めるように何度か呼吸をすると、穏やかに告げた。

「でも、それは危険なのだ、由梨亜妾。……今まで深沙祇妃は、思い切った手段に出ては来なかった。だが、第二王位継承権を得た娘がいるとなれば、話は変わって来る。……沙樹奈后の子供がどうであろうと、関係はないと思うだろう。そして、唯一邪魔なのは、其方の子供だと断定するはずだ。……其方の子がなければ、自分の子供が、王位に即けると。……御祖母様も、元は第二王位継承者だった。だが、異母兄あにが死んだ為に、王位に即くことになった。——それは、その大伯父上が病気で亡くなられたからだだが、人為的に、その時と同じ状況を作り出す可能性が、高くなるのだ」

愕然とする由梨亜妾に、峯慶は努めて冷静に言った。

「由梨亜妾。……赤ん坊を殺すのは、実に簡単なことなのだよ。まだこんなにも小さいから、抵抗などできやしない。……ここで育てることは、この子の生を奪うことと同義だ。……国内の、他の地で育てても同じこと。調べれば、其方の子だと分かってしまう。——深沙祇妃の目を欺いてこの子を護る為には、深沙祇妃には物慣れぬ魔法を使い、この子の素性を隠して、伝手もないような辺境で育てるしか、方法がないのだ」

「そんな……そんな、峯慶殿下……」

小さな赤ん坊の頬を撫でて涙をこぼす由梨亜妾に、峯慶は優しく言った。

「勿論、そのままではない。この子が成長した暁には、この国へ連れ戻す。……誓う、由梨亜妾。だから、私を信じて、この子を預けてほしい」

峯慶の真剣な目に、由梨亜妾はどうとう頷いた。

「分かり、ましたわ……。この子の命運や生命は、峯慶殿下、貴方様に御任せ致します」

そっと赤ん坊を抱き上げると、由梨亜妾は頬ずりをした。

「この子は……いつ、地球連邦へ、送るのですか？」

「それは、まだ決まっていない。……だが、そう遠いことではないだろう。恐らく一月、あるかないか……」

「そう、ですか……」

由梨亜妾は、悲しげに顔を伏せた。

「嗚呼。この子は……この子はあの時に、産まれて来てしまったのですわね。せめて……せめて、もう少し遅ければ……」

悔しげに唇を噛む由梨亜妾の頭を、そっと峯慶は撫でた。

「そのことは、言うな。今は、産まれたてのこの子供に、名を付けなければならない」

「それは、考えがあります」

伏せていた顔を上げ、由梨亜妾は峯慶を見据えた。

「どのような名だ？」

「はい。それは、今この国にはない、富や名声を陰謀などによって手に入れるのではなく、優しい行いによって心を富ませること、樹木を視てその神秘を感じる美しい心、そして、その時に実った果実を、単なる食糧として感謝する気持ちすら持たないのではなく、ここまで育ってきたその生命力と大地の恵みに感謝する心を願って、

『富実樹』と名付けましょう。この子が王になった時の繁栄を願い」

その答えを聞いた峯慶は、微笑して頷いた。

「ああ。それはいい。美しい名だ」

「ところで……」

由梨亜妾は、躊躇って言った。

「この子は、やはり、あちらへ……？」

あまりにもくどく思えるが、産まれたばかりの子と引き離される母親としては、当り前のことなのだろう。

峯慶は、由梨亜妾が腕に抱いた赤ん坊を潰さないように、そっと抱き締めた。

「その時は、お前の名をつけよう……きつと」

その言葉に、由梨亜妾は目を睜り、泣き笑いのような表情を浮かべた。

「あの……この子に、弟か妹が産まれたら……そして、信頼でき、決して裏切らないような子供がいた時は、その時にはこの子が地球連邦にいると言って、いいですわよね？　いくらあんな人でも、まだそのような酷いことをやろうとは思わないでしょうから」

「ああ。我らはいつまでもいられるとは、限らんのだから……」

峯慶はそう言う、小さな赤ん坊の頬を撫でた。

小さな――あまりにも小さ過ぎる、生命。

「この子の未来に、幸多からんことを、祈ろう」

由梨亜妾は、そっと頭を下げた。

そして口を開こうとしたその時、扉が慌ただしく叩かれて、こちらの返事を聞く前に、扉が開け放たれた。

峯慶は、眉をひそめて振り返る。

「一体、何事だ？」

入って来たのは、沙樹奈后の上級侍女の一人だった。

そのことに、由梨亜妾は目を瞠って峯慶の腕から身を乗り出す。

「貴女は、エリザではないの？ 沙樹奈后の上級侍女の」

「はい、仰せの通りに御座います」

「何か……沙樹奈后に、何かあったのです？」

今にも峯慶の腕を振り解き、飛び出さんばかりの由梨亜妾に、エリザは微笑んだ。

「大丈夫ですわ、由梨亜妾様。ただ、沙樹奈后様は、陣痛を御起こしなさいましただけに御座います」

峯慶と由梨亜妾は、驚きに目を瞠った。

「まあ。沙樹奈后も？」

「はい。わたくしは、それを御報せに参りました。……御邪魔致しまして、申し訳御座いません」

そう言って頭を下げる侍女に、由梨亜妾は思わず頬を赤くする。

「それでは、失礼致します」

そう言って、侍女は部屋を出て行った。

彼女が出て行った途端に、峯慶は息をついて、強めに由梨亜妾を抱き寄せた。

「……峯慶殿下？」

見上げる由梨亜妾に、峯慶は深い溜息をつく。

「全く……慌ただしいこと、この上ないな。もしも早く産まれるのであれば、今日だけで三人も子が産まれることになるぞ。こんなことは、前代未聞だ」

「そうですね……。ですが、峯慶殿下。わたくしはそうではありませんでした。初産とは、とても時間が掛かる物らしいですわ。普通は半日程掛かるのだそうです。今から、というのであれば、明日の午前三時頃か、それよりも後ではないでしょうか？ それに、普通赤子と言うのは、明け方頃に産まれるものだと言ったことがあ

ります」

由梨亜妾が見上げると、峯慶は苦笑した。

「ああ……そうか。そうだろうな、きっと」

そう言って、峯慶は腰掛けていた由梨亜妾の寝台に横たわる。

「峯慶殿下……？」

由梨亜妾が半身を起こすと、既に寝入っている峯慶の顔が視界に入った。

昨日は暑さのあまりに政務が滞っていたから、今日はとても忙しかったのだろう。

けれど、その仕事を早く終わらせて、こうして由梨亜妾の所に来てくれたというのは、とても嬉しい。

由梨亜妾は頬を綻ばせると、『富実樹』と名付けた我が子を、寝台の側にあるベビーベッドに寝かせ、自分も横になった。

一眠りして身体は大分楽になったが、それでもまだ、初産の疲れは残っている。

程なくして、由梨亜妾も深い眠りに包まれた。

第四章「別れと、」（前書き）

今回、育児や授乳に関する記述や場面があります。苦手な方はご注意ください。また、誤った内容があった場合は、ご指摘頂けると嬉しいです。

第四章「別れと、」

次の日、慣れない手つきで富実樹ふみきの世話をする由梨亜妾ゆりあしやうの元に、峯慶はなけいが訪ねて来た。

そのことに、由梨亜妾だけでなく周りの侍女達も驚いて、あたふたと動き回った。

何しろ今は、午前九時。

丁度、執務の始まる時間なのである。

由梨亜妾はそのことにも驚いたが、比較的冷静だった為、峯慶が何かを抱いているのも分かり、首を傾げた。

「あの……峯慶殿下？ 何故、この時間にここへ？ それに、その腕に抱いているのは……」

峯慶は、その問いに苦笑し、歩み寄った。

それによって、峯慶が何を抱いているのかが分かり、由梨亜妾は仰天して目を剥いた。

「峯慶殿下っ？！ その子は、一体！」

峯慶が腕に抱いていたのは、何と、赤ん坊だった。

それに気付いた侍女達が、更なるパニックへと陥る。

峯慶は、由梨亜妾が半身を起こしていた寝台に腰掛けると、そつと由梨亜妾に赤ん坊を手渡した。

由梨亜妾は酷く途惑っていたものの、まさか赤ん坊を放っておけるはずもなく、恐る恐る受け取った。

赤ん坊の頭には、柔らかな金色の産毛が生えている。

富実樹と見比べてみると、その髪の色しか違いが分からなかった。

「峯慶殿下、この子は、一体……？」

「ああ。その子は、『フルミ』だ」

あっさりと言われた言葉に、由梨亜妾の思考が停止する。

由梨亜妾の抱き方が不快だったのか、その赤ん坊はむずかかって泣く。

だが、正気付いた由梨亜妾が抱き直しても、あやすように揺すつても、赤ん坊は泣き止まない。

むしろ、声は大きくなるばかりだ。

その赤ん坊を覗き込んだルーシェは、少し途惑ったように口を開いた。

「あの……由梨亜妾様。多分この子、御腹が空いているのではないかと思います。泣き方が、御腹が空いている時の泣き方ですもの」

実は一児の母であるルーシェの言葉に、由梨亜妾は驚いて目を睜り、峯慶は苦笑した。

由梨亜妾が、そっと赤ん坊に乳房を含ませると、途端に泣き止み、凄いい勢いで吸い出す。

その様子に、由梨亜妾は目を睜った。

既に娘である富実樹にもあげたが、ここまでの勢いはなかった。

やがて、赤ん坊は満足したのか、乳房を離れた。

ルーシェがその赤ん坊を受け取ると、由梨亜妾は服を直し、峯慶に向き直った。

「峯慶殿下。先程、あの赤子のことを『フルミ』と御呼びになりましたか？　ならば、あの子は……」

「ああ。深沙祇妃^{みさぎひ}の娘だ」

峯慶はそう言うと、赤ん坊を富実樹の隣に寝かし付けたルーシェ達侍女に目配せをして、退出を促す。

それを受けて部屋を出て行った侍女達の足音が聞こえなくなつてから、ようやく峯慶は口を開いた。

「まず、最初から話した方が良さそうだな」

そう言って、苦笑した。

「深沙祇妃が、其方よりも後に子を産んだことは、昨日も言った通りだが……深沙祇妃は、それをあの子が産まれてから知ったのだ。それに、どうやら深沙祇妃は、男の子が欲しかったようだな。産まれた子が女の子で、ただでさえも落胆していた所に、其方が先に女の子を産んだと報せが行ったのだ。——それで、深沙祇妃は激怒し

たらしい」

その言葉に、由梨亜妾は頷いた。

それは、予想していた通りだ。

けれど、峯慶が続けた言葉は、予想を大きく離れていた。

「昨日、最初に其方の所に行ったが、その時其方はまだ眠っていた。だから、先に深沙祇妃の元に行ったのだ。そうしたら、深沙祇妃に言われた。――自分の娘の方に、第一王位継承権を寄せ、と」

由梨亜妾は、大きく目を瞠った。

「まさか……」

「ああ。そのまさかだ。理由は、自分の方が血筋が正しいのだから、だそうだ。自分は王族で、其方は一貴族だから、こちらに寄せ、と」

由梨亜妾は、思わず眉を寄せた。

「そのような言い分……到底聞ける物ではありませんわ。血筋の高さではなく、性の別ではなく、産まれた順番こそが尊ばれるのです。深沙祇妃の言い分には、理がありませんわ」

峯慶は、溜息をついた。

「私も、そう言った。……そうしたら、今度はこちらを責め出したからな。逃げ出すようにして、深沙祇妃の部屋から出て行ったのだが、それも気に入らなかったようだな。……今朝のことだ。驚くべき報せが来た」

「驚くべき報せ、ですか……?」

「ああ。……深沙祇妃が、侍女共々育児放棄をした、と」

その言葉が由梨亜妾の頭に沁み込むまで、かなりの時間を要した。「……育児放棄というのは、子供の世話をしない、という意味でしたように思えるのですが……」

「まさに、その通りだ。その子は、ここに連れて来た時に、酷く御腹が空いていただろう」

「え、ええ……。でも、どうしてこんな……。だって、こんな子供を巻き込む必要なんて、ないでしょう?」

「ああ。今朝、深沙祇妃の所に行ったが……どうも深沙祇妃は、その子に第一王位継承権を認めてもらうまで、世話をしないつもりらしい。しかも、自分の後見人の貴族に働き掛けたようで、深沙祇妃の後見の貴族達は、ほとんどが仕事に来ていない」

由梨亜妾の顔が、引き攣った。

「そ、そこまで……」

「その通りだ。しかも深沙祇妃は、その子に名前すら与えてやっていない。……『フルミ』という、音こそ決まっているが、字はまだ決まっていないのだ。簡単に言ってしまうえば、母親としての義務を放棄したのだ、深沙祇妃は」

由梨亜妾は、溜息をついた。

「本当に……我が子だと言うのに、そこまでやるのですか？ ……正気を疑ってしまいますわ」

「そうだな。それに、その子を深沙祇妃の元に置いておけば、良くないことになる。……だから由梨亜妾、其方に『フルミ』を育ててほしい」

「分かりましたわ。峯慶殿下」

由梨亜妾は、即答した。

さすがの温厚な由梨亜妾も、深沙祇妃の仕打ちに頭に來たらしい。「赤子には、罪はありませんもの。わたくしが、育てます。……でも、いつまでも産みの母親と引き離すのは、どうかと思いますわ」

峯慶は、少し考えて言った。

「では、そうだな……六歳まで、というのはどうだ？ 其方は、『フルミ』が六歳になるまで育てる。それから先は深沙祇妃が、というのでは」

「はい。峯慶殿下」

由梨亜妾が頷くと、峯慶は微笑した。

「ありがとう、由梨亜妾。……それと、其方のことだ。いつ、どの性別の子が産まれてもいいように、六通り全ての名前は考えてあるのだろうか？」

由梨亜妾は、頬を熱くした。

「え、ええ……。そう、ですわ。確かに、考えてはおりましたけれど……」

「では、その名を、この子に付けてほしい」

思わず反論しようとした由梨亜妾は、峯慶の、悲しみを含んだ静かな瞳に、言葉を呑み込んで頷いた。

「――分かりましたわ。……では、この子の名は、『富瑠美』と」
「何故、その名に？」

由梨亜妾は、小さく息を吸った。

「心を富ませ、豊かな心を持つように、高貴さを表す瑠璃ラリスラスリのように
気高い心を持ち、それでいて弱者を思いやる気持ちを持ち、宝石の
ように美しく、きらきらと光る美しさ、心を持つように」

一息に言った由梨亜妾は、不安げに峯慶を見上げた。

峯慶は、堅く強張っていた頬を緩め、そっと富瑠美の頭を撫でた。

「富瑠美、か……。其方は、よい名をもらったな」

由梨亜妾は、身体から力を抜いた。

「ありがとうございますわ、峯慶殿下」

峯慶は、名残惜しそうに赤ん坊達の頬を撫でたが、勢い良く立ち
上がった。

「そろそろ、執務に戻らなければならぬな。……由梨亜妾、くれ
ぐれも、無理はしないでくれ」

「はい。……峯慶殿下」

峯慶は、そっと由梨亜妾の額に口付け、部屋を出て行った。

由梨亜妾はそれを見送ると、二人並んだ赤ん坊を見詰めた。

いつの間にか、赤ん坊達の手が触れ合っていた。

同じ日に産まれた、異母姉妹しまい。

母親である深沙祇妃と由梨亜妾の仲は悪いのだが、この子達は仲
良く育ってくれそうだ。

そう思った由梨亜妾は、顔を曇らせた。

富実樹の方は、あと一月もしないうちに、地球連邦へ送らなけれ

ばならないのだ。

だから、一緒にいられる時間は――

思わず唇を噛み締めたが、それでもと、思う。

いつかこの子達は、大きくなった時に、再び出会うことになる。

その時に、仲が悪くならないでほしいと、そう願った。

子供達が産まれてから、十日後。

富実樹と富瑠美を育て、忙しい日々を送っていた由梨亜妾の元に、峯慶が訪ねて来た。

「まあ、峯慶殿下。いらっしゃいませ。……そちらの方は？」

由梨亜妾は、峯慶の後ろにいる、老女に視線を向ける。

峯慶の視線を受けて、老女は前に進み出る。

歳の頃は、七十代か、八十代か。

かなり歳が行っているのは間違いなさそうだ。

「お初にお目に掛かります、妾様^{めかけ}。私はミーシャ・ブルーノと申します」

「初めまして。わたくしは、花雲恭由梨亜^{かうきようゆりあ}ですわ」

由梨亜妾は、困惑に満ちた目で峯慶を見た。

峯慶は、由梨亜妾に苦笑する。

「由梨亜妾、この方は、つい先日退職なさったが、我が国の魔術師の最高位に立っておられた方だ。……富実樹のことを、任せる方でもある」

「富実樹の……？」

由梨亜妾は、ミーシャに向き直った。

「ブルーノ様。富実樹を――わたくしの娘を、どうか宜しく御願致します」

「はい。承知仕りました、妾様」

ミーシャは礼をすると、そっと富実樹の傍により、その頭を撫でた。

「真、賢そうなお子でいらっしやいます。この方の命運を背負わせて頂けるのは、ありがたいことです。この目で見るとは叶いませんが、王になる時が楽しみなことですよ」

「この目で見るのが、叶わない……？」

思わず呟いた由梨亜妾に、ミーシャは頷いた。

「ええ。……私は、『時渡り』を致しますので」

「『時渡り』、とは……？」

「文字通り、時を越えることにあります」

その答えに、由梨亜妾は大きく目を瞠った。

「ま、さか……時間を越えることなど、誰にもできやしませんわ」
その言葉に、ミーシャは首を振る。

「いいえ。けれど、高度な力を持つ者でなければ、できません。それこそ、五百年に一人、生まれるか生まれないか……。けれど、幸運なことに、私は『できる』者の一人です。富実樹殿下を地球連邦にお届けしたのち、地球連邦の、千年前へと『時渡り』致します」
「そんな！　だって、過去は既に定められたこと——科学の力をもつてしても、決して成し得なかった、変えることのできない、絶対的な物です！　それを——」

絶句する由梨亜妾に、ミーシャは微笑した。

「ええ。普通は、それでよいのです。『時渡り』には、多大なリスクが伴うのですから。……一度『時渡り』をすると、もう元の時代には戻れない、という、大きなリスクが」

由梨亜妾の身体が、震えた。

「ならば……ならば、何故、そんなことを……！　何も、過去に戻らなくてもよいではありませんか！　必要性など、どこにもありません！」

「いいえ。必要性ならばあります。……私はこれから、人の記憶を書き換えるのです。そして、富実樹殿下が花鶯国かおつくに戻られる時にも、記憶を書き換えることが必要です。けれど、それには決して齟齬があつてはなりません。絶対に。その為のクッションとして、富実樹

殿下と、そして入れ替えられる子供を過去へと運び、記憶を書き換え、そして戻すという必要があります。――確かに、過去であれば、いつでも宜しい。けれど、万が一ということがあります」

「そんな……」

つまりは、この老女の生命と、未来と引き換えなのだ。

そうしなければ、富実樹は護れないのだろうか？

いや、他にも方法があるはずだ。

けれど、それを言おうとした由梨亜妾を遮って、ミーシャが告げた。

「富実樹殿下と入れ替える少女は、地球連邦の日本州に住まう貴族の娘、本条千紗に決まりました」

「ニホン……？　どこかで、聞いたことのある名前ですわ」

「ええ。そうでしょうね。……花鶯国では、王族のみが使用を許される文字がありますね。その文字は、数百年前に、他国からもたらされた物です。――開国前の、地球連邦が日本州、つまり、当時の日本国から」

由梨亜妾の瞳が、大きく瞳られた。

「その文字が創られたのは、その隣の州であり、当時は国であった中華国です。ですから、元はその国へと行き着きます。けれど、花鶯国の者が、当時発見したばかりの未開の星へと――しかも、こちらが存在など、欠片たりとも知り得ない野蛮な国に興味を持ち、行き着いたのは日本国の方。ですから、その国がなければ、今とは違った世になっていたことでしょう」

ミーシャは、由梨亜妾に微笑んだ。

「私は、その国に興味があるのです。許されるならば、行きたいと思っております。……けれど、日本国は既になく、あるのは日本州という州です。ですから、許されるのであれば、『時渡り』をしてでも行きたいと思っております。けれど、『時渡り』は、厳しく制限されております。このことがなければ、私の夢が叶うことはなかったでしょう。――私は、自ら望んで『時渡り』をするのです。

妾様がお気になさることはありません」

ミーシャはそう言うのと、峯慶を振り返り、峯慶が頷くのを確認して由梨亜妾に向き直った。

「妾様。富実樹殿下を地球連邦へお送りするのは、明後日となります」

「あ、さって……？ そんなに早く、連れて行くのですか？」

「はい。出生届の期日がありますので、明後日となります」

由梨亜妾は、富実樹を抱き上げた。

「そう、ですか……分かりました。ありがとうございますわ」

「それでは、失礼致します、妾様。また、明後日」

「はい」

「由梨亜妾、私も、執務に戻らねばならない」

「そうですか。峯慶殿下、ありがとうございます」

「いいや」

短く挨拶を交わしたのち、峯慶とミーシャは部屋を出て行った。

それを無言で見送った由梨亜妾の頬に、一筋、涙が零れた。

腕の中の富実樹へと、それが伝い落ちる。

それで目を覚ましたのか、富実樹はむずかかって泣き出す。

けれど、それでも、由梨亜妾の瞳からは、涙が零れ落ち続けた。

二日後の、八月二十八日。

その早朝に、由梨亜妾は外に出ていた。

由梨亜妾は富実樹を抱きかかえ、ある省に入る。

その名も、花鶯省。かおうしょう

基本的にこの省は、王族関連の仕事をこなしている。

何しろ、ここの大臣は花雲恭奨砥。しやうと

現国王花雲恭藤聯とうれんの実弟であり、由梨亜妾の腕の中で眠っている富実樹からすれば、実の大叔父である。

つまり、代々王族が頂点に立つ省なのだ。

だからこそ、国の最高機密を取り扱うこともある。

そして、花鶯国の中でもトップシークレット、決して諸外国にばれてはいけないことが、魔族の力のことだ。

国内でこそ公然の秘密となっているが、国外にばれたが最後、国際社会から爪弾きにされかねないのだ。

だから、魔族の力を科学の力と誤魔化すのも、この省の担当となっていた。

また、それだけではなく、魔族の力を持って生まれた子供の教育や、魔族の力を社会に役立てる――つまり、就職先の斡旋も、この省がやっていた。

だからこの省には、魔族の力を持つ者が多くいるのである。

ミーシャも、つい先日退職したのだが、元はこの省の職員だった。由梨亜妾は、まだ誰もいないこの省に、足を踏み入れた。

そして、元から指定されていた部屋に入ると、そこには籐聯、峯慶、ミーシャが揃っていた。

由梨亜妾は、峯慶とミーシャがいるのには驚かなかったが、籐聯までがいるのには、驚いて目を瞠った。

五十代の前半に差し掛かっている籐聯は、その歳よりも老けたような顔をしていた。

その視線が娘にあることを知って、由梨亜妾は、そっと富実樹を差し出す。

籐聯は無言で富実樹を抱きかかえると、その険しい表情を緩めた。初孫を手放さなければならぬ悲しみは、峯慶や由梨亜妾と、同じだろう。

籐聯は富実樹を抱き締め、その柔らかな頬に口付けると、ミーシャに手渡した。

ミーシャは、大事に富実樹を受け取る。

その足元には、複雑な紋様の描かれた魔方陣と、鞆が一つ置かれていた。

誰もが無言の中、ミーシャが口を開く。

「妾様。……私は、これから地球連邦へ、それからその過去へと参りますが、それには、これも持つて行こうと思っております」

ミーシャが指し示したそれに、由梨亜妾は首を傾げた。

「これは……鏡？」

「はい。鏡ですが、ただの鏡ではありません。これは、去解鏡きょかいぎょうと申します」

「去解鏡、ですってっ?!」

由梨亜妾は、咄然としてミーシャを凝視した。

「去解鏡って、二十年程前に創られた、過去を覗き見ることできる、あの去解鏡ですかっ？」

「そうです。……これは、これがあつた過去しか、見ることはなりません。そして、その近くになれば」

ミーシャは、そつと鏡を撫でた。

「ですが、隣の部屋にある去解鏡は、少し改善しております、距離の制限を関係なくしたのです。……それを汎用品にするのは危険過ぎますが、少し覗き見る程度には、丁度よいでしょう」

ミーシャは、由梨亜妾を強く見据えた。

「私がこの去解鏡を過去へと持つて行くことによって、妾様、貴女は、富実樹様の成長された姿を見ることが叶います」

ミーシャはそう言うと、驚きに目を瞠る由梨亜妾の返答も聞かず、魔方陣を作動させた。

魔方陣から光が零れ、由梨亜妾達の目を射る。

「陛下、殿下、妾様。……さようなら」

その声が聞こえた途端に、光が消え失せ、ミーシャや富実樹も、魔方陣と共に消え失せた。

後には、何も残らなかった。

いつまで、立ち竦んでいたのだろうか。

そつと峯慶に肩を叩かれて、由梨亜妾が気付いた時には、籐聯の

姿はなかった。

「富実樹、は……富実樹は……！」

泣き崩れる由梨亜妾を抱き留め、峯慶は言った。

「由梨亜妾……これで、良かったのだよ。これしか、方法はなかった。だから……」

峯慶は、由梨亜妾の頬を拭った。

そして、促して外に出る。

隣の部屋に入った由梨亜妾は、そこに立てられた巨大な鏡と、一人の男性がいるのに目を瞠った。

そして、ミーシャが言っていたことを思い出す。

鏡に縫り付くようにした由梨亜妾を峯慶は引き剥がし、男に目配せをする。

それを受けて、男は鏡を向き、手をかざす。

その途端、鏡に映像が映った。

由梨亜妾は、それを食い入るように見詰める。

見たこともない建物に、見たこともない服装の、見たこともない人達。

いかにも古めかしいそれは、確かに千年も昔の過去なのだ。

やがてそれは、二人の少女を映し出す。

二人とも、十二、三歳くらいだ。

一人は、背に届く程の長さの茶色の髪を持つ少女。

もう一人は、肩を越える程の長さの黒髪を持つ少女。

（どっちなの……？ どっちが、富実樹なの……？）

耳を澄ますと、二人が話している言葉が聞き取れた。

『ねえ、これ、何だと思う？』

『え……。分かんないよ、そんなの。だって、学校で習ってないじゃん』

『そうよねえ……。私も、分からないわ。別に、分からなくても困らないけど……』

『うーん……。これを使ってる子達、みんな楽しそうだね？ そ

れに、音もするし……。ゲームなのかな?』

『ああ、成る程。確かに、そうかも知れないわね』
茶色の髪の少女は頷くと、黒髪の少女を促した。

『あ、そろそろ行かないといけないんじゃないかしら? ほら、時間だ』

『ほんとだ。あーもう、もっとゆっくりしてたいよお』

『千紗ったら、ここでそんなことを言っても仕方ないわよ。ほら、行きましよ』

『うん……。由梨亜、何でそんなに元気なの? あたし、寝不足で眠い……。』

その後も、少女達は会話を交わしていたが、由梨亜妾の耳には、もうそれは入って来なかった。

「富実樹……」

由梨亜と呼ばれた、茶色の髪の少女。

去解鏡は、しばらく二人を追っていたが、やがて映像が途切れる。
由梨亜妾はそれでも、しばらく去解鏡を見詰めていた。

「……由梨亜妾」

峯慶は、堅く由梨亜妾を抱き締める。

「富実樹は……富実樹は、あそこで、元気にしていた。——だからきつと、私達の元にも、元気で還って来てくれる。だから、それまでは……」

由来妾は、峯慶を振り返った。

「はい。わたくしは、富実樹の母であるだけでなく、富瑠美の養母ははでもありますもの。……富瑠美を、ちゃんと育てますわ」

由梨亜妾はそう言って、頬を拭った。

「それでは、失礼致しますわ、峯慶殿下。富瑠美が、御腹を空かせているかも知れません」

そう言って立ち去った由梨亜妾を、峯慶は目を細めて見送った。
今考えてみると、由梨亜妾に富瑠美を育てるようにと言ったのは、良かったのかも知れない。

自分で産んだ娘を手放す悲しみは、いつまでも付いて回るだろうけれど、富瑠美を育てているうちに、その悲しみは、少しは薄らいでいくだろう。

そう思った峯慶は、その富瑠美の産みの母である深沙祇妃を思い出し、苦い溜息をついた。

深沙祇妃は、富瑠美を自分の手から引き離されたことに激怒し、王である籐聯に直訴したのだ。

けれど、その剣幕を見て、籐聯は益々富瑠美を由梨亜妾に預ける意志を固めた。

峯慶は最初、富瑠美は六歳の頃まで由梨亜妾に育ててもらおうと思っていた。

さすがにそこまでの時を置けば、深沙祇妃の頭も冷えると思ったのだ。

けれど籐聯は、深沙祇妃の様子を見て、その期間を延長したのだ。そして、深沙祇妃に

『もし御前がこのまま大人しく、妃として過ごすのであれば、富瑠美は十歳になった時に御前に返す。だが、それでも我を通すのであれば、由梨亜妾にはずっと富瑠美を育ててもらおう』

と言いつつ放ったのだ。

それを聞いた深沙祇妃の顔からは血の気が失せたが、ここで抗議すれば、永遠に富瑠美は我が手に戻って来ないことをようやく悟ったのか、渋々と引き上げて行った。

峯慶は、由梨亜妾を特に愛していたが、それでも、他の妻達のことを粗略にするつもりはなかった。

由梨亜妾を愛する、この自分の気持ちは堪えようがないけれど、格別の愛情を注いでしまうのを止めることはできないけれど、他の点では、妻達と全て平等に接するつもりだったし、覚悟もあった。

けれど――深沙祇妃のことは、これから先も愛せそうにない。

だが、深沙祇妃と離縁する訳にもいかない。

そもそも深沙祇妃は、ミオメス国の王女なのだ。

こちらの都合で離縁したら、いくらミオメス国でも気性の激しさに手を焼いていた事実があっても、それこそ全面戦争になりかねないのだ。

このまま、ずっと大人しくしていればいいと思って、峯慶は深い溜息をついた。

まだ二十七の自分には、何もかもが、あまりにも重過ぎた。

終章「未来への途（みち）」

「ねえ……由梨亜……？ 由梨亜！ ねえってば！」

由梨亜は、そっと目を開いた。

辺りを見ると、もうほとんどの人が立ち上がっている。

由梨亜は、眩しそうに千紗ちさを見上げた。

「何？ どうかした？ 千紗」

その答えに、千紗は顔をしかめた。

「『どうかした』って、どうかしたのは由梨亜の方でしょっ？ もう祈禱は終わったってのに、ボヘーって座り込んでるんだから！ やっぱ由梨亜、この前から変だよ！ どうしたの？」

「え、ううん、何でもないわ。ただ、ちよっと寝不足で、ぼんやりしちゃっただけ」

由梨亜はそう言って、笑った。

その笑みが、ぎこちなくならないように気を付ける。

だが、誤魔化し切れなかったようで、千紗は唇を噛んだ。

けれど、それ以上追及しても、由梨亜が何も言わないことを覚ったのだろう。

千紗も、ぎこちなく笑った。

「……そう？ 由梨亜、いつも何も言わないで無茶するんだから、無理しないで言ってね？」

「……大丈夫よ、千紗。さ、行きましょう」

由梨亜はそう言って、千紗を置いて歩き出した。

すると、すぐに後ろから千紗が追って来て、文句を言い出す。

けれど、由梨亜は適当な相槌を打つだけで、ほとんど聞いていなかった。

やがて諦めたのか、千紗が小さな溜息をつく。

それを聞いて、由梨亜は瞳を閉じた。

（私は……千紗の居場所を、奪ったんだわ。彩音さいいんの小母様が酷い方

だっていう訳じゃないけれど……でも、実の両親から、無理矢理引き離してしまったのは、事実よ。それに、千紗の人生を、私のせいで——私が産まれたせいで、狂わせてしまったのも、事実だわ）

由梨亜は、そっと隣を見た。

千紗が、どこか不貞腐れた表情なのが分かる。

思わず、笑みが零れた。

（千紗ったら……。やっぱり、小母様の所で育ったからかしら？ 明るくって、元気で……。真実を知った今になったら、本当に、眩しいくらい……。千紗にしてみたら、真実を知らないでいた方がいいのかも。千紗には、多分……。本条家の暮らし——上流貴族としての暮らしは、似合わないわ。でも、彩音家に戻るっていう選択肢は、最初からない……）

由梨亜は、何日も掛けて知らされた、自分の出生を思い起こした。（そして私も、花鶯国かおうこくに戻らないって選択肢は、最初からないんだわ。……。だったら、千紗を本当の家に還す選択肢が——一番、いいのよね……。これで、いいのよね？ 本当に……。本当に、この選択肢で合ってる？ 間違ってる？ 御父様、御母様……）

由梨亜は、背後を振り返った。

そこには、毎日祈禱を行っていた聖堂があった。

（多分……。この香封啓教かうほうけいぎょうを開いた長手深芳ながてみよしって人と、あの日記帳を創った人は、あの記憶にあった、私を地球連邦まで連れて来たミーシャというお婆様だわ。だから、最後の選択肢を——二人揃って還れる選択肢を選ぶのに必要な、香封珠かうほうじゅがあるのね……。ミーシャさんは、私の為にこんな所で亡くなったんだわ。私が、いなければ……）

ふと、顔を上げた。

暖かな風が、頬を撫でる。

何だかそれだけで、慰められた気がした。

たとえば自分が、もう彼女の親友だと胸を張って言えないような、卑怯者の嘘つきだとしても。

この瞬間だけは、穏やかな心でいられた。

『彼女』は、自分の人生を悲観していなかった。

そこそこの生活水準の家に生まれて、暮らしもごく平凡だった。

普通ではないのは、『彼女』が特異な力を持っていたことだ。

だから、十二歳の時に、親元を離れることになった。

『学校』は厳しくて、修行も厳しくて、家族が恋しくて、何度も泣いた。

けれど、その生活が充実していなかったと言ったら嘘になる。

だから、そのまま国の為に自らの力を尽くすことに、何の不満もなかった。

結婚は、しなかった。

結婚して家庭を持つより、仕事の方が楽しかった。

勿論、働きながらも家庭は持てる。

夫を、子を持っていた同僚や先輩、後輩達も数多くいた。

けれど、どうしても家族がいないと、仕事に割ける時間や余裕が少なくなってしまう。

だから、別にいらなかった。

そうしているうちにどんどん歳を取り、生き甲斐でもあった仕事も退職することになった。

けれどそのことすら、『彼女』を絶望に陥れるに至らなかった。

何故なら、仕事を辞めても研究はできるのだ。

『彼女』は余生を、その研究に費やそうと思っていた。

だが、障害もあった。

何故なら、『彼女』が研究しようと思っている分野は、そもそも研究している者がいないのだ。

別にそのこと自体は、問題ではない。

『彼女』は名声を高めたいのではなく、純粹に趣味を追求したかったのだ。

問題は、そもその情報が足りないことだ。

それに、その研究対象は、かなり辺境の、行くまでも何週間も掛かるような辺境の国である。

おまけにそちらの歴史では、こちらとの関わりがあったという史実すらないのだ。

どう足掻いても、詳しい研究は不可能だった。

どうしようかと、悩んでいた時だった。

『お姉様』の子と孫から、思い詰めた顔で相談を受けたのは。

その『甥っ子』と『大甥っ子』^{おおおい}に、解決策を提示したのは『彼女』だった。

勿論彼らは、難色を示した。

けれど、『彼女』は二人を説き伏せた。

これは、自らも望んでいることだと。

そして、『お姉様』の曾孫ならば、自分の曾姪孫^{そうてっそん}——つまり、親族だと。

『彼女』が、何よりも自分の研究と仕事が好きだと知っていた彼らは、苦しみながらも同意してくれた。

それに、その曾姪孫を護る方法は、それが最も安心でき、簡単にできる物であった。

だから、今生の別れとなると知っていても、『彼女』は笑っていた。
られた。

——何度か、問われたことがあった。

何故、魔術師としての道を選んだのかと。

彼女の母はただの庶民だったが、父親は身分が高かったので、庶子扱いではあるが、こんな危険な仕事に就かなくても、生きていく術はあったのに、と。

……けれど『彼女』は、問われるたびに首を振った。

自分は、魔法が好きだから、ここにいるのだと。

そして、あの生まれた場所に戻ったとしても、そこは箱庭の世界。自分は姫君ではないが、下級侍女として一生を使い、箱庭の中に

閉じ込められるよりは、自分の手で生きる術を掴み取りたい、と。

同時に、『彼女』は母親に対して申し訳なく思っていた。

基本的に総下^{そうげ}は、三年間でお役御免となる。

けれど、王や女王の伴侶が、特別に気に入るか——子供ができたら、話は別だ。

『彼女』の母親は、もうそろそろでお役御免となる時に、妊娠してしまった。

だから、『彼女』は母親を、この鳥籠の中に閉じ込めることになっってしまったのだ。

——ただ、その存在ただ一つで。

でも、母は優しかった。

優しいからこそ、彼女は頑張って、早く大人になろうとした。

子を身籠った総下が後宮に留め置かれるのは、王家の血を引く子供を育てる為。

だから、『彼女』が大人になれば、母親は鳥籠から解放されるのだ。

国直属の魔術師になろうと思ったのも、それが理由の一つだ。けれど、それは理由の全てではない。

それは、『彼女』の姉だった。

正確に言えば、『姉』ではなく、『異母姉^{あね}』。

ほんの二、三年しか歳の違わない、この国の第一王女。

慈愛と賢知の姫君として知られているこの姫君は、第二王位継承者であることが勿体ないと言われる程であった。

そして、国内でしか知られていないことだが、彼女は魔族の力を凄まじい程に受け継いでいた。

だからその王女を、『先輩』として、『異母姉』として、何より
の存在として『彼女』は敬っていた。

けれど、『彼女』の存在を——『異母妹^{いもむい}』の存在を、『異母姉』は知らなかった。

これは、さほど珍しい話でもない。

正妻格の母親を持ち、王女として認められている『異母姉』に対して、愛妾格の母親を持ち、完璧な日蔭者の『異母妹』。

『異母姉』が『異母妹』のことを知ったのは、『彼女』が素晴らしい魔力の使い手として知られてからのことだった。

でも、それで構わなかった。

それでも『異母姉』は、『彼女』の目標だったのだから。

そして、後輩として、異母妹として、王女が即位して女王となった後も、可愛がってもらった。

それだけで、自分は充分だった。

そのことと研究さえあれば、自分はどこでも生きていけた。

だから——この辺境の地で、千年前の過去で死すこととなっても、後悔はなかった。

気掛かりは、あの幼い生命が——曾姪孫そうてっそんにあたる赤ん坊が、ちゃんと大人になれたのか、幸せに暮らせていられるのか、それだけだ。けれど、こんなしわくちやになるまで生きた『彼女』が気に掛けなくても、赤ん坊は元気に育ち、両親と再会しているだろう。

だから——『私』は、満足だった。

後悔なんて、一片たりともありはしない。

気掛かりだけは、……あったけれど。

長手深芳と名乗ったその女性は、当時乱立していた新興宗教の中では、比較的まともな物として受け入れられ、永久とわの眠りに就いた。彼女の申告が確かなのであれば、享年九十七歳。

立派な大往生だった。

けれど、不可思議なことがある。

『長手深芳』という女性は、戸籍になかった。

そして、彼女の遺体は、突如として消え失せてしまったのである。まだ他の宇宙に生きる人類の存在を知らなかった人々は、彼女のことをあらゆる憶測でもって語った。

そのうちの一つに、彼女は実はエイリアンだったという物があつたが、実に言い得て妙である。

彼女は確かに、異邦人^{エイリアン}であつたのだから。

そして、彼女の存在を証明するあらゆるモノは、彼女の死から百年程で消滅した新興宗教と共に、地上から消え失せたのであつた。

時は、西暦二一三〇年。

治安を乱す物と成り下がった新興宗教を、国が狩り始めた年だつた。

ぱちり、と目を開けて、その女性は、そのことに驚いた。

何故なら、自分は『死んだはず』だから。

だから、『あり得ない』のだ。

女性は驚いて辺りを見回し、また驚いた。

その風景は、かつての自分が生きていた時代と、よく似ていた。でも、違う。

そう——自分が生きていた時代と死んだ時代を足して、丁度良く割つたら、こんな感じになるのではないだろうか。

そうして足を踏み出して、そのあまりの軽さと現実感のなさに、また驚いた。

驚いて身体を見下ろして、またもや驚いた。

何故なら、自分は宙に浮いていて、身体も随分と若返っていた。

そう、ざっと七、八十年程。

そして、自分の手が持っている物を見て、女性は目を丸くした。

それは、自分が過去の時代に渡ってから創り上げた、去解鏡^{きょかいきよう}の発展形であり集大成である物——自分がかつて生きていた時代で、理論上は創ることができた物、現解鏡^{げんかいきよう}と、女性が名付けた物だったのだ。

これは、魔族の血を引いている者でなければ使えない。

それに、見た目はただの鏡だ。

だから、どうせ地球人には使えないのだし、別に遺して逝っても構わないだろうと思っていたのだが――。

その時、少女の軽やかな声が聞こえた。

興味をそそられて、女性は声の方向に移動する。

見ると、二人の少女がじゃれ合っていた。

二人の顔は、よく似ていた。

一人は茶色、もう一人は薄茶色の髪で、茶色の髪の少女の瞳は緑がかった黒の色で、薄茶色の髪の少女は焦げ茶色だった。

二人は、とても仲がいいのだろう。

とても、楽しそうだ。

そしてそれ以上に、その女性を惹き付けたモノがあった。

それは、懐かしい気配。

異母姉の、気配だった。

『お姉様……』

女性は、そっと呟いた。

公的な場でも、それどころか私的な場でも、ただの一回として、呼ぶことが叶わなかった呼び名で。

この二人の少女には――特に、茶色い髪の少女の方には、異母姉の加護が色濃くある。

一体何者なのだろうと首を傾げた時、二人の会話が耳に入ってきた。

久し振りに聞く、共通語。

懐かしさに耳をそばだてると、二人の名前が分かった。

千紗と――由梨亜。

それで、その女性は納得した。

この二人は、本条千紗と花雲恭富実樹かうきよみきなのだ。

女性は、この二人が赤ん坊の時に、会ったことがある。

だから、特に本条千紗の方に申し訳ない気持ちがあったのだが、この仲の良さでは、何の心配もいらなさそうだ。

そう思って、ふと手元に目をやる。

……もしかしたら、この二人の少女であったなら、現解鏡を有効活用してくれるのではないだろうか。

そう思うと、女性は微笑した。

そして、自分の気が付いた所に戻る。

そこは、どうやら客間のようなだった。

さて、どこに隠そうかと悩んで、棚に並べられている小物の陰に立て掛ける。

これを見付けられるかどうかは賭けだが、彼女達ならばできそうな気がした。

理由のない、根拠のない自信に、思わず微笑する。

そして窓から外を覗くと、下の方に、先程の少女達がいるのがよく分かる。

花雲恭富実樹は、今、幸せに暮らしているのだと――それを知ることができて、良かった。

そう思い、瞳を閉じる。

女性の姿が、足元から崩れ出した。

けれど、女性は動じない。

死ぬことは、生きる者の定めだ。

けれど、二度はできない『時渡り』を、こうしてすることができて、そして気掛かりも解決できたのは……神のお蔭だ。

神の気紛れのお蔭で、こうして自分は、安らかに逝ける。

随分と前に逝ってしまったであろう、父である花雲恭禰^{おうしやう}祥、母である総下のアイル・ブルーノ、仕事を共にした仲間達、そして、目標であった異母姉、花雲恭癒^{ゆりあ}璃亜――。

既に逝ってしまった彼らのことを思い浮かべ、その女性は消えた。実に、満足そうな表情を浮かべて。

歴史の大きな波に飲み込まれ、存在を失った者は、数多くある。彼女も、その一人。

王の血を引きながら、いわゆる日蔭者として一生を送ることを好まず、ある意味陰の生き方ではあるが、彼女は、自分の生き方を自分自身の手で掴み取った。

その生き様は、歴史に刻み込まれても可笑しくない程、立派な物。けれど、彼女の生まれた国の闇に触れて生きたことから――そして、闇を請け負ってこの時代から姿を消したことから、彼女の存在は、抹消された。

彼女は、満足だったのだろうか？

彼女は姿を消す前に、その問いを投げ掛けた、二十歳も歳の離れた異父妹に答えていた。

『満足か、ですって？ 満足でない訳がないでしょう。だって私は、今まで幸せだったのよ？ 確かに、ここでやりたいことは、まだまだあります。……でも、人生そんな物でしょう。完全に、完璧に欲求を満たしていたら、いつまでも死ねない。私は、お母様に会いたいから、お父様に会いたいから、他にも、会いたい人が一杯いるから、死ぬのは怖くないわ。だって、死ななきゃ会えないもの』

そう言って、彼女は姿を消したという。

これが事実かどうかは、定かではない。

全てが、歴史の陰に葬り去られてしまったから。

けれど、歴史の闇に埋もれたその生き様を思うと、この彼女の言葉は、あながち間違っていないのではないかと思える。

知る人が誰もいない彼女は、それでも、知られていないからこそ幸せだったのではないか。

彼女は、表舞台に立つことは一生なかった。

それを不幸だと言う人もいるだろう。

けれど、彼女を欠片なりとも知る人達は言った。

彼女は、満足していた。

最期を看取ることはできなかったけれど、きっと幸せそうな表情で、立派に大往生したのだろう、と。

(終)

終章「未来への途（みち）」（後書き）

大甥^{おおおい}……兄弟姉妹の孫息子、孫の再従兄弟、親の曾孫である関係。
自分から見て四親等で、続柄的に見て孫と同世代。
曾姪孫^{そうてっそん}……兄弟姉妹の曾孫、曾孫の三従兄弟^{みいとこ}、親の玄孫^{げんそん}（曾孫の子供）
である関係。自分から見て五親等で、続柄的に見て曾孫と同世代。

この章で、峯慶とマリミアンの話は終了になります。
次は千紗と由梨亜の過去編です。

序章「岐路」(前書き)

このく邂逅のその時くは、全体的に暗めな話になります。また、いじめや差別的な表現も相当出てきますので、苦手な方はご注意ください。

序章「岐路」

「お父様……今、何と？」

由梨亜は、呆然と父の耀太ようたに問い掛けた。

「引越すと、そう言ったのだ、由梨亜」

耀太はそう言って、力強く娘を見据えた。

「勿論、今すぐという訳ではない。引越すのは、三年後だ。だから、お前は六年生になった時に、引越すことになる」

「え、でも……どうしてですか？ 何で、そんなにいきなり……」

「実は、我が本条グループほんじょうが、新たな仕事を手掛けることになってな。それには、この東京にいたままでは、何かと不便なのだ。……お前には、可哀想なことになるが……」

父の言葉に、けれど、由梨亜は首を振った。

「いいえ。……むしろ、好都合です、お父様」

その言葉に、耀太はハッとした顔になり、小さく頷いた。

「そうか。……そう、だったな。——由梨亜。お前は、今すぐ引越したいのか？」

由梨亜は、少し迷った後、こくんと頷いた。

「はい。……正直な所を言うと、そうです」

「そうか……」

耀太は小さく溜息をつく、幼い娘の頭を撫でた。

「確かに、今引越して、いいことはいい。だが、今は、向こうに家を造らせている途中だ。だから、今引越したとしても、住む家がないのだ。……だから、由梨亜。あと、もう少し我慢してくれ」

「ええ。……でも、できるだけ、早めて頂けませんか？ 私、あんまりこちらには、長居したくありません」

その言葉に、耀太は渋い顔になった。

「まあ、不可能ではないが……それでは、学期の途中の、中途半端な時期の転校になるぞ。お前は、本当にそれでいいのか？」

「大丈夫です、お父様。……私が六年生になるよりも前に、遅くても六年生になる時には、引越す。これは、決まっているのでしょう？」

「ああ、そうだ」

「なら、それでいいです」

耀太は、由梨亜を痛ましい目で見詰めると、力強く言った。

「勿論、向こうの学校も十分に吟味しよう。幸い、時間はまだたっぷりとあるからな。お前に——本条家の跡取り娘に相応しい学校を選ぼう」

「あ、あの、お父様！」

由梨亜は、熱心に父親を見上げた。

「何だ？ 由梨亜」

「あの……学校は、公立がいいです。私……その、私立の学校は、ちょっと……。——いえ、あんなことがまた起こるとは言いませんが、もし、あんなことと似たようなことでも起こったらと、思うとうと……。だから、私、私立には行きたくありません。公立なら、あんなことは起こらないと思うんです」

由梨亜は、必死に——いささか、必死過ぎる程に、熱心に父親に訴えた。

その様子に、感じる物があつたのだろうか。

耀太は、しばらく唸って考えていたが、やがて頷いた。

「……分かった。お前が、そこまで言うのなら……。公立の学校にしよう。……ただし！」

耀太はぴしゃりと言った。

「その学校の素行は、充分に調べさせてもらうぞ。万が一にも相応しくない事柄があるのであれば、そして、相応しい公立の学校がないのであれば、私は、お前が何と言おうとも、お前を私立の学校に入れるぞ」

「はい。それで結構です、お父様」

由梨亜は頷くと、父親に辞去を述べ、それまで話していた父の書

斎を出た。

そして、その廊下を、どこか感慨深げに歩く。

由梨亜は、ふと足を止めて、窓から外を眺めた。

そこでは、まさに満開の桜が、散り落ちていた。

その幻想的な乱舞を、由梨亜は無言で、無表情で、ただじっと眺める。

——共通暦一三一七年、本条由梨亜、初等部三年生の、八歳の春だった。

墨を流したような漆黒の髪を持つ少女は、暗い顔をして職員室に向かった。

「——先生」

その声に、職員室中の教師が振り返り、一様に気まずげな顔をしてお目を見せる。

けれど、その少女に声を掛けられた教師だけは、そういう訳にはいかず、身体はその少女に向かったものの、顔は微妙に逸らされ、視線も宙を彷徨った。

「ど、どうした、彩音^{さいいん}」

すると、その少女は、小さく溜息をついて言った。

「教室と廊下の掃除、終わりました」

「そ、そうか。ご苦労だったな、彩音。あ、明日も、遅れないように、な」

「……先生。明日から、三連休ですけど」

「あ……ああ、そ、そう、だったな。じ、じゃあ、彩音、もう、帰ってもいいぞ」

始終びくびくしっぱなしの教師に、少女は暗い目をひたと当てる。

「はい。失礼しました」

少女は暗い顔付きのまま、頭を下げ、職員室を後にした。

廊下に差し込む光は、すっかり黄昏の色だ。

少女は皮肉めいた自嘲を浮かべると、教室に戻って行った。

「……………」

可笑しい。

電気は消したはずなのに、何故か付いている。

少女が教室に入ると、そこには誰もいなかったが、少女が机の上に置いていた荷物は、すっかりばら撒かれていた。

少女は、思わず深い溜息をついた。

そのまま床に膝を付き、荷物を拾って仕舞い直す。

自分が予想外に早く戻って来たことで、これをやった人達は、これ以上の悪戯をする余裕がなかったのだろう。

そう思うと、益々憂鬱な気分になった。

立ち上がり、少女は教室を見渡す。

ここの掃除は、今日、自分がやった。

今日だけではなく、昨日も、一昨日も、先週も——一ヶ月前も、二ヶ月前も、ずっとずっと。

全てが自動化された今日、生徒が掃除をする意味はない。

自動機械で、掃除が全てできてしまうのだ。

けれど、生徒の自立心と責任感を養うとか何とかで、自分達の使う教室と廊下は、交替で掃除することになっていた。

しかしこのクラスでは、この少女以外の生徒が掃除をしたことは、一度もない。

このクラスだけではなく、昨年、この少女が属していたクラスでも、そうだった。

だから、去年から少女は、一度も早く帰ったことはない。

曜日ごとに授業数が違うせいで、その時間にはばらつきがあったが、基本的に遅くなった。

それも、仕方のないことであろう。

この広い教室と廊下を、たった一人で掃除しているのだから。

——共通暦二三一九年、彩音千紗^{ちさ}、小学校五年生の、十歳の晩春
だった。

第一章「巡り会い」

「……ただいま……」

その小さな声は、たった一人の少女には広過ぎる空間に、溶けて消えた。

家には、誰もいなかった。

だが、それは元からだ。

千紗ちさの両親は共働きで、二人とも大変忙しく、両親が平日の昼間に家にいる姿を、千紗は見たことがなかった。

そして――七ヶ月前に、千紗の父が、交通事故で逝ってしまっただけから、更に。

昏く沈んだ瞳が、僅かに揺れた。

その時、家の電話が鳴った。

それに、千紗ははっとした表情になり、震える手で通話可能状態にする。

すると、映像は流れて来なかったが、機械で変えられた声が流れて来た。

『――死ね』

微かに、千紗の手が震える。

代わって、別の声が、

『学校来んじゃねえ！ 汚えだろうがっ！』

『邪魔なんだよ、この阿呆が！』

『とっとと死んじまえ！』

『誰がお前なんか相手にするかよ、ばっかっ！』

『このドブス！』

『死ねよ、お前なんか！』

『二度と俺らの前に顔出すんじゃねえ！』

『さっさと消え失せろ！』

『死んじまえっ！ 生きてるだけで目障りなんだよっ！』

千紗は、歯を食いしばって通話を切った。

けれど、先程の言葉が、ずっと頭の中を駆け巡る。

耐え切れずに、耳を塞ぎ、その場にしゃがみ込んだ。

でも、その声は、現実の声ではない。

耳を塞ぐことで、より神経が研ぎ澄まされ、その声は更に大きくなった。

「嫌っ……！」

……分かっている。

もう、自分に電話を掛けて来る友人なんていない。

それでも、どうしてもと、一縷の願いを抱いてしまう。

そして、絶望する。

両親に相談することも、考えた。

けれど、元が意地っ張りで負けず嫌いな千紗は、相談することが『負けた』ように思えて、できなかった。

それでも、耐え切れずに、相談することを決めた。

その矢先だったのだ。

父が、交通事故で急死したのは。

母は常に忙しくしていて、それに父が死んだことにショックを受けていて、とてもではないけれど、相談できるような状態ではなかった。

「……………」

また、電話が鳴った。

自然と伸びる右手を左手で抑え、顔を背ける。

それでも、ずっと鳴り続けるのに耐え切れず、千紗は家を飛び出した。

ざざ、ざざ、と、波が防波堤に打ち寄せる音がする。

千紗は、唇を噛み締めて、その流れを凝視していた。

千紗の胸の辺りまで、木製風の柵がある。

けれど、それは景観を阻害しないように設置されているので、隙間から、もしくは乗り越えれば、向こうに行くことができる。

そこから少し下がった所に、更に頑丈な柵があつて、乗り越えるのは容易ではない。

でも、そこを乗り越えれば、堅い岩があつて、そこから飛び下りれば、溺死できるかも知れない――

はっとして、千紗は頭を振った。

自分に非はない。

確かに今、自分はいじめられているが、それは自分が悪い訳ではないのだ。

いじめは、基本的にいじめる方が悪いとされるが、いじめられる方に一点の非もないということは、とても少ない。

でも、このいじめは――

柵を握り締めた両手に、強く力が籠もる。

もし自分に悪い所があるとすれば、それは、無駄に溢れていた正義感だろう。

思わず唇を噛み締めた千紗に、背後から、声が掛かった。

由梨亜^{ゆりあ}は、初めて来た町に、心を躍らせていた。

それまでいた東京よりも、高い建物は少なく、娯楽施設もほとんどない、由梨亜にしてみたら田舎だ。

でも、道を歩いている時に、騒々しい音がしないのが気に入った。

由梨亜が住んでいたのは閑静な高級住宅街の一角だが、時折休日に出掛けると、人が多いだけではなく、拡声器で大音量に流れる人の声や音楽で、気が休まらなかったのだ。

だが、ここではそれがない。

由梨亜は、思わず目を細めた。

実を言うと、父に引越すことを告げられた時、自分はそれまでの学校に嫌気が差していた。

それは、周りの環境であり、特定の人物だった。

けれど、それから二年近くが経った今、嫌になった環境はほとんど変わらなかったが、その特定の人物はいなくなった。

だから、我慢できなくなかったのだが、こうして引越すことができる、とても嬉しい。

風が吹いて来た時、その中に感じた独特の臭いに、由梨亜は目を瞬き、少し笑った。

この臭いは、海の臭いだ。

ここは沿岸の町だから、海があるのだ。

由梨亜は心を躍らせて、海の臭いを感じる方に足を向けた。しばらく歩くと、海が見えて来た。

由梨亜は思わず駆け寄って、その海を眺めた。

とても、綺麗だった。

束の間それに魅入っていた由梨亜だが、ふと顔を上げた時に、人の姿が視界に入って驚いた。

本当に、そこは静かだったから、人がいるとは思わなかったのだ。それに、その人物の悄然としていて、どこか思い詰めたような雰囲気、思わず息を呑んだ。

見た所、多分、自分と同じ年くらいだ。

学年が違ったとしても、いい所、一つ二つの差だろう。

雰囲気からしても、精々小学生、中学生には見えなかった。

引越したばかりで、知り合いが家族以外誰もいなかった由梨亜は、初めて庶民の学校に通うことになったのだからと理由を付けて、大人しめに装ってはいても、実は好奇心満々に、その少女に声を掛けた。

「あの……？」

千紗は、突然声を掛けられて、驚いて振り返った。
するとそこには、いかにも育ちの良さそうな、歳の近い少女が立

っていた。

垂らせば胸の辺りまでありそうな茶色の髪を、一つに纏めて巻き、左肩の方から前に垂らしている。

服は、手の甲に当たる部分が長い、薄手でハイネックの白ニットの上に、薄い朱色と桃色を混ぜ合わせたような綺麗な色合いの、シフォンのレースでできたボレロだ。

下は、灰色に近い白の、汚れも皺も一つもない、膝の半ばを隠す長さのプリーツスカート。

ニットの裾は、折り目正しくスカートの中に入れている。

脚は靴下ではなく、肌の色が透けそうな程に薄い黒のストッキングを穿いて、薄桃色をしたエナメルのパンプスを履いている。

その脚はかなり細く、運動をやっているような筋肉がまるでない。まるで、これから結婚式にでも参列するような姿だ。

けれど、そういった高価な服装を気にすることがなく、至って普通に着こなしているのです、それが普通通りである、大金持ちのお嬢様だということが分かる。

少し気になるのは、こちらを窺うような目付きだ。

ある事情から、金持ちが大嫌いな千紗は、嫌な顔をするのを寸での所で堪えた。

彼らは、いちゃもんを付けるのが大好きな一族だ。

そして、困ったことに、そのいちゃもんを正当化できる社会的地位と名声と金を得ている、実に厄介な一族だ。

千紗はこれ以上、彼らの我儘に振り回されるのは真っ平だった。

「何か、用ですか？」

できるだけ丁寧に、穏やかにと心掛けて、言葉を発する。

本当の所を言えば、顔を盛大にしかめ、立ち去りたいくらいだ。でも、それはできない。

それをすれば、後々、自分だけではなく母にまで迷惑が掛かるのが、目に見えている。

この少女が、どんな理由でここに来たのかは分からないが、どう

せ長居はしないだろう。

だったら、適当にあしらうに限る。

千紗は、嫌々少女の望むように振る舞った。

けれど、それを本心からだ勘違いしたのか、その見るからにお金持ちそうな少女は、ぱっと顔を明るくした。

「あの、私、この町に来たばかりで、ちょっと不安だったの。貴女、ここの近くの小学校に通っているの？」

その丁寧でありながら、どこか馴れ馴れしい言葉に、千紗は苛立ちを押し隠して頷いた。

「はい。そうです」

すると、その少女はぱっと顔を輝かせた。

「まあ、そうなの？ 私も、これからあの小学校に通うのよ。貴女、何年生なのかしら？」

「五年生、ですけど……」

益々、少女の顔が明るくなる。

「まあ、嘘みたい！ 私も五年生に編入するの。私達、同い年だわ！」

少女が喜んでいるのとは対照的に、千紗は内心舌打ちした。

同じ小学校というだけでも、しまったと思ったのに、同じ学年となると――。

考えるだけでも、頭が痛くなる。

それに、この少女は、見るからにお嬢様だ。

そして、何とも珍しいことに、千紗のクラスにも『お嬢様』がいるのだ。

彼女はそこまで身分が高くなく、精々中流程度の貴族だが、貴族と庶民の間には、大きな隔たりがある。

千紗達の誰もが――教師ですらも、『彼女』には逆らえなかった。それはさておき、千紗のクラスには『お嬢様』がいて、その学年に、また別の『お嬢様』が転入して来る。

東京の大都会からこんな田舎まで来て、きっと心細いに違いない

と、教師は考えるだろう。

そして何とも都合のいいことに、一年近く前からこの学校には、別の『お嬢様』がいるのだ。

すると、この少女が千紗のクラスに入って来るのは、ほぼ間違いないだろう。

千紗は、堪え切れずに眉を寄せた。

だが、幸いなことに、この少女は気付かずに、喜んで話を続けた。「本当に、嬉しいわ！ 私、ここに来たばかりだから、本当に知り合いがないのよ。確かあの小学校の五年生って、三クラスあるのよね？ じゃあ、同じクラスになるのかも知れないんだわ。宜しくね？ それに、私達は同じ年なんだから、敬語はなしにしましょう？」

そう言って笑った顔は、確かに可愛らしく、愛らしかった。

とても、同い年の少女だとは思えない程だ。

「ああ、そうだわ。名乗るのをすっかり忘れてた。私の名前は、本^{ほん}条由梨亜^{じょうりあ}よ。——貴女は？」

だが、千紗には、その少女——由梨亜の問い掛けが、頭に入って来なかった。

「ホンジョウ……？」

「え、ええ……。そうだけど？」

由梨亜は、少し不思議そうに目を瞬く。

「『ホンジョウ』って、あの、本条グループの、本条ですか？」

「え、ええ……。確かに、そうだけど、でも——」

それは父や祖父が関係しているだけで、自分にはまだ、関係ない。第一自分達は子供なのだから、そんなことは関係ないのだから、仲良くしてほしい。

そう言おうとした由梨亜を遮り、千紗は頭を下げた。

「失礼致しました。本条家のご令嬢だったのですね」

それまでも丁寧な言葉遣いだったが、明らかに雰囲気の変わった千紗に、由梨亜が驚いて大きく目を瞪る。

「あ、ねえ、ちょっと、ちょっと待って——」

「失礼な振る舞いをしてしまい、申し訳ありませんでした」
とにかく、こういった貴族と関わりと、碌なことがない。

『本条家』は、千紗のような庶民でも知っているくらい、大きな財閥を運営しているのだ。

貴族は数が多いので、正直言って把握し切れない。

それでも本条家は、この日本州のみならず、地球連邦全体でも名の知られている上流貴族——それも、随一の家だった。

正直言って、千紗とは身分が違い過ぎる。

そう言えば、この近くに本条家の本社が移されることになって、かなりの人が就職することができたとか、やけにだっ広い土地に、本条家が、マンションでも何でもなくて一個の屋敷を建てているとか、そんな噂を聞いたことを、今更ながらに思い出した。

「ねえ、ちょっと!」

由梨亜は歩み寄って、距離を詰めた。

「私は、そんなことをしてほしくて、名乗った訳じゃないわ。ただ……貴女と、友達になりたいの。身分なんか、関係ないわ。本当よ」
純真に、真っ直ぐとこちらを見詰めて来る由梨亜に、千紗は小さな溜息をついた。

この少女は、上流階級の家のお姫様だ。

だから、現実を知らずに、身分など、関係ないと——庶民とも、友達になりたいのだと、心から言うことができるのだろう。

けれど、生憎と千紗は違った。

貴族なんかとは、間違ってもお近付きにはなりたくなかったし、ましてや友達になんてなりたいとは、微塵も思わなかった。

「……お嬢様」

「由梨亜よ」

千紗がたじろぐ程の真剣な目をした由梨亜は、力強く千紗を見据えた。

「私の名前は、由梨亜よ。『お嬢様』でも、『本条』でもないわ。」

私は、由梨亜。……それ以外の名前になった覚えなんてないわ」

千紗は、気付かれないくらいのか細い溜息をついた。

このお嬢様は、思った以上に強情らしい。

「……それでは、由梨亜様。今後は、私の姿を見掛けても、話し掛けない方が身の為です。——これで、失礼致します」

それだけを言い置いて、本当に立ち去ろうとする千紗に、由梨亜は驚いて棒立ちになったが、すぐに我に返って千紗の腕を掴む。

由梨亜はそう小柄な方ではないが、千紗と並ぶと、千紗の方が頭半個分大きい。

顔を見据えようと見上げた由梨亜は、千紗の昏い瞳に逆に見据えられて、思わずたじろいだ。

由梨亜が怯んだのを見て、千紗は丁寧な、けれども有無を言わせず、由梨亜の手を引き剥がした。

「……私は……」

口ごもって俯く由梨亜に、千紗は無感動に告げた。

どうせ、これ以上は檻樓が出る。

「——だから、あたしに近付くなって、そう言ってるのよ」

突然乱暴になった千紗の口調に、由梨亜は驚いて顔を上げる。

「それ、って……どういう、意味……？」

「そのままの意味。あたしは、貴族が大っ嫌いだから、近付いて来てほしくない。友達なんて論外。とっとと消えてくれる？　ま、その前にあたしが消えるけど」

呆然と棒立ちになる由梨亜に、千紗は盛大に溜息をついた。

「あのねえお嬢様。あんた達貴族とあたし達庶民は、まず世界が違うの。あんた自身が、そう思っただけでも。周りが、あんたをお嬢様として扱う。——庶民の世界に来れば、たとえ下流のお嬢様でも、富豪のお嬢様でも、庶民にとっては雲の上の人。周りは何でも言うことを聞く。それが、更に上の、国でも有数の貴族なんて、ちやほやされなかったらそっちの方が不思議なくらいだし。誰がどう思おうと、あんたが特別扱いされることは間違いないよ」

そう言い捨てて踵を返したが、ふと思い付いて、振り返った。

呆然としていた由梨亜は、はっとして千紗を見詰める。

そのお嬢様に――千紗は、彼女に向けるのは、恐らく最後であろう笑顔を見せた。

その笑顔は最早冷笑に近かったが、千紗は、今までの声の中でも穏やかな声で言った。

「お嬢様。……あんたがあたしに近付かない方がいいって言ったのは、本当だよ。どうせ、あんたはあたしと同じクラスになる。――だから、一層近付かない方がいい。あんたは、ここらの中で身分が高いけど……クラスで浮きたくなかったら、仲のいい友達を作りたいって、本気で言ってるなら、あたしは徹底的に無視した方がいい。そうしたら、多分、友達ができるから」

その言葉に、再び呆然とする由梨亜を置き去りにして、千紗は今度こそ立ち去った。

公園を出て、潮騒の音も、その臭いも、遠くなる。

その頃になって、千紗は微笑していた。

「あたしも、親切なもんね……。貴族なんか、アドバイスなんかしっちゃって。いつものあたしじゃないなあ」

その日、夕食を食べる由梨亜の落ち込んだ様子に、耀太ようたが眉を寄せて訊ねた。

「由梨亜？ 一体、どうしたんだ？」

「あ……その……」

由梨亜は、少し目を泳がせる。

「今日、少し外に出てみたんです。そこで、私と同年の女の子に会って……」

「同年の？ じゃあ、貴女と同じ学校になるのかしら？」

母親の瑠璃るりが、はしゃいだように手を合わせて言った。

「ええ……そうです。でも……」

思わず俯いた由梨亜に、両親は目を瞬いた。

「由梨亜？」

「どうか、したの？」

「その……最初は、仲良くできるかな、って、思ったんですけど……話し掛けるな、近付くな、って、言われて……」

由梨亜には、訳が分からなかった。

最初は、優しそうな子だと思った。

敬語なのが堅苦しかったけれど、表情も、声を掛ける前の様子も少し気になったけれど、きっと仲良くなれると思った。

そして、自分が貴族だと分かった時の、あの丁重な態度——少し悲しかったけれど、あれには嫌になる程覚えがあったから、何となくは理解できた。

でも、分からないのは、その後の態度だ。

最初は丁寧で、優しそうだったのに、突然豹変した。

こちらを、少しも寄せ付けない、冷たい雰囲気になった。

言葉も——こちらを、明らかに拒絶していた。

その辺りを、辿々しく説明すると、母は柳眉をひそめ、父は眉を逆立てた。

「まあ、それは……」

「由梨亜。その子供の名前は何と言う？ 嚴重に抗議しなければ。お前がこの本条家の娘だと知っての言葉だろう？ しかも、これからお前が通う学校の同級生だと言うではないか。そのような子供は、お前の同級生として相応しくない。場合によっては、転校させることも考えなければ」

平然と言い放つ父に、由梨亜は思わず身震いした。

でも、これが『普通』なのだ。

貴族は——身分の高い人間は、その下の身分の人間が、身分差で何もできないことをいいことに、何でも強引に押し通してしまう。

耀太も、至極『当たり前』のことを言っているだけ、という意識しかないだろう。

でも、それでは――由梨亜にとって、そのままでは、わざわざ引越して来た意味がない。

由梨亜は、意を決して言った。

「お父様。それは、いくら何でもその子が可哀想です。確かに、その子とは仲良くなれないかも知れませんが、誰とでも仲良くされる訳ではないでしょう？　前の学校でも、そうだったのだから。偶々、あんまり仲良くない子と会っただけだったのに、それでは、引越して来た私の方が余所者よ。その子にとにかく言える筋合いはないわ」

真剣に見据えてくる娘に、耀太は少したじろいだ。

「いや、しかし、だな……」

「それに、私、その子の名前も知らないもの。だから、お父様にもお母様にも、お教えできません」

その言葉に、瑠璃が不思議そうに首を傾げた。

「あら？　でも、由梨亜。貴女は名乗ったんでしょう？」

「ええ、お母様。ちゃんと、本名で名乗りました。でも、そうしたら……その子に、私が本条家の娘だってばれて……嫌われちゃったみたいなんです」

「そうなの……。確かに、うちが屋敷を造ってるって話は、この辺りに住んでいる人でしょう？　知ってても可笑しくないけれど……。それまでは馴れ馴れしくて、貴族だと分かったら丁寧になるのは分かるんだけど、それとは違うのでしょうか？」

「はい。最初はずっと丁寧で、私が本条だって名乗ったら……その、何て言うのかしら？　インギン……」

「慇懃無礼？」

「そう、それです。そんな感じで……。それで、そのまま立ち去ろうとしていたから、思わず引き止めたら、態度が乱暴になって……。だから、向こうが名乗る隙がなかったんです」

首を竦めて言った由梨亜に、それでも耀太は渋い顔をした。

「だが、なあ……」

「貴方」

瑠璃が、隣に座った耀太の膝を叩く。

「由梨亜は一人娘ですもの。可愛いのは仕方がないわ。でも、あんまり構ってばかりいると、由梨亜が成長できないわ」

「しかし、お前……」

「それに、ね？」

瑠璃は、少し含みを持たせた笑みを浮かべた。

「由梨亜は今十歳でしょう？ 再来年には、もう中等部——いえ、庶民では、中学生って言うのかしら？ とにかく、上の学校に行くわ」

「それが……何だ？」

「まあ、忘れちゃったの？ 初等部を卒業して中等部になると、大抵の子は思春期で、反抗期に入るのよ。具体的に言えば、親の干渉を嫌うの」

「あ、ああ……一般的には、そう言われているが……」

「それでね、その時期に、すごい反抗期になる子って、その親が過保護で、猫可愛がりしている場合が多いんですって」

楽しげに手を合わせて言う瑠璃に、耀太がフリーズした。

「な、何だと……？」

「まあ、そういう場合、思春期に入っても、あんまり反抗期らしくならない子もいるんだけど……。大抵は、どちらかに分かれるみたいね。私は前者だったわ」

「そうなんですか、お母様？」

由梨亜が驚いて目を瞠ると、瑠璃は笑って頷いた。

「そうよ。私の場合は、親が煩くってねえ……。別に、進学とか進路とか交友関係とか、そういうことなら分かるのよ？ でもねえ、高等部にまで進学した子供の服とか、靴とか、部屋の小物とか、果てには下着に筆記用具にノートに……全部、私の自由にさせてもらえなかったのよ」

由梨亜は、思わず頬を熱くした。

「もう、あんまりにも干渉が激しくってねえ。それに、それが母親だって言うのなら、まだ良かったんだけど……」

「え……？」

嫌な予感に背筋を冷や汗が伝う。

瑠璃は、娘の様子に構うことなく、沁々と言った。

「それを選んできたの、父親の方だったのよ。別に、服とか靴とか小物とか、そういう物だったら、反発を覚えるだけで済んだんだけど、下着なんて、そうはいかないでしょう？ その頃には、反抗期も大分抜け出して来ていたから、母親に選んでもらう分には構わなかったんだけど……。お母様は、趣味が良かったし。でも、父親に下着を選ばれる、あの気恥ずかしさって言ったら、何とも言えなかったわ。それに、趣味もすっごく悪いのよ」

瑠璃は、向かいに座っている、母の話に若干引き気味の娘に向かって身を乗り出した。

「ほら、それくらいの年頃になると、可愛いのを着けてみたくなるのよ。リボンとかレースが付いてる、可愛いのも。でも、お父様はそう言うのを、『はしたない』とか『ふしだらだ』って言って、買ってくれなかったのよ。しかも、よ？ それだけならまだしも、お母様が、いくら何でも可哀想だって言って買ってくれたのを、捨てたのよ！ 私の目の前で！」

思い切り憤慨する母に、由梨亜は既に腰が引けている。

「は、はあ……」

「それで私、もう、頭に来ちゃってねえ。お母様と示し合わせて家出したのよ」

「い、家出……」

最早、鸚鵡のように繰り返すしかない。

途惑っている娘の様子に、瑠璃は少し首を傾げて言った。

「うーん、そうね、びっくりしちゃうわねえ。私は、これくらいだったら驚かないんだけど……やっぱ、貴女は私に似てないわねえ。」

私の娘なのに、どうしてこんなに大人しいのかしら？ 不思議だわ」
すると、それまで由梨亜と共に顔を引き攣らせていた父が、何故か納得したように頷いた。

「そうか、そういうことだったのか」

「そういうことだったのよ」

「成る程な……そうか。今、初めて知ったぞ。そんな事情があったのか」

「あら？ 初めて知ったの？ 私もお母様も、お義父様とお義母様に、ちゃんと事情を説明したけれど……」

「……聞いてない……」

「まあ、お義父様とお義母様ったら」

ころころと笑う母に、頭を抱える父。

事情が全く分からなかった由梨亜は、首を傾げて訊ねた。

「あの……結局、お母様は家出をして、どうしたんですか？」

「あ、ああ……その、な……」

口籠る耀太を肘で小突き、瑠璃は笑いながら言った。

「私は、この人の所に家出したのよ。お父様は私を連れ戻そうとしたけれど、その時の私達は婚約者候補同士だったし、通ってる学校も同じ幼馴染みだったから、連れ戻す理由がなくて、散々喚いていたわ」

「わ、喚く……？」

母方の祖父の、あの厳格な態度を思い出し、由梨亜は目を点にした。

「ええ。しかも、丁度その時にお姉様が、お父様が薦めていた人を蹴って、別の婚約者候補と婚約しちゃったからねえ……もう大変だったわ。切れて切れて」

「は、はあ……」

「……結局お前は、うちに三ヶ月はいたな」

「さ、三ヶ月も……？」

「ええ。そうよ。だって、お父様ったら、なかなか頭を冷やしてく

れなかったんだもの。そうね……噴火しっぱなしの活火山みたいだったわ」

もう、何に驚いていいかも分からなくなった由梨亜は、無言で食事を口に運んだ。

「……………」

最初はあるな温かくて美味しかった食事も、すっかり冷え切って、不味くなっている。

由梨亜の様子を見て、瑠璃も食事を口に運んだ。

けれど、瑠璃は食事の冷たさを気にする様子がない。

耀太は、反射的に顔をしかめていたが、全く気にする様子のない妻の様子に、諦めたように溜息について食事を再開した。

「もう、すっかり話に夢中になって、ご飯を忘れてたわ」

そう言って笑う母の姿に、由梨亜は寸での所で溜息をつくの堪えた。

母は偉大だという言葉はよく聞くが、本条家の場合の母は——妖怪変化に等しいのではないか。

少なくとも、この人が自分の母だと言うことが、にわかには信じがたかった。

「あら？　そう言えば……私達、何の話をしていたのだったかしら？　すっかり忘れちゃったわ」

朗らかに言って、にこにここと笑う瑠璃。

「……………」

由梨亜は、眩暈を何とか堪えた。

……ちよつとは、感謝しても、いいかも知れない。

いい具合に、母が話を曖昧にしてくれたのだ。けれども、と思う。

自分は、母には似ていない。

どちらかと言えば父寄りだが、父と似ているとも言いがたい。

この両親に、自分は似ていないのだ。

では、自分は——誰に似たのだろう。

そう、不思議に思った。

第二章「初登校」

「うわ、来たよ」

「えゝ、何でくんだよ」

「キモっ！」

「うっぜえ」

「つつうか、何でへーキで学校来れんの？」

「神経通ってないんじゃない？」

「うっわ、人外かよ！」

「いや、むしろ、俺らの言葉分かってねえんじゃない？」

「あ、成る程！ 頭いいねえ」

「確かに。それは納得するかも」

「え？ 耳が聞こえないってこと？」

「ばゝか、ちげえよ」

「そうよ。耳が聞こえないって意味じゃなくって、あたし達の言葉が理解できてないって意味！」

「あゝ、そういうことか。納得ゝ」

「はは！ そこまで言っちゃうかよ！」

「えゝ、だってそうじゃん！」

ざわつく教室に目もくれず、千紗^{ちさ}は出入り口に近い席に腰を下ろした。

このクラスでは、生徒の席が決まっていない。

特にディベート形式の授業の時は、積極的に意見の交換・発言ができるように、着席は自由なのだ。

席が固定されるのは、テストの時だけだと言える。

遠回りに、聞かせるように陰口を叩くクラスメイトに、千紗は表情一つ変えなかった。

ふっと視線を巡らすと、一人の女生徒と目が合う。

千紗が見詰めていたのは、ほんの一秒だけ。

けれど、それだけでその少女は、慌てて目を逸らした。
千紗も目を逸らして、廊下の方をぼんやりと眺める。

……その少女は、千紗の幼馴染みだった。

家も歩いて十分程しか離れておらず、小学校に入った時からずっと仲良しだった。

でも、そんな友達ですら、今では千紗をいじめる側に入っている。

千紗は、皮肉な笑みを浮かべた。

友情なんて、脆い物だ。

こんな小学生でも、権力に全てが押し潰される。

そこに、一人の少女が入って来た。

千紗が先日会った、本条家の令嬢と似た服装をしている。

つまり、高そうな服装だ。

けれど、彼女とこの少女には、決定的に違う点がある。

それは、本条家の令嬢は優しげで親しみやすい雰囲気だったのに対して、この少女は高慢そうで偉そうで、とにかく貴族らしい雰囲気だという点だ。

その少女は、平然と座ってこちらを睥睨する千紗に気付くと、大袈裟な悲鳴を上げた。

「んまあっ！ 何ていうこと！」

ぐらりとよろめくその仕草も、何もかもが芝居めいている。

「あ、咲様！」

「大事ありませんか？」

「どうなされたのですか？」

「どこか、具合でも？」

途端に、クラスメイト達が咲に群がる。

咲は、その中でも最も顔のよい男子の手を借りて立ち上がると、何とも儂げな笑みを浮かべた。

「ええ。大丈夫ですわ。——眞祥、礼を言うわ」

「いえ、並木様なみきが無事なら、何よりです」

眞祥は、微妙に顔を引き攣らせながら言った。

確かにこの眞祥は、かなり顔がいい。
将来、芸能人やモデルになりそうだ。
けれど、咲は違う。

そこその顔、平凡でしかない。

千紗はそれなりに関わって来ているから知っているが、この眞祥は、自分の周りの女子だけでなく男子にも、『綺麗でいること』を求めるのだ。

だから、どんなに性格が良くても、綺麗でない人には近付きもしないし話もしない。

いじめこそはしないし、話し掛けられれば答えるが、自分から話し掛けることは決してない。

いい意味でも悪い意味でも、とにかくプライドが高いのだ。

自分の友達となる男子ですらその扱いだから、女子ともなると、彼のお気に召す人物はほばいない。

しかも、ただ外面が綺麗なだけでは駄目で、中身も彼の氣に入る人物でなければならないのだ。

だから、昨年までの彼ならば、咲と話すことも、こうして手を貸すこともなかっただろう。

実を言うと、眞祥は、咲を氣に入っている訳ではない。

もし咲を拒否すれば、自分が退学する羽目になって、家族にも危害が及ぶ。

それを分かっているから、眞祥は大人しくしているのだ。

咲のことを、名前ではなく姓で呼ぶのは、眞祥のささやかな抵抗だ。

けれど、咲はそれを氣付きもしない。

「ねえ、眞祥。貴女になら、あたくしの名前を許すと、何度言ったら分かるの？ 並樹なんて名字じゃなくて、咲って、名前で呼んで？ 様も、貴方だったら付けなくていいって、何度も言ってるでしょう？」

そう言って眞祥の腕に自分の腕をからめ、上目遣いに見上げる。

だが、眞祥はずっとその腕を外した。

今まで（それこそ幼稚園児の頃から）何度もこういうことを経験しているだけあって、動きは実に滑らかだ。

「いいえ、僕は男ですから、そこまでは……。謹んで遠慮します、並樹様」

そう言っふと笑い、咲の髪を一筋掬い上げ、そつと唇を落とす。

黒縁の伊達眼鏡の上から、そつと咲を見上げるその仕草は、到底小学五年生とは思えない。

まるで、一流ホストだ。

咲も、それにくらくらして、目はうっとり潤み、頬は赤くなる。だが、はつとしな垂れかかっていた身体を起こし、千紗を睨んだ。「ついつい、忘れる所でしたわ。まあ、このあたくし直々に気を掛けられる下民なんか、そんなにいませんから、光栄に思いなさいな」

「あら、それは光栄に――」

千紗は軽く首を傾げると、思いつ切り蔑んだ表情を浮かべる。

「って、素直に言うとも思った？　馬鹿が」

「なっ……！」

咲の顔に血が昇る。

だが、今までの約一年間で、口では千紗に勝てないと知りぬいている咲は、周囲に当たり散らした。

「だから、言っただしよう！　今日だけは、何があっても、絶対に、この下民を近付けてはならないと！」

逆切れして喚くのを相手にするのは、本当に大変だろう。

千紗は、平然とそれを傍観していた。

実際それは、千紗にとっては他人事だったのだ。

「咲様！　それはっ――」

「言い訳は聞きません！　どうしても、今日は来ていけなかったのに！」

だんだんと足を踏みしめる、まるで駄々っ子のような咲に、クラ

スメイト達はさすがに困惑した表情になった。

「あの、咲様……？ それって、一体……」

「お前達は分からなくてもいいのよっ！ 今からでも遅くはないわ、帰りなさい！」

鬼のような形相をする咲に、千紗は鼻で笑った。

「はっ？ 何であたしがそんなことしなきゃいけない訳？ 嫌。学校に来るのも来ないのも、あたしの自由でしょ？ あんたなんかに指図される覚えないし」

「んなっ……！」

「つつうか、好い加減悟れば？ あんたなんかがあたしに口で勝てる訳ないって。精々勝てんのは家柄くらいだし？ あんた、それだけしか取り柄ないし。顔は平凡、頭は悪いじゃあ、貴族階級でもなさやどうしようもないお馬鹿さんだよ。あ、実際に、ほんとの大馬鹿かあ。ごめんね、忘れてた」

「なっ……！」

顔を真っ赤に紅潮させる咲を見詰め、千紗は机に肘を付いてその上に顎を載せた。

「ま、そうやって権力で人の頭押さえ付けて、お山の大将気取ってんのが、あんたにはお似合いだよ。中流貴族さん？」

わざと『中流』を強調して言うのと、咲の頬に更に血が昇った。

ここが咲のウィークポイントだということは、千紗は知り尽くしている。

逆に、千紗のウィークポイントを、咲はなかなか掴めていない。

確かに、周囲の協力性や家柄、持っている権力、親の社会的地位などは、咲の方が上だ。

でも、確実に孤立させたというのに、千紗は屈することがない。逆に、こうして反撃して来る。

事実、それは千紗の唯一の心の支えにもなっていたが、咲はそれも気付かず、更に一層怒りを募らせるばかりだった。

「何をっ……！」

「つていうか、あたし知ってるし。あんたが今日、あたしを遠ざけたかった理由なんて」

千紗があっさり言うのと、今度は咲の顔から血の気が引いた。

「あ……」

咲はよろめくと、大袈裟にわななき、千紗を指で指した。

「お、お前という者は！　それが何を意味するのか、分かって言ってるのっ?!」

「勿論。だって、先週会ってるし」

「会ったっ?!」

咲は益々身を震わせると、頬に血の色を昇らせる。

「何て、何て図々しいことを!」

「ったく……。別に、あたしが自分から会いに行った訳じゃないからね？　あゝんなお屋敷なんて、一般庶民のあたしが好き好んで近付くとも思ってたんの？　この、あたしが?」

千紗が嘲笑し、咲にそれが言い返そうとした途端、担任が教室に入ってきた。

そして、教壇に立って怒りに頬を紅潮させているお嬢様と、教室の後ろで行儀悪く頬杖を付く一般庶民の図を見て、ぎょつとした表情をする。

けれど、頬杖を付いているだけでは、叱ることもできない。

そんなことをしたら、しょっちゅう叱るしかなくなるに違いないのだ。

普段は大人しい彩音千紗さいいんという人物が、いざと言う時に見せる図太さや何やらは、この担任は嫌という程思い知っていた。

叱るとすれば、始業時間になっても席を立てている咲達他の生徒達だが、絶対に、何があろうとも、咲だけは叱れない。

たとえ咲が法を犯したとしても、教育委員会に報告することも、警察に通報することもできないのだ。

まあ、たとえ通報したとしても、あつと言う間に揉み消されてしまふのだが。

そういうことで、担任の矛先は他の生徒達に向かおうとしたが、彼らも怒られる程馬鹿ではない。

教室に入ってしまったら呆然としていた担任が自分を取り戻す前に、さっさと席に付いていた。

咲も、憤然としながらも席に付く。

担任は、どこか空回った気分を咳払いで誤魔化すと、教壇に立った。

そして、手元のデスクで出席を確認し、何やら曖昧に言った。

「あー、今日は、全員出席してるな。うん、いいことだ。いいこと……」

そう言って語尾を濁らせるのは、恐らく千紗のことが気に掛かっているのだろう。

(……ほんと、こいつって優柔不断なんだよなあ……。だから、生徒に『気弱』とか『そんなんで担任って、よく言えますね』とか、『知ってるのに見て見ぬ振りって、阿呆らしくないですか?』、『実際阿呆だし』とか、『ま、こっちも全然期待してませんけど?』、『今までの態度が物語ってますし?』とかって言われるんだよなあ……)

……担任の教師を、ストレスの発散場としていた千紗だった。

だが、全く罪悪感などない。

優柔不断過ぎて、胃炎を起こす方が悪いのだ。

事実、いじめられるようになって約一年が経つが、千紗は胃痛なんて、食べ過ぎ以外の理由で起こしたことは一度もないし、忌引き以外で欠席したこともない、立派な健康優良児だ。

……人はそれを、『責任転嫁』、『八つ当たり』とも言う。

でも、千紗が強いかと言われれば、そうではない。

ただ、意地でもクラスの人間に――特に咲に、自分の弱い所を見せたくないだけだ。

千紗は、本当は、精神的に追い詰められていた。

だが、負けず嫌いな性格が災いして、結果、他人に寄り掛かるこ

とができないだけなのだ。

担任は、しばらくもごもと口ごもっていたが、咳払いをすると、廊下を振り返った。

「え、え、き、今日は、転校生がいらっしやいます……」

その言葉に、教室がざわめいた。

この担任が敬語を使うのは、自分と同じ教師や来客以外には、咲だけだ。

と、いうことは、この転校生も『貴族』だということだ。

思った通りの展開に、千紗は思わず視線を飛ばした。

咲の態度から何となく分かっていたが、できれば外れていてほしかったのに。

由梨亜^{ゆりあ}は、担任の教師が振り返ると同時に、少し深呼吸した。

数日前に会った、あの名前も分からない少女――彼女は、『多分同じクラスになる』と言っていた。

だから、このクラスの中にいるのかも知れないのだ。

由梨亜には、彼女が言っていたことの意味がさっぱり分からなかった。

どうしても、納得がゆかなかったのだ。

だから、できれば本人の口から、その意味を聞きたかった。

彼女が、自分を嫌っているのは、あの短い会話でも分かった。

けれど、その理由は由梨亜の性格でも見た目でもなく、由梨亜の身分なのだ。

だったら、ちゃんと話し合えば、きっと分かってくれるし、仲良くなってもくれる。

由梨亜は、そう信じていた。

でも――由梨亜は、転校するのは初めてだし、由梨亜の通っていた学校は、皇族も通うような正真正銘のお嬢様学校だ。

そんな学校に転校生など、ほとんど来る訳がない。

勿論、何人が転校して来ていたはずだが、彼ら是由梨亜と違うクラスになっていたので、由梨亜にとって、『転校生』という存在は非常に遠い物だったのだ。

だから、由梨亜は酷く緊張しながら――けれど、見掛けはゆつたりと落ち着き払い、教室の中に足を踏み入れた。

教室を見渡すと、驚くことに、生徒達はてんでんばらばらに座っていた。

どうやら、ここでは席が決まっていないようだ。

特に、教室の後ろの出入り口の辺りは、一人しか座っていない。

由梨亜は、ほんの少し目を瞠った。

そこに座っているのは、この前会ったあの少女だ。

奇しくも、彼女が言ったことが事実になった、そういうことだろうか。

由梨亜は、ざっとクラスを見渡して会釈した。

「初めまして。私は本条由梨亜です。東京から来ました。宜しくお願いします」

「え、えー、では、好きな席に、どうぞ……」

どこかおどおどとしている担任に、由梨亜は思わず眉を寄せた。

先程から思っていたが、どこかこの担任は可笑しい。

それに、由梨亜は転校して来たばかりだし、『好きな席にどうぞ』と言われたって、どうすればいいのかも分からないのだ。

由梨亜が躊躇っていると、生徒の中の一人が立った。

「由梨亜様！　どうぞ、こちらへお越し下さいな！」

その声の主を見て、由梨亜は驚愕に目を瞠った。

「え……貴女、まさか……」

「はい。咲です。並樹咲にございます、由梨亜様。本当にお久し振りですわね。どうぞ、こちらへ。あたくしが、色々と説明を致しますわ」

咲はそう言うと、近くに座っていた女子を睨んだ。

それに、その少女は怯えたように首を竦めると、そそくさと席を

移動した。

由梨亜は、思わず唇を噛み締める。

こんな——こんなことなら、ここに転校して来なかった。

咲の申し出を断るのは、本当に簡単だ。

でも、このクラスの様子を見ると、リーダーは咲なのだろう。

転校して来たばかりなのに、クラスと軋轢を起こすのは良策ではない。

由梨亜は、渋々とその少女が空けた席に腰を下ろした。

「由梨亜様、学生証はお持ちですか？」

「……これのこと？」

「はい。そうですわ。それを、机のこの部分に差し込んで下さいまし。これで、出席の確認ができるのですわ」

「……そう」

由梨亜はそう言うと、眉を寄せたまま、前を向いた。

担任の話が、続いているのだ。

咲は、それでもまだ話し足りなさそうな顔をしていたが、由梨亜の毅然とした態度に諦めたのか、口を噤んだ。

だが、髪をいじったり、視線を窓の外にやったり、どうも担任の話を聞く気が端からないようだ。

由梨亜は、思わず零れた溜息を押し殺した。

初っ端からこれで、本当に大丈夫なのだろうか。

それに、このクラスの雰囲気は、どうも可笑しい。

クラスにリーダー格の人間がいるのは当然だが、それにしては、咲の裁量権が大きいような——担任までも、その影響が及んでいるような気がするのだ。

由梨亜は、別の小学校にすれば良かったと、早くも後悔を始めていた。

昼休み、由梨亜は咲を誘って外に出た。

何も知らないクラスメイトの前で、会話をする気にはなれなかったのだ。

「咲、貴女、ここに転校していたの？」

「はい、由梨亜様。確かに今は、こんな下民だらけの学校に通っておりませんが、中学からは違いますわ。中学は、歴とした私立の学校に通う予定ですのよ。あ、由梨亜様も——」

「悪いけど」

由梨亜は、冷徹な声でそれを遮った。

「由梨亜様……」

「咲。貴女、何があったのか、忘れたの？ たったの一年前なのに。——いいえ、まだ、一年も経っていないわ」

由梨亜に見据えられて、咲は居心地悪そうに身動ぎした。

「それは……」

「私は、貴女を許さないわ」

「由梨亜様！」

追い縋ろうと伸ばされた咲の手を、由梨亜はぴしゃりと叩いた。

「貴女がやったことは、最早犯罪よ。いくら向こうの身分が高いからって、それは捏造でも何でもなくて、紛れもない事実よ」

悔しげに唇を噛み締める咲に、由梨亜は憐れむように言った。

「貴女だって、彼女の身分を知らなかった訳じゃないでしょ？ なのに、貴女はそれをやった。……退学だけじゃ飽き足らずに、東京を追放されたのも無理はないわね。しかも、その追放された先で、またおんなじことをやろうとしているの？ ……いいえ、もう、やっている、っていうレベルかしらね」

「……ですが、由梨亜様。彼らは人間ではないのですよ？ たただの下民ですよ？ あたくし達が奴らの上位に位置するのは、紛れもない事実ですわ。奴隷を扱き使って、何が悪いと言うのです？」

由梨亜は、思わず嘆息した。

「ふーん。その理屈で言うとか、イギリス州の陛下が、ただちよつと気分がむしゃくしゃするからって貴女の親を撃ち殺しても、貴女に

は何かを言う資格はない、むしろ、『偉大なる陛下の御手に掛かって死ぬことができたのですから、両親も大変光栄でしょう』と褒め称えなきゃならないんじゃない？」

「いつ……いくら何でも、飛躍し過ぎですわ！」

「そう？ 私は、至って普通だと思うけど」

由梨亜に見据えられて、咲は唇を噛んだ。

「そう言えば……教室の、一番後ろにいた子、一人でいたのは何故？ 貴女は、その子をいじめてるの？」

その言葉に、咲は睨むように由梨亜を見上げた。

「ええ。確かにそれは否定しません。ですが、由梨亜様が気に掛ける価値もないような奴ですわ」

「何故？」

「あいつには、貴族が絶対、貴族が優位という世の中の条理が理解できていませんもの。あれでは、社会に出ててもやって行けるのかどうか。ですから、あたくしが指導を付けてやっているだけのことですわ」

「いじめが？ いじめが指導なの？ それって、可笑しくない？」

「いいえ。下民には相応しい扱いですわ」

咲はそう言って踵を返し掛けた。

「待って。咲」

「……何か？」

訝しげに振り返った咲に、由梨亜は端的に問い掛けた。

「貴女がいじめている、その子の名前は？」

「……彩音千紗、ですわ」

「彩音、千紗？」

「はい」

「ありがとう、咲」

由梨亜はそう言うと、今度は由梨亜の方が踵を返した。

放課後になったのに、教室には随分と多くの人が残っていた。転校して来たばかりのお嬢様のことが気になったのだろう。

だが、毎日掃除をしている千紗にとっては、邪魔でしかなかった。勿論、掃除なんかサボって帰ってもいいのだ。

でも、千紗は自分の心が限界に近付いて来ているのを感じていた。だから、無闇に軋轢を起こすよりも、譲れる所は譲った方が、自分の精神安定上いいのだ。

でも――一日くらいサボったって、ばれないだろう。

千紗は溜息をつくと、廊下に出た。

まだ青い空が、実に清々しい。

クラスメイト達も、お嬢様のことが気になってか、今日はちょっかいを出して来なかった。

千紗はそのまま真っ直ぐ家に帰ろうとしたが、そうは問屋が卸さなかったのである。

千紗が、まさに家の前に着いて、生体認証で家の鍵を開けた時だった。

「貴女、ここに住んでいたのね。彩音さん」

その言葉に、千紗は驚くべき速度で振り返った。

そして、自分の背後にお嬢様がいるのを認めると、鋭い舌打ちを洩らした。

「……何で、あんたがここにいる訳？ あたし、関わるなっつたでしょ」

「ええ。でも、その理由が、よく分からないわ」

小首を傾げるその姿に、千紗は遠慮なく顔をしかめた。

「……あんた、ほんと馬鹿なの？ って言うか、どうやってここまで来た訳？」

「付けて来ただけよ」

「……………」

千紗は、痛みにこめかみを押さえた。

「……あんたは転校して来たばかりだし、本条家のお嬢様だし、咲

とかクラスの奴らが放さないと思ったんだけど？」

「ええ。私もそう思うわ。だから、トイレに行く振りをして出て来たの」

「……………」

千紗は、益々痛くなって来た頭を押さえた。

「……………んで？ 何がしたい訳？」

「理由が、知りたいの。どうして貴女は、私と関わり合いになりたくないの？ どうして、貴族が嫌いななの？」

「……………一々、人に説明すること？ それ。——あり得ない。下んな過ぎ」

千紗は吐き捨てると、扉を開けて家に入ろうとする。

「あっ、駄目、待って！」

だが、お嬢様は慌てて手を伸ばし、千紗の袖を掴んだ。

苛立った千紗は、その手を乱暴に引き離す。

すると、

「……………何てことをっ！」

と、甲高い耳障りな悲鳴が上がった。

千紗が眉を寄せて、声の発生源を振り返ると、そこには真っ蒼になった女の人がいた。

恐らく、三十代前半くらいだろう。

年齢からして、このお嬢様の母親かと思ったが、そのお嬢様が苦々しく言った言葉で、彼女が母親ではないことが分かった。

「鈴南……………貴女、どうしてここにいるの？」

「僭越ながら、お嬢様。学校にお迎えに上がりましたら、お嬢様がいらっしやらなかったので、本当に心配したのですよ？ 本当に、見つかって本当に良かった」

「鈴南……………」

お嬢様の口調は、どこかたしなめるような感じになった。

「私、送り迎えは要らないって言ったわよね？」

「とんでもないことです、お嬢様。仮にも本条家のご令嬢ともある

う方が、運転手なしで外出するなんて、あり得ません」

「でもねえ、鈴南――」

千紗は、比喻ではなく本当に頭痛がしてきた。

何なのだろう、この異次元世界は。

上流階級の常識は、むしろ他星系の国の常識よりも非常識に思えて来る。

千紗は溜息をつく、そのまま家に入ろうとした。

お迎えが来た以上、これ以上お嬢様がここに長居することはないと踏んだのだ。

けれど、今度はそれを鈴南と呼ばれた女性が邪魔をした。

「待ちなさい、その庶民」

千紗は眉を吊り上げ、横目で振り返る。

「お前は、先程由梨亜様に何をしました？ 高貴な身分である由梨亜様の腕を振り解きましたよね？ これは、立派な不敬罪に当たりますよ」

千紗は、彼女にも聞こえるように、盛大な溜息をついた。

「な、何ですっ？！」

千紗は、ゆっくりと振り返り、その女性を見据えた。

「一つ、現在の地球連邦に、不敬罪と言う刑法はない」

千紗が指を一本立てると、彼女はぐっと詰まる。

「二つ、不敬罪とは、王室もしくは皇室に対して用いられる刑法であり、貴族に用いられる物ではない」

唇を噛む女性に向かって、千紗は三本目の指を立てた。

「三つ、不敬罪とは、王族や皇族、それに関連した物事に対して侮辱をしたり、中傷をしたり、敬わなかったり、危害を加えたりした場合にのみ用いられる刑法である。……つまり、あたしがお嬢様の腕を振り解いたくらいじゃ、たとえこのお嬢様が皇族だったとして、不敬罪が今も存在していたとしても、あたしを罪には問えない訳。……それじゃあ」

千紗は、半ば呆然としている二人を置いて家の中に入ろうとした

が、ふと思い付いて振り返った。

「そうだ。……あんた、お嬢様のことが大事なんでしょう？　だったらちゃんと見張つていてよね。あたしと関わってもいいことなんか一個もないから、ちゃんと管理しなよ？　あたしも貴族と関わり合いになんかなりたくないんだから」

にっこりと笑って言い放つと、千紗は今度こそ、二人の鼻先でドアを閉めた。

由梨亜は、布団の中に潜り込んで深い溜息をついた。

今日は疲れたから、九時には部屋に戻ったのだ。

でも、何だか妙に目が冴えて、しばらくは寝付けそうにない。

由梨亜は寝返りを打って、天井を見上げた。

千紗とのことは、鈴南を何とか宥めて、両親には何も言わなかった。

言えば、千紗を退学にさせるに決まっているのだ。

それにしても――

由梨亜は、きつく唇を噛み締める。

まさか、並樹咲がこの学校にいたとは、思わなかった。

父や母には、詳しいことは言っていない。

けれど、並樹家の令嬢である咲のことは、特に日本州の一部の上流階級では、ブラックリストに載ったような危険人物扱いになっている。

それ自体は自業自得だし、由梨亜も同情していない。

何しろ、咲が『追放』されるようになった原因は、由梨亜の幼馴染とも言える、由梨亜よりも身分の高い少女が関係しているのだ。それに、由梨亜が前の学校を転校したかったのも、咲がいたからだった。

なのに、また同じになるなんて――最悪だ。

由梨亜は、また溜息をついた。

今日はとても疲れたし、最悪なことだらけだ。

これから、この学校で上手くやって行けるのだろうか。

由梨亜は、少し不安を覚える。

とにかく、一般的な転校生の生活を考えると、その中でも最悪な方に入る転校初日だっただろう。

第三章「秘密」(前書き)

あれこれ書くと、ネタばれになってしまうので、これだけ。
千紗、法律違反してませんからっ!! (予防線)

第三章「秘密」

次の日から、千紗^{ちさ}には日常が戻って来た。

平日は学校に行き、淡々と授業を受け、真っ直ぐ家へ帰って閉じ籠^{こも}もる。

あのお嬢様も、思ったよりは動きがなかった。

それに、咲^{さく}からのいじめも少なくなった。

お嬢様はあまり咲のことが好きではないようで、その扱いはどこかぞんざいでおざなりだ。

だからなのか、それとも彼女が高位の貴族だからなのか、咲が彼女のご機嫌を取るのに必死になっているお蔭で、いじめる暇がなさそうなのだ。

おまけに、そうやって四六時中咲が付き纏っているお蔭で、千紗はお嬢様のことを余裕で避けられるし、彼女の方から近付いて来ようとしても、貴族至上主義で平民侮蔑主義な上に千紗を嫌っているめまでしている咲が、あつと言う間に彼女を止めてくれる。

これは、あのお嬢様が転校して来て得た唯一の成果だろう。

千紗は、ほっと息をついて空を見上げた。

自分の家がある町とは違って、この都会は空気が淀んでいる。

雑踏の中に埋もれていると、汚れた空気に身体中を汚染されて、安穩として全てを忘れてしまいそうだ。

でも、それは駄目だ。

（何の為にやっていると思ってるの？ 忘れちゃ駄目。忘れたら、あまりにも可哀想だわ……）

千紗は、唇を噛み締めて駅へと歩いた。

今日は日曜日の午後だから、やたらと人が多い。

気を抜くと、進みたい方向とは別の方向に持って行かれそうになったり、真っ直ぐ歩いているつもりが蛇行してしまったりすることもあるのだ。

特に、子供の千紗は大人よりも二十センチは背が低いので、その分人混みに流されやすいのだろう。

千紗は苛立ちながら唇を噛み、できるだけ真っ直ぐ歩いていたが、ふと――視界に一人の少女の姿が映り、千紗は顔を引き攣らせた。

確かに、ここは大都市・東京だ。

彼女はここの出身だから、今東京に来ていても、全く不思議ではない。

けれど――

（何て、間の悪い！）

千紗は、思わず歯噛みした。

何故なら、彼女のような『お嬢様』が、車も使わずに歩いているのだ。

しかも、千紗のいる方向に向かって歩いて来ている。

普通に考えたら、まずあり得ない。

もしあり得るとしたら、千紗がうっかり彼女の家の近くにいるか、彼女が車で千紗が歩きで擦れ違うくらいだろう。

けれどこの場合、その二つは当てはまらない。

本当に、何て運が悪いのだろう。

こんなこと、予想もできなかった。

千紗は深い溜息をつく、帽子を深くかぶった。

千紗は頻繁にこちらに来ているから、ここでお嬢様に向かって背を向けても、道に迷わないで駅に着く自信はあるし、それくらいは余裕でこなせる。

だが、そうやって遠回りすると、予約した電車の時間には間に合わなくなるのだ。

確かに、その後の電車に乗ればいいのだろうが、生憎ここは、そう気軽に行き来ができるような距離にはない。

一本でも乗り過ごせば、その後の乗り換えの電車が狂ってしまい、結果的に家に着くのは遅くなってしまう。

まあ、母親は休日出勤しているから、遅く帰って来ても叱られる

ことはないだろうが、あんまり遅い時間に外に出ていると——そう、千紗の年齢だと、七時くらいに外にいと、警官に補導される可能性が高いのだ。

それは、面倒臭い。

非常に、面倒臭い。

第一、そんなことになったら親にも連絡を取られることになるし、そうしたら、ただでさえも忙しい母親の時間を削ることになってしまふのだ。

仕方がないから、ばれないようにするしかない。

（ああ、もう……面倒臭い）

幸い、彼女が転校して来た初日以外、言葉を交わしたことはない。時折物言いたげにこちらを見ている視線は感じるものの、周囲の人間が邪魔なせいで言葉を交わすまでには至らないのだ。

だから、それに賭けるしかない。

（それもこれも……全部、あいつのせいだっ！）

千紗は、心の中で八つ当たりをしながら早足になった。

「あら……？」

由梨亜は、ふと振り返った。

そこにあるのは、ただの雑踏だけだ。

「由梨亜？　どうかしたのか？」

耀太ようたが由梨亜を見下ろして言ったが、由梨亜は小さく首を振った。

「あ、いえ……多分、見間違いだと思います。だから、大丈夫です」

「そうか。ならばいいが……」

由梨亜は、もう一度だけ、横目で後ろを見た。

（やっぱり、見間違いなんかじゃない……。あれは、彩音さいおんさんだわ。

どうして、こんな所に……）

由梨亜は、本当は来年に引っ越してくる予定だった。

だが、初等部の三年になった時に、六年になったら引っ越すと聞

いて、それを早められないかと頼んだのだ。

結果、半年以上予定を早めることができたが、その引越は慌ただしく、こちらにも色々と残して来てしまった事物があるのだ。

今日はそれを回収する為に来て、ついでに街を歩いて買い物したいと父におねだりをして、こうして雑踏の中を歩いていたのだが――

（でも、まさか……初等部の五年が、勝手にこんな所まで、来れるの？ 交通手段としては、可能だけれど――お金とか、色々掛かるだろうし……）

幸い、明日は平日だ。

つまり、学校はある。

由梨亜にたかる人集りと、向こうがこちらを避けまくっているせいで、学校では――少なくとも、他に人のいる授業の前後では決して話せないだろうが、彼女が放課後に一人で掃除をしていることを、由梨亜は既に突き止めていた。

だから、その時間まで残って、彼女を捕まえて話を聞き出す。

由梨亜は、小さく拳を握り締め、自分に気合を入れた。

千紗は、いつもの定席から、そっとお嬢様の様子を窺った。

幸い、普段と何も変わりはない。

いかにも高そうな服を身に付け、真っ直ぐと背筋を伸ばして教師の話を聞いている。

その椅子に座っている面積は少なく、隣で退屈そうに髪をいじっている咲のように、背もたれに寄っ掛かったりなどはしていない。いかにも、清楚な意味での『お嬢様』だ。

千紗はそれに呆れながらも感心するとともに、ほんと小さく溜息をついた。

昨日は、きっと気付かなかったのだ。

だって、あともう少しなのだ。

あとちょっとで、自分の望みは達成される。

だからこんな所で、しかもあんな予想外な所からは、決して邪魔をされたくなかった。

——時間が経つのは、早い。

ぼんやりとしているだけで、あつと言う間に昼になり、放課後になり、人がいなくなる。

千紗は溜息をつく、自分の荷物を鍵付きのロッカーに放り込み、掃除道具を取り出した。

千紗が掛けたその南京錠は、昔ながらのダイヤル式だ。

今は、小型ながらも生体認証の付いた南京錠も存在するが、技術があれば、そんな物はすぐに解除されてしまう。

小学生の彼らにそんな技術があるとは思えないが、相手は貴族だ。……つまり、金がある。

今、彼女はお嬢様に取り入るので精一杯だが、ふと思い付いて、鍵を解錠して悪戯しないとも限らない。

だったら、生体認証も何も付いていないただのダイヤル式の南京錠を使い、毎回毎回暗証番号を変えればいい。

何しろ、暗証番号を変えるのはタダなのだし、簡単に変えることもできる。

おまけに開けられる可能性は低くなるし、そうすれば安価で済む。実に、小学生の懐と千紗の事情に優しい作りだ。

(……でも、時々開けられるんだよなあ……。何でだろう。あたしって、そんなに分かりやすいのかな？ これでも、一応法則性は作らないで、気分を変えてるんだけど……)

所詮は、いちごっこだと、千紗にも分かっている。

この悪循環を止めさせるには、大財閥のお嬢様が転校して来たことだけでは、充分ではないのだ。

……大本を、絶たなければならぬ。

(だから、その為にも、あたしは——)

ガラリ、と扉が開いて、千紗は思わず飛び上がった。

(まさか、こんな時間まで、人が残ってるなんて……)

振り返ると、赤い夕焼けの中に、千紗と同じくらいの背の子が立っている。

それを見て、千紗は思いつ切り顔をしかめて舌打ちを洩らした。

こちらからだ、逆光になっていいるせいでよく顔が見えない。

けれど、その高そうな服装と、手間の掛かっていそうな髪型。

そして、ヨーロッパ系の血がどこかで入っているのか、アジア人離れしたミルク色の色白の肌と、彫りのしっかりとした――つまり、はつきりとした顔立ちは見取れた。

そして、こちらからだ逆光だということは、向こうからだ順光だということだ。

彼女からは、千紗が彼女の訪れを歓迎していないことがよく見えただろう。

けれど、それを全く気にした様子もなく、そのお嬢様は、小首を傾げた。

「こんにちは、彩音さん。やっぱり、放課後に毎日貴女が掃除をしているって噂、本当だったのね」

「……あんたは、何しにここに来た訳？」

「私、忘れ物しちゃったのよ」

そう言うとお嬢様は今日使っていた机に近付き、明日提出しろと言われていた宿題を取り出した。

「ほら、ね？」

そう言うって邪気なく微笑む彼女に、千紗は顔をしかめた。

あの初日以来、彼女は何もしてこなかったから、正直油断していた。

けれど、それは甘かったとしか言いようがない。

何故なら、

「あんた……絶対に、わざと忘れ物したでしょ？ 自分のせいだからって言って、周りにいる『取り巻き』とか『お付き』の人を付いて来させない為に」

「あら？ 何のことかしら？ よく分からないわ」

彼女は首を傾げてみせたが、その目には悪戯の色が――それも、成功して誇らしげな、そして満足そうな色がある。

絶っ対に、確信犯だ。

それ以外にはあり得ない。

けれど千紗は、こういうタイプが――実は、苦手ではない。

むしろ、好きな方だ。

何しろ、本来は千紗だって、そういう属性なのだ。

もし、彼女が貴族のお嬢様でなければ――彼女と自分は、仲のよい友達になって居たかも知れないのに。

一番気の合う、それこそ一生でも付き合えるような、真の意味での友情を、築き上げることができたかも知れないのに。

そう考えると、ちょっと惜しいような気持ちちが浮かび上がって来る。

けれど、それを認めることはできない。

千紗が貴族を憎むのは、それ相応の理由があり、その理由の為に、千紗は由梨亜に近付くことができない。

だから、惜しいなんて思うこと自体が、間違っているのだ。

結局自分はただのしがない庶民で、彼女は大貴族のお嬢様。

この間には、決して越えることのできない、絶対的な壁がそびえ立っている。

だから、これは仕方のないことなのだ。

彼女と自分は、一生、決して相容れることはない。

千紗はそう思って、深い溜息をついた。

由梨亜は、目の前の少女に盛大な溜息をつかれて、思わず眉を吊り上げた。

そして、ふと思う。

（私、一体何回、彩音さんに溜息をつかれているのかしら……）

……思わず反射的に回数を数え掛けるが、何となく虚しくなつてやめた。

そんなこと、数えるだけ馬鹿らしい。

由梨亜は何とか気を取り直して、

「丁度良かったわ。私、貴女に訊きたいことがあったのよ」

そう言うてにつこりと微笑んだが、顔中の筋肉を総動員して、引き攣らないように精一杯気を付けた。

何しろ目の前の彼女は、

『何を白々しい』

とでも言わんばかりの、醒め切って冷え切った視線で見詰めて来るのだ。

これで、少しでもひるまない方が可笑しい程に、彼女の雰囲気は寒々しく、迫力に満ちている。

正直に言つて――……恐怖だ。

だが、何とか微笑みを維持し、千紗に問い掛けた。

「彩音さん。貴女、この前の週末に東京にいなかった？」

「……それが、どうかしたの？」

はぐらかすようなその態度は、確かにいたと認めているも同然だ。由梨亜は確信を深めると、更に問い詰めた。

「どうして貴女、たった一人でいたの？ 親と一緒にかなら、まだ分かるけど……。それに、私達は子供だわ。そう簡単に東京へ行けるお金なんて、そうそう持つてゐるはずがない」

「ふーん。ま、そうだよな。でもさ、お年玉とかお小遣いとかをこつこつ貯めてけば、ここから東京まで普通に往復できるじゃん。一人で東京観光に乗り出すなんて、子供らしくはないとはしても別に不自然じゃないし。だって、普通に観光しても余裕で日帰りできる距離なんだよ？ だったら、何にも可笑しいことはないでしょ。それに知ってるでしょ？ あたしがクラスで孤立してるの。第一あんなだって、あたしと喋ってる所がばれたら――」

「…………でも、二日もいたわよね？」

由梨亜の鋭い眼光に見詰められて、初めて千紗は、狼狽えた様子を出した。

「……二日もいちゃ、悪いの？」

「それだけじゃないわ」

語尾と半ば被さるように、由梨亜が畳み掛けて言うと、千紗は怪訝そうな顔になった。

「最初に会った時は、何にも思わなかったわ。私も、あの時はそれどころじゃなかったし。……でも、こうして転校して来て、貴女に無視されて……。それで私、分かったことがあるのよ」

「……何？」

「普通、誰かと道を擦れ違った時と違って、無視するわよね？ 一々挨拶なんかしてたら、いつまで経っても進まないから。特に、常に人が絶えない都会なんかじゃ、そんなことは当たり前だわ」

「……そりゃあそうでしょ？ まあ、知り合いがいたら別だけどさ

……」

「ええ。そうよね。知り合いがいたら、別よね」

由梨亜は意味深な含み笑いを浮かべた。

そして、訝しげに眉を寄せる彼女に向かって、ある人物の名前を告げた。

しんじやすおき

「藤城恭興」

ぴくりと肩を揺らす彼女に、由梨亜はにっこりと笑い掛けた。

「やっぱり彩音さん、貴女、この人と知り合いなのね？ 藤城家は、うちの親戚の中流貴族なのよ。確か、母方の祖母の実家、だったかしら？ 彼は、私の母の従兄なのよ。だから、親戚一同での集まりにも時々呼ばれるし、この前だって、曾お祖父様である藤城グループの会長の、傘寿のお祝いでお会いしたばかりだわ」

「ふーん、遠い親戚なのに、結構なことだ」

千紗は適当に言って目を逸らしたが、挙動はどこか落ち着きがなく、目線も定まっていなかった。

「まあ、そういうのが貴族だからね。……だから私、恭興小父様の

奥様も、娘さんも知っているのよ？」

由梨亜はそう言うと、笑っていない目で千紗を見詰めた。

「だから、そのことに気付いた時には、とっても驚いたわ。——確か、去年の秋頃、だったかしら？ 貴女、恭興小父様と一緒にいたわよね？ それも、普通に道を歩いてた。私、その時友達と一緒に買い物に出ていたんだけど、貴方達と擦れ違ってとても驚いたわ。恭興小父様くらいの年齢の方が、私達の年齢くらいの子と一緒にいるって、親子関係を疑って当然よね？ 離れていても、せいぜい甥っ子姪っ子くらいのもよ。そして、恭興小父様とそういう関係にある子なら、私、全員知ってるのよ。でも、その時擦れ違った子を、私は全く知らなかった」

由梨亜は、最後通牒を突き付けるかのように言った。

「何故、貴女は小父様と一緒にいたの？ 時期的に考えると、咲が転校して来たのは去年の初夏。そして、彼女の性格を考えたら、貴女がいじめられ出したのも、きっとその頃よね。……だったら、何故貴女は、貴女の嫌いな貴族と一緒にいたの？ それに、きっとあの時が最後じゃないわよね。この前、擦れ違った時だって——本当は、会ってたんでしょう？ 誰か、貴族と。下手をしたら、貴女、また恭興小父様とお会いしていたのかも知れないわよね？ 私がそう疑っても、当然だと思わない？」

「……それが、何？ あんたと関係ないでしょう？」

千紗は、疲れたように溜息をつく。

「関係ない？ そんなことはないわ。恭興小父様は私の親戚よ？」

貴女の目的は、一体何？ どうして小父様に近付くの？」

「……あたしの、目的の為よ」

「その目的って？」

「……あたしに、そこまで話す義務がある？ あたしは、貴族の言い成りになるのが、大っ嫌いな」

千紗は吐き捨てると、踵を返した。

これ以上、話してはいられないと思ったのだろう。

「待って、彩音さん！ 貴女——小父様に近付いて、何をしているの？ ……それだけは、答えて頂戴」

由梨亜の気迫が伝わったのか、千紗は少しだけ振り返る。

「……別に、あんたには関係ないことよ。ただ——丁度いいのよね。それくらい年代の人って」

由梨亜が片眉を吊り上げると、千紗は意味深な笑みを浮かべた。

「そのくらいの年代の人にとっても、あたしくらいの年齢だと丁度いいんだよね。……ま、欲を言えば、もうちょっと上の、中高生くらいがいいみたいなんだけど」

「彩音さん、貴女——」

由梨亜は、絶句した。

その言い方では、まるで——

「あ、それと」

千紗は、戻し掛けていた身体を反転させ、歩きながら告げた。

「別に名字で呼ばなくてもいいよ？ まだるっこいし。名前で呼んで。あたしの名字は珍しいから、誰か別の人と被る心配だけはないけどさ、名字だと別の人を呼ばれてるみたいで、なんか嫌なの。子供の頃から、名前と呼ばれてたから」

それだけ言って立ち去ろうとする千紗に、由梨亜は思わず手を伸ばす。

だが、不意にその手は引き止められた。

振り返ると、確か、クラス男子だったと思われる少年が、由梨亜の手を掴んでいる。

「……離して」

「嫌ですね」

ふっと笑みを浮かべたその顔すら、今は憎らしい。

「離しなさい！ 私は、彼女に聞かなければならないことがあるのよっ！」

「無理ですね。あいつは話しませんよ。……それに、まあ、別に離しても構いませんが——」

彼は、いきなりぱっと手を離した。

そのせいで、全力を籠めていた由梨亜は、思わずよろめく。

「もう、無駄ですよ。あいつはもうここにはいません。少なくとも、ここから視認できる範囲には」

由梨亜が振り向くと、確かに、千紗の姿はどこにもない。

「貴方……」

由梨亜が言葉を濁らせると、少年はくつと黒縁眼鏡を押し上げる。

「ご存じないのでしょね？ 僕は東風上眞祥こちがみまこやすと申します」

「コチガミ……？ 随分と、珍しい名字なのね」

「ええ、よく言われます。何でも、広島の方の名字らしいですよ？
確かに、言われてみれば、あちらの方には親戚もいますし。まあ、大抵は一発で顔と名前を憶えてもらえるので、僕としては得なのですけれど、ね」

眞祥はそう言って小首を傾げたが、その眼鏡の奥の瞳は――笑っていない。

「……貴方は、一体誰なの？」

由梨亜が呟いた言葉に、眞祥は意味深な笑みを浮かべた。

「何でもありませんよ？ 僕は、ただの貴女のクラスメイトです。ただ――」

眞祥は、不意に表情を消す。

そうすると、何故か不気味さが際立って、少々恐ろしい。

「あいつに深入りするのは、金輪際やめた方がいい。第一、あいつはガキじゃない。自分で全部分かって、いざと言う時の責任は自分が取って、周りの人間に迷惑を掛けないようにしようと、たった一人っきりで頑張っているんだ。……放っておけ。本人も、そんなことは望んでいない」

「……それは……彼女にも、言われたわ」

「だったら、尚更だ。本条さんほんじょう、貴女がやっていることは、過干渉なんだ。これ以上付きまとわない方がいい。……貴女がもし貴族じゃなかったら、話は別になるんだけどな。世の中って、上手く回ら

ないよ」

眞祥はそう言い残すと、夕陽から夕暮れに変わり掛けた光が差し込む教室を出て行った。

弱くなった陽が差し込む教室に、由梨亜は、ただ一人で立ち竦んでいた。

第四章「真実と暴露」

由梨亜は、落ち込んでいた。
ゆりあ

非っ常に、落ち込んでいたのだ。

自分のやったことが、端から見れば『お節介』なのだろうということは、理解している。

それでも、この前の彼女の口調、そして、言っていた内容は――
(売春、ってこと……?)

まさか、という思いが強い。

全てを四角四面に統率しようとしても、決して上手く行かないということは、由梨亜も貴族社会で生まれ育った一員だ、知っている。だけど、それは大人に対しての話だ。

大人対大人の場合は、その規制が若干緩み、大人同士の関係ということで大目に見られ、ある程度は放って置かれる。

その代わりに、大人対子供の場合は、圧倒的に大人が不利な立場に押し込められる。

これが子供対子供ならば、『若気の至り』として片付けられるが、片方が大人の場合、『売春』『性犯罪』として捉えられても仕方がないのだ。

いくら、お互いが本気で想い合っていたとしても。

つまり、それ程厳しく子供の売春は取り締まられているのだ。

もし摘発されたら、一体どんなことになるか――。

彼女は、愚かな人間ではない。

お金を目当てに、法律違反を――それも、自分の身を削るようなやり方をするなんて、そんな馬鹿な人間には思えなかった。

(……お金が目当てじゃ、ない?)

由梨亜は、自分の思考にぞっとした。

そういうようなことをする少女は、大抵がお金目当てと決まっている。

時々ドラマなどの題材として取り上げられているが、そういう子は、家が貧しくて已むに已まねずという場合か、ブランド物のバッグや服を欲しがってお金が足りないという場合が大半を占める。

それに、彼女が——千紗が近付いているのは、貴族の男達だ。

だから由梨亜は、てつきり、千紗の目的が『金』だと思い込んでいたが——

（違うのかも、知れないの……？　だって、そんな……お金じゃないとすれば、何で？　何で彼女は、そんなことを繰り返してるの？

それに、何度も、何度も……）

いっそのこと、恭興にでも確認してみようか。

何度もそう思ったが、実行には移せなかった。

（だって、もし小父様に、事実だと言われたら……。それに、こんなことで、小父様の家庭を壊したくないわ）

由梨亜は、思わず身震いした。

そう、売春は、売る側がたった一人いても、どうにもならない。

彼女を買う側がいなければ、成り立たないのだ。

（つまり、彼女と、たったの一度でも一緒にいた——恭興小父様も、お金を出して、買ったんだわ）

今まで、そんなことにも思いが寄らなかった。

つまり、それ程自分が動揺していたということだろう。

（でも、どうすればいいの……？　彼女に、そんなことはしてほしくないわ。小父様の家庭も壊したくない。彼女の目的がお金なら、私が払えば、何とかかなると思っていたけど……。もし、お金じゃないのなら？　私は、何をすれば、彼女に思い留まってもらえるの？　どうしたら、あんなことを止めてもらえるの？　分かんない……。分かんないわ。本当に、私、どうしたらいいの……？）

由梨亜は、泣きそうに顔を歪めて、下を見下ろした。

屋上にはきちんと高いフェンスが取り付けられていて、決して落ちないようになっている。

それに、緑化政策の一環なのか、屋上には木々が植えられ、花壇

に花が咲き誇り、ベンチが到る所に置かれているので、ちょっとした公園のような趣だ。

休み時間にここに来る生徒は多いが、こんな時間——陽も暮れなかった放課後ともなれば、この空間には誰もいない。

由梨亜の独り占めにできる。

確かに、ここは美しいが——今は、到底それに感嘆できるような心持ちではない。

とても……とても、虚しい気分だ。

結局、自分には何もできない。

ただの無力な子供なのだと、貴族の娘だと言っても、結局自由にできるのは、多少のお金くらいなのだと、嫌になる程思い知らされた気分だ。

由梨亜が深い溜息をついた時、屋上の扉が開いた。

思わずはっとして振り返ると、そこには二つの人影がある。

由梨亜は、思わず息を呑んだ。

「彩音さん……東風上さん……」

その言葉に、千紗は肩を竦めてみせる。

「その呼び方、あんまり好きじゃないんだけどね……。丁度良かった。今日、暇？」

「え、ええ……特に、用事はないけれど……？」

「じゃあ、あたし達に付き合ってほしいんだ」

「付き合う？……何を、するの？」

由梨亜が警戒して目を眇めると、千紗は読めない笑みを浮かべる。助けを求めて千紗の隣にいる眞祥まきやすに目を移すが、彼も、千紗と同じような笑みを浮かべるだけだ。

由梨亜が完全に困惑して立ち尽くすと、ずっと眞祥が近付いて来る。

はっと気が付いた時には、すぐ目の前だ。

由梨亜が彼を見上げると、何故か、眞祥は眼鏡を外す。

そうして、何にも遮られることなくさらされた彼の美貌に、思わ

ず由梨亜は息を詰めた。

眞祥は突如として由梨亜の右手をすくい取り、腰をかかめると、そつと由梨亜の右手に唇を落とす。

そして、上目遣いに、背筋がぞくりとする程の色気を纏って見上げて来るのだ。

由梨亜は、一瞬その異様な空気に吞まれ掛けたが、何とか彼の手から右手を取り戻すと、軽い怒りとショックに頬を紅潮させて怒鳴った。

「い、いきなり何をするのっ?! 貴方、ホストにでもなったつもりっ?」

美人が怒ると怖い、ということは、よく言われている。

由梨亜もそれに合致するのだろうか、自分自身ではどうもよく分からないが、自分が怒ると、眉が吊り上がって恐ろしい形相になるらしい。

由梨亜は怒鳴ってから、すぐにそれに気付いて慌てたが、向こうは呆氣に取られているだけだった。

そして、何故か眞祥の後ろにいる千紗に吹き出される。

「ぶ、ぷぷ……。や、やっぱあんた、面白い! ほんつと、あんたが貴族なのが惜しいくらいだよ。庶民だったら、いい友達になれたなあ」

「え……?」

由梨亜が瞬くと、

「ほ、本当……。全く、俺の色仕掛けが通用しないなんて……。初めてじゃないかな? くく……」

「でも眞祥、あんたにはいい葉になったんじゃない? あんた、女の子に振られたことなんてないし」

「ま、確かにそうかも……。で、でも、ぷぷ……。思い出すだけで、笑えて来る」

目の前で笑いだす二人を、由梨亜はどこか呆然と見詰めた。
そのうちに、あることに気付く。

「あら……？　そう言えば、貴方達、似ていない？　今まで眼鏡を掛けていたから、よく分からなかったけれど……」

由梨亜の言葉に、千紗は笑い過ぎて涙の浮かんだ目を人差し指で拭いながら言った。

「そうだよ？　だって眞祥、——だもん」

ヒュウと、風が吹く。

「……………え？」

長い沈黙の末、由梨亜の口から出たのは、そんな意味のない音だった。

「聞こえなかったんですか？　いいですか？　もう一度だけ言いませよ。僕にとって千紗は、——なんですよ」

由梨亜は信じられずに、あんぐりと口を開ける。

「あ、でも……ちよつと待って。だって、彩音と東風上って、名字が違う……」

「だって眞祥、あたしの母方の——だもん。この『彩音』って名字は、父方の方の名字なの。あたしのお母さんの旧姓は『東風上』だよ」

「そ、そう……なんだ……」

由梨亜が呆然と言うと、不意に腕を引かれる。見ると、千紗が由梨亜の腕を引いていた。

「彩音さん……？」

「お願い。あたし達に付いて来て頂戴。あんたには何の益もないことかも知れないけど、あたし達はしくじる訳にはいかないんだ。それに、面白い物が見れるよ？」

「面白い……物？」

「そう。あたしの、一世一代の、ね」

そう言って不敵に笑う顔は、到底、法にもとる行為に耽っているとは思えない程、晴れやかで清々しい物だった。

「ここ……って……」

由梨亜は、呆然と見上げた。

その家は、最早家と呼ぶのが躊躇われる程の大きさで、屋敷その物だった。

ただ、由梨亜の家には到底及ばない程度の大きさである。

だから由梨亜が驚いたのは、その家が大きかったから、という訳ではなかった。

そこが、クラスメイトの家だったから。

それも、こんな大きな家を建てる程の。

「まさか、咲の家さきっ?！」

由梨亜は、思わず千紗と眞祥を凝視する。

「どうして、ここに……」

「まあ……強いて言うなら、仇討ち、かな」

千紗は腕を組んで、少し難しい顔をしている。

「仇討ち、って……いじめられたから、そんなことを言うの?」

「違うよ」

由梨亜の語尾にかぶさる程の勢いで、千紗ははっきりと言い放った。

「あたしは別に、いじめられたぐらいじゃあ、こんなことは思い付かなかったと思う。確かに、あれは嫌だけど……」

千紗は顔をしかめて、目の前にそびえ立つ館を睨み上げる。

「でも、我慢して、息を殺していれば、中学に上がった時には終わるの。あいつは中学まで庶民の学校に通う気はないから、どっか私立に行くだろうし、あたしは近くの公立に行く。それで縁が切れる。まあ――」

不意に苦笑を洩らすと、千紗は肩を竦めた。

「そういう持久戦って言うか、何にもしないでるのはあたしの性に合っていないけど、どうせ長引いても三年足らず。我慢できなくはないし、実際我慢するつもりだった。……あんなことが、なければね」

「あんなこと、って……?」

由梨亜が訊ねても、千紗も眞祥も何も言わない。
ただ、二人で視線を交わしただけだ。

そうしてそのまま、千紗は無言で玄関へと進む。

そこは、勿論閉ざされていた。

だが、由梨亜の屋敷とは違って、人間の門衛はいない。

ただ、堅固な二メートル以上もある柵状の門がそびえ立っているだけだ。

勿論そこは、堅く閉ざされている。

一体どうやって中に入るのかと由梨亜が訝しんでいると、千紗に門の前から退くようにと促され、咲の屋敷からは見えない煉瓦調の塀の辺りに移動する。

すると、何故か眞祥が携帯端末を取り出した。

それで、どこだかに電話を掛ける。

しかし、すぐにその電話は終わってしまった。

「……………」

由梨亜は問い詰めようと千紗を見詰めたが、首を振られ、おまけに黙っているようにと促される。

——時間にして、五分程経った頃だろうか。

慌ただしく駆ける足音が聞こえたかと思うと、門扉がゆっくりと内側に向かって開いた。

そして、人一人がぎりぎり通れる広さになったかと思うと、一人の少女が駆けだして来て、眞祥に飛び付いた。

「まあ、眞祥！ 何度あたくしが誘っても来なかったのに、よく来てくれたわ！ ほら、入って。丁度今日は、お父様がお休みだからいるのよ。ああ、何て運のいい日に来てくれたの！ お父様はお忙しいから、週の半分は東京に行っているのよ？」

「ええ。以前にもお伺いしたことはありますよ、並木様^{なみき}」

「ああ、だから、もう何度言わせるの？ 名前で呼んでって。それに、うちだとお父様もお母様も、お兄様もみんな並樹なのよ？ 區別が付かなくなるじゃないの」

「いいえ、ご身分が違うと、何度も申し上げているでしょう？」

由梨亜は、思わず呆氣にとられた。

学校ではいつも咲に付き纏われて媚を売られているが、いや、だからなのか、いくら顔がいいとはいえ、咲が庶民の男子にここまですり寄っているなんて、初めて見た。

由梨亜が唾然としてみると、ふと横を風が吹いた。

思わず隣を見ると、そこにいたはずの千紗の姿がない。

（あ、あれ……？）

由梨亜は慌ててきよろきよろと辺りを見回したが、目に付いた動きと言えば、咲が眞祥を門の中に引きずり込み、門が閉ざされただけだ。

由梨亜は一人、道に突っ立っていた。

（置いて、かれた……？）

由梨亜のこめかみを、汗が伝い落ちる。

「何ぼうつとしてんの？」

どこからともなく千紗の声が聞こえ、由梨亜は慌てて辺りを見渡した。

でも、どこにも彼女の姿はない。

由梨亜が不安に駆られると、

「どこ見てんの、上だつてば」

由梨亜は慌てて空を見上げたが、そこにはただ青い空が広がっているだけだ。

「ちよつと、あんたつてほんとに馬鹿なの？ 上つて言われて空見

上げるなんて、正真正銘の大馬鹿か純粹培養のお嬢様だけだつて。

あ、そうか。あんた、正真正銘のお嬢様だもんね」

由梨亜が何とか声の元を辿ると、塀の上に千紗の姿があった。

「どうやって……そこまで上がったの？」

「どうやってって、助走付けてジャンプして塀の上に手え引っ掛けて、あとは木登りみたいに登っただけだよ？ ほら、煉瓦風に作つてあるから、とっかかりが多いんだよね。さすがに四、五メートル

くらいだと難しいけど、三メートルないもん、ここ」

千紗はあっさりと言うと、含み笑いをして由梨亜を見下ろした。

「まあ、あたしは平気だけどさあ、あんたは無理だよね、ここ登んの」

「あ、当たり前じゃない……」

千紗は明るく笑うと、ぴよんと塀の内側に飛んだ。

「あ、ちよっと……!」

「門の方に回って。今開けるから」

少し張り上げた声に促されて、由梨亜は恐る恐る門の前に立つ。すると、あっさりと門は開かれた。

と言っても、それは僅かな隙間でしかない。

「ほら、さっさと入ってよ」

門の近くに佇む千紗から不満気に言われ、由梨亜は慌てて門の内側に入る。

その途端、すぐに門は閉められた。

「どう……やったの?」

「何が?」

何も躊躇うことなく屋敷へ歩いて行く千紗に、由梨亜は焦りながらその後ろを追い掛ける。

「何がって、どうやって門を開けたの? 人もいないのに……」

「だから、その人の代わりをあたしがしたんだってば。この家は広いけどさ、家計の実情は火の車なんだ。だから、こう言った所に人を雇う金がない。だったらさ、ここを開け閉めするのは、ここを通る人しかないじゃん? だから、あたしでも簡単に開けられたって訳」

あつと言う間に並樹家の玄関に辿り着いたかと思うと、今度は遠慮もへったくれもなく玄関の扉を開け放つ。

「あ、ちよっ……!」

由梨亜が慌てて手を伸ばしても、千紗はするりと中に入ってしまう。

あまりにずかずかと進んで行く千紗に、由梨亜は躊躇いながらも後を追った。

けれど、不安が付いて回る。

「ねえ、ちょっと……いいの、これ？ 不法侵入じゃない」

「違うよ？ あたし達は、門の前でこれを見付けたの」

千紗は、人差し指と中指の間に挟んだカードを振った。

「それ……学生証？」

由梨亜は、思わず呆氣にとられた。

しかも、その学生証は咲の物だ。

「どうやって、そんな物……」

「ん？ 眞祥がかすめ取ってたの。知らなかった？」

「知らないわよ……」

由梨亜は、思わず脱力した。

「でも、それじゃあ不法侵入したことには変わらないじゃない……」

「だから、違うってば。ここは咲のお屋敷だし、家の目の前で拾ったなら、届けるのが普通でしょ？ それで見たら、門が開いてたら、こうやって入って来たの」

ふてぶてしく笑う千紗に、由梨亜は更に力の抜ける思いで額を押さえた。

「そんな屁理屈、通用するとでも、思ってるの……？」

「通用するとかしないじゃなくて、通用させるの」

不意に強い口調で言われ、由梨亜は訝しげに千紗を見上げる。

「彩音さん……？」

「ああ、ここだね」

千紗はしゃがむと、何かを手を取った。

そして、その何かを巻き取るような仕草をする。

「え……？ ちょっと、何やってるの？」

由梨亜もしゃがむと、何かがきらりと光った。

「これ？ テグス。まあ、天然繊維のじゃない、強いて言うなら『テグスもどき』かな？ 本物だと高過ぎて、あたしみたいな一般庶

民には手出しできないからね。でも、透明度で言うところの方が上だよ？ だからこれ、注意して見ないと見えにくいから、眞祥に屋敷の玄関から落として行ってもらったの。これだったら、簡単に後を追えるでしょ？」

「そりゃあ、そうだけど……」

由梨亜は呆れて溜息をついた。

こんなことは、一朝一夕には思い付かないだろう。

つまり、千紗と眞祥は、随分と前から用意周到に準備を進めていたということだ。

「貴女……一体、何を仕出かす気なの？」

「それはまあ、見てのお楽しみってことで」

千紗は悪戯っぽく笑うと、またしても無造作に扉を開け放った。しかも、乱暴に。

ダーンという音が響き、中にいた咲は驚いてこちらを見た。

その向かいでは、ゆったりと眞祥が紅茶を飲んでいて、咲の隣や近くには、咲の両親や兄と思われる人物がいる。

彼らも咲同様に驚いていて、唯一泰然としているのは眞祥だけだ。

「何だ、遅かったな」

「仕方ないじゃん。あたしだけだったらさっさと来れたけど、塀を乗り越えられないお嬢様がいたからさ。それに何？ 一人で優雅に紅茶飲んじゃって」

「まあ、一見優雅に見えるけど……飲む？」

「うん。もらう」

千紗は眞祥からカップを受け取って一口含んだが、すぐに渋い顔になった。

「うっわ、何これ。まずい……」

「な、何をっ！」

今まで呆然としていたくせに、批判には敏感な咲だ。

「だってそうじゃん。出過ぎてて渋いのを、何とか砂糖とミルクで誤魔化してる感じ。よくこんなの飲めるよね、眞祥」

「俺だって、本音を言えば飲みたくなかったさ。だけど、お前が来るまでに疑われる訳にはいかないだろう？ 多分セイロンだと思うが、明らかな粗悪品だよ、こんなの」

「ま……眞祥？ い、一体何を……」

強張った顔で咲が言うと、眞祥は明らかな冷笑を浮かべた。

「不愉快なんだよ。俺の名前を呼ぶな。ブスが」

「なっ……！」

「見た目は可愛くないし、中身も最悪。まだ中身が良かったら、話す価値もあったかも知れないが、お前にそんな価値はない。この紅茶と同様」

眞祥は、千紗に付き返された紅茶のカップを掲げてみせた。

「まず、淹れたお湯の温度が低過ぎる。充分沸騰させないとまずくなるだろう？ それに、出し時間だって長過ぎる。だから渋くなるんだ。おまけに茶葉の方も最悪だな。等級はオレンジペコだろうがダストだろうが構わないが、もっと質が良くないと駄目だ。不味過ぎる。まあ、俺の好みはフラワリー・オレンジペコだが、その中でもやっぱりシルバー・ファイン・ティッピー・ゴールデン・フラワリー・オレンジ・ペコが一番だな。今まで飲み比べた中で、一番だった」

由梨亜は、自分の顔が徐々に引き攣っていくのを感じた。

「あと、種類だとセカンドフラッシュのダーズリンだな。ダーズリンのあの渋みが、ストレートティーに最高に合う。別にファーストフラッシュも美味しいんだが、高級品のダーズリンの特徴であるマスカテルフレーザーが一番多く含まれているのは、セカンドフラッシュだからな。それを考えると、やっぱり……」

その、まるで本物の貴族のような批評に、並樹家の面々は目を白黒させる。

（何で、たかが小学生なのに沢山知ってるの……？ ほんと、紅茶のディーラーになれるんじゃないかしら……）

「眞祥……あんた、相っ変わらず気取ってんのねえ……。って言う

か、何？ オレンジペコって」

「……………お前はそこからか」

眞祥は呆れたようにじつとりと千紗を睨んでいるが、普通の小学生としては、千紗のような反応が最も正しい物だろう。

「いいか、紅茶ってのは奥が深いんだ。オレンジペコかダストかだと、抽出時間が大きく変わるんだぞ？ それだけじゃない。茶葉の種類や出荷時期によって、濃い目に出した方がいいか薄目に出した方がいいか、ストレートがいいかレモンがいいかミルクがいいか、全っ然変わって来るんだからな！ それに硬水と軟水でも、大きく変わって来てっ——！」

「あゝ、もういい。めんどくさい。別にあたし、市販の奴で充分だし」

「なっ！ いいか千紗、あれは紅茶じゃない！ 断じて紅茶とは認めないぞ、俺はっ！ あんなのは紅茶『風』飲料だっ！ 香気も味もあつたもんじゃないぞ！」

「はゝあゝ。もう好い加減にしてよ。あんた、目的忘れてるでしょ？」

千紗に呆れたように睨まれて、眞祥は少したじろいだ。

「……………だったら、お前が進めろよ。そもそも俺は、お前に協力しているだけであって、本命はお前だろう」

「ま、確かにそうなんだけどさ。そっちの方向に話を持ってけなかったのって、眞祥のせいじゃん」

千紗は頬を膨らますと、溜息をついた。

「まあ、いいけどさあ…………」

「いいのっ?!」

由梨亜が思わず声を上げると、初めて咲達是由梨亜の存在に気付いたのか、大きく目を瞠った。

だが、その後の反応は違った。

咲は、何故彼女がここにいるのかと訝しみ、咲の兄是由梨亜が誰なのかと不快を示し、咲の両親は、ぎょっとして顔を強張らせた。

「ん？　だって進まないじゃん。いつものことだし」

「いつものことって……」

由梨亜が脱力して眩くのを気にも留めず、千紗は肩から下げていたバッグの中からファイルを取り出した。

「じゃあ、まず最初に。去年の十月八日。……心当たり、ありません？」

「何……？」

咲が訝しげな声を上げるのに、千紗は冷たい視線を投げ掛けた。

「黙っててくれる？　あたしはあんたに訊いてるんじゃないの。あたしが訊いてんのは、あんたの父親。並樹^{なかつ}筈。——あんたよ」

自分の娘と同じ年の子供に呼び捨てにされたからか、筈は顔を真っ赤にしながら身体を強張らせるという、実に器用な真似を仕出かした。

「ふーん、その様子だと、心当たりがあるみたいね」

千紗は、咲になど目もくれず、真っ直ぐ筈の元に歩み寄る。

「去年の十月八日。あんたはその日、東京で資金繰りをする為に、色んな所を回ってたでしょ？　車で。そこであんたは、自分の思うようにならない世間と、道に迷った運転手のせいで、苛々していた。だから、運転手をその場で降ろして、自分で運転してたんだよね？　それも、選りにも選って、人通りの少なくて狭い、昼日中の道を。驀進していたあんたは、目の前で信号が赤になったけど、停まるのが嫌で、信号を無視して……」

千紗は、ずっと目を眇める。

「信号を渡ってた男の人を、轢いたでしょ？」

その言葉に、由梨亜は大きく目を瞠った。

「轢いたって、そんな……」

由梨亜に咎めるように見詰められて、筈は狼狽えたように声を絞り出す。

「な、何を……じ、事実無根だっ！」

「事実無根だ？」

千紗は繰り返すと、何が可笑しいのか、くすくすと笑い出した。

「あんた、本気でそれ言ってるの？　じゃあ、続けるね。あんたはその人を轢いた後、我に返ったんじゃないの？　それで、一回は車を止めて、その男の人の様子を見た。……でも、血を流している人を見て、怖くなった。自分が捕まるんじゃないか、このままじゃあ並樹家の再興ができなくなるって。だから、逃げようと思った。それだけじゃなく、すぐにこの男の人の身元が分からない方がいいと思って、懷を漁って、財布を盗んで」

千紗はゆったりと笑みを作るが、目は笑っていない。

むしろ、怒りに燃えて、爛々と光っている。

「そこには誰もいなかったから、あんたもそんなことができた。そして、その男の人をほっぽり出して、逃げ出した。……でも残念だったね。その人、その近くに仕事で来ていたの。だから、その人がちょっと出掛けた後、いつまで経っても戻って来ないっていうことで、探されたのよ。そうして、血を流して倒れている所が見付けられた」

千紗の顔から、不意に表情が抜ける。

「その時には、まだ微かに息があった。でも、救急車を呼んで、病院に搬送される間に息を引き取った。でもねえ、あんたが轢いてから見付かるまで、軽く一時間以上は経っちゃってるの。もし、あんたが轢いた後に、すぐ病院に行っていたら——」

千紗は、真っ直ぐ笈を睨み上げる。

「間違いなく、その人は助かっていた。……今も、間違いなく生きていた」

その言葉に、咲の母親が息を呑む。

「その人は、あんたが殺したの。——彩音櫻堵^{おうと}は、あんたに殺されたのよ。並樹笈、あんたに」

「今……何、て？」

由梨亜は、掠れた声を出した。

千紗は、振り返りもせず、視線を笈から逸らしもせずに言い放っ

た。

「並樹笈は、彩音櫻堵を轢き殺したの。――あたしの、父親を」
しんと、室内は静まり返った。

あの咲でさえも、信じられないとばかりに口を覆っている。

「父親って……そんな。じゃあ――」

「証拠は何だ！　こ、この私を、ここまで侮辱する、その証拠はっ
！！」

笈は、口から泡を飛ばし、掌をテーブルに叩き付ける。

「証拠？　ほら、これ」

千紗は、手に持っていたファイルをテーブルに投げた。

「そこに、全部纏めてある。あんたが、お父さんを轢き殺した時の
状況も、その証拠も」

「証拠って、どうやって？　そんな物、とっくの昔に処分してるん
じゃないの？」

由梨亜が当たり前の疑問を千紗にぶつけると、何故か彼女は、に
んまりと笑った。

「うん。こいつの手の中には、もうないよ。でもねえ、財布だけ盗
んだのは、まずかったんだよねえ」

「財布？」

「そう。免許証とか身分証明書とかって、男の人って大抵財布に入
れてるでしょ？　だから、笈はそれを盗んでから、しばらく経って
ほとぼりが冷めた頃、召し使いに言って捨てさせたの。その召し使
いは、更に下の、町からバイトに来ていた人に渡したんだよね。処
分するようにって。でもねえ、お金とかカードとかが入った財布を
捨てろって、明らかに不自然だよね？　だからその人、その財布の
持ち主が誰なのか、中身を見たの。……そうしたら、びっくり。自
分の父親の、財布だったんだから」

「はあっ?!」

由梨亜は、思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「彩音さん、貴女、このお屋敷で働いていたのっ?!」

「うん。……あたし、最初っから可笑しいって思ってたんだよね。いくら人気のない場所での轢き逃げだったとしても、犯人が捕まらないままだやむやに終わらせられたのって、かなり不自然だと思わない？　でも、どんなに調べたくても、あたしには頻繁に東京に行くお金がなかった。だから、短期間で給料が良くて、おまけに小学生でも使ってもらえたから、ちよっとこの家で雑用係やってたんだよねえ。でも、まうさかその主人に、自分の父親が轢き殺されてたなんて、夢にも思わなかったなあ」

千紗は、場違いにもにんまりと笑うと、テーブルに投げ出したファイルの中から、数枚の紙を抜き取った。

「それについて纏めてあるのがこれ。財布をあたしに渡した人の証言も取ってあるよ。それと――あんた、ほんとに警察に疑われてたでしょ？　でも、それを金と身分で押し潰した。その証拠も、ちゃんとここに纏めてある」

千紗はひらひらとその紙を振ると、にやりと笑った。

「ついでに、あんたが東京からこっちに移った後、また東京に戻ってやってた諸々についても、証言は取得済みだから。覚悟しといてよね」

「なっ……！」

笈は、顔を真っ赤にする。

「諸々って……？」

「聞きたい？」

由梨亜が思わず訊ねた言葉に、目をキラキラさせながら返されて、由梨亜は思わず一步下がった。

「で、できれば……聞きたい、かな……？」

「うーんとね、まずは、東京に返り咲く為の賄賂とか、それに関連して、議員個人への明らかに違法な献金とか？　あとは、自分のとこの商品を使えとか、これ以上取り引きしないって言って、主に小工場とか個人営業の庶民に対しての恐喝及び暴力、もしくはそれらに対する教唆、おまけに脱税とかこいつの会社の社員に対する労働

系の法律違反がいくつか？ それと、それらの事件が警察にばれた
りばれそうになったりした時にそれを誤魔化したのもあるかな？

ああ、あと公務執行妨害もしてたけど、金の力で誤魔化してたよね
え」

「……そんなに？」

由梨亜は、思わず啞然として口を開けた。

貴族であり商人である以上、汚いことをしている人間はごまんと
いる。

また、金や権力に物を言わせる程度では、どうあっても捕まえる
ことはできない。

何しろ、被害者はほぼ庶民なのだ。

泣き寝入りするしかない。

「うん。まあ、この中には、明らかに捕まんないようなものもあるけ
ど……」

千紗はにっこりと笑みを浮かべると、一歩笈に近付いた。

「貴方の被害によって泣き寝入りした人達は、そのほとんどが貴方
を訴える方針を固めています。そして、そのほとんどの人間には、
後援役として中級以上の貴族が付いていて、裁判から何からをバッ
クアップします。また、賄賂や献金や脱税などについては、もう何
日も前に警察にリークしました。今頃は、警察でもすっかりとした
裏付けが得られているはずです。――さて、どうする？ 並樹笈」

第五章「最後の秘密」

可哀想なことに、笈ことうは固まって動けない。

他の並樹なみき家の家族も同様だ。

千紗ちさは冷笑を洩らすと、手にしていた紙をテーブルに叩き付けて、踵を返した。

「ああ、これはそちらでどうぞご自由に？ 二重三重にバックアッ
プは取ってるし、警察にだってこれのコピーはあるから」

鮮やかに捨て台詞を残して立ち去ろうとする千紗と、その後について自然に立ち去ろうとする眞祥まじやすに、由梨ゆりあ亜も慌てて部屋を立ち去ろうとする。

こんな居心地の悪い場所に、いつまでもいたくはない。

だが、空気が読めないと言えいいのか、彼女はどこまで行っても彼女だということなのか――。

「お、お待ちなさい！」

傲慢な貴族の声に、眞祥は立ち止まりこそしたものの振り返らず、千紗は煩そうに顔をしかめて振り返った。

「何？ 落ちぶれたお嬢様」

「落ちぶれた、ですってっ……?!」

「そう。いくら貴族だって言っても、娘のあんたが事件を起こして、その父親までもがこんだけやっちゃったらねえ。もう貴族とは認められないかもよ？ 中学だって、あんたは町の方の、ここいらの富豪が沢山通ってる私立に行くつつつたけど、もうこうなったら無理じゃないかな？ この屋敷の維持費だけでも馬鹿になんないし、たとえぎりつぎり貴族として認められたとしても、家賃も学費も出せないんじゃないかな？」

「な、何を言うのです?! そう簡単に、貴族ではないとは認められないというのにっ！」

顔を真っ赤にして怒鳴る咲さきに対して、千紗は至って落ち着いてい

る。

「ふうん。ま、どうせ庶民とか富豪扱いになるか、名ばかりの貴族になるかって違いしかないだろうけどね。で？　訊きたいことって何」

「そ、それですわ！　お前と眞祥は、一体どういう関係ですの？！」
バン、と強く椅子の肘掛けを叩く咲に、眞祥は思いつ切り顔をしかめて振り返った。

「うっせえな、このドブス。キャンキャン吠えてうっせえんだよ」

その言葉に、咲だけではなく、由梨亜も顔を引き攣らせた。

「い、いくら何でも、その言い方は、ないんじゃないかなあ……？」

「は？　今までずーっと、こいつの物言いには我慢させられてきたんだ。これだけじゃあ足りねえよ。俺は、基本的には綺麗な奴とか喋らないつつうのに、お前って奴は……」

半眼で千紗を睨む眞祥に、けれど千紗はどこ吹く風だ。

「だって、しょうがないじゃん？　あたしには使える人がいなかったんだから。だったら、親戚のあんたに頼むしかないでしょ？　ねえ？　眞祥叔父さん？」

——途端に、咲の顔が凍り付いた。

「うっわあ……やめろよ。タメのくせして『叔父さん』はないだろ」

「だって、事実でしょ？　あたしのお母さんの歳が離れた弟が、あんたなんだから」

和やか(?)に会話をする二人に、由梨亜はずっと気になっていたことを訊ねた。

「歳が離れてるって……いくつ違うの？」

「え？　えーっと……十九歳、かな？　あたしのお母さん、十九歳であたし産んだし。……つつうか眞祥、何であんた十一月生まれなの？　あたしは真正正銘あんたの姪なのに、誕生日はあたしの方が先じゃん」

その言葉に、由梨亜の思考が停止した。

「……ってことは、彩音さいいんさんの方が年上なのに、東風上こちがみさんは叔父

さんってこと……？」

「言うなっ！ それは二度と口にするなっ！」

……どうやら、眞祥にとってそれは禁句だったらしい。

「じゃあ、これから眞祥のこと、『眞祥叔父さん』って呼ぶから。宜しくね？ 眞祥叔父さん？」

「んのっ……！ もう帰るぞ、千紗！」

「あ、逃げた」

思わず由梨亜が呟くと、何とも凄まじい形相で眞祥に睨まれる。

「いいからつべこべ言わずにさっさと行くっ！」

「はーい。あ、忘れる所だった」

千紗はそう言うと、咲の学生証を咲に向かって投げ付ける。

「ほら、これで用は済んだし、もう行こう」

いきなり千紗に手首を掴まれ、由梨亜は思わず目を瞠った。

由梨亜も咲達も啞然としているうちに、そのまま千紗に引きずられて外に出た。

千紗も眞祥も、もうこの屋敷には近付きたくもないのか、あつと言う間に咲の屋敷は見えなくなる。

「あ、あの――そろそろ、手を離してもらってもいい？」

由梨亜が恐る恐る声を掛けると、千紗はびくりした顔で手を離した。

どうやら、無意識で掴んでいたようだ。

辺りはもう、すっかり暗くなっている。

「なあ。本条さん。家、大丈夫か？」

「家？」

「門限だよ、門限。貴族なんだし、結構厳しいんじゃないのか？」

「あ……すっかり忘れていたわ。今、何時くらいかしら？ もう暗いけど……」

「んー、六時半だな」

眞祥が携帯端末を取り出して言うと、由梨亜はその時間にくぐりと肩を落とした。

「……もう、いいわ。東風上さん、その端末、貸してもらえるかしら？」

「あ、いいけど？」

由梨亜は眞祥の携帯端末を受け取ると、家の番号に掛けた。

「もしもし？ 由梨亜ですけど、遅くなるので一応連絡を入れました。帰る時にまた連絡します」

由梨亜はたったそれだけを言うのと切り、更には端末の電源まで落とした。

「……えーつとさ、今、留守電みたいな感じで話してたけど……」

千紗に恐る恐る言われ、由梨亜はあっさりと頷いた。

「ええ。留守電なもの。私が今掛けた番号は、お父様の予備端末だから、基本的に留守電に接続されることになっているのよ。悪戯電話だったら留守電になった時点ですぐに切られるし、何か大事な話だったら、留守電にメッセージを残すでしょ？ そうしたら、それをお父様が聞いてリダイヤルすればいいから」

由梨亜はそう言うのと、少し小首を傾げる。

「私、まだちょっと訊きたいこともあるし、もう少しお喋りしたいの。彩音さんの家に行ってもいいかしら？」

その言葉に、千紗は盛大な溜息をついた。

「はあ、もう……いいよ。あと五分で、うちに着くし」

「良かった。ありがとう」

そう言うてにっこり笑う由梨亜の背後で、眞祥が

「確信犯かよ……」

と呟いたのは、聞かなかったことにした。

千紗は、心の中で深い溜息をつきながら家に入った。

勿論、ようやく父の復讐が果たされることとなるのだと思うと、安堵感や喜びも込み上げて来る。

しかし、計算外が一つ。

（何でうちまで付いて来んの……？）

千紗が由梨亜を連れて行った理由は一つ。

証人と保険だ。

眞祥は千紗のクラスメイトだし、何よりも叔父と姪の関係だ。

眞祥は、証人とはなり得ない。

だから、千紗達とはほとんど関係のない由梨亜であれば、証人になれると思ったのだ。

そして、彼女は並樹家よりも家格の高い本条家のお嬢様だ。

いくら並樹家でも、そして邪魔に思ったとしても、櫻堵おうとのように彼女を取り除くことはできない。

必然、共にいる千紗や眞祥にも手出しはできない。

だが、千紗の予定していたことはそこまでだ。

家まで付いて来るなんてことは、予定にない。

千紗は疲れた溜息をつきながら、由梨亜に飲み物を出した。

眞祥には、出していない。

「……？　ありがとう。でも、どうして私にだけ？」

「そうだよ。俺にも出せ」

眞祥の要求に、千紗は鼻で笑って答えた。

「あんたは自分で出せば？　だって、あんたもここに住んでんじゃん。ま、正直、どうしてあたしとあんたが一緒に住んでんのがばれなかったのか、疑問だけどね」

「ふん、そんなの、俺が注意して尾行されないように気を張ってたからじゃねえか。つつうことで、恩義を感じているならすぐに淹れて来い。自分でやるのは面倒臭い」

「お坊ちゃまが」

「は？　……あゝそうか、分かった。よし、じゃあ本条さんに、お前の小さい頃のあれやこれやを――」

「あゝもう！　はいっ！」

千紗は、自分用に持って来たお茶を眞祥の前に叩き付けた。

「はっ。こんな出来合いの奴が飲めるか。おまけにこのカップ、お

前のだろう。俺で淹れて来い」

「くそそこまで言うなら自分で淹れてよ！ あんたの好みのお茶をあたしが淹れる訳ないでしょうがっ！」

「だから、お前に半年も仕込んでるんだろうが！」

「はっ？ それでも淹れられなかったあたしを見くびらないでよね！」

「それは自慢じゃないっ！」

言い合いを続ける二人に、由梨亜はずっと疑問に思っていたことを口にした。

「そう言えば……どうして東風上さんは、そんなに紅茶に詳しいの？」

「詳しい？ 俺が？ 普通だろ？」

あっさりと返されて、由梨亜は顔を引き攣らせた。

「普通じゃないわよ！ そんなに詳しい小学生なんて、私見たことないわ！ 貴方、本当に紅茶のディーラーになれるんじゃない？」

その言葉に、千紗と眞祥は思わず吹き出した。

「何か、当たらずとも遠からずって感じだな」

「うん。お母さん方のお祖父ちゃんとお祖母ちゃん、紅茶の仕入れやってるから」

「……仕入れ？」

由梨亜は目を点にさせた。

「そう、仕入れ。普段は店で売ったり小売店に卸したりするんだけど、よく色んな紅茶の産地を回って、新しく仕入れたりしてるんだ」

その言葉に、由梨亜は目を丸くした。

「そうなの……。あ、それと、もう一つ気になっていたんだけど」「何？」

「どうして、東風上さんは彩音さんと一緒に暮らしているの？ この家、普通の一軒家よね？ 二世帯で暮らすには、少し狭そうな気もするわ」

「ああ、そりゃそうだろ。俺の両親はここにいなし、そもそも俺が

こっちに來てから、まだ半年だからな」

眞祥はそう言くと、遠い目をした。

「うん、そうか。半年か……うん」

千紗も、思わず遠い目になる。

「色々あったね、半年前……」

「ああ、色々あったな……」

「……何が、あったの？」

由梨亜の目には、好奇心の色が多分にある。

千紗は、思わず微笑を浮かべて言った。

「あのね、お祖父ちゃんが家出しちゃったの。借金まで作りやがって」

「え………？」

きよとんと眼を瞬かせる由梨亜に、千紗は乾いた笑みを浮かべた。

「嘘みたいでしょ？ でも、本当にあってさあ。それで、お祖母ちゃんがお祖父ちゃんを追っ掛けに行って、その間、眞祥をうちに——つまり、自分の娘に預けたって訳」

「おい千紗、お前の説明は省き過ぎた。父さんは、まあ——紅茶狂いって言うか何て言うか、紅茶に生命を懸けてるみたいな感じなんだ」

「………眞祥にそれを言われるお祖父ちゃんって、もう終わりの気がする」

「何か言ったか？」

「何も」

眞祥の視線から逃れるように、千紗は目を逸らした。

「とにかく——それで、父さんは半年前に、『地球一の茶葉を探して来る！』って宣言して家を飛び出しちゃったんだ。しかも、必要経費やらなんやらはうちの名前で借金してやりくりしてるから、その借金が母さんに回って、その母さんも父さんを探しに、カードとか借金の履歴を辿って地球中を飛び回ってるから、その二人の必要経費が回りに回って姉さんに……」

「……それって、ありなの？」

「……後でその分返すって言うてるから、いいんじゃないのか？」
由梨亜の疑問に、眞祥は目を逸らして言う。

「……でも、東風上さんの普段のお金も――」

「……姉さんの負担になってるな」

「……いいの？ それ」

「……悪いんじゃないか？ 常識的に」

二人して、乾いた笑いを洩らした。

「でもさ、お祖父ちゃんの動機も不純だよね。お父さんが、つまり、お祖父ちゃんにとっての義息子が事故死しちゃったから、その墓前に供える為の最上級の茶葉を――って。結局、全部お母さんが負担してるのに。だからお母さん、こんなに遅くなっても仕事が終わらなくて帰って来ないんだよ」

唇を尖らせる千紗は、年相応に見える。

眞祥は微笑を浮かべ、千紗の頭を撫でた。

「とにかく、お前は頑張ったよ。よく我慢したよな」

「――我慢してないし」

「ああ、そうか」

「あたし、我慢なんてしてないからね。先生とか咲で鬱憤晴らししてたし」

「ああ、そうだな」

「だから、我慢なんてしてないんだから」

「ん」

ゆっくりと、眞祥は千紗の頭を撫で続ける。

産まれた月日で言えば、千紗の方が眞祥よりも上だ。

だが、どちらかと言えば、眞祥は千紗の保護者のようだった。

「まあ、お前みたいに凶太い神経してたら、そうなるだろうなあ」

「……………眞祥、あんたあたしに喧嘩売ってんの？ ああそう売ってんのね。分かったじゃあ高く買ってやろうじゃないの」

「は？ 俺が？ この俺が、喧嘩なんかする訳ないだろうが」

「……ナルシストが」

千紗はぼそつと呟くと、由梨亜に向かって申し訳なさそうな顔を
した。

「ああ、ごめんね。騙す感じに巻き込んだじゃって」

「確信犯のくせによく言うよな」

「眞祥は黙ってて」

千紗にぴしゃりと言われ、眞祥はにやにやと笑いながら口をつぐ
む。

「あ、でも、別に大丈夫よ？　だって、私と彼女の間には、ちよつ
と因縁があったから」

「因縁？」

千紗が首を傾げると、由梨亜はこくりと頷いた。

「ええ。私の幼馴染みに、双葉ふたばと若葉わかばって子がいたんだけど、その
二人、双子だし可愛いし頭もいいし、学校の中でも目立っていた子
だったの。私とは幼稚園から一緒だったんだけど、二人の姓は、貴
族とか富豪の中では聞いたことがないような名字で、おまけに何か
の行事の時にも、一度も両親が来ていなくて……他の人達の間では、
二人は庶民だって見方が一般的だったの。そして、そこには並樹咲
もいた」

由梨亜の話に、千紗は思わず眉をひそめた。

その部分だけで、もう、咲が何をやったのかが分かった。

「分かったよ。咲、その双葉と若葉って子をいじめたんでしょ？

あたしみたいに」

「ええ。全く同じではないと思うけど、いじめたことには変わりな
いわ」

由梨亜はそう言うと、肩を竦めた。

「最初は、二人と仲の良かった私や、他の人でも庇えるくらいの物
だったわ。移動教室の時に報せなかったり、授業が変わったことを
教えなかったり、体育とかでペアを作る時、仲間外れにしたり……。
向こうには、何て言うか、選民主義？　みたいな人が沢山付いてい

たけれど、こっちにだって、仲の良かった人が何人も付いていたから、私達が気を付けていれば大丈夫だったの。でも、どんどんエスカレートしていった、物を隠したり、壊したり……他にも、色々……」

由梨亜は、顔を伏せた後、真っ直ぐに千紗と眞祥を見詰めた。

「貴方達、咲のこと、調べたんでしょう？　だったら、知ってるはずよね。——どうして咲が、東京からこっちに来たのか」

その言葉に、思わず千紗は言い淀んだ。

「まあ……。東京の私立学校で、ちょっと問題起こしたせいで、こっちに来ることになったって聞いたけど、それ以上は聞けなかった」

「ええ、そうでしょうね。確かに、彼女は問題を起こしたのよ。——双葉と若葉って、双子なんだけど、性格は違ってたね。双葉の方が、何て言うか、活発だったの。それで、咲に直談判を挑んだのよ。結果は咲の惨敗。おまけにその途中で、双葉と若葉がどの家の子だったのかわれちゃってたね。彼女達は、実はとっても身分が高い家の子供だったの。だから、彩音さんが詳しいことを知っていないのも無理はないわ。彼女の両親が揉み消したから」

苦々しく笑う由梨亜に、眞祥が眉を寄せて訊ねた。

「結局、その双葉と若葉って、一体誰だったんだ？」

すると、由梨亜が肩を竦めて答える。

「内親王殿下よ。まあ、私は知っていたけどね」

「え、じゃあ何で、その人達って自分の身分を隠してたの？　別に、

内親王なんて……隠すことじゃないじゃん？」

「まあ、ね……。でも、皇族ってなると、幼い頃からのメディアの露出が普通になるでしょ？　おまけに学校に入っても、周囲に気を遣われることになる。……だったら、身分を隠せばいいって、彼女達の父親である皇太子殿下が判断なされたのよ。メディアへの顔出しも公務も、二人が義務教育を終えてからだって。それまでは、名前とかも全部非公開。さすがに、皇太子殿下の次に天皇になるだろ

う息子の義彰親王^{よしあき}までは、それは不可能だったみたいだけど」

由梨亜は、苦い溜息をつく。

「とにかくもう、それで咲が怒髪天を衝いちゃってね。頭に血が昇り過ぎて、相手が皇族だとか、自分より身分が高いとか、全部頭から抜けちゃったのよ。双葉の方にやられたって逆恨みが、今度は若葉に向いちゃって……。どうしてかは分からないけど、若葉をプールに呼び出して、突き落としたのよ」

思わず、千紗は顔を引き攣らせた。

「何か、過激……」

由梨亜も苦笑して頷いた。

「ええ、そうね。まあ、唯一良かったことは、若葉が突き落とされたプールは室内の温水プールだったってこと。季節としては春だったけれど、年中使えるように温水が張ってあったから、寒さは大丈夫だったわ。でも、若葉が突き落とされたプールは、シンクロ用の水深が深い物だったし、若葉は泳ぎが下手だったから、溺れ掛けちゃったの。まあ、すぐに若葉がいなくて気付いた双葉が人を呼んで、助かったんだけどね。……だけどこれ、未必の殺人未遂よ。子供だってことを考慮して、咲自身は退学処分で済んだのだけど、さすがに父親まではそういかないわ。並樹家よりも上位の貴族とか、外聞を気にするような企業なんかは、もう並樹家とのやり取りがないわ。だから私、もう懲りてると思ってたんだけどね」

その言葉に、眞祥が深い息をついた。

「ったく……それで、あいつは東京を追い出されてこんなところまで来たって訳か？ その挙句に、また懲りもせずに千紗をいじめたって？ 本当、学習能力ってもんがないのか？」

「ほんと。もう……あり得ない。でも、それ聞いて納得したよ。どうしてあたしが咲にいじめられたのか」

千紗は溜息をつく、口の端を歪めた。

「あいつがこっちに転校して来た時にさ、四年生だったんだけど、そのクラスに幼馴染みがいたんだ。で、偶々咲がその幼馴染みと隣

の席になったの。そしたら、その当日から幼馴染みがいっ走りにされたんだ。んで、あたしって正義感強くてさあ。黙って見てらんなかったんだよね」

千紗は、そう言っって小さく肩を竦めてみせる。

「だから、つい言っちゃったんだよね。」

『あんた何変なこと仕出かしてんの？ 人を使いっ走りにするって何様な訳？ あ、お貴族様だったよね。でもさ、何でこんな地方まで来た訳？ 何か東京で仕出かして、追い出されでもしたの？ とにかく、あんたが何考えてんのかは分かんないけど、こんなことは二度とやらないでよ』

って。そうしたら、次の日には他のクラスメイトとか先生とかを味方に付けやがって、あたしは孤立しちゃったって訳」

「え、でも、その幼馴染みは？」

その言葉に、千紗は少し寂しそうな顔をする。

「向こうに付いちちゃったよ。今もおんなじクラスだし。ま、そんな訳で、あたしはいじめられてたって訳。うーん、あたし、うっかり地雷踏んでたんだなあ」

うんうんと頷く千紗に、何かを思い出したのか、由梨亜ははつとした顔になっていきなり千紗に詰め寄った。

「彩音さん！」

「うわっ！ ちょ、顔！ 顔、近い！」

「あ、ごめんなさい」

由梨亜はぱつと顔を離れたが、真剣な顔でまた詰め寄った。

「彩音さん、貴女、東京に何回も行ってたわよね。あれって、並樹筈の情報を集める為だったの？」

「え、うん。それと、筈にやられて泣き寝入りした庶民の人達の後援人を引き受けてもらう為に、ちよつと。でも、それが？」

すると、由梨亜は少し頬を赤らめ、目線をうろろうと彷徨わせながら口籠った。

「えっと、その……あの、でも、理由は分かったけど、その……そ

ういうことは、やっちゃいけないと思うのよね。その、何て言うか……」

「へ？ 何のこと？」

千紗は、きょとんと目を瞬かせた。

由梨亜が何のことを言っているのか、さっぱり意味が分からなかった。

「え、ちょっと、何のことって……しらばっくれる気？ 確かに、犯罪かも知れないけれど、そういうのって良くないと思うわ」

何故か、剣呑な雰囲気になる由梨亜に、千紗はただぽかんとした。そのうちに、眞祥が由梨亜の言わんとしていることに気が付いたのか、手をぽんと打った後に大爆笑に陥った。

「え？ ちょっと、眞祥？」

「東風上さん。笑いごとじゃなくってよ？」

益々眦をきつくする由梨亜に、眞祥は笑いを堪えながら何とか答ええた。

「あ、いや……別に、馬鹿にする気じゃなかったんだけど、さ……クク、や、ちょっと……まあ、当たり前前の発想だとは思うぞ？ でも、それが千紗だと思うと……ク、ごめん、ちょっと笑いが……」

「は？ あたしが、何？」

「や、だって、色気も何もない、ちんちくりんなお前だぞ？ ちょっと、あり得なさ過ぎるって言うか……」

笑い続ける眞祥に、今度は千紗が剣呑な雰囲気になる。

「ちよっと眞祥。はっきり答えてよ。あたしが、何？」

「――売春、してたんじゃないの？」

笑い続けて答えられない眞祥に代わって、由梨亜が千紗を睨みながら言う。

「……………誰が、何だって？」

「だから、貴女が、売春していたんじゃないかって言ってるの」

「してないよっ！ 何、それっ！ だって犯罪じゃん！ わざわざ相手に付け入る隙を与えてどうすんの？！ あり得ないし！」

「……………確かに、言われてみればそうね……………」

「そうだよっ！ あたしそんなに馬鹿じゃないからね！ 第一小学生の売春って、特殊な趣味の人間しか引っ掛けらんないじゃん！ 効率悪過ぎ！」

千紗はどんとテーブルを叩いて力説した。

「千紗、紅茶が零れる」

……斜め後ろから、やや怨念掛かった声が掛かり、千紗は大人しく座った。

「……………それで、本当は何をやった訳？」

由梨亜も、眞祥の怨念に怖れをなしたのか、大人しく紅茶をすすりながら千紗に訊ねる。

「ん？ 思春期の子供に関する相談。まあ、あたしよりもちっちゃい子のお父さんもいたけど」

「……………相談？」

由梨亜の目が点になる。

「うん。やっぱりさあ、お父さんってお母さんよりも、思春期の子供との距離感が難しいらしくってさ。あたしは小学生だけど、何となく中高生が父親を嫌がる気持ちも分かるし？ だから、そういう相談に乗ったり、プレゼント選ぶの手伝ったり？ 報酬は、並樹笈の情報とか、後援役の引き受けとか、あとここから東京までの往復の交通費とお昼代。正直、貴族の人達にとっちゃあ、安かったと思うよ？ あたしにとっても、ちよつとしたお小遣い稼ぎにもなったしね」

「何だ、そういうことだったのね……………心配して損したわ。私、恭興やすおき小父様の家庭が壊れるかもって冷や冷やしたんだから」

由梨亜はそう言って、大袈裟な程深い溜息をつく。

余程心配だったのだろう。

「そんなの、別に心配しなくても良かったのに。むしろあたしがやってたのって、逆に関係修復だよ？ それに、犯罪を密告するのに犯罪をやっちゃあ元も子もないじゃん？」

「だから、それが分からなかったのよ、最初は！ 貴女が咲にいじめられてるのは分かってたけど、まさか、貴女のお父様が咲の父親に殺されていたなんて、思わなかったんだもの」

「まあ、確かに本条さんの言うことに一理あるな。事情が分からないじゃあ、疑われてもしようがない。しかも、またお前が『中高生の方がいい』なんて紛らわしい言い方をするから……」

「え？ だってそうじゃん。あの人達、思春期の子供に悩んでるかああたしに相談するんだよ？ だったら、できるだけ歳が近い方が分かりやすいじゃん」

千紗が頬を膨らませると、背後から声が掛かった。

「あらあら、楽しそうね。何を話してるの？」

「お母さん！ いつの間に帰ってたの？」

「いつの間になって、たった今よ？ 二人とも、ご飯も食べないでどうしたの？ それに、その子は誰？」

その言葉に、由梨亜は慌てて立ち上がって頭を下げた。

「お、お邪魔しております。私、本条由梨亜です。あの……彩音さんの、お母様ですか？」

「ええ。そうよ。初めまして、千紗の母で彩音眞弥まやです。……それにしても、礼儀正しいわねえ、由梨亜ちゃん。千紗も眞祥も、乱暴って言うか、ガサツって言うか……」

そう言って溜息をつく眞弥に、即座に千紗が反論した。

「ちよっとお母さん！ ガサツって何？！ あたし、そんな乱暴でもないからね！」

「そうだよ姉さん。千紗はともかく俺はちゃんと礼儀をわきまえてる！」

「あーら、どうかしらねえ。眞祥、あんたが綺麗じゃない子には口も利かないこと、姉さんは充分分かってるんだからね？」

「ぐっ……ど、どうせ、この世は見た目で決まるんだよ！」

「そんなのもてる奴の言い分だよ！ 見た目で無視されるとか、あり得ないし！」

わいわいと言合いを始める三人を、由梨亜はただただ目を丸くして見詰めていた。

由梨亜の家だって、勿論家族は仲がいい。
でも、こんなに騒ぐなんて覚えがない。

(こういうのも、ありなんだ)

由梨亜は、ただ驚いていた。

「は？ そんなの僻みだろ？ ただの」

「くっ！ むかつく！ お母さんも何か言ってよ！」

「え？ でもねえ……。二人とも、どっちもどっちだわ。そもそも論点ずれていない？」

「……まあ、そうだけどさあ……」

千紗がムスツと膨れると、眞祥がはっと気が付いたように手を打った。

「そもそも、俺らの礼儀が悪いって、千紗を育てたの姉さんじゃねえか！ しかも、その姉さんを育てた母さんに俺は育てられた訳だろ？ つつうことは、結果的に母さんの育て方が悪かったってことじゃねえか！」

「え？ お祖母ちゃんの？ ……うーん、あたしには、そうは思えないけど……。ただ単に、眞祥の性格が悪いだけなんじゃない？」

「何だと？」

二人が顔を寄せて睨み合っていると、

「ああ、もうやめなさい、千紗、眞祥。そんなことで喧嘩したってどうにもならないでしょ？」

眞弥は溜息をつきながら言うのと、ふと思い出したように言った。

「あ、忘れていたわ」

「何が？」

「お父さん、見付かったんですって」

「マジかよ！」

いきなり眞祥は立ち上がって、眞弥に詰め寄った。

「母さん、やーっと父さんを見付けたのか？！ んで、どこにいた

んだ？ 父さん」

「いや、灯台元暗しって言うのか、静岡にいたのよ」

「……………何で静岡なの？ 静岡って、紅茶って言うよりも緑茶ってイメージが強いんだけど……………」

「いや、強いつて言うか、静岡と言ったら緑茶だろ？」

さすがに口を挟むことはできなかったが、由梨亜も興味津々に眞弥を見詰める。

「うん。でも、どうせ紅茶も緑茶も同じ木からできてるでしょ？

発酵方法が違うだけだから、紅茶も作ってるみたいで…………。でも、お父さんの言い分も振るっているのよね。何でも、日本で産まれた男を弔う為にはやっぱり日本の物が一番だって言うのよ」

「だったら最初っから緑茶をやればいいじゃん」

「……………千紗、お前だって知ってるだろう？ 父さんの紅茶に対するあの執着心。それにしても、日本か…………。正直、インドとか中華州とか、裏を付いてヨーロッパ辺りにいるかと思った…………」

眞祥の言葉に、千紗は若干目を逸らしながら曖昧に頷いた。

「うん、まあ…………あたしも、そう思ってたけど…………。あ、お母さん。お祖父ちゃんが見付かったってことは、眞祥、帰っちゃうの？」

その少し淋しそうな様子に、由梨亜は思わず目を瞬いた。

彼女がそんな様子を見せるなんて、少し意外だったのだ。

「ううん、まだよ。何か、お母さんが張り切っちゃってねえ…………。

どうあってもお父さんを矯正する気らしいのよ。それから、まあ、色々とお灸を据えるつもりらしい…………。何かね、小学校を卒業するまでは、眞祥を預かってって頼まれちゃったわ」

眞弥はそう言って肩を竦めると、由梨亜に向かって言った。

「あ、ごめんなさいね、内輪で盛り上がっちゃって」

「え、いえ、別に、大丈夫です。それに、聞いているだけでも楽しかったです…………」

「そう？ ありがとう。でも、もうそろそろ七時半になるわよ？ おうちの方は大丈夫なの？」

「はい。先程、父に『帰る時に連絡する』と電話を入れたので……」
「それでも、女の子が遅くまで帰らないのは良くないわ。小母さんが送ってあげるから」

その発言に、由梨亜は驚いて手と首を同時に振る。

「え、いえ！ 結構です！ 一人で帰れますから……！」

「遠慮しないでよ。それに、もうこんなに暗いんだから。女の子の一人歩きは危険よ？ じゃあ、ちょっと車取りに行くから待っててね。あ、眞祥、あんたご飯作っておいて頂戴。あと、千紗は——」

「あ、あたしも付いてく！」

「そう？ じゃあ、取って来るわね」

眞弥がそう言っただけで家を出て行くと、途端に眞祥が不満一杯の顔付きでこちらを睨んで来る。

「どうやら、自分だけに用事が言い渡されたのが気に食わないようだ。」

千紗は、慌てて由梨亜を急ぎ立てた。

「あ、ほら、行こう！ 外で待ってれば、その分早く帰れるじゃん！」

「あ、ちょっと待って。連絡入れるから」

由梨亜はそう言うと、先程と同じようにして連絡を入れた。

そして、こちらを睨みつけて来る眞祥に向かって、にっこりと笑い掛ける。

「じゃあ、また来週ね。ご飯、頑張って作ってね？ 東風上さん」

「……………てめえ」

由梨亜は千紗と視線を見交わすと、眞祥が爆発する前に急いで外に出る。

少し息を切らしながら、互いに顔を見合せて笑った。

やがて、車を取りに行っていた眞弥が戻って来る。

車に乗り込みながら、千紗は涙を指で拭いながら言った。

「あ、ねえ」

「何？」

「好い加減、名字呼びやめにしない？ 何か、疎外感あるんだよね。距離を取られてるって言うか、淋しいって言うか。だから、あたしのことは『彩音さん』じゃなくって『千紗』って呼んで。眞祥も、『東風上さん』って呼ばれるよりは『眞祥』って呼ばれる方がしっくりくるだろうし」

その言葉に、由梨亜は少しきよんとして――笑顔で頷いた。

「ええ。分かったわ。千紗。じゃあ、千紗の方も、私のことを『由梨亜』って、名前で呼んで？ 『あんた』とか『お嬢様』って言うのは、ちよつと淋しいの」

由梨亜が千紗を真似て言い、悪戯っぽく微笑むと、千紗は吹き出しながら頷いた。

「うん、分かったよ。由梨亜！ じゃあ、帰ったら眞祥にも伝えておくね？」

「ええ、お願い」

「ちよつと、二人とも？ 乗らないの？」

訝しげに眞弥に問い掛けられて、慌てて二人は車に乗り込んだ。

由梨亜が自分の家の住所を伝え、すぐに車は動き出す。

すっかり暗くなった道は、街灯もまばらで、何だかとても新鮮だ。

「ねえ、千紗……」

「何？」

「これから、宜しくね？」

由梨亜がそう言うてにっこりと笑うと、千紗がにやりと笑い返して来た。

「こっちこそ、由梨亜！ ……そう言えばさ、」

「何？」

「今日遅れたこと……どうやって言い訳するの？」

途端に、由梨亜の顔がぴしりと固まった。

「今日、もう遅いしさあ……。あたし、一緒に言い訳できないから、一人で頑張ってね？」

由梨亜はしばらく固まっていたが、ふと思い付いて手を叩いた。

「あ、今日は駄目なのね？　じゃあ、明日迎えに行くから！」
「はっ?!」

何やら身の危険を感じ、千紗は身を引く。

由梨亜は、目を爛々と光らせながら身を乗り出した。

「私、言い訳は明日するわ。明日、貴女と眞祥と一緒に、ね」

「はあっ?!　ちょっと、こっちまで巻き込む気っ?!」

「あら？　そっちの都合に付き合わされたのは、私の方が最初よ？
だったら、私にもその権利があるとは思わない？」

「……そっちだって、楽しんでたくせに……」

「あら？　何か、言ったかしら？」

妙に威圧感のある由梨亜に、千紗は思わず目を逸らす。

その二人の様子を感じて、運転席の眞弥が吹き出した。

「何だか貴女達、面白いわねえ。漫才できるんじゃない？」

「誰がっ!!」

「ちょっと小母様！　私達、そんなつもりでやってるんじゃない
せん！」

「ほら、息ぴったり」

軽やかに笑われて、二人は途端にむすくれる。

「ほら、また」

重ねて言われて、千紗が思わず身を乗り出した。

「ちょっとお母さん！」

「あ、ごめんね」

途端に眞弥が急ブレーキを掛け、千紗は危うく前の座席に転がり
掛けた。

「ちょっと千紗、大丈夫？」

「うぐ……。お母さん！　何って急ブレーキ掛けんのっ?!　自
動運転にしてなかった訳っ?!」

千紗がキッと眞弥を睨み上げると、眞弥は唇を尖らせた。

「えい、だって、気付いたら目的地だったし、それに同じ町内だっ
たんだもん」

「『もん』ってお母さん、いくつなのよ……」

「え？ 今年で三十だけど？ いいじゃない、若い母親って。お母さんが小五の時、お祖母ちゃんはまだもう三十代の後半だったのよ？ 十歳近くも違うじゃない」

「だからってさあ……」

千紗はぶつぶつと呟きながら、額をさする。どうやらぶつけてしまったようだ。

由梨亜は親子二人の様子を、笑いを堪えながら見て、立ち上がった。

もう、ここは自分の屋敷と目と鼻の先だ。

さすがに正面に付いたら目立つだろうから、由梨亜は少しほつとする。

それに、眞弥はこの屋敷を見ているはずなのに、全く動揺した様子がない。

初対面の時の千紗の反応からすると、どうやら眞弥は随分と胆が座っているようだ。

「小母様、ありがとうございました」

「いいえ、どう致しまして」

眞弥はそう言って、にっこりと笑う。

今年で三十と言っていたから、恐らく眞弥の年齢は二十九か三十。同年代の他の人と比べると、まだ結婚していない人も随分といえるだろう。

だからか、自分の母親や他の知っている母親よりも、かなり新鮮な気がした。

由梨亜は、まだむすつとしている千紗を覗き込む。

「じゃあ、千紗。またね」

返事がないことも覚悟していたが、

「……………うん、また明日」

そう返事が返って来て、由梨亜は思わず笑ってしまった。

また明日、ということは、千紗は明日、一緒に言い訳をすること

を受け入れたのだ。

実に素直と言うか、裏がないと言うか――。

由梨亜は、笑いを堪えることができなかった。

初めてこちらの学校に通った時は、最悪だと思ったこの転校だが、こうしてみると悪くない。

むしろ、最高だ。

多分、彼女とは一生付き合える友人になれるだろう。

そう思うと、何故か足取りも弾んで来る。

今日は、本当に最高の一日だった。

また明日も、明後日も、そして多分、また来年も、再来年も、ずっとずっと――こうした日々が、ずっと続けばいい。

ただ、そう思った。

終章「八年が経って」

燦々と、太陽が照りつけて来る。

千紗ちさと由梨ゆり亜あと睦月むつきと香麻こうまの四人は、それぞれぐったりと机に身を伏せていた。

アメリカ州の中でも、どちらかと言えば南寄りにあるこのレイメーア大学は、日本の家よりも暑い。

日本とは違って湿気は多くないが、その分じりじりと肌を焼かれるように強い太陽にさらされるのだ。

確かに、こちらの夏休みが日本よりも長い理由がよく分かる。

けれど、四人がぐったりとしているのは、それだけが理由ではなかった。

「ようやく……終わったわね、補講……」

ぐったりと由梨亜が呟くと、

「ああ……うん、終わったね……。って言うかき、何？ あの教授の迫力！ 確かに、授業とかが遅れたのはあたし達がイギリスにいたただけどさ、それって結局は不可抗力じゃん！ 別に旅行してた訳じゃないんだしっ……！」

「あ、おい、ちょっと待て、千紗」

「何で？！ 別にあたし達は悪くないじゃん！ 貴族をイギリスに集めるって言い出した奴が悪いんだよ！」

「いや、だからな、千紗」

「――ほう、授業に付いていけないのは自分のせいではない、と。」

そう仰るのか？ ミス・本条ほんしょう姉あね」

「ぎゃあ！ 出たっ！」

千紗は思わず叫んで、一步仰け反った。

「ほっほう？ 『出た』とは、これまた、珍妙な言葉を……」

「あ、ああああのですね、プロフェッサー・リヴィングストン、ちよ、ちよーっと待って下さい、これには深い訳が――」

「訳なんぞどうでも宜しい、ミス・本条妹」

その返答に、由梨亜は顔を引き攣らせる。

「いや、あの、プロフェッサー？ 『本条姉』とか『本条妹』とか、ややこしい言い方じゃなくって名前で呼んで下さいってお願いしたはずですけど？ 私達双子ですし？」

「では、『プロフェッサー』などと、どこにでもいるような人間の称号ではなく、『ロード・リヴィングストン』か『ヴァイカウント・リヴィングストン』とお呼びなさい。私は、歴としたイギリスの子爵なのですから。アメリカで大学教授などをやっているのは、ただの趣味と暇潰しです」

ふっと笑うその姿は、悔しいことに実に様になっている。

「とはいえ……この私を、たかが成金貴族であり生徒であるミス・本条姉が愚弄したことは事実。現代経営学論の、地球連邦と花鶯国かおうこくなどの先進国家間における、経営システムの違いをレポート用紙三十枚で書け。いいか、きっかり三十枚だぞ。それより多くても少なくとも駄目だ」

「はあ？ 何その宿題。って言うか、確かにうちは会社経営とか商人みたいなことやって金稼いでますけど、そっちみたいに先祖に継り付いて昼行燈するよりはましでしょう？ よっぽどこっちの方が有意義で、社会貢献も果たしてますが？」

ばちばちと、千紗とリヴィングストンの間で火花が散る。

やがて、ふっと二人が笑みを浮かべる。

「ほう、やるな、小娘」

「あら、どうも？ プロフェッサー？」

リヴィングストンはすっと目を細めると、ぐるりと四人を見渡した。

「さて、先程の課題は、ミス・本条妹、ミスター・莊傲そうつごう、ミスター・藤咲ふじさきにもやってもらおうか」

「えーっ?!」

「ちよ、プロフェッサー?!」

「ま、な、何で俺達までっ?!」

次々に三人が文句を言うが、

「問答無用です」

とぼっさり斬られ、固まっているうちにリヴィングストーンはどこかに行ってしまった。

「あゝっ! ったく、千紗、お前のせいだぞ!」

「そうだぞ! お前がプロフェッサーに突っ掛かなきゃ、俺達まで厄介な課題を背負わなくて済んだんだ!」

「えゝ? でもさ、四人でおんなじ課題出されたってことは、四人で協力して三十枚書けばいいじゃん」

「あ、それいいわね! だってプロフェッサー、一人三十枚って言うてなかったもの! だったら、私達が勝手に解釈して四人で三十枚書いても問題ないわ」

にこにこ笑う由梨亜に、睦月が顔を引き攣らせた。

「……おい、それであいつが納得するのか?」

「しなかったらその時よ。ね、香麻?」

にっこりと笑い掛ける由梨亜に、香麻も笑い返す。

「うん、そうだな」

「……おい香麻、てめえ、ほだされてんじゃねえよ」

睦月はがっくりと肩を落とした。

その隣で、ずっと何かを考え込んでいた千紗が、あっと声を上げた。

「ん? どうした、千紗?」

「あのね、あのプロフェッサーのナルシスト具合とサディスト具合、なゝんか見たことあるなあってずっと思ってたんだけど、まよひやす眞祥に似てるなあって思ってた」

「マサヤス?」

「誰だ、それ?」

睦月と香麻は首を傾げ、由梨亜は顔を引き攣らせた。

「あゝ……確かに、プロフェッサー・リヴィングストーン、眞祥と性

格そっくり……。眞祥の方は、貴族じゃないけどね」

千紗と由梨亜で盛り上がっていると、睦月が不機嫌そうに声を上げた。

「だから、その『マサヤス』って誰なんだよ！」

「ん？ あたしの元叔父さん。タメだったけど」

「はあ？」

首を傾げる二人に、由梨亜が溜息をついて詳しい説明をする。

それを聞いても納得し切れなかったのか、睦月は訝しげに首を傾げた。

「成る程なあ……。でも、何で香麻は知らなかったんだ？ その眞祥のこと」

「え？ だって俺、中学からだし。眞祥って奴、いなかったぞ？ 中学には」

「うん。眞祥、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんと一緒に、どこだったかな……。確か、インド北部のダージリンの一大産地に、小学校卒業と同時に引越しちゃったから……」

「ほんつとにあの家の男二人、紅茶狂だったからねえ……」

遠い目をする由梨亜に、子供の頃からだから慣れているのか、千紗がくすりと笑う。

「でも、意外と仲いい人には弱いんだよ？ 眞祥だって、何だかんだ言って、あたしと由梨亜の言うこと聞いてくれてたじゃん。確か、写真——あった」

千紗は携帯端末をいじると、睦月と香麻に見せた。

「ほら。これ、小学校の卒業式の写真。記録的に凄い大雪で大変だったけど、楽しかったなあ」

その写真には、少し長めの髪をした仏頂面の少年が、卒業証書を手にした千紗に上から押し掛かれていて、その隣で爆笑している由梨亜の姿が映っていた。

懐かしいのか、にこにここと目を細めている千紗に対し、睦月はほとんど顔を陰しくする。

「……千紗、この眞祥って奴、お前の叔父だったんだよね？」

「うん。あ、でも、もうあたしは彩音千紗さいいんじゃなくなつて本条千紗だから、もう叔父さんじゃないね。結婚もできるし」

あつさりと放たれた爆弾発言に、睦月が凍り付く。

その様子を見て、由梨亜が意図的に更なる爆弾を落とす。

「そうよねえ。だって千紗、初恋が眞祥だつて言つてたもんね？」

「うん。確か、保育園くらいかな？」

由梨亜の意図に全く気付かずと言つた千紗に、睦月が不気味に微笑む。

「ふーん、そうか、お前の初恋だつて……？ ふーん……」

しかし、千紗は全く睦月の様子に気が付かない。

「でも、本当に懐かしい。今、どうしてるかな……。そもそも、眞祥もお祖父ちゃんもお祖母ちゃんも、今どこにいるんだろう……」

少し寂しそうに笑う千紗に、由梨亜が首に手を回して抱き付いた。

「ちょ、由梨亜！ 暑苦しいってば！ どうしたの？」

「ん？ あのさ、明日日本に帰るでしょ？」

「うん、それが？」

「だったらさ、日本に帰ったら、彩音の小父様と小母様のお墓参りに行かない？」

その言葉に、千紗の顔が強張った。

今まで千紗は、意図的にその話題を避けていた。

由梨亜は勿論それを知っていたが、今、意図的にその話題に触れる。

「もうそろそろ、小母様の命日でもあるでしょ？ ……ずっと、お墓参りしていないんだもの。小母様のお墓だつて、千紗、一度も行ってないでしょ？ もう、お父様もお母様も記憶が戻ったんだし、気兼ねも何もないわ。どこに行ったんだつて、不審がられることもない。小母様だつて、千紗がお墓参りに来てくれたら、嬉しいんじゃないかしら」

千紗は、唇を引き結んで俯く。

だが、決然と顔を上げて言った。

「うん、分かった。――行くよ。お母さんとお父さんのお墓」

「じゃ、それで決まりね」

にっこりと二人で笑い合っていると、

「……おい、千紗」

「何？」

「その眞祥って奴、名字は何だ？ 彩音か？」

「ううん。眞祥はお母さんの弟だから、お母さんの旧姓の東風上こちがみだよ。東風上眞祥」

「ふうん……東風上、ねえ……」

うっそうと笑う睦月に、ようやく千紗は不信感を持ったのか、眉根を寄せた。

「ちよつと、睦月？ どうしたの？」

「いや、何でもない。……でも、墓参りに行くの、千紗の母親の命日、なんだよな？」

「え、うん……。それが？」

千紗は訝しげに目を瞬かせた。

「じゃあ、その東風上眞祥に、もしかしたら遭あうかも知れないな？」
「あ……そうか。どうしよう、由梨亜。多分眞祥、あたしと由梨亜のこと、ただの友達の子供ってしか憶えてないよ。何で自分のお姉ちゃんとお義兄にいちゃんのお墓にいるんだって思われたらどうしよう？」

動揺してあわあわと狼狽える千紗に、由梨亜がにっこりと笑った。

「大丈夫よ。何とかなるわ。適当に誤魔化せばいいんだし、誤魔化せなかったら私が眞祥の記憶を戻すわ。それで何とかなるわよ」

「あ、そっか……。最終手段になるけど、それがあるよね」

納得したのか、千紗は頷いて笑顔になった。

「うん、そうよ。何とかなるわ」

「よくっし。じゃ、決まったから帰ろう！ 明日、日本に帰るんだから、さっさと戻って残りの準備を済ませとかないと！」

「じゃ、寮まで競走しましょう！」

「えーっ！ それ、俺への当て付け？ な、そうだろう？ このメ
ンバーで走ったら、俺がビリって決まってるじゃねえか！」

香麻が怒鳴るが、

「え？ でも、奇跡が起るかも知れないじゃん！」

「そうよ、ほら、香麻！ 睦月も行くわよ！」

「はいよ。じゃ、罰は前にも屋敷でやった通りでいいな？」

「うん、オッケー！ じゃ、行くよ！ よーい、ドン！」

四人は、一斉に走り出した。

けれど、すぐに香麻が半歩遅れる。

その様子を見ながら――いつの間にか、四人は笑い転げながら走
っていた。

（終）

終章「八年が経って」（後書き）

ここまで読んで下さり、本当にありがとうございました！
　　～邂逅
のその時～は、ここで完結となります。

次回からは、おまけとして様々な小話を載せていきたいと思っています。
どんな話なのかは、その話を更新した時の活動報告に書いていくので、気になる方はそちらをご覧ください。

―オネエサマと私―

大きな会場には、大勢の人が――それも、二十代前半頃の若者達が集まっていた。

彼女は、一つ深呼吸をすると、彼らの前に歩み出る。

できるだけ威厳を保つように、立派に見えるように、心掛けつつ。拡声器を通して、彼女の声が、会場に響き渡る。

『皆さん、初めまして。わたくしは、花鶯省特別統括官の、ミーシヤ・ブルーノと申します。本日は、皆様方、官僚の卵の先輩として、激励を行う為に参りました。どうぞ、宜しくお願い致します』

ミーシヤは、ふうと溜息をついた。

その様子を見た同僚のダリア・フィオーレは、思わず吹き出す。

「ちょっと、ミーシヤ。何ぐったりしてるの？」

「そりゃあ、あんなだけ心にもないこと延々と喋らされたらね……」

その顔に浮かんでいるのは、うんざりとした表情だけだ。

「ま、エリートさんは違うからねえ。私みたいに、一般から回されて来た人と違って」

その言葉に、ミーシヤは本気で顔をしかめる。

「やめてよ、冗談じゃない。私はただ、持って生まれた魔力があったというだけの話よ。第一、私が十二歳で花鶯省直属の鶯学校おうがっこうに入学したのだって、あそこが全寮制で、将来花鶯省に入省さえすればずっとこっちの面倒見てくれるからよ」

「だから、大抵の人には、その前提条件である、鶯学校の入学試験を潜り抜けることもできないんだってば！ あそこで魔力のあるなしと強弱を篩い分けるんだから、私みたいにちょっとしか魔力がないと、入学もできないのよ？」

ダリアが口を尖らせて言うのと、その隣にいたシャノン・ハリソン

も便乗して来る。

「そうよお。でも、どうして統括官様は、そんなに早く親元を離れたかったの？ そんなに嫌いだった？」

「違うわよ。って言うか、その『統括官様』っていうの、何回言ったらやめてくれるの？」

「そんなことはどうでもいいから、質問に答えてよ！」

シャノンに詰め寄られて、ミーシャは溜息をついて言った。

「私の母は、私が実家にいるってだけで、家に縛り付けられていたの。私が自立すれば、母は自由になれたのよ。鴛学校は全寮制だし、基本的に内部進学だし、黙って試験に合格さえすれば、卒業と同時に花鶯省に入省できるし……。正直、金銭問題を除けば、もう親に頼らなくても大丈夫でしょう？ だから、私が鴛学校に入学することによって、母を自由にしてあげたかったのよ」

その淡々とした言葉に、シャノンは顔を引き攣らせた。

「へ、へ……何か、壮大ねえ……。でも、そうだったら貴女のお父さん、お母さんに執着とかってなかったの？」

「いいえ？ 元々愛人扱いだったし、正直、母も私も存在を認識されていたかどうかも怪しいわ。だから、そのこと自体に問題はないのよ。第一、私だって庶子だったし、財産分与権もなかったから、あそこにいる意味自体がないの。……異父妹^{いもうと}だって、産まれたし」

「異父妹っ?! ……って、え？」

やけに大袈裟な声を上げたダリアに、ミーシャは溜息をついて言った。

「私が十四になった時、母が官吏と結婚してね。第二妻になったの。母はその時三十九歳。その六年後に子供を産んで、今は五十三歳。異父妹は八歳ね」

「うっわあ……複雑ねえ……」

ダリアは、シャノンと同じく顔を引き攣らせる。

「そうかしら？ でも、私の父方の血筋の方が、もっと複雑よ。私も、何が何やら、何がどこでどう繋がっているのか、全く分からない

いもの」

すると、シャノンが下唇に人差し指を当て、首を傾げながら言った。

「ねえ、ミーシャ。貴女、もしかして――」

「失礼致します」

突然割り込んで来た声に、控え室でくつろいでいた三人は、一斉に扉へ顔を向ける。

「どうかなさいました？」

ミーシャが訊ねると、

「陛下が御越しになります故、御準備を」

ただそう言われて頭を下げられても、正直困る。

ミーシャがただ困惑しているうちに、その『陛下』が来てしまった。

「ごめん下さいなさいな、御邪魔致しますわ」

そう言って入って来た人は、揺らめく長い黒髪に、ロイヤルパールの瞳を持つ、三十そこそこの美人だった。

「初めまして。このような所にまで御越し下さり、恐悦至極に御座います、陛下」

ミーシャは立ち上がると、そう言って綺麗に頭を下げた。

その様子を見て、慌ててダリアとシャノンも立ち上がって頭を下げる。

「まあ、そこまで堅苦しくなさらないで宜しいのよ？　どうぞ、御

寛ぎ下さいな」

そう、癒璃亜女王に声を掛けられて、三人は頭を上げる。

彼女達は、数年前に花鶯国の王となった花雲恭癒璃亜と会うのは初めてだが、花鶯省はその職業柄、王族とかなり関わって来ている。

そもそも、ミーシャの直属の上司である鶯大臣は、この花雲恭癒璃亜の異母弟なのだ。

そういう意味では、それなりに親しくしていても可笑しくはない人物だということになる。

「初めまして、陛下。わたくしは、花鶯省特別統括官ミーシャ・ブルーノと申します」

ミーシャに続いて、慌ててダリアとシャノンも自己紹介をする。癒璃亜は三人にそれぞれ笑い掛けると、立ったままミーシャに声を掛けた。

「初めまして、ブルーノ統括官。花雲恭癒璃亜です。本日の御挨拶、御聞きしました」

「まあ、わたくしなどの言葉を御聞き下さったのですか？」

ミーシャが思わず目を瞠ると、

「ええ。貴女は、史上最年少で特別統括官に御成り遊ばした御方ですもの。以前から、少し興味が御座いましたの」

「そんな、わたくしなど、陛下に比べれば、何程の物でもありません。もし陛下が王ではなく花鶯省に入省致しておりましたら、わたくしなどよりも余程早く統括官になられていらっしゃったでしょうに」

ミーシャは、謙遜ではなくそう言った。

事実、彼女は特別統括官に、それこそ史上最年少でなれていただろうからだ。

「まあ、ありがとうございます。ですが、わたくしの力は、どこかが突出している訳ではありませんから……。ブルーノ統括官は、魔力の統括官なのでしたよね？」

花鶯省の統括官は三人いる。

魔族の体力、魔族の知能、そして魔族の異能——魔法。

花鶯省に入省する者の大半は、そう言った能力に長けている。

ミーシャは、魔族の知能と魔力の、二つの力を持っていた。

だが、知能の方は平均的な力程度であり、魔力の方は他の者よりもかなり抜きん出ている。

ミーシャが魔力の統括官に就いているのは、当然のことであった。まあ、対外的には花鶯国は魔族の力を認めていないので、曖昧にぼかして『特別』統括官という役職になっているが。

「はい。確かに、わたくしは魔力の統括官ではあります。ですが、わたくしなど、陛下にはとても及びませぬ」

ミーシャがそう言って首を振ると、何が面白いのか、ころころと笑われた。

……彼女は一体、何がしたいのだろうか。

ミーシャが怪訝気に癒璃亜を見詰めると、

「わたくし、少し貴女と御話したいことがありますのですが、今週末の土曜日、御時間は空いておりますか？」

「え、ええ……大丈夫です」

「それでは、土曜日の正午過ぎに、貴女の執務室に伺いますわ」

「はい、了解致しました。御待ち申し上げております」

ミーシャがそう言って頭を下げると、癒璃亜は控え室を出て行った。

「……………結局、陛下って何しにいらしたの？」

ダリアは、癒璃亜が立ち去ってしばらく経った後に、掠れた声で呟いた。

「結局、ミーシャの所を訪ねるよおっていうアポだったんじゃない？ んまあ、本人が来る意味が分かんないけど」

シャノンはそう言うと、ちろんとミーシャを見上げた。

「ねえ？ ミーシャ。さっき言い掛けたんだけどお」

「何？」

「さっきの、貴女のオネエサマ、よね？」

その言葉に、ミーシャは渋面を作る。

ダリアは、きょとんと目を瞬かせた。

「え……どうということ？」

「どういふも何も、そういうことでしょお？ お母さんは愛人で、子供がいるから、その子が自立するまで父親の家に縛り付けられる。しかも、当の父親もミーシャ達の存在を知ってるか怪しい。でも、金銭的にはある程度の余裕があって、父方の血筋は複雑怪奇。そうになったら、ミーシャは先王陛下の娘で、お母さんは元総下^{そうげ}って考え

の方が自然じゃなあい？ 後宮の侍女っても考えられるけど、後宮の侍女が結婚するのは、侍従相手以外だと難しいみたいだし……」
その説明で、シャロンはだんだんと事情が呑み込めてきたのか、
どんと顔色が悪くなる。

「え……え？ ちょ、ちよつと待って。ミーシャが、先王陛下の――
――襖おつしやう祥王の、娘？ ……ってことは、もしかして、陛下って――」
「……私の、腹違いの姉よ」

ミーシャは吐き捨てる、シャロンが口を挟む間もなく告げた。
「でも、向こうは私のことなんて知らないわ。知ってるのは、私が特別統括官だってことだけ。……こんなのも姉妹って言えるのなら、確かに姉妹なんでしょうね。ただ、血の繋がりだけしかない、何とも虚しい姉妹関係だけど」

「ふーん、やっぱそうだったのねえ……。でも、何でミーシャは、後宮に留まらなかったの？ 総下の子供って、普通は侍女か侍従になるんでしょ？ それなのに、わざわざ花鶯省に入って……」
ミーシャは、シャロンが触れて欲しくない所に触れなかったことにほっとしながら、無然と言った。

「前にも言ったでしょ？ 自立したかったって。母を縛り付けたくなかったって。……それに、あんな所に縛り付けられなくなかったのは、私だって同じよ。どうせ、私の母は庶民出だったから、侍女になったとしても下級侍女だし……」

ミーシャは溜息を吐いて言う、不意に小さく笑った。

「でもまあ、感謝はしているのよ？ もし先王陛下がいらっしゃらなければ、私は産まれていなかったし、十二歳になるまでの間に小中学校レベルの教育は受けられたし、鶯学校の学費だって払ってくれてたもの」

「……それって、親なら普通じゃない？」

ダリアの呟いた言葉に、ミーシャは目を瞬かせて答えた。

「私、実の父親への感謝って、私自身が産まれたってことぐらいしか感謝してないわよ？ それどころか、どうして母に私を産ませた

のかつて、恨んだこともあるわ。私が感謝しているのは、後宮で産まれた子供への援助をしてくれる、その後宮制度よ。……それにしても、シャロン。何で、貴女は総下についてそんなに詳しいの？」

「聞いてくれるっ？！ ミーシャ！ あのね、私だって、総下に立候補したのよ！ 二十一になった時に！ 私、自分の美貌には自信があったから、総下になって、上手く貴族の妻に収まろうって思ってたのよ！ でも、あんの堅物王子が……！」

そのシャロンの剣幕に、思わずミーシャは遠い目をした。

「ああ……シャロンって、二十四だったわね……」

およそ四年前、この首都シャンクランで流行り病が起こった。

その病は新種のウイルスによる物で、更には致死率も四十パーセントと、ここ最近のウイルスが原因の病の中では酷く高かった。

何とかそのウイルスに効く薬やワクチンを開発し、病を終息させることはできたものの、その間に当時の国王であった花雲恭禰祥までもが亡くなってしまった。

おまけに、その禰祥の第一王子であった、王太子の花雲恭皇蓮^{おうれん}までもが亡くなってしまったのだ。

当時、彼は二十五歳で、翌年に結婚を控えてさえもいた。

もし、彼のすぐ下の異母^{ていご}弟妹が男であれば、その妻達はその異母弟に引き継がれていただろう。

けれど、彼のすぐ下にいたのは、一歳年下の異母妹^{いもつと}、元々は皇蓮^{こうれん}の後になるはずであった、花雲恭癒璃亜^{けうりあ}だった。

そこで、急遽彼女は二十四歳で即位し、同い年の異母弟である花雲恭斑都^{はんと}と結婚したのだ。

現在、癒璃亜と斑都の間には、第一王子である二歳の花雲恭藤聯^{とうれん}が産まれている。

それはともかく、シャロンが総下に立候補した三年前、総下の相手となるのは禰祥ではなく斑都だった。

ミーシャは、思わず遠い目をする。

確かに、花雲恭禰様は、自分の実の父親ではあるが……。

「先王陛下って、何て言うか——言っちゃ悪いけど、女好きだったからね。確かに先王陛下だったら、シャロンを選んだに違いないわ。でも、斑都殿下って——」

「そう！ あのシスコンで奥さん大好き男！ 折角この私が行ってあげたのに、

『君みたいに綺麗で頭のいい人だったら、実力でも生きていけるだろう？ 私は、総下を選んでも通う気はないし、君だって後宮で無為に時を過ごしたくないだろう』

何て言っちゃって！ かっこよく聞こえるけど、ただのヘタレよ！ 据え膳食わないなんてっ！ ああ、これで私の人生設計はパアになっちゃったんだから！ ミーシャのオニイサマのせいで！」

その言い掛かりに、ミーシャは目を剥いた。

「はあっ？！ ちよっと、確かに血は繋がってるけど、会ったことも話したこともないのよっ？！ 勝手に責任なすりつけないでよ！」

「それでも兄妹は兄妹でしょっ！」

シャロンがいきなり飛び掛かって来たのをミーシャは何とか避けたが、シャロンはそのままの勢いで、ずっと固まっていたダリアに正面衝突してしまう。

すると、何故かシャロンの矛先がダリアに向かった。

二人がぎゃあぎゃあ言い合っている隙に、ミーシャはこっそりと控え室を出る。

これ以上、自分のペースを乱されたくはなかった。

ミーシャは、小さく息をついた。

こんこん、と来客を告げるノックがあり、ミーシャは訝しげに顔を上げた。

そして、その扉から入って来た人物を見て、思わずミーシャは立ち上がった。

「へ、陛下！」

時計を見て、更にミーシャは蒼褪めた。

今の時刻は、土曜日の十四時。

癒璃亜が訪ねると言っていた時間である。

……本当に、すっかり忘れていた。

そのせいで、何も準備はしていない。

「あ、あの、陛下。その……」

ミーシャが目を彷徨わせるのを見て、癒璃亜はふんわりと笑う。

「ああ、大丈夫ですよ。御仕事の区切りは、宜しいですか？」

「あ、だ、大丈夫です……」

「では、御話しましょうか」

「あ、で、では、今お茶を――」

「いいえ、大丈夫ですわ。別になくても」

「いえ、そんな訳には参りません。今すぐにお茶を淹れて参りますので、少々お待ちを」

ミーシャはそう言って、早足で廊下に飛び出す。

そして、そこにわいわいと集まっている野次馬達を、一睨みして追い払った。

ミーシャにはかなりの迫力があるらしく、大抵の人物（特に男）はこれで追い払える。

ミーシャは安心して、給湯室に急いだ。

「それで……本日のご用は、一体何でしょうか」

ミーシャが癒璃亜の目を見詰めて単刀直入に言うと、癒璃亜は少し目を瞠った後、かちやりとソーサーにカップを置いた。

「わたくしが、魔族の全ての力を持っていること――知っているわよね？」

その言葉に、ミーシャは驚いて目を瞠る。

「ええ。勿論です」

「ええ……そうよね」

癒璃亜は独り言のように呟くと、小さく息をついた。

「ブルーノ統括官。……貴女、時を越えたいと思ったことは？」

ミーシャは、思わず凍り付いた。

「——思ったことならば、あります。ですが……」

ミーシャは、震える息を何とか整える。

「それは、禁じられたことです。確かに私なら、あるいは陛下であれば、時を越えることは可能です。ですが、それは一方通行の物。

……往復は、たとえ陛下であっても、なりません」

「そう、それが問題なのよね……」

癒璃亜は溜息をつくと、不意に真面目な顔になった。

「例えば、殺人事件。例えば、強盗事件。他にも、凶悪事件や、未解決事件。……いくら科学が進歩しても、そういった事件を全て解決することは、できませんわ。でも、魔法だったら？」

ミーシャは、思わず目を瞠った。

「そう。何も、わたくし達自身が過去に向かわなくてもいい。ただ、過去を覗き見ることでできる何かがあれば——」

癒璃亜は、にっこりと笑った。

「そう、思いませんか？」

ミーシャは、固く詰めていた息を吐いた。

「……ですが、それには問題があります。最初は、かなりつたない技術も、進歩すれば、それは脅威になります。もし、それに制限がなくなれば——」

「ええ。人権侵害、ストーカー、機密情報の漏洩、他にも沢山の問題がありますわね。でも、それ程心配しなくても大丈夫だと思えますわよ」

「何故ですか？」

「まだ、具体的にはよく分かっていない、過去を覗き見ることできる何か——これは、多分魔族の血を引く人の中でも、適性がないと動かせないと思います。そう、魔族の力と同じように」

「あ、そうか……確かに、そうですね。そして、それを花鶯省の、もしくは宗賽省しきさいの管轄に置けば――」

「そう、余計に悪用の危険は少なくなる」

二人は顔を見合わせて、くすりと笑った。

「何だか、楽しそうですね、陛下のご提案は」

「やる気になったかしら？」

「はい。どうか陛下、わたくしにも手伝わせて下さいませ」

「元よりそのつもりですわ」

癒璃亜は、悪戯っ子のように笑った。

その姿は、到底一児の母とは思えない。

「あ、でも、今すぐではなく、しばらく時を置いてもらっても構わないかしら？」

その言葉に、ミーシャは首を傾げる。

「ええ、少し残念ですけど、構いません。……ですが、何故ですか？」

すると、癒璃亜は少し笑った。

「実は、妊娠したのです。まだ安定期には入っていないので、発表は、今しばらく先ですが……」

「それは、おめでとうございます、陛下」

ミーシャは、目を瞠りながらもお祝いを言って頭を下げた。

確かに、彼女の長男である籐聯王子は二歳だし、そろそろ妊娠しても可笑しくはない。

「第二子ということになりますね。本当にお喜び申し上げます。健やかな御子のご誕生をお祈り申し上げております、陛下」

そう言って深く頭を下げるミーシャに、癒璃亜は少し寂しそうに呟いた。

「……御異母姉様おねえさま、とは、呼んでくれないのね」

その声に、ミーシャは思わず驚いて肩を揺らした。

――実の父親でも、把握していたかどうか怪しい娘だ。なのに、彼女が知っていたなんて、夢にも思わなかった。

けれど、ミーシャは顔を上げずに、頭を下げたまま言った。

「何のことでございましょう、陛下」

癒璃亜が、どこか辛そうな雰囲気なのは、感じ取っている。
でも——これは、自分のけじめだ。

「……いいわ。時間は、まだあるものね。わたくし、絶対に貴女に、御異母姉様って、呼んでもらうから。覚悟しておいて」

癒璃亜はそう言い置くと、部屋を出て行った。

彼女は、たとえ妊娠していると言っても、王に違いない。

恐らく、執務が溜まっているのだろう。

癒璃亜が出て行ってからしばらくして、ミーシャは顔を上げた。

そして、少しほつれてしまった髪を撫で付ける。

その髪が、赤茶けた色をしているのを見て——ミーシャは、唇を
噛み締める。

王家には、赤系統の色が出やすいらしい。

その証拠に、王家の証しとされる瞳の色は桃色だし、髪の色は赤
茶色だ。

勿論、それ以外の色が出る時もある。

癒璃亜の髪の色だって漆黒だし、瞳の色は貝紫だ。

けれど、その癒璃亜の夫である斑都は、目も髪も赤茶色だ。

ミーシャは、強く髪を引っ張った。

こんな、髪の色……大っ嫌いだ。

いっそのこと、染めてしまおうか。

瞳と、同じように。

ミーシャは溜息をつくとき、コンタクトレンズを外した。

そのレンズの色は、一般的な花鶯国の瞳——堇色をしている。

けれど、鏡を覗き込むと、そこには強い桃色の瞳が映っていた。
きつく、唇を引き結ぶ。

赤茶色の髪なら、探せば他にもいる。

けれど、この花鶯国で桃色の瞳を——それも、濃い桃色の瞳を持つ者は、王族に連なる者に限られている。

これこそが、ミーシャの血筋を示す証し。
だから、こんな色――

「大っ嫌い」

癒璃亜自身は、嫌いではない。

むしろ、尊敬している。

でも、できることと、できないことがある。

あの、後宮を出た十二歳の時に、決めたのだ。

もう、仕事以外では、金輪際花雲恭家には関わらない。

たとえ血筋がばれたとしても、決して異母兄とは、異母姉とは、

異母弟とは、異母妹とは――絶対に、呼ばないと。

「これは、私なりのけじめなんだから。……だから、絶対に、貴女の希望には、答えられない。たとえ貴女が死んでも、私には、絶対に無理。……ごめんなさい、」

オネエサマ――

その言葉だけは、胸の奥に仕舞って。

そののち、癒璃亜が第二子の奨砥しやうとを出産して一年が経った頃、過去を覗き見る道具の開発・研究が始まった。

けれど、それをどんな形状にするか、どんな制限と利用方法にするか、そこから始めなければならなかったのだ、その方針に見合った上でちゃんと機能する試作品が完成するまで、何と二十年近くも掛かってしまった。

だが、その試作品ができてからの展開は早く、それからも有効範囲を広げる試行錯誤が繰り返され、ミーシャが五十一歳になった時――

「……ようやく、完成致しました。陛下。これならば、市場に出すことも可能です」

顔に深く皺の刻まれた女は、その言葉に、にっこりと微笑んだ。

「ええ、ようやく……。この去解鏡きよかいきようが完成するまで、もう、何年掛

かりました？」

「そうですね、もう、二十年は過ぎて……二十四年です」

ミーシャはそう言うのと、皺の浮いた自らの手を眺めた。

時は、無常に流れて行く。

もう、すっかり年老いてしまった。

「全く、時が経つのは早いものだわ……」

「ええ、そうですね、陛下」

癒璃亜は、そっと鏡を持ち上げて、そこに映る自分を見て笑った。
「でも、よいこともありました。こうしてわたくしは年老いていき、もう五十代です。――ミーシャ。わたくしは、今年一杯で退位します」

その言葉に、ミーシャは一瞬目を瞠った後、頷いた。

「ああ……。そう言えば、決まりがございましたね」

「そう。王の在位は三十五年に留める。わたくしは、今年が在位三十年目。五年ばかり早いですが、来年からは、籐聯が王です」

「ですが、籐聯殿下も、随分とご立派になられております。それは、陛下と比べてしまえば、幾段か落ちてしまいますが……二十七歳の青年にしては、見所がございます」

その言葉に、癒璃亜はくすくすと笑う。

「まあ、王子すらも批評の対象にしてしまいますの？ ミーシャは」

「ええ。わたくしは、花鶯省の人間ですもの。王族とは深い関わりを持つ省ですから」

癒璃亜はミーシャの言い分に笑顔を浮かべた後――突如として、咳き込んだ。

「陛下！」

慌てて、ミーシャは癒璃亜の背中をさする。

しばらくすると落ち着いたのか、癒璃亜は弱々しい笑みを浮かべた。

「……ごめんなさいね。近頃は、めっきり身体も弱くなって……」

「いいえ、陛下。そんな弱気なこと、仰らないで下さい。昨年、初

ミーシャは早足で部屋を出た。

あの部屋には、他にも人がいた。

人のいない所まで行くと、ミーシャは蹲り、声を噛み殺す。

「陛下、下っ……」

（御異母姉様っ……）

「ごめん、なさい……。ごめ、なさっ……。最期まで、御異母姉様って、呼べなくて……。ごめんなさい……」

ここなら、誰も来ない。

ミーシャは思う存分泣いた。

それから、また幾年が過ぎ、ミーシャが七十八歳になった時。

「ふふ……。いいですよ。私が、その役目、引き受けましょう」

ミーシャは、穏やかに微笑んだ。

「ですが、ブルーノ殿っ……！」

「ですが、とは何でしょうか？ 陛下。峯慶殿下。申し入れは、そ

ちらからの物。それに、私の夢も叶います故、問題はございませぬ」

老女の言葉に、藤聯と峯慶は顔を歪めた。

「本当に……宜しいのですか？」

「ですから、何度も申し上げております。これは、私の夢が叶う方法。否やはございませぬ」

ミーシャは断言すると、二人を追いつ出した。

途端に、部屋の中は静かになる。

椅子に腰掛けると、自然と身体から力が抜けた。

こういった所から、徐々に自分が衰えていつているのだと、認識することができる。

（それにしても……）

ミーシャは、くすりと笑った。

峯慶は、さすが癒璃亜の孫息子だ。

本当に、本質がよく似ている。

ミーシャは、寂しげに微笑んだ。

異母姉が逝ってから、もう十年以上が経った。

けれど、その断片は、こうして次の世代に見受けることができる。そのことが、酷く楽しかった。

「私も、子供を持てば良かったかしら……」

小さく呟いた後、ミーシャはかぶりを振った。

ミーシャの中に流れる血は、王家の血。

彼女が子供を持てば、それは次の世代へと流れて行ってしまう。

ただでさえも、こんなややこしい血筋に産まれたのに、それを持ち越したくはなかった。

「まあ……いい殿方が見付からなかったというのも、あるかしらね？」

呟いた後、ミーシャは立ち上がった。

全ての準備が終わったら、もう、自分はここへと還って来ることはない。

異国の、異時代の地で、その生涯を閉じることとなる。

だから、全ての整理を付けなければならなかった。

……それが不幸だと、嘆く人もいるだろう。

けれど、ミーシャは不幸には思わなかった。

もう、この場所には未練が——心残りが無いから。

心持ち軽い足取りで、老女は歩いて行った。

自身の望む、未来に向かって。

(終)

—お転婆姫と王子—

『私は、貴女に私の婚約者になってほしいと思います。……貴女は、いかがですか？ ……私と、婚約を結んではくれないでしょうか』
『……はい。わたくしも……わたくしからも、お願いします、峯慶^{ミナキ}王子殿下。……喜んで、貴方の婚約者にならせて頂きたいですわ』

それは、幼い子供の口約束。

けれど、大人達にとって、それは重い意味を持っていた。
つまり、自らの家系から、百年振りに王家に嫁ぐ娘を持つということ——ひよつとしたら、この王子の次代の王に、自らの血縁が即くかも知れないということ。

幼い子供達の想いとは別に、大人達の思惑も動き出す。

けれど、彼女の近しい血縁達は、家の繁栄とは別に、この幼い子供の未来を、幸せを——むしろ、そちらの比重の方が大きいのではないかと思える程に、祈っていた。

「リ……ア、様……ミア、様……！」

侍女達が、ばたばたと駆け回っている。

十歳くらいに見えるその幼い少女は、その様子を笑いを堪えながら観察していた。

やはり、ここはいい。

ここにいれば、大抵の人物には見付からなくて済む。

屋敷の中では、兄と家庭教師の女性が話しているのが見える。

家庭教師の方は、何故彼女ではなく兄が対応しているのか不思議なようで、兄に受け答えをしながらも、首を傾げたり扉の方を窺っ

たりしている。

そのたびに、兄が焦って何かを話し掛けているのが、余計に笑いをそそる。

そのうちに、受け答えをしていた二つ年上の下の兄だけでなく、六歳年上の異母兄^{あに}までもが部屋に入って来た。

この異母兄は十六歳になるので、確かに家庭教師を治めるには、彼の方が相応しいだろう。

それに、この異母兄は恰好いいし、話術も巧みだ。

見事に彼女の話題から別の話題に誘導していくのを、彼女は隠れながら見詰めていた。

と、その時、足元の方で、何やら人の気配がする。

下を見ると――彼女は、思わず口を押さえ、気配を殺した。

けれど、何故だろう。

彼女は隠れんぼが得意なはずなのに――それなのに、いつも彼は見付けてくれるのだ。

そう、今、こちらを見上げてるように――温かい、優しい目で。そして、必ず呼んでくれるのだ。

「マリミアン」

と。

そう、彼女の名を。

「ほ、峯慶殿下！」

マリミアンは、思わず動揺してしまった。

(ど、どうしよう、どうしよう……！　こ、こんなはしたない姿を……！)

その時、突風が吹いた。

「きゃあっ！」

マリミアンは、必死に木にしがみつく。

侍女達に見咎められないように、こっそりとスカートの下にズボンを履いて木に登ったのだが、そのスカートの面積はかなり大きい。下にズボンを履いているお蔭で、スカートがめくられても気にはな

らないが、その大きなスカートが風に持っていかれて、かなり風に煽られるのだ。

「マリミアン！」

峯慶の声に、マリミアンは目を開ける。

けれど、その時――

「あっ！」

マリミアンは、バランスを崩して落ち掛け、慌ててより強く木にしがみつく。

だが、元々木の枝に立っていたのが良かったのか、木の叉に跨ることができた。

下からは、峯慶がはらはらとこちらを見上げているのが分かる。

でも、マリミアンは、心配はしていなかった。

何故なら、こういう時はいつだって――

「マリミアン！」

「シャーウィン御異母兄様！」
おにいさま

マリミアンは声を上げると、思いつ切り木を飛び下りた。

「あ、マリミアン！」

峯慶の慌てた声を尻目に、マリミアンはシャーウィンの腕に飛び込む。

シャーウィンは、しっかりとマリミアンを受け止めると、眉を吊り上げた。

「マリミアン！ 何度も言っているが、木に登るのはやめなさい！

お前、御淑やかになると言ったのではなかったのかっ？！」

「ごめんなさい、シャーウィン御異母兄様……」

マリミアンが上目遣いにシャーウィンを見上げると、シャーウィンは無然として言った。

「全く、分かっているならいいが……それにしても、御前、王子殿下の御前で！」

「あっ……」

マリミアンは、呆然とこちらを見詰めている峯慶の視線に気付き、

顔を真っ赤にする。

そしてそのまま、シャーウィンの手をすり抜けて屋敷の中に駆け戻ってしまった。

峯慶は、マリミアンの背に手を伸ばし掛けた格好で固まっていた。気付かずに通り過ぎてしまったマリミアンに肩を落とした彼に、シャーウィンがにこやかに笑いながら声を掛ける。

「申し訳ありません、殿下。マリミアンは、どうやら御転婆気質が治らないようで――」

「……いや、いい。平気です」

そう言いながら、峯慶はシャーウィンをこっそり睨む。

彼が現れなければ――もしかしたら、マリミアンといい雰囲気になれたかも知れないのに。

けれど、にっこりと笑って返されてしまった。

所詮、十三歳と十六歳の少年では、年上の方が確実に勝つということなのだろう。

峯慶は、決心した。

（よし……。もし次にこんなことが起こったのならば、私が必ず受け止める！）

「しかし、何ゆえ本日は我が家に御越し下さったのですか？ 殿下は、先日こちらを御訪ねになられたばかりだと存じておりますが……」

その言葉に、峯慶は自分の用向きを思い出した。

「ああ。それに関してですが……」

峯慶はそう言って、後ろに控えていた侍従から、巻筒式の文書を受け取った。

それを見たシャーウィンは、その古典的な公文書のような物に、眉を寄せる。

「殿下、それは？」

「これは、マリミアンの王籍名のことに関しての文書です。私は本日、これを戦祝大臣殿に御届する為と、王籍名についての説明にこへ伺いました。戦祝大臣殿も、御承知のことです」

峯慶は、そう言うのと苦笑した。

「このような物、口頭でも何ら問題がないはずですが、そうはいかないようで……。このような、前時代的な公文書でなければならぬという慣習があるのです。ただ、これを作るのは、相当時間が掛かるようで、先日の訪問には間に合わず、このような中途半端な時期となってしまいました」

「そう……でしたか。では、こちらへどうぞ。祖父は書斎にいるはずですから」

「ええ、頼みます」

峯慶はそう言って屋敷の中に足を踏み入れた。

(うう……どうでしょう！ わたくしったら、殿下の御前で、何てはしたくない真似を……！)

マリミアンが、寝室の片隅で蹲っていると、

「マリミアン……？ マリミアンったら、どこにいるの？」

「御異母姉様？」

マリミアンが寝室から顔を覗かせると、四歳年上の異母姉あねのシュミアンがいた。

「御異母姉様、一体どうかなさったの？」

「どうかなさったの、じゃないわ！ マリミアン、貴女の王籍名が決まったのよ！」

そう言う割には、嬉しそうではない。

「そうなの？ じゃあ、何て名前になるのかしら」

「それなのよ！」

シュミアンに肩を掴まれて、マリミアンは目を白黒させる。

そうして告げられた、マリミアンの将来の『名前』に、マリミア

ンの顔が強張った。

「――殿下！ 峯慶殿下！」

峯慶の待ち望んでいた声が聞こえ、峯慶は立ち上がって彼女を迎えた。

けれど、彼女の蒼褪めた顔に、峯慶は訝しげに首を傾げる。

「マリミアン？ どうかしましたか？」

「あ、あのっ……わたくしの、王籍名が、『ユリア』だというのは真に御座いますかっ?!」

「ええ……そうですけど？」

その途端、マリミアンの腰が砕けた。

「マリミアン！」

慌てて彼女を支え、椅子に座らせると、マリミアンは蒼褪めた顔で呟いた。

「『ユリア』と言うのは、先王陛下の御名では御座いませぬか！ そんな……そんな名を……」

「それは……」

峯慶は言葉を詰まらせた。

確かに、それはそうだ。

彼の祖母である、昨年崩御した先王癒璃亜ゆりあは、賢帝として名高い。王族の名の音がいり回されているということは、貴族では周知の事実ではあるが、庶民の間ではそうではない。

よって、あの先王陛下と同じ音の名を名乗るということは、余程凄い人なのか、はたまた虚栄心が強い人なのか、と要らぬ憶測を招きかねない。

「……でも、もうそれは決定したことなのですわよね」

「え、ええ……そうです」

「では、仕方がありませんわ」

マリミアンはそう言うと、ふうと溜息をついた。

「わたくし、名前負けと呼ばれぬように、精一杯頑張りますわ!」
そう断言した口調は氣負った所がなく、目はきらきらと輝いていた。

峯慶は、思わずほっと力を抜く。

その様子を見たマリミアンは、首を傾げた。

「どうか、なさったのですか？　大変安堵なさった御様子ですけれど……」

「ええ……。ちょっと」

峯慶は、そう言って溜息をついた。

「この王籍名の告辞と説明は、上位から――つまり、マリミアンの前に、后きさきと妃ひの候補の所も伺ったのです。まあ、后となる沙樹奈さきなは異母妹いもむすめですし、大した問題もなかったのですけれど、妃となるミオメス国の王女殿下の所が、王籍名に洩はれまして……。その、産まれた時に名付けられた名を改めるのは、気に食わないと」

「まあ……そんなことが。確かに、親とすれば、自らの名付けた子の名が変えられるのは、御嫌かも知れませんか」

その言葉に、峯慶は曖昧な笑みを浮かべる。

「はあ、まあ……そんな所ですね」

実際は、それを嫌がったのは妃候補本人なのだが。

「とにかく、これで貴女は私の正式な婚約者です。どちらかに不測の事態が起こらない限り」

「え、ええ……。そうですね」

マリミアンは、峯慶の『婚約者』という言葉に頬を赤らめる。

こういう所が、大変初々しくて、愛らしい。

峯慶は、図々しかったミオメス国の王女、ミアン・ストールを思い出して溜息をついた。

他の候補達は、野心や好奇心が全くない訳ではなかったが、ミアン程押し付けがましくはなく、図々しくもなく、我儘でも高慢ちきでもなく、それぞれの分をわきまえた少女達であっただけに、彼女に対する幻滅感が払拭できない。

ひょっとして、代々の王が大抵六十代から八十代の早さで亡くなっているのは、そういった心労があるのではないだろうか。

峯慶は、思わずそう勘繰ってしまった。

ふと見ると、何故かマリミアンが目には涙を浮かべていた。

「マ、マリミアン？ 一体何が？」

峯慶が慌てて彼女の顔を覗き込むと、

「峯慶様……わたくし、やはり子供なのですわね」

「はい？」

峯慶は、滅多にないマリミアンからの『峯慶様』という言葉に相好を崩しつつ、『子供だ』という、前後の繋がりがよく分からない言葉に首を傾げた。

「だって、わたくしがこんなことで恥ずかしがっているから、峯慶様は溜息をつかれたのでしょうか？」

とんでもなく見当外れの言葉に、峯慶は慌てて否定する。

「い、いえ、これはそうではなく――」

「いいえ、取り繕わないで下さいませ！ わたくし、もっと頑張つて、早く大人になりますわ！」

そう言つて、峯慶に抱き付いて来る。

「ですから、待っていて下さいましね、峯慶様！ 三年歳が違うくらい、何だと言うのです！ わたくし、早く大人らしくなりますから、見ていて下さいませ！」

そう言つて、目をきらきらさせる姿は、とっても――可愛い。

「え、ええ……そう、ですわ……」

（ああ、早く大人になりたい……。三年どころではなく、十年以上も先だな、ようやく結婚できるのは……）

何にも知らない、けれども大変可愛らしい十歳の少女を前に、峯慶は切実な溜息をついた。

（終）

―双子のお姫様―（前書き）

話の中に、いじめの表現や差別的な発言が出て来ます。
苦手な方はご注意ください。

―双子のお姫様―

「あれ……？ ふたばに……わかば、よね？」

少女が目を瞬いて言うと、その正面に立つ瓜二つの双子は、気ま
ずそうに顔を背けた。

「なんで……いるの？」

「えっと……」

「その……」

「ねえ、なんで？ わたし、なんにもきいてなかったわ」

三人の幼い子供の間に、気まずい沈黙が流れた。

「あゝ、いたいた」

「本当。何でもこんな所にいるの？ 庶民のくせに」

「さっさと辞めちゃえばいいのに。ねえ？」

「そうそう。分不相応だって、理解してるんでしょ？」

くすくすと笑う声に、少女は顔を強張らせた。

「無視よ、双葉^{ふたば}、若葉^{わかば}。あんな雀のお喋り、気に掛けるだけ無駄だ
わ。時間の無駄、気持ちの無駄」

由梨亜^{ゆりあ}が、向こうのグループにも聞こえるくらいの声で言うと、
思った通りに、

「何ですってっ?!」

と、向こうの代表格の少女が食って掛かって来た。

「あら？ 何か聞こえるかしら？ 双葉」

「え、えーっと、聴こえないんじゃないかな？」

「やっぱりそうよね。私、疲れてるのかしら。だから幻聴が聞こえ
るのよね。そう思わない？ 若葉」

「え、えっと……うん」

「こっ……こちらを愚弄するのも好い加減になさい！ 愛仁^{あい}双葉^に！

愛仁若葉！」

「あゝ、煩い。ほら、次の授業、科学実験室でしょ？ 移動しないと」

「そうよ。ほら、雑音なんか気にしないで。ね？ 双葉、若葉」

「あ、……ありがと」

「ううん？ 何のこと？」

「それより、さっさと行かないと！」

「……うん、そうね」

背中の方から、凄まじい殺気が湧き立つのを感じるが、由梨亜は無視した。

——これが、この殺気立った日々が、由梨亜にとっての日常。

由梨亜は、小さく溜息をついた。

この『日常』が、いつから始まったのか、それはよく憶えていない。

けれど、初等部の入学式のこと、今でも憶えている。

双葉と若葉は、由梨亜の幼馴染だった。

だが、この時まで由梨亜は、二人が同じ学校に通うことになるということを知らなかったのだ。

前もって、クラスの名簿を渡されてはいたが——そこにあったのは、『愛仁』という名字。

由梨亜は、彼女の名字を知らなかったのではない。

彼女達に、名字がないと知っていたのだ。

だから、この『愛仁』という名字に驚いた。

「そう言えば……どうして、皇太子殿下と皇太子妃殿下は、貴女達の名字を『愛仁』にしたのかしら？」

放課後、双葉や若葉と共に由梨亜の屋敷で遊びながら、由梨亜は首を傾げた。

「ああ……それ？ 確か、私の皇族としての名前って愛宮^{いとのみや}双葉で、

若葉は仁宮若葉なのね？^{よしのみや} それで、その愛と仁をとって、愛仁にしたらいいわ。正直、皇族ってばれなければ何でも良かったらしいから、そういう風に作っても大丈夫だったみたい」

「でも、私……それ、正直法律違反に思えてならないのよねえ。だって、それ……えーっと、嘘をつくってことでしょ？」

若葉の言葉に、双葉は考え込んだ。

「ああ……何て言うんだったかしら？　嘘、嘘……詐欺？」

「どうなのかしらねえ……」

二人して考え込んでいると、由梨亜が恐る恐る訊ねた。

「でも……皇太子殿下には、双子の内親王がおられて、その称号が愛宮って言うのと仁宮って言うのは公開されてるのよね？　じゃあ、気付く人っているんじゃないかしら？」

「うーん、どうだろう……？」

「ま、気付いた所で、私達にはどうしようもないし」

そう言って人形を抱き上げる、能天気な双葉と若葉に、由梨亜は小さく溜息をついた。

けれども、同時に思う。

彼女達が、実は天皇の直系の孫——内親王であるということがばれれば、こんな下らないいじめは終わるのに、と。

くすくす、くすくす、と、密やかな笑いが聞こえる。

双葉は、強く唇を噛み締めながら、背筋を伸ばして歩いた。

この初等部に入学してから、ずっといじめと言うか、派閥の対立が続いていた。

けれども、この頃余計に酷くなってきた気がする。

確か、三年生の後半に入った頃だっただろうか。

まあ、その理由は分かっているのだ。

丁度その頃、この学校へ天皇の孫——^{まさのみやよしあき}賢宮義彰親王が入学するところが、正式に決定したのだ。

まあ、この学校は日本州で最も歴史の古い学校の一つであり、代々皇族はこの学校に通って来ているから、義彰がこの学校に入るということは自然なことだ。

けれど、そのことが起爆剤となって、一部の血統至尊主義者達による『庶民排斥運動』が活発になっていくのだ。

事実、元からこの学校に通っていた富豪の子息達は、彼らの圧力に耐え切れずにもう既に何人も辞めている。

そして、彼らのターゲットは、勿論双葉と若葉にも向かっていた。彼らにとって、富豪がこの学校にいることすら赦せないのだ。

ましてや、庶民だと思われる二人が、退学もせずに居座っている。

そのことが、決して赦せないのだろう。

本当の、彼女達の身分を知りもせずに。

双葉は深い溜息をついた。

「なあに？　こんな所で溜息をつけるなんて、庶民はいいわねえ、お気楽で。あたくし達貴族とは違って、本当にのろまなんだから。そうでしょう？　皆さん」

歪んだ笑みを浮かべる少女――中流貴族出身の並樹咲なみきさきに、双葉は思わず顔をしかめた。

「そうそう」

「ほんっと、庶民は気楽そうでいいわあ」

「まあ、気楽って言うか鈍感かしらねえ？」

「まあ、ふふ……」

双葉は再度溜息をついた。

こいつらに捕まると、本当に厄介なのだ。

ここに由梨亜がいなくて良かったと、双葉は内心考える。

由梨亜は、何と言うか、どこか自分達の保護者のように振る舞っていて、こんな倉庫の裏なんて古典的な呼び出しを受けているのを見掛けたら、激怒するに決まっているのだ。

そう思って溜息をついたのだが、向こうはそれを知らない為、益

々いきり立つ。

ぎゃあぎゃああと喚かれて、最早何を言われているのかも聞こえない程だ。

双葉は三度溜息をつく、顔を上げて彼女達を見据えた。

「さつきから聞いてたら、何なの？ 煩過ぎて、何言ってるのか分からないわ。しかも、おんなじことの繰り返し。こんなので、私が怯むとも思ってるの？ 本当に馬鹿馬鹿しいわ」

「何ですってっ?!」

向こうは眉を逆立てるが、

「だって、そうでしょ？ 庶民庶民出て行け出て行け、その繰り返し。お猿さんでも言えるわよ？ やっぱ、馬鹿の相手は疲れるわねえ。こうやって一々説明しなきゃ、私が何を言っているのか理解してもらえないんだから」

「こ、こちらを馬鹿にするのも好い加減にしなさいよね！ 第一、天皇陛下のお孫様が通うような学校に庶民がいるなんて、虫唾が走るのよ！ あんたみたいな穢れた人間と同じ息を、賢宮様に吸わせるつもりなのっ?!」

「はっ？ 人間が穢れるとか、そもそも聞いたことないわ。それに大変ねえ。義彰親王も。貴女のその理屈で言くと、庶民と同じ空気を吸ったらいけないんでしょう？ だったら、宮内省の人間は全て貴族出身、掃除や配膳担当の人も全員貴族じゃなきゃ駄目じゃない。ああ、それに、公務にも出れないわよ？ だって、庶民と一度も接触しない、同じ空間にいないなんて厳しい条件で、移動なんてできる訳ないじゃない？ それに、大統領ともお会いできないわよね？ だって今の大統領って、庶民出だもの」

双葉がまくしたてると、向こうは彼女の勢いに押され、目を白黒させる。

双葉は、もう一押しとばかりに言葉を重ねる。

「ああ、そうそう、忘れる所だったわ。義彰親王がもし公務に出たとしても、その公務先に庶民が勤めているとしたら、その公務はで

きないってことになるわよね？ 貴女達の理屈だと。これじゃあ、皇族の公務は全て果たされないじゃないの。何てったって、皇族にはノブレス・オブリージュがあるんですものね。社会的弱者に対する配慮こそが、皇族の公務の内容の一つよ？ それができない皇族なんて、諸州の王族や諸外国の王族に非難されるだけだわ」

薄く笑みを履いて、双葉は彼女達を見渡す。

言いたいことがあるのなら、こちらが高く買い付けてやる。

精々倍返しにして叩き売ろうではないか。

「んな……賢宮様を、『義彰親王』と、呼び捨てにするなんて……！！ お前はそれでも日本州の人間なのっ？！」

「そうよ！ 天皇家に対する尊敬の意がないなんて、この人非人！」

あまりの剣幕に、双葉は思わずどん引きしてしまった。

「は？ 何それ？ そんな、千年前じゃあるまいし……天皇家を神格化していたのは、そんなに昔の話なのよ？ しかも、人非人って……。過剰反応し過ぎよ」

双葉は、考え込んだ。

もし、自分が内親王という身分を明らかにして、この学校に通っていたら——この人達は、自分をそれこそ神格化して、崇敬っていただろう。

その様子が頭に浮かんで、双葉は身震いした。

天皇家の人間として、双葉は知っている。

いくら皇族でも、ただの人間なのだ。

そうやって、血筋だけに尊崇の念を抱かれたって嬉しくないし、神の一族として絶対視されても鬱陶しいだけだ。

それに、研究と公務をこなせば大して働かなくても生きてはいけるが、その分テロなどの過激派の対象になりやすいという危険性を孕む。

そんなことを知りもせずに、ただ鼻息を荒くする彼女達は、双葉からしてみれば不気味の一言に尽きた。

本当に、頭痛がして来る。

庶民だどこまで神格化するの珍しいが、貴族階級だと、こういった奴らは偶にいるのだ。

双葉がまたもや溜息を吐いた時、後ろから足音がした。ぱっと振り返ると、そこには六歳くらいの男の子がいた。その男の子を見て、咲達は飛び上がって周りに群がる。

「まあ、賢宮様！」

「義彰親王殿下、どうしてここに？」

「ここは暗いですから、表の明るい所に参りましょう？」

「あら、ちよっと、押さないですよ」

「そっちこそ、押さないですよ！ ほら、賢宮様、参りますよ！」

突然年上の少女達に群がられ、引っ張られて、義彰は泣きそうに顔を歪めた。

だが、それを彼女達は都合のいいように解釈する。

「まあ！ ここに庶民がいることが、そこまで耐えられぬのですか！」

「ご安心下さい、賢宮様。こ奴は、明日にでも——いいえ、今日にでも追い出しますから！」

あまりにも彼女達の行き過ぎた態度に、双葉の額に青筋が立つ。

「ちよっと！ やめなさいよ！」

双葉は少女を掻き分け、義彰の前に立ち塞がる。

「あんた達、この子が怯えてるのが見えない訳っ？！ 自分より年下の子を怯えさせといて、何が貴族よ！ どこが尊敬してるよっ！ ただ、自分達の都合のいいようにやってるだけじゃないっ！」

その言葉に、彼女達が絶句する。

義彰は、最初はぼかんと口を開けていたが、やがてにつこりと笑って、双葉に抱き付いた。

「ふたばあねうえっ！」

という、何とも嬉しそうな言葉と共に。

双葉は、思わず空を見上げた。

（まあ、義彰は六歳だし、黙ってろってのも無理か……）

しかも、怖い思いをした後なのだ。

大好きな姉がいたら、嬉しくなるに決まっている。

双葉は、咲達を見渡した。

彼女達は、義彰の『姉上』発言に固まっている。

双葉は溜息をついて、もう今日だけで何度溜息をついたのだろうと思う。

けれど、考えるだけ無駄だと気付き、義彰を抱きかかえた。

「あねうえー！」

義彰は、嬉しそうに双葉に抱き付き、頬を擦り寄せる。

どうやら義彰は、折角同じ学校に通っているのに、接触することを許してもらえず、淋しい思いをしていたらしい。

ふくふくとした頬は、子供らしくて柔らかく、それだけで双葉は癒された。

ぎゅっと抱き締めると、益々義彰はしがみ付いて来る。

これはしばらく離れそうにないなと思いながら、双葉は咲達を一瞥し、その場を後にした。

これで、双葉と若葉が内親王だということは、明日にでも学校中に広まるだろう。

意外と、ばれるのは早かったと思う。

けれど、義彰のことを考えるのならば、これが良かったのだろう。少なくとも、こんなに嬉しそうにする義彰を見るのは、義彰が入学して以来初めてだった。

「それで？ 結局ばれちゃったって訳？」

呆れたように由梨亜が言うと、双葉はやけにご機嫌に頷いた。

「ええ。そうよ。それにしても、噂の伝播力って凄いわね。だって、私が咲に呼び出されたのって、昨日の放課後よ？ しかも、まだ午前中なのに、もうみんなに知れ渡っちゃってるんだもの」

確かに、双葉と若葉が廊下を歩くと、まず間違いなく飛び退かれ

る。

しかしその大半は、咲達に加担していたか、咲のいじめを見て見ぬふりしていた者達であり、その反応も、仕方がないと言えば仕方がないのだろうが。

「でも、そんなことより、これで学校でも義彰と一緒にいられるっていうのが、私は嬉しいわ」

にこにこしながら言う若葉に、由梨亜は呆れた目を向ける。

「本当に貴女達、弟好きよねえ……」

「あら、そんなの当たり前じゃない」

「そうよ。あんなに柔らかくって懷いてくれるのって、義彰か子犬くらいなものよ」

真剣に力説する双葉に、由梨亜は遠い目をした。

「……………うん、双葉と若葉の弟についての認識が凄くよく分かったわ。子犬レベルなのね」

「あら、失礼な」

「でも、確かに由梨亜の言う通りかも。あんなに可愛い生き物って、義彰以外だと、それこそ動物の赤ちゃんくらいしか思い付かないわねえ、双葉？」

「そうよね、若葉」

にこにこ笑いながら進む双子に、その双子を見て飛び退く上級生に下級生――

何とも居心地の悪い思いをしながら、由梨亜は二人を追い掛けた。

チャイムが鳴って先生が教室を出て行くと、若葉は立ち上がった。今日は、滅多に遊んでももらえない祖父と遊べる日なのだ。

それも、祖母や父や母なども含めた、家族みんなで。

若葉が席を立つと、周りはぎょっとして身を引く。

その様子を一瞥だけすると、若葉は無言で教室を立ち去った。

このクラスは、咲がない代わりに由梨亜も双葉もない。

それに、このクラス担任は話が非常に長く、その間にもうとつくに由梨亜と双葉は教室を後にしている。

だから、いつも昇降口の辺りで待ち合わせをしているのだ。

若葉が廊下を歩いていると、後ろからぱたぱたと走る足音がする。邪魔にならないように、心持ち端に寄ると、何故か若葉の目の前で、彼女が立ち止まった。

「あの……」

「何？」

若葉は、ふと眉根を寄せる。

彼女は、確か同じ学年の子で、下級貴族の出身だったはずだ。

「その、これを……」

彼女が震える手で渡して来たのは、一枚の紙だった。

若葉がそれを受け取ると、彼女は一目散に駆け出してしまう。

取り残された形になった若葉は、しばし啞然としていたが、気を取り直して紙を見る。

そこには、少し用事ができてプールに行っているから、そちらに来てほしいという由梨亜からのメッセージがあった。

それを見て、若葉は首を傾げる。

確かに、今彼女達の学年はプールの学習をしているし、由梨亜に先生が用事を言い付けたのだと考えると納得できる。

けれど、それなら双葉にでも伝言を頼めばいい話だ。

何も、親しくも何ともない女子に、手紙を書いて伝えるようなことではない。

若葉はそこに、違和感を覚えた。

（もしかしたら、咲の罠……？）

けれど、昨日のうちに、若葉の身分はばれている。

もう、自分が内親王だとばれた以上、彼女はこちらに手出しをして来ないはずだ。

彼女こそ、血統主義——選民主義者の最たる者。

そんな咲が、内親王である自分に手出しができるとは、到底思え

なかった。

だから若葉は、素直にプールへと向かうことにした。それが、どんな結果をもたらすのかも、分からずに。

「あれ……？ 由梨亜……？ 双葉？ いないの？」

若葉の声が、天井の高いプールに響いて、反響する。ぐるりと見回すが、由梨亜の姿も双葉の姿もない。

若葉は、首を傾げた。

倉庫の方にいたとしても、若葉の声が聞こえない訳がないだろう。これは、もしかしたら誰かに謀られたのかも知れない。

だが、その目的は何だろうか。

若葉が考え込んでいると、背後で足音がした。

もしかしたら由梨亜が来たのかも、と思って若葉は振り返ったが、その人物を目にした途端、若葉は険しい顔になった。

「やっぱり、あの手紙は、貴女が送って来たの？ 咲」

けれど、彼女は無言で目をぎらつかせるだけで、若葉の問いに答えない。

若葉が訝しげに眉を寄せた途端、

「あんたが……あんたが、皇族じゃなきゃっ！」

意味の分からない言葉に、若葉の動きが止まる。

「ああああああああっ！！」

人間とも思えない、凄まじい絶叫。

それと共に、若葉は息ができなくなった。

必死にもがくと、一瞬だけ呼吸ができる。

けれど、すぐにまた酸素が奪われた。

口の中に、鼻の中に、何かが流れ込んでくる。

咳き込みながら、本能でもがき、必死に空気を身体に取り入れようとする。

その動きで、若葉は、ようやく自分が溺れているということに気

が付いた。

ここは、海ではなくプールだ。

けれど、必死に足を伸ばしても、底に足が付かない。

それで、若葉は悟った。

ここは、水深が深い、シンクロ用のプールなのだ。

このプールは、幼稚舎から大学まで共有で使っているので、こんな所もある。

それを忘れていた自分を自嘲しながら、若葉は必死にもがき続けた。

自分は、泳ぎが下手だから、せめて、誰か、人が来るまでは――。

「遅いわねえ、若葉……」

由梨亜が呟くと、双葉も顔をしかめて頷いた。

「うん……。若葉、今週は掃除ないでしょ？　なのに、もう同じクラスの人が出て来てるし……」

その時、双葉の視界におどとした少女が映り、双葉は眉を寄せた。

彼女は、何故か双葉を見付けると、ぎくりと身体を強張らせたのだ。

その反応は、今日一日ずっと受け続けた反応だから、別にいい。

問題は、彼女は自分達をいじめる側でも、その取り巻きでも、無視する側でもないということだ。

彼女は若葉と同じクラスになったことはないが、双葉と同じクラスになったことはある。

その時、彼女は咲達に怯えながらも、隠された物の隠し場所を教えてくれたり、こっそりと庇ってくれたりしたのだ。

だから、今更双葉の姿に怯えるというのは、可笑しい。

「ねえ、逢野^{おうの}さん？」

双葉が声を掛けた途端、彼女は背を向けて駆け出す。

それを、明らかに怪しいと思ったのか、足の速い由梨亜が駆け寄って腕を掴んだ。

「ちょっと、逢野さん？ 一体どうしたの？」

けれど、彼女はがたと震えて答えない。

「逢野さん。貴女……もしかして、若葉に何かしたの？」

双葉が低い声音で問うと、彼女はヒツと言ってしゃがみ込んだ。

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい……！ わ、私、怖くて、並樹さんに、逆らえなくて、だから……！」

その様子を見て、双葉は益々顔を険しくした。

「言い訳はいいから、若葉はっ?!」

「プ、プール……プール、に……」

「分かったわ。ありがとう」

双葉は、由梨亜を振り返った。

「由梨亜！ 私はプールに行くから、由梨亜は先生呼んで！ 私のことを知らなかった先生も多いだろうし、由梨亜が呼んだ方が、絶対確実だわ！」

「え、でも、どうして……?」

由梨亜が目を瞬くと、双葉は唇を噛み締めて言った。

「……嫌な、予感がするの。何もなければ、それでいいわ。でも、万が一でも、何かがあったら……」

「……うん、分かった。双葉は、早く行ってあげて。私も、早く先生を呼んで行くから」

由梨亜の顔は、固く強張っていた。

恐らく、双葉の顔も、それ以上に強張っているのだろう。

（並樹咲、あいつっ——!）

もう、終わったと思っていた。

あいつは、皇族に対する畏敬の念と、行き過ぎる程の選民主義者だったから、双葉と若葉が内親王だと分かれば、もう手出しができないと、信じ込んでいた。

なのに、こんなことになるなんて——。

双葉は、きつく唇を噛み締める。
舌に、鉄の味が滲みた。

双葉がプールに着くと、プールサイドに仁王立ちしている咲の姿が見えた。

彼女の視線の先を辿ると、水面が異様に乱れている。

そこに双子の妹の姿を認め、双葉の頭にかっと血が昇った。

「並樹咲！ あんたって奴は、どこまでっ——！」

言葉が、激情によって続かない。

そんなことをしている場合ではないとは分かっていたが、双葉は咲に詰め寄り、力一杯頬を殴った。

途端に、手が焼け付くような痛みに襲われる。

生まれて初めてこんなことをしたから、むしろ双葉の一撃で吹っ飛ばされた咲に驚き、その軟弱さにも拘らず若葉をこんな目に遭わせたことに、激しい怒りを覚える。

けれど、双葉は咲を睨むことで残りの激情を押さえると、溺れている若葉に向かって手を伸ばす。

「若葉っ！」

その声に気付き、若葉は手を伸ばす。

けれど、あと一メートル、手が届かない。

双葉は唇を噛んだ。

何か、何か、何かっ——！

「双葉！ 若葉っ！」

その時、由梨亜が教師を連れて駆け込んで来た。

若葉が溺れているのを見て、由梨亜は棒状の一メートルはある浮き具を取り、若葉に向かって投げる。

若葉は何とかそれに捕まり、それを腕を伸ばした由梨亜が引き寄せた。

何とか水の中から引き揚げられた若葉は、いくらか水を飲んだの

か、プールの水温が冷た過ぎたのか、やたらと咳き込んでいるし、顔色も蒼褪めている。

「先生。すぐに若葉を病院に連れて行って下さい」

「わ、私が、ですかっ?!」

その言葉に、双葉は苛ついて教師を睨む。

「そうよ! もし若葉に何かあったらどうするつもりなのっ?!」

一義的な責任は並樹咲にあるけど、監督責任は教師にあるでしょう?!

分かったら、さっさと連れて行きなさい!」

双葉の怒鳴り声に、その教師は身体を震わせると、若葉を何とか抱きあげてプールを出て行った。

その後を、由梨亜も追って行く。

彼女が付いて行くのなら安心だと思って、双葉は咲に向き直った。咲は開き直ったのか、ふてぶてしい顔でこちらを睨み上げる。

「並樹咲。あんた、どうしてこんなことを仕出かしたの?」

双葉が怒りを押し殺して訊ねると、咲は図々しいくらいの笑みを浮かべた。

「はっ。あんた達が、皇族だなんて、日本も落ちたものね。しかも、皇族であることを隠すなんて! 庶民にしか見えない皇族だなんて、あたくしは皇族とは認めないわっ!」

「何を言うかと思ったら……何、それ? 下らな過ぎて、逆に笑えないわ」

殺し切れない怒りに、双葉の声が震える。

「第一、あんた血統至上主義者でしょ? だったら、皇族の称号や

宮家の号も知ってるはずよね。そして、現在の天皇の皇太子である

てるのみよしおき

晃宮義興には双子の内親王がいて、その二人の名前は公開されてい

ないけれど、称号は公開されているってことは知ってるでしょ?」

「……それが、どうしたって言うのよ」

憎々しげに呟く彼女に、双葉は呆れた。

「ここまで言っても分からないの? 本当に馬鹿だったのね、あん

た。……私の称号は、『愛』と書いて愛宮。若葉の称号は、『仁』と書いて仁宮。この二つを合わせたら、『愛仁』になるでしょ？……ほんと、馬鹿馬鹿しいわ。ここまで言わないと分かんないなんて。こんな奴に、若葉は殺され掛けたの？」

その言葉に、咲は弾かれたように立ち上がった。

「ちよっと、待ちなさいよ！ 殺すなんて、そんな……！」

必死に縋り付いて来る手を振り払うと、双葉は冷たい目で咲を見下ろした。

「事実でしょ？ どんな事情があったのかは若葉に聞かないと分からないけど、あんたが若葉を殺し掛けたのは事実。それ以外に何も無いわ」

そう言うのと、双葉は咲を振り払ってプールを出て行った。

早く帰って、両親にこのことを言わなければならぬ。

あの教師の怯えた様子からすると、由梨亜が気を回さない限り、家に連絡は行かないだろうから。

明るい日差しに照らされているからなのか、若葉の顔色は大分良かった。

「良かった。元気そうね、若葉」

その声に振り返った若葉は、由梨亜に苦笑してみせる。

「そうよ。第一、お父様達は過保護なのよ。一週間も休め、なんて……」

「そんなことないわよ。あんなことがあって、平気で娘を送り出せる親がいると思う？」

その言葉に、若葉はくすくすと笑う。

けれど、ふと笑いやむと、真剣な顔になって由梨亜に向き直った。

「ねえ、由梨亜。咲って、結局どうなったの？」

その言葉に、由梨亜は少し顔を強張らせた。

「……取り敢えず、学校には来てないわ。私達の通ってる学校は、

私立だし……多分、退学処分は免れないでしょうね。——それに、並樹家の他の人達も、東京にはいられないだろうって……お父様が、仰っていたわ」

「そう……」

そう言つて顔を俯かせる若葉に、由梨亜は慌てて言う。

「ちよつと若葉！ 何落ち込んでるのよ！ 咲のあれは、自業自得よ。それに、若葉が無事で良かったわ。それが第一よ。それに、咲はまだ四年生だし、義務教育の途中よ。放り出されることはないわ。仮に並樹家の事業が全て破綻しても、最低限の生活は保障されるもの」

「そう……よね、それは、分かっているけど……」

それでも目が彷徨っているのは、若葉が優し過ぎるせいだろう。

「もう、何言ってるのよ、若葉！ 若葉はもっと咲を憎んでいいんだからね！」

お茶を持って来た双葉は、一体いつから話を聞いていたのか、突如会話に割り込んで来た。

「もう、双葉ったら……」

そう言いながらも、若葉は苦笑している。

どうやら、気分を持ち直したらしい。

その様子を見ながら、由梨亜はあることを告げるかどうか迷う。けれど、いつかは言わなければならぬことだから、覚悟を決めた。

「双葉、若葉」

「何？」

「どうしたの？」

「私……来年、転校することになったわ」

由梨亜の言葉に、双葉と若葉は凍り付いた。

「え……どういう、こと？」

「そんな、だって、何で……？」

由梨亜は俯きながら言った。

「お父様の事業で、力を入れる部門を変えるらしいのね？　それで、その本拠地と言うか、基盤となる所が、東京から移るの。それで、私もそちに引っ越さなければならぬの」

由梨亜はそう言うのと、小さく苦笑した。

「これが決まったのは、去年だったけれど、ほら、咲のこととか、色々あったじゃない？　それで、言い出せなくて……。来年のいつ転校するのかはまだ分からないけど、でも、来年中に引っ越すことは間違いないから……」

そう言うって由梨亜が苦笑すると、途端に二人は顔を曇らせた。

「でも、由梨亜……」

だが、その時、

「わかばあねうえ〜！」

そう言うって、義彰が駆け込んで来た。

「わっ。ちよっと、義彰！　重いわよ！」

若葉がしっかりと抱えながらも言うのと、義彰は頬を膨らませた。

「あねうえ〜……」

「ああ、分かった。分かったから。ほら、義彰！　こちよこちよこちよ〜」

そう言うって若葉が義彰をくすぐると、義彰はきやあきやあと歓声を上げる。

「ふふ、可愛い！　私、弟妹がいないから、ちよっと羨ましいな……」

由梨亜が唇を尖らせて言うのと、双葉はにっこりと笑って、若葉の膝の上に座っていた義彰を抱き上げた。

「ふたばあねうえ？」

きよとんと目を瞬く様子が、また可愛い。

双葉に膝の上に乗せられると、由梨亜は思わずぎゅっと抱き締めた。

確かに、小さい子供はとても可愛い。

「おねえちゃん、だあれ？」

もぞもぞと動きながら義彰に訊ねられて、由梨亜はにっこり笑って答えた。

「私是由梨亜よ。本条由梨亜。^{ほんしょう}宜しくね？　ねえ、貴方、お名前は？」

「ぼくは、まさのみやよしあきだよ！」

自分の名前を名乗る様子は、とても張り切っている。その様子が可笑しくて、由梨亜はくすくすと笑った。

「ゆりあおねえちゃん？　どうかしたの？」

「ううん、何でもないわ」

由梨亜はそう言うと、そっと義彰を床に下ろした。

途端に、もうこの部屋にいるのが飽きたのか、部屋の外に駆け出して行く。

遠くの方で、微かに

「ははうえー！」

という声がして、本当に子供っぽかったので、由梨亜は思わず吹き出した。

「ちょっと、由梨亜？　どうしたの？」

「う、ううん……だって、あの頃の双葉と若葉、あんなに子供じゃなかったから……。末っ子って、本当に甘やかされて、伸び伸びと育ってるんだなあって思ったのと、姉弟の落差が激しいなあって思ったのと……」

「何ですってえ！」

双葉に押し掛かれて、由梨亜は声を上げた。

「ちよっとっ！　重いってば！　それに……」

「それに？」

由梨亜は、ちらっと双葉と若葉を見る。

「あんなにちっちゃいんだったら、すぐに私のこと、忘れちゃうんだろうなあって思って、ちよっと寂しかっただけ。来年また会っても、まだ初等部の二年でしょ？　私だって、引越したらそうそうこっちは来れないだろうし……」

由梨亜は少し躊躇った後、小さく言った。

「ねえ、双葉、若葉……。私のこと、忘れないよね？」

その言葉に、二人は呆気にとられた顔をした後——思いつ切り、首を絞め上げられた。

「ちよつと由梨亜！ 私達、もう四年生なんだよっ？！ そんなに簡単に、親友を忘れる訳ないじゃない！」

「そうよ！ 見くびらないでよね！ 本当に！ そこまで言うんだったら、由梨亜が引越した後、不意打ちで訪ねて行って見せるから！ 覚悟しといてよね！ 絶対に、それまで由梨亜はこっちに來たら駄目なんだから！」

双葉が断言したのに、由梨亜は思わず目を白黒させる。

「はあっ？！ 仮にも内親王が、そうほいほいと自由に外出できる訳ないでしょっ？！ 警備とか考えたら、絶対に無理よ！」

「何言ってるのよ！ そこをどうにかするって言ってるの！ とにかく！ 何年掛かるか分からないけど、絶対にこっちから由梨亜の所に行くんだからね！ それまではこっちに來ちゃ駄目なんだから！」

熱く語る双葉に、若葉が醒めた口調で言う。

「まだ引越してもいない時点で、そんな話する？」

「はあっ？！ 何よ、まだ引越してないからするんじゃない！」

「はあ……知ってる？ 双葉。そういうの、取らぬ狸の皮算用って言うんだよ？ 行けるかどうか分からないのに、絶対にこっち來ちゃ駄目って——」

「あゝ、煩い、若葉！ インテリぶってるんじゃないわよ！」

双葉が若葉に掴み掛かり、若葉はそのままベッドの上に倒れる。

「ああ、もう！ 若葉は安静にしてなきゃ駄目なんですよ！」

そう言つて由梨亜が二人を引き剥がそうとすると、何故か由梨亜までベッドの上に引っ張り上げられた。

「もう……二人ともっ！ そこに直りなさいっ！」

由梨亜が眉を吊り上げると、双葉も若葉もくすくすと笑う。

由梨亜も、最初は不貞腐れていたが、二人に触発されて笑い出す。部屋には、楽しげな少女の笑い声が満ちていた。

（終）

―貴族と庶民―

「あゝ、やだやだ……。ほんとやだ。ねえ、由梨亜^{ゆりあ}。やっぱあたし帰る――」

「そんなの駄目に決まってるでしょう？ 千紗^{ちさ}、貴女受け入れたわよね？ それで、あと家まで約五分って距離まで近付いているわよね？ それなのに、一体何を躊躇^{ちゅうちう}ってるの？」

「そうだぞ、千紗。往生^{せいじやう}際が悪い。……と言うより、そもそも、どうして俺^{おれ}まで巻き込んだ？ 由梨亜」

眞祥^{まひさ}が白けた目で由梨亜を睨^{にら}むと、由梨亜はぺろりと舌を出した。「えゝ、だって、私一人だったら、お父様を説得^{せつとく}し切れる自信がないんですもの」

そう言っつてふうと溜息をつく由梨亜に、千紗が顔をしかめた。

「ねえ、そういう時だけお嬢様ぶるのやめてくれる？ 悪寒^{あくかん}がする」その言葉に、由梨亜の眉が吊り上がるが、咳払いをしてそれを誤魔化^{ごまか}した。

「む、しょうがないじゃないの。だって私、正真正銘^{ほんじやうめい}本条家のお嬢様^{ぢやうさま}ですもの」

「それが分かってるから言ってるの。だって由梨亜の性格と違って、どっちかって言うとお嬢様^{ぢやうさま}って言うよりは庶民に近いでしょ？ まあ、服装はお嬢様^{ぢやうさま}だけどさ……」

千紗はそう言っつて、ちらりと由梨亜の服装を見下ろした後、深い溜息をついた。

その様子に、由梨亜は頬を赤くする。

「しょ、しょうがないじゃない！ 私、あんまり服を自分で選べないのよ！ 全部、お父様が勝手に買って来るんだもの！」

「うわゝ、出た、お嬢様発言。はあゝ、全く、こんなのが地球連邦随一の貴族の、本条家のお嬢様だなんて……世も末だなあ。眞祥もそう思わない？」

「何よ！ 世も末って！ 言い過ぎじゃないのっ？ 眞祥もそう思うわよねっ？」

若干殺気立った少女二人に、睨み付けられるような勢いで見詰められて、眞祥は視線を泳がせた後、

「んまあ……コメントは控えさせて頂く」

実に、賢明な発言だ。

けれど、勿論二人はその言葉に納得しない。

特に千紗は、思い切り頬を膨らませて言った。

「えー、ちよつと眞祥！ 何言ってるのっ？ 眞祥はあたしの幼馴染みでしょうが！」

「ん？ そうだったか？ 俺の基準では、お前は幼馴染みに該当しない」

すげなく返した眞祥に、千紗はぶすくれると――にやりと笑った。

「そうだったねえ？ 確かに、あんたとあたしは、幼馴染みって言うよりは、親戚だもんねえ？ 眞祥叔父さん？」

ぴしぴし、と眞祥の額に青筋が浮かぶ。

「うん、そうだった。眞祥叔父さんの言う通り！ 確かにあたしは叔父さんの姪だから、紛れもなく親戚だもんね！ ごめんね、叔父さん！」

「……てんめえ……！」

眞祥が、怒りに拳を震わせて千紗に詰め寄ると、

「あ、ごめんなさいね、眞祥。もううちの前だわ。だから、もう言い争いはお終いね？」

由梨亜の絶妙なタイミングでの言葉に、眞祥が頬をひくりと引き攣らせる。

「お前らなあ……」

千紗は意図的に眞祥を無視すると、屋敷を見上げてごくりと唾を飲み込んだ。

今まで、千紗が見たこともない程の大きさのそれは――明らかな、豪邸だった。

千紗は、思わず一瞬立ち竦む。

昨日は暗かったし、脇に車を着けたから、こんなに大きいとは思わなかったのだ。

けれど、さすがはここに住んでいるからか、それとも東京の家はもっと大きかったのか、由梨亜は躊躇いもせずに正門の前に立つ。

すると、門は自動的に開いた。

恐る恐るそこから中に入り、どんな仕組みになっているのかと門の脇を覗くと、人が二、三人程寝泊りできそうな大きさの小屋があって、どうやらそこから目視で門を開閉しているようだ。

由梨亜がそちらを向いてにっこりと笑うと、そこに詰めている男性はにっこりと笑い返して会釈した。

その一方で、千紗と眞祥には不審気な視線を向ける。

確かに、由梨亜はこちらに引っ越して来たばかりだし、家に招く程仲のいい友達がいるとは思えないので、ここに来た由梨亜の同級生は千紗と眞祥が初めてだろう。

もし彼が、由梨亜が東京にいた頃から門番をやっているのなら、それ以上に『何故庶民ごときがこんな所に来るのか』という意識もあるかも知れない。

千紗は、気付かれないように小さく溜息をついた。

これだから、貴族は嫌なのだ。

こちらを見下して、当然と思い込む。

そして、それに引き込まれた庶民も、また。

こんな差別社会がまかり通っているからこそ、父は、死んでしまったのだと――そう思うと、哀しくなった。

耀太ようたは、苛々と部屋の中を歩き回った。

こういう時、椅子に泰然と座っていた方がよいということは分かっている。

けれど、椅子に座っていても延々と貧乏揺すりをするだけだと思

い知ったので、それくらいならば、部屋の中を歩き回った方がましだと思ったのだ。

だが、今の自分の様子はまるで落ち着きのない虎や獅子のようだと思うと、何だか嫌になって来て、結局ソファ―に座ったり立ったりを繰り返した。

瑠璃るりの方は、そんな耀太の様子を見て、完璧に呆れ顔だ。

しかし、この夫に苦言を呈してもあまり変わらないと知っているからかどうか、何も言わない。

もしかしたら、ただ面倒臭いだけなのかも知れない。

耀太の苛々が頂点に達しようとした時、扉が開かれた。

「失礼致します。由梨亜様をお連れ致しました」

そう言って頭を下げる鈴南すずなが、どうしても由梨亜の隣にいる二人の名前を呼ばないのは、庶民がこの屋敷の表部分にいることを認めたくないからだろう。

耀太は、思わず苦笑した。

彼女は中級貴族の三女で、本条家の一人娘の一のお付きということこともあり、かなりプライドが高い。

そこら辺を庶民が歩いている分には構わないが、自分や敬愛する主人一家に親しくされるのが気に食わないのだろう。

耀太は、そもそも庶民とは別世界の人間だと認識しているので、鈴南程嫌悪はしていない。

ただ、こちらに関わって来るのを煩わしく思うだけだ。

けれど、その寛容さも限度がある。

娘が『夜帰り』して来るなんて、思いも寄らなかった。

まだ夕方程度なら許せるが、娘が帰って来たのは八時前だ。

その原因は――確実に、娘の傍にいる二人の庶民に間違いない。

耀太は、眦を陰しくした。

そして、そのまま三人の元に歩み寄る。

由梨亜は、耀太の威圧に少し怯えたような顔をする。

その表情に申し訳なく思ったが、それもこれもこいつらを追い出

す為だと思って、由梨亜の連れて来た二人に目を移すと――二人の方は、全く怯えていなかった。

少年の方は読めない微笑を浮かべ、少女の方は、全くふてぶてしいことに、どこか面白そうな表情で笑みを浮かべている。

全く堪えていないその様子に、耀太の怒りが益々募る。

「お前らか。由梨亜を誑かして、夜遅くまで家に帰らなかった元凶は！」

耀太は、わなわなと身体を震わせて二人を指差す。

「え？ 何のことでしょうか？」

そう言って小首を傾げる少年に、耀太の怒りは頂点に達する。

「貴様、そうやって誤魔化そうとっ――！」

けれど、その耀太に瑠璃が声を掛けた。

「まあ、取り敢えず座りませんか？ ねえ、貴方達も、こっちに来てくれないこと？ 由梨亜がお友達を連れて来るなんて、とても珍しいから」

そう言っただけで笑う瑠璃に、耀太は気が殺がれた。

「お前なあ……」

「まあ、いいじゃないの、貴方。ほら、由梨亜も。こっちにいらっしやい？」

言い方は柔らかいが、どうしても譲る様子がない瑠璃に――耀太は、思わず天を仰いだ。

瑠璃は由梨亜の母親だからと思って、ここにいることを許したのだが、それは間違いだったかも知れない。

事実、瑠璃の独特の調子に、耀太はいつも逆らうことができないのであった。

千紗は、正直な所飽きていた。

周囲の召し使い達が向けて来る視線と言い、由梨亜の父が上げた怒声と言い、全て思った通りだったのだ。

むしろ、ここまで想像した通りだと笑えて来る。

どうやらそれは眞祥も同じらしく、ちらりと見上げると、明らかに醒めた目で、それでも微笑を浮かべていた。

（多分この後、由梨亜と一緒にこの人を説得するってことになるんだよね？ でも、眞祥結構怒ってるって言うか、この人こてんぱんにしたそうにしてるって言うか……。まあ、眞祥に任せればいいや）千紗は呆気なく放り投げると、由梨亜の母親らしき人に声を掛けられたのを好機に、いそいそとソファに腰掛けた。

昨日訪れた並樹家のソファは、見た目には大変豪華な物であったが、そこに座った眞祥いわく、『座り心地はホームセンターの安物よりも悪かった』らしい。

けれど、さすがに本条家でそんなことはない。

見た目はシンプルだったが、よくよく見ると天然繊維でできていて、中に詰まっているクッションの弾力も丁度良かった。

横目でちらりと眞祥を窺うと、先程よりも穏やかな笑みを浮かべている。

どうやらこのソファは、彼のお気に召したらしい。

ふと前を見ると、にこにここと由梨亜の母に微笑まれた。

「初めまして。私は由梨亜の母で、瑠璃と言うの。貴方達のお名前を伺ってもいいかしら？」

その丁寧な様子は、彼女の隣で苛々と貧乏揺すりを始めた夫とは実に対照的で、好意が持てる。

「初めまして。あたし、彩音千紗です」

「初めまして。僕は東風上眞祥と申します。由梨亜さんのお母様が、こんなにお綺麗だとは思いますが、よりませんでした。由梨亜さんは、お母様に似たのですね。どちらも大変な美人です」

口から砂を吐きたくなる甘い言葉に、千紗は呆れた。

彼は、普通の美貌だったら適当な挨拶で終わるが、綺麗な人だったら、こうやって必ず甘い言葉を付け加えるのだ。

しかも、それが許される程の顔を持っているのが、余計に腹立た

しい。

「あら？ 若い子にそんなことを言われるなんて、随分と久し振りだわ。だって私、貴方のお母様くらいの年齢でしょう？」

「いいえ？ 僕の母は遅くに僕を産んだので、もう五十代も後半になりますし」

「まあ、そうなの？ 私はまだ三十五だから、貴方の御母様とは、下手をしたら親子程離れているわねえ」

「ええ、そうでしょうね。僕の姉も、確か今年で三十歳になりますから」

「え？ じゃあ、姉弟なのに二十歳も離れているの？」

「はい。凄い差ですよ」

「まあ……」

……実に、和んでいる。

由梨亜からの視線を感じ、千紗は若干顔を引き攣らせた。

今の視線は、明らかにこの二人をどうにかしろという物だろう。はっきり言おう。

……無理だ。

由梨亜もそれを分かっているから、何も言わない。

けれど、それが分からない人間がいた。

「――お前ら！ 何を喋っているのだ！ ……そうか。お前はそうやって、由梨亜も誑かしたんだっ？！」

「何を馬鹿なことを……」

さすがに眞祥も、瑠璃から視線を外して呆れ顔で呟いた。

あまりの言葉に、由梨亜は溜息をついた。

千紗も、あまりのことに口が塞がらない。

そして、眞祥に向いていた耀太の矛先は、今度は千紗に向かった。「お前も、共犯なのだっ？！ さあ、立て！ この街から追い出してやる！」

「はい？」

千紗が目を点にしていると、その様子に更に苛立ったのか、いき

なり腕を引つ張られた。

「はっ?! ちょっと何すんのよ!」

「ここから追い出すに決まっているだろう! 鈴南! こいつの家を知っていると、前に言っていたなっ? すぐに警察へ通報しろっ!」

その言葉に、啞然としていた鈴南は飛び上がった。

「あ、えっと……はいっ!」

どうやら、彼女にとって主人の命令は絶対のようだ。

千紗は腕を掴まれたまま、大袈裟に溜息をついた。

そして、冷たい目でこちらを窺っている眞祥に目配せをする。

それで千紗が何を求めているのかが分かったのか、眞祥は立ち上がり、鈴南の前に立ち塞がった。

「な、何ですっ?!」

この部屋は、出入り口が一つしかない為、そこを塞げば出られない。

「すぐにそこを退きなさい! 私の邪魔をするつもりならば、容赦はしませんよっ?!」

肩を怒らせる鈴南に、眞祥がふっと笑った。

そして、十歳にしては長身の身体を活かし、鈴南の頬に触れる。

「えっ?!」

仰天して硬直する鈴南に、眞祥はにっこりと笑い掛ける。

「そんな顔をなさらないで下さい。折角のお美しい顔が台無しです」

「え? ちょっと……何を言っているんですかっ?」

「本当に、貴女程『明眸皓齒』という言葉がお似合いの方はいらっしゃいません」

「め、明眸皓齒って……言い過ぎでしょう? 私の目は普通ですし、齒が白いのも、召し使いとしての職業柄で……」

普通の小学生は分からないような言葉を使って褒められたせいで、相手が子供だということがどこかに飛んでしまったのか、鈴南は頬

を赤らめて恥じらう。

「ですから、その努力を惜しまない心根が美しいのですよ。分かっているやらない、自分に投資をしない嘆かわしい女性は、この世に数多いのですから」

そう言ってこちらをちらりと見る眞祥に、千紗の額に青筋が立つ。けれど、ここでも何か言っただけは台無しだ。

だから、何とか耐える。

「そう、その凛とした立ち姿も、主に忠実な真っ直ぐな気性も、清雅な雰囲気も、全て素晴らしい。それに、主に呼ばれるまでは己の存在を消し、慎ましく控えていたのも、実に女性らしく、世間一般の女性から抜きん出ている。理想の女性の鏡と言っても過言ではありません」

「ま、まあ……そんな……」

鈴南は、真っ赤に頬を染めた。

見た所、若く見積もっても二十代の後半にはなっているだろう。下手をすれば親子程離れているのに、それでも鈴南を墮とす眞祥の腕前は、ホストにでもなったら貢がれまくるであろう。

まあ、本人にそんな気は全くないのだが。

「本当に、あんな怖い顔は、貴女には全く似合いません。そうやって、笑顔でいて下さい。その方が世の為——いえ、僕の為になりまし、貴女の主達も、貴女が笑っていれば嬉しいでしょう。貴女は、ここに長年住み込んでいるのでしょうか？　ならば、家族も同然のはず。家族が笑っていれば、嬉しく思うのは道理。そうでしょう？」

「え、ええ……」

どうやら、一段落ついたらしい。

千紗が耀太を見ると、あんぐりと口が開いている。

どうやら、娘と同じ年の少年が、妻と歳の近い召し使いを口説き落としたことが信じられないようだ。

その隣では、瑠璃が口元に手を当てて笑いを噛み殺している。最後に由梨亜を見ると、どこか満足そうな顔をしていた。

由梨亜に微笑まれて、千紗も頷き返す。

それを受けて、由梨亜は父の目の前に立った。

「ゆ、由梨亜……」

掠れた声で耀太が呟くと、由梨亜は腰に手を当てて、しかつめらしく言った。

「いいですか？ お父様。誑かすって言うのは、ああいうの言うんです」

さすがに、耀太も反論できないようだった。

「鈴南！」

由梨亜に声を掛けられて、うっとりとし真祥を見詰めていた鈴南は、現実に取り戻されたようだ。

「あ、はい、お嬢様！」

既に、鈴南の視界に真祥はいない。

見事な忠義心と言っているだろう。

「鈴南、ちょっと下がってもらってもいいかしら？ あとは、こっちでやるから」

「は、はい……分かりました」

そう言って下がる鈴南に、真祥はただ苦笑するだけで見送った。

「真祥、やっぱあんたやばいわ。だって、多分二十歳くらい離れてるでしょ？ なのに堕とすなんて……」

千紗が嘆息すると、真祥はにやりと笑った。

「こういう所で働いている人って、中級貴族か下級貴族が多いだろう？ そういう所のご令嬢って、結構男に対して免疫ないし。あれくらいだったら訳ないさ」

千紗は、思わず顔をしかめた。

「あゝ、出たあ、もてる奴のむかつく発言」

「はっ。もてない奴が僻んでんじゃねえよ」

「はい？ 僻んでなんかないし。そもそもあんたみたいな奴がいるから、普通の人間が肩身狭い思いすんのに」

「ん？ それこそ本人の勝手だろう」

「はあ？ 自分じゃあどうしようもないことだってあるでしょ？」

「だから、それを努力で何とかする人間と、生まれ付き運のいい人間だけが成功者になるんだよ」

千紗は、論破できない眞祥に唇を引き結ぶと、にやりと笑った。

「あゝ、はいはい。あんたの言う通りだわ、叔父さん？」

「……………」

眞祥の口元が、ひくりと動く。

けれど、彼が口を開く前に耀太が言った。

「おい、お前。同い年の少年を『オジサン』呼ばわりとは、どういう教育を受けている！」

あまりの的外れの言葉に、千紗も眞祥も、思わずぽかんと口を開けてしまった。

瑠璃も、不思議そうに首を傾げている。

何も言えない二人に代わって、由梨亜が溜息をついて言った。

「あのね、お父様。この二人、正真正銘、叔父と姪なのよ」

「何……………」

さすがの耀太も、啞然として目を剥いている。

「だから、千紗にとって眞祥は、本当に『叔父さん』なのよ。さっき言ってた通り、眞祥のお母様は、眞祥を遅くに産んだの。そして、その眞祥のお姉様は、若くして千紗を産んだ訳。だから血の繋がりで見れば、眞祥は歴とした千紗の叔父様なのよ。たとえ同い年でもね」

「……………叔父と、姪…………」

驚いて言葉もない耀太とは対照的に、瑠璃はにこりと笑った。

「まあ、随分と珍しいのね。同い年なのに叔父と姪なんて」

「そう…………ですか？ 僕にとってそれは産まれた時からですから、あんまり珍しいという気はしませんね」

眞祥が首を傾げて言うと、瑠璃は更に笑みを深めた。

「私、もっと貴方達とお喋りしたいわ。いいわよね？ 由梨亜」
何故、そこで娘に了解を取る。

「あ、はい……いいです」

啞然としているうちに、由梨亜が答えてしまった。

「そう？　じゃあ由梨亜、お茶を持って来てもらっていいかしら？　全員分。鈴南は、あの状態だと使えないだろうし……そうね、^な茶を使っているから。確か、うちの召し使いの中で一番お茶を美味しく淹れられるのは、^{れい}苓奈だから」

「はい。分かりました」

そう言って出て行く由梨亜は、親の言うことに逆らわない、まさに良家の子女だ。

けれどこの場合、瑠璃に逆らうことによって得られるのは、かなり大きな精神的打撃である。

瑠璃はおっとりした外見なのに、無言の圧力と言うか、押しがかなり強い。

何をどうやったら、この人から由梨亜が生まれたのだろうか。

固まってしまった千紗とは正反対に、何故か眞祥が目を輝かせて身を乗り出した。

「ここでは、お茶は何を使っているのですか？」

「……………そうだった。」

眞祥は、紅茶狂——いや、紅茶好きだった。

千紗は、思わず遠い目をした。

初めてお邪魔する家——いや、屋敷で、しかもこちらは庶民で向こうは大貴族だと言うのに、遠慮もへつたくれないこの態度。

いや、ここが大貴族の家だということと、室内やソファアの趣味が眞祥と合致した為に、かなり期待しているのかも知れない。

「ああ、紅茶よ？　もしかして、珈琲とか煎茶の方が良かったかしら？」

「いえ！　是非紅茶でっ！」

眞祥の目が、益々キラキラして、一種異様な雰囲気だ。

千紗は、こっそり目を逸らした。

こうなったら、もう彼が止まらないことは、嫌と言う程思い知ら

されていた。

「その紅茶の種類ですが、どんな物を？」

「ああ……うちのは、結構特殊なのよ。だから、知っているかどうか……」

そう言って曖昧に微笑む瑠璃に、眞祥は思いつ切り身を乗り出した。

「是非ともお教え下さい！」

その異様な熱気に、既に耀太は引いている。

けれど、瑠璃は引く様子もなく嬉しそうに答えた。

「あのね、紅茶って、お茶の木からできてるでしょ？ でも、地球人の味覚に合うお茶の木って、とても少ないのね」

「ええ、知っています。ですが、地球連邦のお茶の木は他国にも人気で、地球連邦の輸出品目の中でもトップテン入りしているんですよ」

博識ぶりを披露する眞祥に、瑠璃は頷いた。

「そうよ。でも紅茶って、この地球の中でさえも、育てる場所の土壌や気候によって味が変わって来るでしょう？ だったら、外国で育てたらどうなるかってやっている所があつてね。勿論、そのほとんどが失敗したわ。でも、僅かながらにも成功した所があつたのよ。うちで使っているのは、そのうちの一つよ」

「銘柄は、何と？」

「オーギュリアって言うの。オーギュリア村は、アンデル共和国のザンガリ地方にある、小さな村よ。でも、地球連邦で作っている紅茶にも負けないくらい美味しいの。ああ……ありがとう、由梨亜、荅奈」

「いえ。どうぞ」

目の前に置かれた紅茶を、眞祥は慎重な手付きで持ち上げた。

千紗は、そのカップを見て顔を引き攣らせる。

間違いなく、それは本物の磁器だ。

つまり、落としたら割れる。

おまけに、それには金の華麗な装飾が施され、精緻な模様が描かれているのだ。

しかも、ソーサーも同じデザインで、庶民には決して手が届かない高級品であることは間違いない。

そんな物をあっさりと出して来るなんて、さすがは本条家だ。

顔を引き攣らせて手を付けない千紗とは対照的に、眞祥は紅茶を口元に運ぶと、ゆっくりと匂いを嗅いだ。

途端に、眞祥の顔がほころぶ。

次に、一口嚥下する。

益々、眞祥の顔がほころんだ。

「これは……美味しい。匂いはしっかりと付いているのに、味になよやかさがなくて、コクもある。でも、嫌な苦味はない。それに、こんなに濃い赤——ミルクやレモンなどで誤魔化さずに、ストレートでこんなに美味しいのは珍しい」

まるで試飲をしたような感想だ。

けれど、何故か瑠璃はそれに食い付いた。

「そうでしょう？ 本当に美味しいけど、アンデル共和国って遠いじゃない？ それにオーギュリアって、結構僻地なのよ。元々の美味しさと希少性の分の高価さとは別に、運搬費の高さが付いて、地球だと本当に高くなってしまふのよ。それこそ、お金持ちじゃないと手が出せないわ。何とか安くできないものかと思っではいるんだけど、どうしようもなくて……」

ほうと溜息をつく瑠璃に、眞祥の目がきらりと光る。

「では、父と母に少し掛け合ってみます。今は無理ですが、数年後には、必ず」

「あら？ 貴方のご両親って……」

「紅茶の仕入れや販売をしております。今はここにおりませんが、連絡を付けられたら、父は必ずこの話に乗って来るはずですよ」

「そう？ それは嬉しいわ。このオーギュリアを最初にアンデル共和国で作ろうとしたのは、私の大伯父なの。だから、私も小さな頃

から紅茶が好きだったんだけど、夫も娘も、こういった方面には興味がないみたいで……」

そう言って溜息をつく瑠璃に、千紗はまるで眞祥が二人いるような錯覚を感じる。

「そうですか？ 残念です。僕も紅茶は好きなのですが、姉や千紗は、全く興味がありません……本当に、嘆かわしいことです」「そうよね、こんなに美味しくて楽しいのに！」

二人して大盛り上がりしているのに、他の三人は顔を引き攣らせた。

「あゝ、その、何だ。彼は――」

「紅茶狂いですから、ああいうのは無視して構いませんよ？」

千紗は、思わず溜息をついた。

由梨亜も、二人を遠い目で見詰める。

「まさか、ここであんなに盛り上がるなんて……。それに、お母様が眞祥についていけるくらい紅茶が好きだなんて、知らなかったわ」「……………私も、知らなかった」

「奥さんののに、ですか？」

さすがに驚いて千紗が目を瞠ると、耀太は苦笑した。

「まあ、自分の趣味が珍しいと分かっているからだろうが……君、あれをどうにかできるか？」

耀太に真剣に言われて、千紗は仰け反った。

「無理ですよ！ ああなった時の眞祥なんて、お母さんかお祖母ちゃんくらいしか止められないですからねっ？ しかも、それが二倍！」

「……………無理なことを言って悪かった」

さすがに、耀太も目を逸らして謝罪する。

三人が引いている間にも、眞祥と瑠璃の紅茶談義は益々盛り上がっていく。

由梨亜はそちらを見ないようにしながら、千紗にお茶を勧めた。

「千紗……………取り敢えず、これ飲んで落ち着いたら？」

「……………うん。今、ここにこれしかないのが不幸だよ……。
うちに帰ったら、眞祥に感想とかを求められるに違いないんだから
……」

千紗は嘆きながらも、紅茶を含む。

「あ、美味しい。さすがは高級品」

千紗は、眞祥達に聞こえないように、小声で呟いた。

「うん。そうよね。これ、本当に美味しいのよ。ただ……ねえ？
お父様」

「ああ……。ただ、話にはついていけないな」

三人がちらりと窺うと、眞祥と瑠璃は益々話が盛り上がっている。
時計を見て、千紗は溜息をついた。

確か、うちを出たのは午後一時過ぎ。

今は二時で、既に三十分は彼らの会話は続いているだろう。

けれど、飽きた雰囲気どころか、益々過熱しているのだ。

これでは、夕方までに帰れるかどうかも分からない。

「あゝ、いざとなったら、置いて行ってもいいですか？ あれ」

「……ああ。すまないな」

「いえ……まさか、眞祥並みに紅茶好きな人がいるなんて、思っ
てなかったの……。はあ、こんなことになるんだったら、眞祥連れ
て来なきゃ良かった……」

千紗は、深い溜息をついた。

（終）

―二人の母を持つ姫君―

彼女は、物心ついた時から、ハハを『御母様』と呼んではいなかった。

けれど、一緒に育っていたイモウトやオトウトは、ハハを『御母様』『母上』と呼んでいたので、彼女は何度もハハに訊ねた。

どうして自分だけ、ハハを『御母様』と呼んではいけないのか、と。

そのたびに、ハハは何度も繰り返し彼女に言い聞かせた。

自分は、貴女を育ててはいるが、産みの母親ではない、と。

貴女の本当の御母様は他にいるのだから、そちらを『御母様』と呼ばなければならないのだ、と。

けれど、それでも納得できなくて、週に一度訪れる父にも訴えた。自分にとって、母親は彼女しかないのに、どうしても『御母様』と呼ばせてはくれない。

だから、『御母様』と呼びたいのだ、と。

父は、どこか辛そうな顔をして、首を振った。

どうしても、駄目だと言って。

反論しなかったが、その父の表情は、彼女から言葉を奪った。

納得はできなかったが、従うしかなかった。

本当は『御母様』と呼びたかったけれど、いつまでも意地を張る訳にはいなくて、ハハを名前で呼ぶことにも、いつの間にか慣れていた。

――けれど、いつまでも続いて行くと思っていたその生活は、ハハに告げられた言葉によって、一変した。

彼女が十とおになった時に、産みの母親の元に戻されるといいう、五歳のまだ幼い彼女には決して覆せない言葉によって。

「富瑠美……富瑠美？ どこにいったの？ 富瑠美……？」

由梨亜妾は、声を張り上げた。

見渡す限り広がっているのは、鬱蒼と茂った林。

人が手を加えているので、散歩のできる小道が伸びている。

けれど、問題は、行方が分からないのはまだ五歳の幼子だということだ。

まだ一メートルもない背の子供ならば、どこに潜んでいるのか分からない。

唯一安心できることは、ここは毎年王家が避暑に訪れる為に造られた離宮の『庭』であることだ。

だから、普通に歩く分には、問題はない。

「本当に……どこに行ってしまったのかしら」

由梨亜妾は、深く溜息をついた。

富瑠美は、小さくなって茂みに隠れた。

彼女には、異母姉がいる。

けれど、その異母姉は、産まれてすぐにどこかへ行ってしまったのだという。

どうやら父や祖父がどこかに隠したらしいのだが、どこにいるのかは分からない。

だから、主に貴族達の間では、その異母姉は存在しないこととして扱われているようで、上から二番目である富瑠美への貴族達の重圧は凄かった。

——我儘を言って泣くことは、許されなかった。
ぐすり、と鼻をすすする。

それでも、濃い桃色の瞳を大きく見開き、涙は決してこぼさない。

……ここには、誰もいないというのに。

その時、

「富瑠美。こんな所にいましたの？ 本当に捜しましたわ」

そう言って抱き上げられ——富瑠美は、顔を歪めた。

「おかあさま……」

由梨亜妾は、今にも泣きそうな顔をしている富瑠美を見て、困った顔をした。

「富瑠美……何度も言っているでしょう？ 貴女の御母様は、深沙みさ祇妃ぎひですわ。わたくしは、貴女の義理の母であり、育ての母でもあります。産みの母では御座いません。ですので、『御母様』とは、決して呼んではなりません」

由梨亜妾の言葉に、富瑠美は益々顔を歪めた。

けれど、涙はこぼさない。

「でも……さなみは、おかあさまのことを『おかあさま』ってよんでおります。ゆきやも、このごろはなせるようになりましたでしょう？ ゆきやも、『ははうえ』ってよんでいます。どうして、わたくしだけめなのですか？ わたくしにとって、『おかあさま』はおかあさまだけです。それなのに、どうしてよんではならないのですか？ ちがつながっていないから？」

由梨亜妾は、この幼子を不憫に思いながらも、決して妥協はしなかった。

「そうです。些さ南美なみも柚希夜ゆきやも、わたくしが産みました。けれど、貴女は違います。確かに、貴女の『富瑠美』という名はわたくしが付けましたが、それは殿下の御許可を頂いた上でのこと。また、貴女をわたくしが御育てしているのも、陛下と殿下の御許可の下です」
「でも、わたくしをすてるって、このまえおっしゃっていたではありませんかっ！」

その言葉に、由梨亜妾は困惑した。

「わたくしが貴女を捨てる？ そんなことは、決して御座いませんわ」

「うそです！ だって、わたくしがおになったら、もう、おかあ

さまといっしょには、いられないって……」

とうとう、富瑠美はぽろぽろと涙を流す。

由梨亜妾は唇を引き結び、堅い声で告げた。

「確かに、それは事実ですわ。けれど、わたくしが貴女を棄てる訳では御座いません。元々、わたくしが貴女を育てているのは、深沙祇妃の態度に問題があったからです。陛下は、時が経てば態度が改まるのではないかと御考えになり、貴女をわたくしに預けたのです。貴女が、十歳になるまでと、期限を区切って」

「きげん……？」

不思議そうに目を瞬く富瑠美に、由梨亜妾は頷いてみせた。

「そうです。貴女を産んだのは深沙祇妃で、同母の弟妹は柚菟羅と苓奈。些南美と柚希夜は、杜歩埜や璃枝菜達と同じ異腹の弟妹で、わたくしは、莉未亜貴や阿実亜女と同じ義理の母。貴女が実の母の元に戻るのは、自明の理——当たり前のことですわ」

そう言って、由梨亜妾は富瑠美の頭を撫でる。

けれど、富瑠美は激しく首を振って由梨亜妾の手を払い除けた。

「いやです！　ぜったいにいやっ！」

「富瑠美……」

さすがに由梨亜妾も困り果てた。

由梨亜妾は、富瑠美の顔を覗き込んだ。

「ねえ、富瑠美。どうして、深沙祇妃の元に帰るのが嫌なの？」

「『みさぎひ』って……ゆうらやれいなのおかあさまで、わたくしとおなじかみのいろをしたかたでしょう？」

柚菟羅はまだ三歳で、苓奈もまだ一歳——そろそろ二歳になる所だが、富瑠美は頻繁に彼らと会っている。

彼らは十五人兄弟で、今は長女の富実樹がいなから十四人なのだが、母親は六人もいる。

しかも、歳が皆近いのだ。

これでもし互いの顔が分からない、名前が分からないというような環境では、国際的に見て『不健全な家庭』と言われかねない。

一般家庭ならまだしも、花雲恭家は王家で、しかも花鶯国は列強の一つ。

余計、国内外の目に気を配らなければならない。

だからこそ、『仲が悪い』と言われない為に、彼ら兄弟は一日のうちの一定時間、一緒に過ごしているのだ。

けれどその時間、母親達はお茶会をしているのが普通で、特に深沙祇妃は富瑠美との接触が禁じられている為、富瑠美は深沙祇妃と口を利いたことはなく、何かの儀式や、こういった避暑地などで擦れ違ったり、遠目で見たりしかできてはいなかった。

「ええ……。そうですわ。富瑠美のその金の髪の色は、深沙祇妃から譲り受けた物ですから」

「でも！ あのかたは、いつもおかあさまのことを、すごいめでにらんでおります！ とても可愛い！」

「それ、は……」

由梨亜妾は、うっと黙り込んだ。

最初に峯慶と結婚した時、自分と深沙祇妃の仲はあまり悪くなかった。

深沙祇妃に比べると、そう親しくしていた訳ではなかったが、深沙祇妃にとって近親婚は論外であった為か、貴族の娘であった由梨亜妾にはそこまで風当たりが強くなかったのだ。

けれどそれは、互いに子を身籠るまでの話。

特に、由梨亜妾が最初の子供を産み、数時間差で深沙祇妃が二番目の子供を産んで、おまけにその深沙祇妃の子を由梨亜妾が名付けて育てることになってからは、決定的に仲が悪くなった。

だから、深沙祇妃はよく自分を睨んでいたし、まだ二歳の些南美ですら、四ヶ月年上の異母兄である柚菟羅と仲が悪く、よく『ゆうらおにいさまにいじわるされた』と言って泣いていた。

由梨亜妾は目を泳がせ、何とか言葉を捻り出す。

「えっと……その、あのね、深沙祇妃は——そう！ 御自分の子供を、わたくしが育てるのが気に入らないの。自分の子供は、自分で

育てたいもの。だから、わたくしを睨んだりしているのですよ？

だから、富瑠美。貴女には、優しいはずだわ」

「そう、なのですか？ でも……わたくしは、やっぱり、こわいです」

そう言って口をへの字に曲げる富瑠美に、由梨亜妾は困ったように笑った。

そして、富瑠美の頬に残る涙を拭う。

「さあ、もう戻りましょう？ 富瑠美。皆が心配しておりますわ」

「はい、おかあさま……」

「ですから、富瑠美。わたくしを『御母様』と呼んではなりませんと、何度申し上げれば御理解頂けるのです？」

由梨亜妾の手厳しい言葉に、富瑠美は唇を引き結び、再び目に涙を浮かべる。

「まあ、そうは言いましたが――」

由梨亜妾は、富瑠美の前に膝を付いた。

「人間、間違いを犯さないというのはあり得ません。ただ、その誤りは、決して人前ではしてはならないのです」

「……………」

首を傾げる富瑠美に、まだこの年では難しかったと苦笑しながら、由梨亜妾は更に言った。

「つまり、人前でなければ、過ちを犯したとしても、咎められないということですね。富瑠美、人前では、決してわたくしのことを、『御母様』と呼んではなりませんよ？」

その言葉で、富瑠美は由梨亜妾が何を言いたかったのかが分かったようだ。

ぱっと顔を輝かせて、由梨亜妾に抱き付く。

「おかあさま、だ〜いすきっ！」

そう言って抱き付く富瑠美に、由梨亜妾は目を和ませた。

（そう、この子なら……きつと、大丈夫だわ。些南美にはまだ早いし、柚希夜はまだ一歳だから、理解できると思えない……。けれ

ど、この子なら、富実樹のことを話しても、きっと大丈夫ですわ……」

由梨亜妾は、べったりと張り付いた富瑠美を抱き上げ、そつと顔を覗き込む。

「おかあさま……?」

「あのね、富瑠美。貴女には、貴女の御異母姉様おねえさまのことを、話しておきたいの」

「おねえさまの……?」

赤子の頃にだけ、一緒に過ごしたことのある異母姉だから、富瑠美の記憶には残っていないだろう。

けれど、その存在は知っているはずだ。

「そう。貴女の御異母姉様はね——」

富瑠美は、固く引き結んだ拳に気付くと、慌てて手の力を緩めた。そして、自室の内装を、改めてじっくりと眺める。

由梨亜妾の所で育っていた頃の自室は、質素ながらも洗練された美しさと温かさがあった。

けれどここは、富瑠美が深沙祇妃に引き取られてからの三年間でいくらか手を入れたとはいえ、とにかく華美だ。

……本当は、今でも由梨亜妾を『御母様』と呼びたいし、深沙祇妃の所なんかで過ごしたくはない。

深沙祇妃に引き取られて、この間の誕生日で三年が過ぎたが、未だに深沙祇妃とは馴染めなかった。

柚菟羅や荅奈とは、以前からそこその親交はあったから、全く話さないということはなかったが、明らかにぎこちない関係でしかない。

富瑠美は、深い溜息をついた。

この国では、王の権限が、他の国よりも強い。だから、独裁を防ぐ為に、王位に即ける長さが——期限があった。

その期限に従い、祖父の籐聯とうれんが退位して父の峯慶が王位に即いたのは、今から五年前のこと。

実の母である深沙祇妃は、自分が由梨垂妾と会うことを快く思っていないし、父は即位してからは滅多に会えないし、富瑠美は寂しい思いをしていた。

けれど、これでもう終わりだ。

この国に、正当なる王位継承者が戻って来たのだ。

だからこそ、彼女に次代の王位を得る権利を譲り渡すことに、何の抵抗もなかった。

何故なら、自分で悟っていたのだ。

自分は、王の器ではないと。

この異母姉とは、富瑠美の記憶のある限り、一度も会ったことはない。

けれど、あの由梨垂妾の、実の娘だ。

性格が悪いなんてことは、まずあり得ないだろう。

勿論、性格は環境で定まることは多い。

しかし、その異母姉が育ったのは、父が選んだ家なのだ。

何の不都合もないだろう。

そう思い、由梨垂妾に連れられて彼女と対面した富瑠美は、はっきり言って拍子抜けした。

彼女は、由梨垂妾と同じ髪の色をしていたが、髪質や目の色は自分と同じだった。

そして何より、顔立ちが非常に似通っていた。

富瑠美はまずそのことに驚き、そして異母姉が、自分のことを『富瑠美様』と様付けで呼んだことに啞然とした。

そして、決意した。

この異母姉に――花雲恭富実樹に、花鶯国の王族として必要な全てを叩き込もうと。

富瑠美が早足で廊下を歩くと、一生懸命に背後を付いて来る気配がして、富瑠美は思わず口元をほころばせた。

まず、言葉遣いがない。

そして、王族としての態度、歩き方、他にも知識など、彼女に叩き込まなければならぬことは、山ほどある。

言葉や態度がなっていないのは、富瑠美を多少苛つかせたものの、あの『御母様』の娘だ、きちんとした教育をすれば、きっと輝くだろう。

そう、何も全てを自分一人でやらなくても、兄弟達がいた。

勿論、総合的に見た時に、一番優れているのは富瑠美ではあるが、ある特定の分野で区切った時に、そこに一番秀でているという弟妹もいる。

異母姉には、早くこの国に馴染んでもらわなければならない。

その第一歩は、知識を得ることと、兄弟と馴染むことだ。

だから、むしろ積極的に兄弟を呼んで、異母姉に全てを教え込まなければならぬだろう。

そのことを思うと、自然に笑みがこぼれた。

恐らく自分は、教育向きなのだろう。

ただし、その方法はスパルタ以外の何物でもないが。

異母姉がいるということ喜び、そしてこれからのことを思い――富瑠美は、楽しそうな未来が待っていると考えて、その考えの子供らしさに笑った。

けれど、これからが楽しくなるというのは、間違いないだろう。

あれだけ待ち望んでいた異母姉が、ようやく還って来たのだ。

富瑠美は、これから頑張って、異母姉の力にならなければならないのだ。

深沙祇妃の野望を知る娘として、そして、あの優しく厳しい由梨巫妾に育てられた義娘むすめとして――。

(終)

―キビシイ試練―

「御異母姉様^{おねえさま}！ ですから、そのようにすたすたと御歩きにならないで下さいませ！ もっとゆったりと！ 優雅に！」

「は、はい！」

「ああ、それでは遅過ぎますわ！　そこまで遅いと、のろまに見えてしまいます！」

「え、じゃあっ……きゃっ！」

富実樹^{ふみき}は、ドレスの裾を踏んでしまった。

そのまま倒れ伏してしまう富実樹に、富瑠美^{ふるみ}は慌てて駆け寄る。

「御異母姉様！　御無事でしうか？」

「いたた……大丈夫よ、富瑠美。ちよっと躓いただけだから……」
すると、富実樹の言葉遣いに、富瑠美が眉を上げる。

「御異母姉様？　言葉遣いになっておりませんわよ」

「あ、ごめんなさい！　えっと、少し躓いてしまっただけですわ」
「……まあ、一応及第点としておきましょう」

「ありがとうございます……」

富実樹は、若干目を逸らして言った。

富瑠美は富実樹が立ち上がるのに手を貸すと、溜息をついた。

「御異母姉様は、背筋はぴんと伸びておりますし、立ち姿も悪くはありません。ただ、御歩きになる速さと歩幅の問題ですのに……何故、そこで御転びになってしまわれるのですか？　しかも毎回」

富瑠美に白い目で見られて、富実樹は思わず目を逸らす。

「あゝ、それは……その、あまり、こういった裾の長いドレスに慣れていないから、感覚が掴めなくて……」

「成る程……そういった問題でしたのね。ですがそれは、着て慣れるしかないでしょうね」

「そう、ですよ……」

富実樹は、肩を落として落ち込んだ。

その様子に慌てたのは富瑠美だ。

「お、御異母姉様、しっかりなさって下さいませ！　そうですわ。もう随分と長く練習なさっておりますし、そろそろ休憩になさいませんか？」

「え、ええ……そうね」

「それでは、わたくし、些^さ南^な美と柚^ゆ希^き夜^やを呼んで参りますわ。御茶に致しましょう」

そう言って富瑠美が出て行くと、富実樹は深い溜息をついた。

本当は頭も掻き毟りたい所だが、そんなことをしてしまっては、綺麗にセットされた髪が崩れてしまい、また富瑠美に雷を落とされてしまう。

富実樹は、こっそりと裾を持ち上げた。

花^か鶯^{おう}国^{こく}で、王侯貴族が普段着として使っているすっきりとしたラインのドレスなら、富実樹も普通に着られるようになった。

問題は、式典など公の場で着る、やけにスカートが膨らんだこのドレスだ。

地球連邦では、こんな衣装などを着ているのは、結婚式に臨む花嫁くらいしかないだろう。

「確か、プリンセスラインって言うんだっただかしら……」

富実樹は盛大に溜息をつく。

富実樹は何度か結婚式に出席したことがあり、そこでこれと似たようなドレスを着た花嫁も見たことがあるのだが、こんなにスカートが広がっていて歩きにくいなんて、想像もしなかった。

「一生に一度くらいだったら、着てもいいんだろうけど……やっぱり、あっちの服に慣れちゃうと、こんなのはうんざりするわね……」

富実樹は裾を持ち上げ、そのまま椅子に腰掛けた。

要は、裾が長くてこもこしているから踏むのだ。

だから、裾を持ち上げてしまえば、何の問題もなく歩ける。

問題は、花鶯国の貴族以上の身分の女性は、運動をする時やプールに入る時以外で、足をさらさないということだ。

真夏でも、ドレス自体は肌が透けない程度に薄手になるのだが、長さは短くてもふくらはぎが半分見えるか見えないか程度で、膝下丈のドレスを着るのは子供か侍女くらいなのだ。

こんなロングドレスを滅多に着たことのなかった富実樹にとって、これを毎日着なければならぬというだけで地獄だった。

「失礼致します。富実樹御姉様？ 本日は、もう練習は宜しいのですか？」

十一歳になった妹の些南美が、富実樹の部屋に顔を出した。

「いいえ。まだです。少しの間、休憩のだけで……」

富実樹がそう言って苦笑すると、些南美は面白そうにくすりと笑った。

「まあ。富瑠美御異母姉様は、御厳しいですからね」

「ええ、本当に……」

富実樹はそう言って溜息をつくと、卓に肘を付いた。すると、その肘を些南美に叩かれる。

「富実樹御姉様？ 御行儀が悪いですわ」

「あ……申し訳ありません」

富実樹は、慌てて背筋を伸ばして膝に手を置く。

「ええ、宜しいですわ」

そう言っただけでと笑い些南美に、富実樹はこっそりと溜息をつく。

富瑠美もなかなか厳しい教師ではあるが、この些南美も、富実樹がうっかり気を抜いた時に容赦なく正して来るのだ。

ふと、富実樹は些南美の背後に柚希夜の姿がないことに気付くと、首を傾げた。

「あら？ ねえ、些南美。柚希夜は？ 富瑠美は、貴女と柚希夜を呼びに行くと言っていたのだけれど。些南美の部屋と柚希夜の部屋って、わたくしの部屋の隣だし……」

その疑問に、些南美は小首を傾げて言った。

「ええ。柚希夜はとても勉強熱心なので、杜歩塾御異母兄様に勉強

を教わりに参っているのですわ。いつも、午前中は教師に教わったり、兄弟で過ごしたりしているのですけれど、午後は自由でしよう？ 柚希夜はその時間に、よく杜歩埜御異母兄様の所で勉強を教わっているのです。他にも、璃枝菜御異母姉様や鳳蓮は官吏になりたいて考えていらっしやるので、その二人の所に通っておりますわ。あと、麻箕華の所にも。富瑠美御異母姉様の次に頭がよいのは、璃枝菜御異母姉様達を除けば麻箕華ですから。あの子、本当に勉強熱心ですよ？」

「そうなの……。じゃあ、杜歩埜も呼んで来るのかしら？」

「そうではないでしょうか？ 杜歩埜御異母兄様の御部屋まで柚希夜を呼びに行くのに、その部屋の主である杜歩埜御異母兄様を御誘いにならないのであれば、それは大変に失礼なことで御座いますもの」

「ええ、そうよね……」

富実樹はそう言うと、僅かに視線を逸らした。

正直、富実樹は途惑いがあった。

将来、自分は花鶯国の王位に即く。

それは受け入れていたし、納得もしていた。

富実樹が理解できないのは、自分の婚約者が杜歩埜だということだ。

杜歩埜は、一日違いで産まれたとはいえ、間違いなく自分の異母弟なのだ。

しかも、彼の母親は沙樹奈后で、沙樹奈后は父親である峯慶の異母妹でもある。

つまり、富実樹にとって沙樹奈后は、父の妻であるという意味の義理の母であり、婚約者の母親という意味の義母でもあり、そして血の繋がった叔母でもあるのだ。

沙樹奈后自身の母親は妃であったとはいえ、近親相姦で産まれた異母弟と結婚するのは、いくら何でも納得できない。

しかも、富実樹の異母弟妹は十四人もいるのだが、そのうち沙樹

奈后と紗羅瑳侍の子供達は、富実樹にとって従弟妹や再従弟妹や三
従弟妹でもあり、他にも遡ればもっと様々な血縁関係が出て来る。

地球連邦では、こんな事態は考えられない。

州ごとに違うが、それでも、地球連邦では大抵三親等か四親等以
内での婚姻は認められておらず、その意味でも嫌悪感が残る。

深沙祇妃程過剰に嫌がっている訳ではないし、郷に入っては郷に
従った方が利口なのも理解しているが、地球連邦の常識の中で育っ
た富実樹にとって、いくら腹違いでも異母弟で従弟でもある杜歩埜
と結婚することは、到底考えられなかった。

突然黙り込んだ姉に、些南美は眉を寄せた。

どこか俯いて考え込んだ様子なのは、些南美に不安をもたらす。

まだ、この姉と再会してから一月も経っていない。

なので、この姉が何を考えているのか、よく分からないことも度
々あった。

だから、些南美がこの沈黙を苦痛に感じ始めるその直前、異母姉
が異母兄と弟を連れて室内に入って来て、正直些南美はほっとした。

「富瑠美御異母姉様、杜歩埜御異母兄様、柚希夜」
すると、三人はにっこりと些南美に笑い掛けてくれた。

「杜歩埜御異母兄様。ほら、こちらに御座りになって下さい。どう
ぞ、わたくしの隣に」

些南美は、意識して『異母兄を慕う異母妹』を演じる。

まだ些南美は十一歳だが、この異母兄を好く気持ちは本気だった。
杜歩埜は、可愛い異母妹の我儘に困った顔をしているようだ。
けれど、些南美には分かる。

それは、些南美の態度と同じく『演技』でしかないことを。

『異母妹の頼みを断れない振り』をすることによって、些南美の近
くにいても怪しまれないのだ。

この国は、兄妹間の婚姻も許されている。

それは王だけに限らず、庶民でも許されているのだ。

だから、些南美と杜歩埜が結婚するのに、法律上の問題はない。けれど、障害はある。

杜歩埜が、既に富実樹の婚約者だという障害が。

勿論、杜歩埜が富実樹の婚約者の地位を辞退して、第二王子である風絃ふうげんを婚約者にすることはできる。

けれど、杜歩埜は后きさきの息子。

この国では、まず第一に産まれ順が尊ばれ、その次に血の濃さが尊ばれる。

もし杜歩埜が最貴たうきや最女めいじょの子供で、風絃が后きさきや最侍さいじの子供であったのなら、それなりのすったもんだはあっても、杜歩埜の婚約者辞退は認められただろう。

けれど、杜歩埜は后の息子であり、風絃は最貴の息子。

どちらが血筋的に見て婚約者に相応しいかと言えば、それは杜歩埜なのだ。

つまり、些南美と杜歩埜は、正式な結婚ができない。

それに、些南美はまだ子供だ。

歳が同じで、正式な婚約者である富実樹に杜歩埜が惹かれても、些南美にはそれを止めることができない。

だから、些南美はとても不安だった。

勿論、方法がない訳ではない。

些南美が総下そうげになればいいのだ。

けれど、当代の王は父である峯慶。

いくら近親婚に寛容的な花鶯国でも、直系間での婚姻は認められない。

富実樹が即位し、杜歩埜がその夫となる時を待ったとしても、総下には年齢制限がある。

もしその法律を変え、些南美が総下になれたとしても、杜歩埜の愛情を受け続けられる確証はない。

杜歩埜は、富実樹と子供を創らなければならないのだ。

そのうちに、愛情が些南美から移ってしまう可能性だってなくはない。

些南美は、涙が零れてしまいそうな涙腺を叱り飛ばすと、思い切って異母兄の膝に座った。

「さ、些南美？」

見ると、今にも零れ落ちそうな程に大きく、姉が目を瞠っている。そう言えば、姉の目の前で異母兄とべったりくっつくのは、初めてだっただろうか。

「ああ、杜歩埜と些南美は、とても仲が宜しいのです。柚希夜も、勉強は杜歩埜に教えてもらっておりまして……本当に、些南美も柚希夜も、杜歩埜と仲が良過ぎるくらいですわ」

富瑠美は、そう言って溜息をついた。

その口調は、仲のよい異母弟妹達を微笑ましく眺めるような雰囲気であり、些南美はほっとする。

すると、柚希夜は何故か苦笑しながらお茶を出した。

正確には、富瑠美達が部屋に入って来るのと同じタイミングで、中級侍女が富実樹の部屋に持って来ていたのだが、些南美が杜歩埜とじゃれ合っているのを見た柚希夜が、侍女にお茶を置いて部屋を出るようにと促したのだ。

だから柚希夜がやったのは、お茶が冷めないうちに、異母兄姉達の前にカップを並べることだ。

「ありがとう、柚希夜」

富瑠美は柚希夜に礼を言うと、カップを手にとって一口飲んだ。

「美味しいですけれど……少し、冷めてしまいましたわね」

その言葉に、富実樹もお茶を口を含む。

「あ、本当……。でも、わたくしはこれくらいのぬるさの方が好きです。あんまり熱過ぎると、逆に風味が飛んでしまいますから」

富実樹はそう言って、首を傾げた。

「でも、これ……何の御茶でしょうか？ ハーブティー？」

富実樹の疑問に、些南美は杜歩埜の膝に腰掛けてお茶を飲みなが

ら答えた。

「ええ。これは、花鶯国でしか採れないクロスリというハーブを煎じたクロスリティーですわ。苦味が少なく甘味強いのが特徴なのです。ですが、アイスティーにすると苦くなってしまうのが残念な所ですわね。これは少し冷めてしまっているのも、甘味が少々弱くなってしまっています。本当の温かさならば、もっと美味しいのですけれど」

些南美がそう言って肩を竦めると、また一口啜った。

杜歩埜も、些南美を膝の上に乗せたままお茶を飲む。

どこか違和感のある光景も、些南美にとっては普通だ。

けれど、心の中のどこかで、いつもびくびくしていた。

この想いが、決して、他人にばれませんように。

そして、このままの関係が続き、いつか――いつか、異母兄と結ばれますように。

それだけが、彼女の願いだった。

富実樹は、急に説明を始めた些南美に、一瞬首を竦ませた。

けれど、ほんの数秒で終わった説明に、内心ほっとして力を抜く。

つい一年前までは、親友の義理の叔父であった、『紅茶狂い』とも呼ぶべき人物による『紅茶談義』に頻繁に付き合わされていた為、お茶の説明に対して、いつも身構えてしまうのだ。

まあ、今回の場合、最初に種を蒔いたのは自分なのだが。

（でも……普通は、そんなにぐだぐだと説明はしないわよね。あいつが規格外なだけで……）

富実樹は、小さく溜息をついた。

その人物のことを嫌っていた訳でもないし、むしろよく一緒に遊んではいたのだが、彼の紅茶に対する情熱だけは理解できなかったし、理解したくもなかった。

その時、突然富瑠美が立ち上がった。

「？ 富瑠美？」

「さあ、御異母姉様。休憩はこれにて終了ですわ。さ、練習を再開しましょう」

「ええっ?!」

富実樹は、思わず大声を上げてしまった。

休憩が始まってから、まだ五分も経っていないのだ。

「ええ、では御座いません！ やるべきことは、まだ山積しておりますのよ？ いつまでも休んでいる訳には参りません！ それに御異母姉様は、まだ歩き方で躓いておられるでは御座いませんか。綺麗な歩き方を会得したのは、礼の取り方、綺麗な座り方、優雅な仕草。他にも様々なことが御座いますわ。御異母姉様は、まだ基礎の基礎の段階で止まっておられるのです。せめて今日中に、式典の服装でも人前に出られる程度にして下さいませ」

富瑠美に鋭く睨まれて、富実樹は肩を落とした。

確かに、自分が歩き方で躓いているのは事実だ。

富実樹は残っていたお茶を一気におおると、立ち上がった。

「杜歩埜、些南美、柚希夜。忙しくて申し訳ありません。富瑠美、三人を邪魔しては悪いですから、わたくし達は別室で練習しましょう？」

「ええ。やる気があるのは、大変宜しいですわ。ただ、それが持続なさればよいのですけれど……」

富瑠美の溜息をつきながらの言葉に、富実樹は頬に血を昇らせる。

「ちゃ、ちゃんとやるわよ！」

「御異母姉様、言葉遣いが乱れておりますわよ？ 所作も言葉遣いも、全て御気を付け下さいませ。何事も優雅に、気高く、威厳を持つて。これを御心掛け下さいませ」

「わ、分かりましたわ」

富実樹はそう言うと、慎重に歩き出した。

本当に、この服装は歩きにくい。

けれど、それが覚られないくらい、優雅に歩かなければならない。少なくとも、自分が将来父の後を継ぎ、女王になることは決まっているのだから。

富実樹は、富瑠美のはらとした視線を感じながら、ゆっくりと歩く。

裾を踏まないように、けれど、裾を蹴立てないように。

目標は、十月に行われる鳳蓮ほうれんの誕生会に出席すること。

それに間に合わなくても、せめて、十二月の柚希夜の誕生会には出席したい。

だからそれまでには、全ての所作や言葉遣いで、富瑠美に及第点をもらわなければならないのだ。

今の所、それが富実樹の目標である。

異母妹の、厳しくも思いやりのある指導を受けながら。

(終)

―記憶の中の、―

眞祥まひやすは、いきなり自宅の電話が鳴り、驚いてそれを見詰めた。

眞祥は、小学校を卒業してからインド州に引っ越していた。

原因は、父の東風こちがみけい上慧斗だ。

元々『紅茶狂い』と言われる程紅茶好きだった父は、娘婿が亡くなつてからというもの、更にそれに磨きが掛かってしまったのだ。

結果、日本州にあった店舗を畳み、ネット上での販売のみとして、紅茶の一大産地であるインド州までやってきてしまったのだ。

けれど、ここでも父は落ち着くということを知らず、州内の様々な産地へ足を運び、はたまた紅茶生産の指導をしてまで自分好みの茶葉を作らせて買い取り、気付けばお隣とはいえスリランカまで足を運んで試飲し、ふといなくなったと思えばヨーロッパへ赴いて知らない紅茶を訪ね歩き、しばらく帰って来ないと思ったら中華州で中国茶に嵌り――とにかく、落ち着かなかった。

しかも、まだインド州に引っ越してきてから半年と少ししか経っていないのだ。

また、そのたびに母が取っ捕まえに行くので、結局眞祥は一人きりになることが多かった。

正直、ネットで紅茶を売っていなかったら、この家は破産していただろう。

そして、そんな風に両親がいないのが普通だったので、家の電話が鳴るというのも、正直何ヶ月振りだか分からない。

「……………」

眞祥は、電源の所で手を彷徨わせる。

率直に言つて、何かの販売や間違い電話以外、この電話に掛かつて来たことはない。

だから、無視するのが一番だ。

けれど――胸騒ぎがして、眞祥は電話を取った。

そして、そこに映し出された姿を見て、眞祥は驚きに目を瞠った。
『ああ、良かった、眞祥ね？ 番号、間違ったかと思っただわ……』
そう言って溜息をつくのは、間違いなく、眞祥の姉の彩音眞弥だ。
けれど、その顔は非常にやつれていて、まだ三十代の前半だと言
うのに、四十代くらいにしか見えなかった。

「姉さん……？ 一体、どうしたんだ？」

眞祥が強張った顔で訊ねると、眞弥も負けず劣らず強張った顔で
訊ね返して来た。

『ねえ、眞祥……あんた、千紗のこと、憶えてる？』

「千紗？」

眞祥が眉を寄せると、眞弥は顔を引き攣らせた。

一体、何に？

……恐らく、恐怖に。

『眞祥……まさか、あんたまで忘れちゃったのっ？！』

その悲鳴のような言葉に、眞祥は目をまん丸に見開いた。

「馬鹿言え！ 何でそうなるんだ！ 千紗は姉さんの娘だろうが！

そんでもって、認めたくはないけど、正真正銘俺の姪っ子だろう

?!」

眞祥が怒鳴り返すと、眞弥は細い息をついた。

「ちょ、姉さん？ ……何だよ、忘れたって！ 誰が、千紗のこと

を忘れたんだっ？！」

眞祥が、画面が埋め込まれた壁に手を付いて怒鳴ると、眞弥は泣
きそうな顔をして言った。

『みんなよ……みんな。近所の人も、会社の人も。みんなみんな、
千紗のことを忘れちゃったの……！』

「な、なんだよ、それ……何で、みんな千紗を忘れるんだよ？！」

『分かんないわよ、そんなの！ でも、千紗がいないの！ 昨日学
校に行って、そのまま帰って来なくて——それで、警察に行ったの
よ！ でも、私には子供がいないだろうって言われて、相手にされ
なくて——狂人扱いされて！』

喚き散らす眞弥に、眞祥は慌てた。

「ちよっと落ち着けよ姉さん！ これじゃ全然話が分かんないだろう？！ もっと詳しく話せよ！」

眞祥の言葉に、眞弥は深呼吸を繰り返す。

『……私にだって、分からないわよ……。だって、今まで普通だったのよ？ 夏休みが明けて、行って来ますって言って、学校に行つて……。でも、私が帰って来ても、家には灯りが点いてなかったの。それで、慌てて家の中に入ったら、千紗がいなくて……。それに、千紗の物が、全部なくなってたの！ 写真も、映像も、靴も服も鞆も、全部っ！ ……ねえ、眞祥。全部、私の妄想だったのかな？ 旦那が死んで、子供が欲しいって思っ——妄想で、娘を持ってたの？』

「そんな馬鹿なことがあるかつ！ 千紗がいらないなんて、そんなのあり得ない！ 俺だって憶えてるぞ。ちっちゃい時から、よく遊んでたしっ……。！」

『でも……。でも、いないのよ。千紗。物も、思い出も、全部なくなってるのよ……。？』

眞祥は、言葉を失った。

『やっぱり、私……。夢、見てたのかな？ ……ごめんね、眞祥。そっち、まだ朝でしょ……。？ こんな時間に電話掛けて、ごめんね……。』

眞弥はそう言うと、眞祥が何も言う前に、電話を切った。

眞祥は、その場にずるずると座り込む。

「——んな馬鹿なこと、あるかよ……」

眞祥は唇を噛み締めると、不意に立ち上がった。

先程姉は、『思い出もなくなった』と言っていた。

眞祥の家にも、千紗が写っている写真がある。

まずは、それを確認しようと思ったのだ。

——眞弥の言っていたことは、外れていた。

ちゃんと、千紗は写真に写っていたのだ。

眞祥は、ほっとして溜息をつき――けれど、ふと覚えた違和感に眉を寄せた。

そう、どこか変だ。

例えば、千紗のこの位置――。

眞祥は、大きく目を瞠った。

そして、画面に写真を一覧状態にして全て並べる。

一枚ずつスクロールして見て、ようやく異変に気付いた。

――本条由梨亜ほんしょうゆりあが、写真に写っていないかった。

「どういう、ことだ……？」

例えば、半年と少し前の、卒業式の時の写真。

この時、眞祥は千紗に首を絞められかけながら写真を撮られた。

そして、その隣では、由梨亜が爆笑していたはずなのだ。

でも、由梨亜のその姿は、この写真に写っていない。

それに、五年生から六年生に掛けての、どの写真にも写っていないかったのだ。

眞祥は、今度は幼い頃の写真をデータの奥から引っ張り出した。

同じ年の叔父と姪ということで、両親や姉夫婦はとても面白がり、

幼少期は二人並べて撮った写真がとても多かった。

……けれど、そこに写っていたのは、眞祥だけだった。

画面から、少し離れた手が震える。

「何で――どうしてっ！」

みっともなく、声が震える。

姉の家からは、千紗の全てが消えた。

自分の家からは――千紗ではなく、由梨亜が消えた。

「何が、どうなってるんだよ……」

眞祥は、頭を掻きまわった。

深呼吸をして、改めて写真を眺める。

そして、気付いた。

四年生までの写真の中に、千紗はいない。

けれど、五年生の時から、千紗が写真に写っていた。

そう、五年生と言えば、

「由梨亜が、転校して来た時だ……。何でだよ……。何で……。何で、由梨亜じゃなくて、千紗が写ってるんだよ……！」

写真に写っていることと、自分の記憶が一致しない。

記憶が正しいのか、写真が正しいのか——判断できない。

……普通に考えれば、写真が正しくて、自分の記憶が誤りだと思われるだろう。

でも、眞祥には、あの鮮明な記憶が偽りだとは——自分の創り上げた物だとは、決して思えなかった。

「眞祥……ちょっと眞祥、起きてるの？」

母の蛍子ほたるこに揺り起こされて、眞祥は目を瞬いた。

ふと顔を上げると、画面には、あの写真が出たままになっていた。

……いつの間にか、寝てしまっていたらしい。

「あ……母さん？ 父さん追って、どこかに行ってたんじゃないかっ
たっけ？」

「ええ、今回は結構近場で、タミルナードゥにいたわ。一応州内だから、早く帰って来れたのよ。それにしても……」

蛍子は、溜息をついて眞祥を見下ろした。

「眞祥、あんた学校サボったの？ 母さん達がいらないのをいいことにして！」

眞祥は、慌てて時計を見た。

今日は何だか早くに目が覚めてしまっていたので、眞弥からの電話も取ることができたのだが、そのせいで居眠りしてしまったようだ。

「全く……もうお昼よ？ しょうがないから、ご飯作るわね」

「あ、うん……」

もしかしたら、今までののは夢だったのだろうか。

そうだ、きっとそうに違いない。

だって、千紗と千紗の全てが姉の所から姿を消し、由梨亜が記録から消えるなんて――そんなの、夢物語にしか聞こえない。

けれど、画面に目を戻しても、そこには由梨亜の姿はなく、小さい頃の千紗の姿もまたなかった。

「なあ、父さん……」

台所に消えた母に代えて、父に声を掛ける。

「ん？ 何だ？ 眞祥」

どこかげっそりとした表情で、父が答えた。

『蛭子』なんて古風で儂い名前なのにも拘らず、母は行動的で、ある意味暴力的でもあり、父が家に帰って来る時は、いつもげっそりとしていた。

「父さん……千紗、憶えてるよな？」

姉は憶えていて、自分も憶えている。

だから、両親も憶えているに違いない。

けれど、眞祥の期待は裏切られた。

「チサ……？ 誰だ？」

「やあねえ、お父さん。眞祥の友達じゃないの」

いきなり話に割り込んで来た母の言葉に、眞祥の思考が停止する。

「友達？ ここのか？」

「違うわよ。眞弥に預けてた時の友達よ。貴方、本当に憶えてないの？ 呆れた。もう歳なの？ そうよねえ、もう還暦過ぎちゃったからねえ」

「そ、そう言うお前だって、あと何年かで六十だろう？！」

「あら？ 私、まだ五十七なのよ？ まだ三年も先です！ やあねえ、六十一歳のお爺ちゃんったら」

「お、お爺ちゃんって、おい！ 俺はまだ孫なんていないぞっ？！ 眞祥はまだ中学生だし、眞弥だって、櫻堵^{おうと}君は亡くなってしまっ
たし……」

（孫が、いないって……父さん？）

「もう六十も過ぎているんですから、立派にお爺ちゃんでしょう？」

私達と同年代の人って、もうほとんどが孫持ちだもの。それに、眞弥の所って、最初から子供は諦めてたでしょ？ 眞弥、子供ができにくいから……」

眞祥は、目を瞠った。

確かに、姉が子供を産むのは絶望的だったと、幼い頃に聞いていた。

だから両親は、眞弥が櫻堵と結婚するのを渋ったのだと。

けれど、義兄あにはそれをねじ伏せ、まだ未成年だった姉を掻っ攫うようにして二人は結婚したのだと。

そして、結婚してすぐに子供ができて、そうして奇跡的に娘が――千紗が産まれたのだと、眞祥はそう聞いていたのだ。

だが、この二人の様子だと――二人とも、自分に孫がいたことを、憶えていない。

「母さん……母さんは、千紗のこと、憶えてるんだな？」

微かに、声が震える。

「ええ、この子でしょ？」

蛍子は、眞祥が画面に映し出していた写真を指差した。

これは、確か修学旅行の時の写真だ。

「ああ……そうだ」

蛍子は、千紗を見て、それが千紗だと認識している。

でも、彼女が孫だとは、認識していない。

その矛盾を解く為には、どうしたらいいのだろうか。

しかし、その難問は、あっさりと放たれた蛍子の言葉によって解かれてしまった。

「そうそう、懐かしいわねえ。よく眞弥の所に遊びに来てたんですよ？ 確か……そう、本条家のお嬢様」

「え………？」

眞祥の声はとても小さく、蛍子も慧斗も気付かなかったようだ。

「ああ、そう言えばいたな。何であんな小さな町に本条家の人間がいるのか、よく分からんが……」

「あら。何か新しい会社とかができたから、総帥一家が越して来たんじゃないの。そうそう、千紗ちゃん。こっちに越して来る前……眞祥の卒業式の時に挨拶したでしょう？それに、この子の両親もだから私は憶えていたけど……お父さんったら、挨拶したのにすっかり忘れちゃったの？やあねえ、歳って。ボケたくないものだわあ」

蛍子はそう言うのと、台所に戻りながら言った。

「あとちよつとでご飯だから、二人とも、お箸とか並べて？」

「あ、うん……」

眞祥はそう答えながらも、頭のどこかが麻痺したように、考えが纏まらなかった。

（本条家の、お嬢様って……母さん、確か、そう言ってた……）

眞祥は、本棚の中から卒業アルバムを取り出す。

震える手で堅いページをめくるから、手が滑って上手くめくれない。

それでも、何とか自分のクラスのページを開いた。

「これ、やっぱり……何で、だよ……」

眞祥は、唇を噛み締めた。

そこには、やはり由梨亜の姿はなかった。

千紗は——『本条千紗』という名前で、写っていた。

彩音千紗では、なかった。

「何だよ、これっ……。由梨亜は、一体どこに消えたんだ？それに、何で千紗が『本条』なんだよ！何だよ、何だよ、これっ……！」

眞祥は、顔を歪めた。

けれど、何度見返しても、結果は変わらない。

ここから考えられることは、由梨亜はどこかへ行ってしまったって、千紗は本条家の人間になったということだ。

しかし、納得できない。

自分が小学校を卒業した時、ここには間違いなく由梨亜が写っていて、千紗も『本条』ではなく『彩音』だった。

それを書き換え、自分と姉以外の記憶も書き換えるなんて、どこから見ても物語にしか見えない。

けれど、それは紛れもない事実なのだ。

「……………」

こんなことは、姉には話せない。

自分の娘が、他の家の娘になって、しかも同じ町内にいるなんて。――もしかしたら、母の記憶も失ってしまっているかも知れない、なんて。

（千紗……お前は、憶えているのか……？）

訪ねて行こうかと、思った。

けれど、もし彼女が記憶を失ってしまっているとしたら、平静でいられる自信がない。

「くそっ……何で――何で、こうなったんだよっ……！」

ばん、と壁を殴り付ける。

だが、それで気分が晴れる訳ではなかった。

（……そうだ。千紗、お前が姉さん達のことを憶えてるなら、義兄にいさんの命日に、もしかしたら墓参りに来るかも知れない……）

その日なら、自分が日本州に戻ったとしても、怪しまれることはないだろう。

そして、千紗に記憶があるならば、

（姉さんに、絶対会わせるからな。お前が嫌がっても……）

眞祥は、そう心に決めた。

――けれど、千紗が義兄の墓に訪れることはなかった。

「姉さん……もう、やめろよ。顔色悪いぞ？」

『大丈夫よ。ちょっと貧血なだけ……』

「だから、ちょっとじゃないだろう？ 千紗が帰って来るのを待つのはいいよ。俺だって、あいつがいなくなったのが信じられないんだから。でもさ、その前に姉さんが死んじゃったら元も子もないだろう？ 一体誰が、あいつを待つって言うんだよ」

『大丈夫。それに、もし私に何かあっても、眞祥がいるし……』

「おい、何で他力本願に走るんだよ！ 俺は今、そっちにいないんだぞっ?! その間に千紗が来たらっ……!」

『でも、このうちローンもあるでしょ？ 大丈夫よ。だから、眞祥はそっちで大人しく勉強でもしてなさい？ 私は大丈夫だから……』
そう言われて、一方的に通信は切られた。

眞祥は心配だったが、まだ高校生だ。

インド州では十四歳から十八歳が高校生なので、眞祥は高校三年生になったが、一人で日本州に行ける訳がない。

休みを待つて行くにしても、往復の飛行機代がなければ不可能だ。だから、こうして通信をして姉を説得するしかできなかった。

……でも、無駄だった。

その年の、八月。

いきなり電話があり、姉が孤独死したことが伝えられた。

皆が黒い喪服に身を包み、並んでいる。

遺影に写る姉の姿は、ここしばらく見たことがない程に穏やかな笑みを浮かべていた。

参列者達は両親に挨拶をした後、それぞれ帰って行った。

……気付くと、その部屋にいたのは、眞祥だけになった。

姉の遺影に近付くと、眞祥はその場に胡坐を掻いて座る。

「姉さん……。千紗、見付かんないうちに、死んじゃったな……。」

ごめんな、姉さん。俺、千紗がどこにいるか知ってたんだ。でも、多分千紗は、姉さんのことを憶えてないって思ったから……姉さん

を傷付けると思っ、俺、言わなかった。……ごめんな」

ぐると、部屋を見回した。

両親は相談して、この家を売り払うことにしたらしい。

葬式が終わったら、両親はインドに戻る。

けれど――眞祥は、日本に残る。

この辺りは、本条家の本社が移転して来たこともあり、地価が高くて住めない。

でも、これから姉が入る場所であり、義兄が眠っている墓地の近くは、墓場が近いということもあるのか、余裕でアパートを借りられた。

それに、もう編入試験も受けていて、こちらの高校に通うことにもなっているのだ。

「本当は、姉さんがこれ以上身体を悪くする前に、支えるつもりだったんだけど……。ごめんな、姉さん。俺、何にもできなかったよ……」

眞祥は、はあと息をついて立ち上がった。

自分は、意気地なしだ。

姉のことを忘れた千紗の前に、姿を現す勇氣はない。

でも、忍耐はある。

姉夫婦の墓場の近くにアパートを借りたのも、姉と義兄の命日は、ずっと墓の前で待っていてようと決めたからだ。

随分と消極的だが、『彩音千紗』の存在を示す物は、既に自身の記憶しかないのだ。

もし、これが自分の妄想だったらと考えると、尻込みしてしまう。こんなに自分が臆病者だったなんて、初めて知った。

眞祥は自嘲の笑みを浮かべると、勢いを付けて立ち上がった。

あと一、二週間もあれば夏休みが明け、眞祥は正式にこちらの高校に入学することになる。

一人暮らしに不安がないと言えは嘘になるが、今までだって、ほとんど一人で暮らしていたようなものだ。

それに、いつか千紗が墓を訪ねてくれると……そう、眞祥は信じていた。

勿論、確証はない。

けれど、いつになるかは分からないが、姉の為にも、決して諦めることはしない。

——記憶の中にしかない彼女と、再び見える^{まみ}ことを。

（終）

―無自覚の新しい世界―

小雪がばらばらとちらつく曇天にも拘らず、そこにいる少年少女達は、皆笑顔だ。

それもそうだろう。

今日は入学式なのだ。

しかも、この学校――嶺郷れいごう高校は、毎年倍率が二倍前後の上に偏差値も七十を超える難関校であり、進学校でもある。

またそれだけではなく、部活動にも熱心で、文化部では吹奏楽部が、運動部では陸上部と男子バスケットボール部が、毎年連邦大会やユーラシア大陸大会に出場するなど、かなりの好成績を収めていた。

そんな学校なので、彼らがここに入学できたということに胸を躍らせ、華やかな高校生活を夢見るのは至極当然のことと言える。

けれど、そこに一人、しっかりとした表情をした少女がいた。

他の生徒のように浮かれた表情を見せず、部活の勧誘をしようとチラシを押し付けて来る上級生を適当にあしらって、彼女は昇降口に辿り着く。

そこで自分のクラスを確認すると、淡々とした様子で、彼女は校舎の中に入って行った。

「――じゃあ、これで休み時間だ。休憩が終わった後、部活の登録のやり方とか、みんながやりたがってるバイトの注意事項とかがあるからな。しっかり聞けよ。それから、委員会決めもするから、どんなのに入りたいか考えておくこと。以上！ 休み時間にしろ」

教師の言葉に、生徒達は少し身動いた後、周囲とぎこちなく会話を交わし始める。

入学式の翌日、改めてクラスに集まって自己紹介をした彼らは、

それぞれ趣味や入りたい部活など、共通の話題を見付けて話し始めていた。

千紗^{ちさ}は、それを教室の後ろの方から、つまらなそうな顔で見っていた。

周囲の子達は、携帯のサイトで既に知り合っていたのか、千紗が入る隙間がないのだ。

二番目に近い所にいる子達は、一見真面目そうにも見えるが、よく見ると校則違反のアクセサリを付けていたり、明らかに髪の毛をいじっていたり、スカート丈がかなり短かったり、耳にピアスの穴が開いていたり――正直、友達になりたいとは思えなかった。

前を見ているようで、ぼんやりとしていた千紗は、いきなり机に手を叩き付けられて、驚いて顔を上げた。

一瞬、こちらが気に食わないのかと思ったが、どうやら勢いが良過ぎただけのようで、彼女は少し頬を赤くしている。

けれど、果敢にも声を掛けて来た。

「ねえ、あたし澤本藍南^{さわもとあいな}って言うの。本条千紗^{ほんじょう}、だよね？」

「そう……だけど？」

千紗が目を瞬くと、藍南はにこっと笑って言った。

「ねえ、千紗って呼んでもいい？」

「あ、別にいいけど……」

「じゃ、あたしは藍南って呼んで？」

「うん。分かったわ」

すると、何故か両手をがしっと掴まれた。

「え、えっと……何？」

「ねえ、千紗！ あたしと一緒に部活見学行かない？！
目は爛々と光っていて、正直怖い。

「はい……？」

千紗は、思わずぽかんと口を開けてしまった。

「あたしの中学校、吹奏楽がなくて入れなかったんだよね。でも、すっごく入りたくってさ！ でも、ちょっと一人で音楽室に行くの

怖くって……ねえ、さっきの自己紹介の時、文化部に入りたいけどまだ決めてないって言ってたでしょ？　ね、あたしと一緒に来てくれないかな？　一回だけでいいから！　お願い！」

そう言って顔の前で手を合わせる藍南に、千紗は狼狽した。

「え、や、その……別にいいけど。でも、確かこの学校の吹奏楽って、結構優秀だよね？」

優秀ならば、休みの日も部活が入っているだろう。

それならば、なるべく家に居着きたくない自分にとっても好都合だ。

そう思って口にしたその言葉は、藍南に思わぬ反応をさせた。

「だから、初心者お断りの部活かも知れないでしょ……？　それだったら、諦めなきゃ駄目だしさあ」

そう言って床に膝を付く藍南に、千紗は思わず立ち上がった。

「や、ちょ、藍南？！　大丈夫っ？！」

「だってさ、大抵こういう強い所って、経験者求む！　なんだよ？　『経験ないのはちょっと……』って言われたら、もうお終いなんだよ！　もう怖くってさあ……」

見ず知らずの自分に声を掛ける勇気があるのなら、部活動見学も行けるのではないかと思いながら、千紗は頷いた。

「分かった。一緒に行く」

「ほんとっ？　ありがとう！　恩に着るよー！」

そう言って笑う藍南に、千紗は苦笑した。

「はい、じゃあここに名前書いてね」

そう言って、優しいに笑って紙を差し出す先輩に、千紗は少しだけほっとした。

「えーっと、千紗ちゃんと藍南ちゃんね。二人とも、吹奏楽の経験はある？」

その言葉に、千紗は首を振ったが、藍南は曖昧に頷いた。

「えっと……その、叔母がクラリネットをやっていたので、小学生の頃に吹かせてもらってました」

「あ、じゃあ音階とかは大体憶えてる？」

「はい。あと、クラリネットの楽譜も読めます」

「じゃ、クラリネット志望ってことでいいよね？　里依ちゃん！」

藍南ちゃん宜しく！」

「はーい、先輩」

そう言うと、里依は藍南を連れて音楽室を出て行った。

楽器経験がほとんどなくても追い払われなかったことに、藍南はどこかほっとした表情をしている。

「じゃあ、千紗ちゃん。吹奏楽の経験はないってことだけど、楽器のことは分かる？」

「はい、それは大丈夫です。中学生の時、何回か見学に行ったりしましたし、音楽の授業でも習ったので……」

「そっか。じゃあ、何の楽器やりたい？」

千紗は、少し考え込んだ。

あの時、自分は何の楽器を体験したのだったろうか。

（確か、お父様に相談した時、フルートとかじゃないと駄目って——ううん、違う。これは別の人……あれ？　あたし、誰かと一緒に見学に行ったの？　一人——いいえ、二人？　あれ？　そもそも、あたし……何の楽器をやったかったんだっけ？　確か金管楽器で……そう、ホルンだった気がするし、ホルンにしようかな）

「えっと、じゃあホルンで」

途端に、彼女の目がきらりと光った。

「了解。じゃ、えーっと、あいつどこ行った？　あ、いた！　亮ちやーん！　こっち！」

「ちよっと玲央南先輩！　『亮ちゃん』って呼ぶなって何回言ったら分かるんですか！」

彼は顔を真っ赤にして怒るが、玲央南は笑って軽くあしらった。「はいはい。それよりも、ホルン志望の子よ。初心者だから、そこ

んとこ宜しく」

「あゝ、じゃあ、先輩が連れてけばいいじゃないですか。俺、受付やりますから」

「ちよつと亮ちゃん、何サボろうとしてるの？ 初心者に教えるのが面倒だって言うんじゃないでしょうね」

「えゝ、だって、指を教えるのはいいんですけど、楽譜の読み方が面倒臭いじゃないですか。だってうちの学校の楽譜って、ほとんどエフで読むんですよ？ 読み方が分かんなくても大変だし、ピアノの楽譜の読み方に凝り固まれてたら、もっと大変じゃないですか！」

「いいから！ 四の五の言わない！」

「はゝい、分かりました」

そう言うと、彼は千紗に疲れた笑いを見せた。

「んじゃ、こっち来て」

彼に促されて音楽室を出ると、彼は自己紹介を始めた。

「俺、二年の加科亮太郎^{かしなりようたろう}。間違っても『亮ちゃん』なんて呼ぶなよ」
「分かりました。そっか、亮太郎だから『亮ちゃん』になるんですね？」

にっこりと笑って言うと、亮太郎はうつと胸を押さえた。

「今の、結構クリーンヒットだったぞ、えっと……」

「あ、千紗です」

「そっか、千紗ちゃんか。宜しくな」

「はい、亮ちゃん先輩」

駄目押しのように笑って言うと、亮太郎は遠い目をした。

「……うん、そっか。君も玲央南先輩と同類か……。えっと、ホルンは俺の他に、部長の玲央南先輩と、もう一人いるから。一応、今年は二人取る予定。えゝっと、君、初心者なんだよね？」

「はい。でも、一応楽譜は読めます」

「じゃあ、何かやってたの？」

「はい。ピアノをちよつと」

「うわああゝ、来ちゃったよこのパターン！ あのね、確かに楽

譜自体は同じなんだよ。でも、ドの位置がドの音じゃないんだ、ホルンの楽譜。エフー―えっと、ファの音の位置にドの音が来るっていう、ややこしい読み方をするから、固定概念は全部捨てちゃってね！」

自棄糞のように言う亮太郎に、千紗は若干顔を引き攣らせた。

「分かりました。あと、あたし、ドイツの音名も分かるので大丈夫です。それにあたし、ピアノのレッスンはサボりまくっていたから、結構曖昧なので……」

「ああうん、良かったよ！ あ、ここだよ、今日ホルンが使わせてもらってる教室！ おうい、蓮香！^{はすか}追加だよ！」

すると、髪をポニーテールにくくった女子が振り返った。

「ん？ ああ、亮ちゃんも来たの？ ねえ亮ちゃん、この子上手いよ！」

「だから亮ちゃんって呼ぶな！ で、そちらはもう一人の体験者？」

「そうだよ。香麻君。^{こうま}中学校でもホルンやってたんだって」

「いや、その、先輩？ でも、俺のいた学校、かなりの弱小校で、楽器もボロボロだったんですけど……」

「だから、そんな環境でやってたのに上手いんだって！ あ、そちらが追加の子？」

「うん、初心者だよ」

千紗は亮太郎の後ろから顔を覗かせると、蓮香の隣で楽器を抱えている人物を見て、目を丸くした。

「あれ？ 香麻？」

「ん？ あれ、千紗？ え、でも千紗って、吹奏楽じゃなかったよな？」

「うん、そうだったけど……」

千紗は、驚いて目を瞬いた。

「でも香麻って、そんなに頭良かったっけ？ この嶺郷高校にいること自体がびっくりなんだけど」

「……遠慮なく言うよなあ、お前。確かにぎりぎりで合格したけど

さあ」

「あれ？ 知り合いだった？」

蓮香に言われ、二人は頷いた。

「中学校の時の同級生です」

「ふーん、そっかあ。じゃ、亮ちゃん。あと宜しく！ 香麻君、私がいなくても大丈夫みたいだし。上で先輩の手伝いやってくるから！」

「あ、おい、ちょっと蓮香！」

「じゃ、頑張ってるね」

そう言っただけで、言う間に教室から姿を消した蓮香に、亮太郎はがくりと肩を落とした。

「……そうだなあ、俺、いつもこういう貧乏籤を引かされるんだよなあ……」

「あ、じゃああたし、香麻に教えてもらいますから。いいよね、香麻？」

「ああ、別にいいけど」

「じゃ、亮ちゃん先輩も上に行ってもいいですよ？ ね、香麻？」

「ああ、うん。えっと、亮ちゃん先輩？ 心配しなくても大丈夫ですよ？」

悪戯っぽく笑う二人に、とうとう亮太郎は天を仰いだ。

「そうか……俺の周りの人間は、みんな玲央南先輩と同類か……」

そう言うと、亮太郎はふらふらと部屋を出て行った。

残された千紗と香麻は、顔を見合せて吹き出す。

「それで？ なーんで千紗お嬢様は、わざわざ吹奏楽部に入りたいんだ？」

その言葉に、千紗はむくれて頬を膨らましながら香麻の背を叩いた。

「ちょっと、それやめてよ！ その呼び方！ それに、あたし達の学校の吹奏楽って、あんまり評判良くなかったじゃん？ 夜遊びして、警察に補導されたりしてさ。だから、お父様が許してくれな

ったの。あたしは入りたかったのに」

千紗はそう言うと、乱暴に椅子へ腰掛けた。

「でも、体験するのは自由でしょ？　だから、中学校の時点で、音名とか指遣いとか、もう憶えちゃったの。まあ、あやふやな所もあるけどさ。それで？　香麻って、ホルンやってたんだ？」

「ああ。ほんととは他の楽器が良かったんだけど、その先輩が問題起こしてる人だったから、ホルンにしたんだ。……千紗の親父さんが反対したのも当然だよ。悪い人って、本当に悪かったんだからなあ。まあ、俺みたいに真面目なものいたけど、悪い奴がいるとそっちに目が向いちゃうだろ？　こっちは踏んだり蹴ったりだ。まあ、ここはまともだし、心配しなくてもいいと思うぞ？」

「それは分かってるよ。だって、この辺りだと強豪校でしょ？　ここ。それに忙しいし！　あたし、あんまり家にいたくないからさあ。それに、吹奏楽ってお金掛かるでしょ？　運動部は駄目って言われているから、忙しくってお金が掛かる所にしようと思ったの」

千紗が肩を竦めると、香麻は苦笑した。

「変わんないな、お前。……それで、何で『金が掛かる』のが重要なんだ？　本条家だったら、娘を吹奏楽部に参加させるどころか、むしろ自腹でオーケストラも作れそうだけど？」

その言葉に、千紗は頬を膨らませた。

「そんなの、嫌がらせに決まってんじゃない！　蚊に刺されたところか、そよ風が吹いた程度の影響しかないっていうのは分かっているけど、ちよつとはこっちの胸もすくってもんだよ」

千紗はそう言うと、置かれていたホルンを手に取った。

「さてと！　あたし三年ぶりだから、結構忘れちゃってると思うんだ。だから、ご指導宜しくお願いします！」

千紗がふざけて言うと、香麻もにやっと笑って言った。

「おう！　徹底的にしごいてやるよ！」

「ちよつと、こっちは初心者なんだから、手加減してよね？」

「まあ、そこは考えとくよ」

二人は、顔を見合わせると吹き出した。

「あ、いた！ 千紗く、ありがと！ 一緒に付いて来てくれて！」
部活が終わる時間に、千紗が音楽室に戻ると、クラリネットを抱えた藍南に飛び付かれた。

「ちよっ！ 危ないでしょ？！」

千紗は狼狽えながら、慌てて藍南を引き剥がす。

「結局、あたしが一緒にいった意味、あんまりなかったみたいだけど……それで？ ここに入部するの？」

「うん！ 先輩達もみんなレベル高くて、付いてけるかちよっと心配だけど……でも叔母さん、一応音楽家だから、休みの日にでも特別レッスンやつてもらって頑張ろっかなって思うの！」

やる気と向上心に満ちた言葉に、千紗は苦笑した。

「そっか。あたしも、多分入ると思う。できればホルンがいいけど……駄目だったら、他の金管楽器かな？」

「へっ……あ、玲央南先輩！」

藍南が大きく手を振ると、恐らく副部長なのだろう女生徒と頭を付き合わせて話していた玲央南は、振り返ってにっこり笑った。

「あら？ 入部決定者でも引っ張って来たの？」

「はい！ この子も入ります！」

「あ、ちよつと藍南、勝手に進めないでよ！」

確かに入ろうとは思っているが、今すぐ決めようと思っていた訳でもない。

「え？ だって、どうせ入るでしょ？ だったら早く手続きしとした方がいいよ！」

「そりゃあそうだけど……。はあ、もういい。先輩、あたしも入ります」

「よっしゃあ！ しーちゃん！ 手続き宜しく！」

「はー、全く、レオったらいつもこっちに雑用押し付けるんだか

女って初心者よね？」

「はい。そうですけど……」

「えっとね、吹奏楽って、凄いお金掛かるの。別に楽器は買わなくてもいいんだけど、最低限のお手入れ用品とか、チューニング用のチューナーも必要だし、大会に出たり楽譜買ったり、楽器の修理をやったり……結構出費が多いの。勿論学校からも貰えるんだけど、毎月部費も徴収しなきゃやってけないくらいなのよ。それで……もし、お金がなくて携帯端末が買えないなら、あんまり吹奏楽はお勧めできないわ」

その見当違いな発言に、千紗は何とか吹き出すのを堪えた。

確かに、もしお金がなくて端末が買えないというのであれば、何かと出費のかさむ部活に入るのは躊躇われるだろう。

けれど、そんな心配は、ただの取り越し苦労でしかない。

「あ、先輩。そいつにその心配は無用ですよ？ そいつ、『お嬢様ですから』

背後から掛かった声に、千紗は振り返って睨んだ。

「ちょっと香麻、『お嬢様』って呼ばないでって何回言わせるの？」

「え？ だって、お前がお嬢様なのは事実だろう？ 家に召し使っているだろうし、そいつらからも『お嬢様』って呼ばれてるんだろうし？ だったら俺に呼ばれるのを嫌がる理由が分かんねえな」

「だから、それが嫌なんだってば！ 第一同級生から『お嬢様』呼ばわりなんて、ぞっとするよ。ほら、鳥肌立ってる！」

千紗はそう言いながら、腕をさすった。

「え？ 千紗って、お嬢様だったんだ」

隣にいた藍南が目を瞠るのを見て、千紗は藍南を睨む。

「別に、あたしがお金を稼いでる訳じゃないし。それに、父親が過保護すぎるし、いいことって言えばお金に制限がないことぐらいだもん。あとはみーんな制限付けまくりだし。携帯端末だって、うちにお金がないからじゃなくって、あたしを束縛する為に持たせてくれてないんだよ？ あゝあ、普通の家に生まれたかった」

千紗は投げ遣りに言うと、汐華が渡したプリントへ乱暴に署名した。

「先輩、どうぞ」

それを受け取った玲央南は、恐る恐る口を開いた。

「あ、あのさ、勝手に部活に入っても大丈夫なの？ そんな家だったら、後から駄目って言われたりとか……」

「あ、それは大丈夫です。運動部じゃなきゃいいってお墨付き貰ってますから。文化部でも、忙しくて大変な部活があるっていうの、多分忘れてるんだと思いますけど。でもまあ、一度言ったことを引っ繰り返すのは嫌がる人なので、大丈夫だと思いますよ？」

あっけらかんと言った千紗に、玲央南は引き攣り気味の笑みを浮かべた。

「そっか……うん、大丈夫ならいいんだ……って、え？」

玲央南の表情が、瞬時に凍り付いた。

「あ、あのね、千紗ちゃん。ここに『本条』ってあるんだけど……ま、まさか、あの本条家？ えっと、ただの同姓同名よね？」

その言葉に、千紗は目を逸らした。

「……すみません、その本条家です……」

すると、がくりと玲央南が膝を付いた。

「あ、先輩？」

「ふふ……本条グループって、うちのパパの勤め先だわ……。あ、確かにパパ、総帥が娘を溺愛してるとか何とか言ってたような……。うん。それだったら、お金の心配なんてないわよね……。笑えるわ……。はは」

醒めた顔で笑い続ける玲央南に、思わず千紗は一步引いた。

「うん、そっか……。確かに、お金持ちなら、部費の心配はいらないわよね……。でも、携帯がないと不便だわ」

そう言って眉を寄せる汐華に、千紗は思わず感心した。

自分で言うのも何だが、『本条家』を知らない人は、この地球連邦にほとんどいない。

明らかに上から数えた方が早い、大財閥なのだ。

だから、玲央南の反応は『普通』と言ってもいいのだが、汐華のこの反応は、ちょっと予想外だった。

「あ、えっと……家の電話じゃ駄目ですか？」

「駄目ね。この人数だと、電話よりメールだし。……ねえ、どうしても買ってもらうのは無理？」

「無理……だと思えます」

「そっか。……じゃ、バイトしない？」

その言葉に、千紗は目を瞠った。

「え……でも、部活は……」

「ああ、それは大丈夫。うちって進学校でしょ？ だから、土日のどっちかに丸一日か、両方の午前だけか午後だけ、休みを取らなきゃ駄目なの。あと、平日も一日部活なしの日を作らなきゃいけないのよ。つまり、その日は勉強しろってこと。まあ、その日に遊んでる人もいるし、楽器を持って帰って練習してる人もいるしね。その日にバイトしない？ お金を貯めれば、携帯も買えると思うのよね」

きらきらと、汐華の目が光っている。

「えっと……それって、どんな感じのバイトなんですか？」

「ストリートミュージシャンよ。つまり、アマチュアの路上ライブを手伝ってほしいの。まあ、時々だけどっちかい所を借りて、屋内でのライブもやるんだけどね」

「……トランペットとかならともかく、あたし、ホルン志望なんですけど……？」

千紗が訝しげに汐華を見上げると、汐華はにっこり笑って言った。

「大丈夫。貴女には、キーボードをやってほしいの。今までやってた子が、ちょっと辞めちゃってねえ……。貴女の気が済むまでいいから、お願い！ むしろ手伝って下さい！」

「わ、分かりました！ その、休みの日だけで大丈夫なんですよね？」

「勿論！ 私達も、それぐらいの日しか動けないし……。って言う

か、今更だけど、キーボード弾ける？」

心配そうな顔で覗き込んで来る汐華に、千紗は吹き出してしまった。

「大丈夫です。あたし、前にちよっとピアノをやったので、練習すれば勘も取り戻せるだろうし、多分いけますよ」

「そう？ 良かった。助かったわ」

そう言って笑う汐華に、千紗も笑みが零れて来た。

「でも……それで、お金貯められるんですか？」

「平気よ。結構私達のバンドってファンが多いし、キーボードは備品としてあるし」

少しほっとした千紗は、小さく溜息をついた。

千紗が家に帰ると、玄関で耀太ようたが仁王立ちをしていたので、思わずよっとして立ち竦んでしまった。

「お、お父様？」

「千紗！ お前、今何時だと思っている！ もう七時を過ぎているのだぞ！」

そう怒鳴る耀太に、千紗は溜息をついて瑠璃るりを見た。

「言ってなかったの？ お母様。あたし今朝、今日は部活見学があるから遅くなるって言ったよね？」

「ええ。勿論聞いていたわ。でも、言う暇がなかったのよ」

和やかに会話を交わす母娘に、父が額に青筋を立てる。

「……それでも、遅くなるならそれで、連絡の一つも入れるべきだろう！」

「え、そんなの無理だよ。あたし、携帯端末持っていないもん。あ、それともお父様、買ってくれるの？」

「誰が買うかつ！」

「じゃあ、連絡入れるなんて無理じゃん」

千紗はそう言うと、溜息をついてダイニングへと急いだ。

「それよりもあたし、お腹空いちやった。もうご飯できてる？」

「ええ。あとは私達が席に着くだけよ」

瑠璃がそう言うと、千紗はぱっと顔を明るくさせた。

「じゃ、早く食べよう！ あ、それと、吹奏楽に入部したの」

その言葉に、耀太がぎょつとして凍り付く。

「お、前……！ 忘れたのかっ？！ 中学校の吹奏楽が、どんなに悲惨な部活だったのかっ！」

「だから、それはあの学校だけだってば。嶺郷高校の吹奏楽って、この辺りでも有名なくらい吹奏楽が強いんだよ？ 大陸での大会に進出するくらい普通のレベルなんだってば」

千紗は顔を真っ赤にする耀太を無視して、勢い良く食事を掻き込む。

ほんの少しでも長く、耀太と一緒にいたくないのだ。

高校受験で父とぶつかってから、千紗と耀太の仲は決定的に悪くなった。

私立の学校に通えとか、婚約者候補と会えとか、千紗には納得できないことばかりを強制して来るのだ。

（まあ、あたしには好きな人はいないけど……でも、あいつらは気に入らないし。そもそもあたし、初恋って……あれ？ ないよね？ でも、あったような気もするし……ん？ まあいいか）

千紗が食事を掻き込む間に、瑠璃が耀太を慰めていた。

……母には、感謝していた。

何しろ、自分と父が衝突するたびに、おっとりと父を絡め取ってあやふやにさせてくれるのだ。

けれど、母とも合わないことがある。

母は、自分が父と上手く行ったから、婚約者候補のことには賛成なのだ。

（いくら自分が婚約者と恋愛できたからって、それをあたしにも押し付けないでほしいよ、ほんと……）

千紗は内心溜息を吐くと、席を立った。

父のせいで、すっかり早食いが身に付いてしまったのだ。

その時になって、ようやく耀太は落ち着いたらしく、既に食べ終わった千紗を見て目を瞠っていた。

「じゃあ、あたしはご飯も食べ終わったから、部屋に戻るわ」

「ああ、ちよつと待って、千紗」

「……何？ お母様」

「貴女、何の楽器をやるの？ 娘が楽器を演奏するって、何だか想像するだけで楽しいわ」

にっこりと笑って言う瑠璃に、千紗は毒気を抜かれて脱力した。

「……まだ本決まりじゃないんだけど、一応ホルン希望」

「そう。頑張ってね」

「……うん」

千紗は小さな声で返事をする、階段を上がり自室に戻った。

途端に、千紗の顔が歪む。

そのまま寝台の上に身を投げ出し、枕元に置いてあったオルゴールを持ち上げた。

——千紗は、赤が好きだ。

赤や黄色などの暖色系が好きで、青などの寒色系は、見る分にはいいのだが、あまり持ちたいとは思えなかった。

でも、このオルゴールは、青と白を——典型的な寒色を基調としていた。

しかも、これは特注品であり、おまけに千紗をイメージして作られたとも言われているのだ。

これを作った人の目は、節穴ではないかと思ってしまう。

寒色を基調としている上に、そのデザインは『繊細』としか言いようがない。

もし、これが子供の頃に作られたというのなら納得するが、このオルゴールは、千紗が小学校六年生の時の誕生日プレゼントだったのだ。

けれどその時、自分が不満を覚えた記憶はない。

綺麗な物だと感動した記憶があるのだ。

初めて『自分に合わない』と思ったのは、それから一年以上が過ぎた頃——確か、中学校一年生の秋頃だ。

その時間の流れが、どうしても腑に落ちない。

それに、他にもある。

千紗は身を起こすと、部屋を見回した。

家具やカーテンなどは、ここ数年で入れ替えていた。

つまり、それ以前の物は、千紗にとって気に食わない物だったのだ。

青、青、白、繊細なデザイン——

「何でだろ……あたし、何でそんなのを選んだのかな……」

この部屋は、五年生で引っ越してくる時に千紗が選んだのだ。なのに、気に食わない。

その違和感と怖さは、言いようがない。

千紗の周りは、そんな物で一杯だった。

それも、ある時期を過ぎてから……そう、中学一年の、夏の終わりから、それが始まったのだ。

一体、その時期に何があったのだろう。

けれど——

「……………」

千紗は、無言でオルゴールを開けた。

途端に、軽やかな音楽が流れ出す。

カノン、もしくはパッヘルバルのカノン。

正式名称は、『三つのヴァイオリンと通奏低音のためのカノンとジグ ニ長調』第一曲と言うらしい。

このやけに長ったらしいタイトルは、今から千五百年以上も前の時代の人達にとっては普通だったようで、その時代のいわゆる『クラシック音楽』は、正式な名前ではなく、『第九』や『アリア』、『カノン』や『運命』のように、短い通称で呼ばれることが多かった。

このカノンは、最初はどこか物哀しげな旋律だが、サビの所まで来ると、どこか軽やかな印象が強い。

その時代の音楽はどこか重厚感が強くて、楽しげな物は少ない。だからなのか、カノンの主にサビの部分は、色々な所で耳にする機会が多かった。

でも、このオルゴールには、最初から最後までカノンが収められていた。

けれど、サビに到達するその前に、オルゴールは力尽きて鳴らなくなる。

何とも時代的だが、このオルゴールはゼンマイで動いているのだ。「何であたし……この音楽にしたんだっけかな……」

確か、その時に習っていたピアノの曲がこのカノンとG線上のアリアで、どちらにしようか迷っていた記憶がある。

……でも、今、そんなにクラシックは好きではない。

どちらかと言えば、現代音楽の方が好きだ。

カノンは、このオルゴールに合った曲だとは思うが、曲もオルゴールも、千紗の好みと合致しないのだ。

けれど、これだけは違う。

千紗は、音のしなくなったオルゴールの中から、ビーズで作られたアクセサリーを取り出した。

稚拙な作りのそれは、明らかに市販品ではない。

けれど、どこか温かみのある物である上に、使用されている色は、濃い赤紫と薄桃色を上手く組み合わせていて、千紗の好みと合っていた。

外に付けて出ることはないが、それでもこれは、千紗の一番のお気に入りなのだ。

——でも、一体どこでこれを手に入れたのか、千紗は憶えていない。

「……っ」

思い出そうとすると襲い来る痛みに、千紗は頭を抱え込んだ。

その痛みの中で、何かが脳裏をよぎる。

柔らかな質感の茶色の髪、そして、癖っ毛の栗色の髪――。

逆光の中、唇が動いているのが見える。

……けれど、それ以上は思い出せなかった。

千紗は、オルゴールの螺子を巻いた。

すると、途切れた所から、すぐにサビが流れ出す。

軽やかな音楽は、けれど、どこか淋しげでもある。

あまりにも有名なその旋律は、好む者も多い。

『私、これが好きなんだ』

千紗は、ぱっと顔を上げた。

「今……何か……。あれ、誰……？」

けれど、誰だったのか、思い出せない。

千紗は顔を歪めた。

（確か、あたしが今まで親しく関わって来た中で、こういうことを
言いそうなのって、眞祥まひらかな……。でも、眞祥って紅茶狂だけど、
そんなにクラシック好きでもなかったような……。じゃあ、双葉ふたばか
若葉わかばなのかな？ あのと二人は内親王だし、あり得なくはないだろう
けど……）

それでも、やっぱり違うのだ。

この中の、誰でもない。

（じゃあ、一体誰なの……。？ どうして……。？ あたしは、一体何
を忘れてるの……。？）

常に身を付いて回る違和感と不安感。

多分、自分は記憶を喪っているのだろう。

そう最初に思ったのは、一体いつだったのだろうか。

けれど、周りは何も言わない。

もし敢えて黙っているのであれば、それを感じるはずだし、黙っ
ていないのなら、そのことを口に出しているはずだ。

どちらでもないこの現状は、千紗に嫌悪と惧れをもたらした。

「あたしって……。一体、何なんだろうなあ……。」

でも、その違和感は、喪った記憶を取り戻さない限り、決してなくならないだろう。

そして、取り戻せる可能性は――多分、ゼロに近い。

だったら、今を楽しまないと損だ。

千紗はベッドから飛び下りると、鞆を開けた。

まだ入学したばかりだというのに、もう既に宿題が出されているのだ。

さすが、進学校という能書きは伊達ではない。

学校に付いて行けなくなれば、父から厭味を言われるだろうし、千紗も悔しい。

だから、勉強を頑張って、部活も中学校からやっている人達に追いつけるよう猛練習し、汐華から頼まれたバンドも精一杯やらなければならぬ。

やるべきことは、山のようにあるのだ。

こんな所でうじうじ悩んで立ち止まっているより、今を一生懸命頑張った方が性に合う。

千紗は取り出した宿題を机の上に置くと、ひっそりと笑みを浮かべた。

（終）

―牢獄の中の宿敵（ライバル）―

ポロン、ポロンと、雅やかな豎琴の音が、狭い室内に響く。

それと、どこか苛々とした、こつこつという足音も響く。

けれど、豎琴をつま弾く人物は、歩き回る人物を歯牙にも掛けず、うつとりとした表情で豎琴を奏でる。

やがて、堪忍袋の緒が切れたのか――

「ノワール殿っ！　そうのんびりとなさっておられる場合ではないぞっ！　こうしている間にも、一体外がどうなっているか、先王陛下の御容体が如何様なのか、貴様は心配ではおらぬのかっ！」

いきり立った言葉に、ノワールは煩そうに眉をひそめた。

「全く、そういきり立つな、フォリュシエア殿。耳障りだ」

「みっ……耳障りだとっ?!」

「そうだ。そう騒いでいては、私の豎琴の音が聞こえぬではないか」
そう言って、ノワールは豎琴を掻き鳴らした。

「な、何っ……!」

顔を真っ赤にしたフォリュシエアは、怒りのあまりに言葉が続かないようで、まるで酸欠の金魚のように口をパクパクさせている。

「それに、ここで我々が騒いだとして、どうしようもない。そもそも、我らに掛けられておる嫌疑は『先王陛下暗殺未遂』だ。王家に関する犯罪は、宗賽省が裁判を受け持つ慣例。……よりもよって、あの省なのだ。どうしようもない」

ノワールは、それまでの優雅な様子をかなぐり捨て、吐き捨てた。

「……ノワール殿？」

ノワールの変わりように途惑ったフォリュシエアは、眉根を寄せた。

「何故、宗賽省がいけないのか？　宗賽大臣は、あのシユール殿だぞ？　あの温厚なシユール殿であれば、公正な裁判が期待されよう。そもそも、我らの嫌疑はただの冤罪なのだから」

そう言つて胸を張るフォリュシエアに、ノワールは溜息をついた。

「……御主は、本当に阿呆としか言いようがないな」

「何を抜かすかつ！」

肩を怒らせてノワールを睨むフォリュシエアに、ノワールも豎琴を置いて立ち上がると、面と向かつて言い切った。

「何度でも言うわ。御主は阿呆だ。大馬鹿者だ。一体誰が、我らを陥れたのだと考えておるのだ？ シュールに決まっておるだろう」

「何、を……下らぬ、戯言を……！」

フォリュシエアは、蒼褪めた顔でノワールに詰め寄った。

「戯言ではない。先王陛下は、陛下を大変可愛がっておられる。それ故、一時期手元から離された程だ。無論、おうだいじん 鴛大臣殿下も実子であることに違いはないし、愛情も注がれておられたことではあろう。

だが、先王陛下が陛下そひよみ寄りだと思われてしまうのに無理はない。その先王陛下が総票会そひよみかいに出席されるか否かということは、投票の結果をも左右するだろう。出席なされば、陛下に有利に。欠席なされば、陛下に不利に」

その言葉に、フォリュシエアは眉をひそめた。

「確かに、先日の総票会に、先王陛下と由梨ゆり亜あし妾は御出席なさらなかったが……まさか、そのような下らぬ理由で、先王陛下を暗殺しようと思ひ立ったと？ それでは、いささか無理があるのではないか」

「まあ……貴殿の言う通り、確たる理由は掴めないが……自身が権力を握りたかった、もしくは先王陛下への恨みつらみが溜まっていたと考えれば、納得はゆくだろう。……けれど、シュールが先王陛下を暗殺しようとしたのは事実だ。少なくとも、奴が毒見役をする中級侍女を魔力で操って毒を盛り、その侍女を拳銃自殺させたのは間違いない」

ノワールは吐き捨てると、どさりと椅子に腰掛けた。

そのノワールの様子に、フォリュシエアは訝しげに訊ねた。

「だが……ノワール殿。それを、貴殿は如何様にして知り得たのだ

？ 証拠がないだろう」

ノワールは、暢気なことを言うフォリュシエアに対し、強い怒りが込み上げて来た。

けれど、ノワールは努めて怒りを押し殺す。

彼は、何も知らないのだ。

「……証拠ならば、去解鏡きょかいきようを視ればよい。私は、そうやって真実を知り得た」

簡潔な言葉に、フォリュシエアは眉を寄せた。

「しかし、貴殿にはその資格があるまい。あれを視るのは、花鶯省かおうしやうだぞ。国内に去解鏡があるのも、また花鶯省のみだ」

「……そうだったな」

ノワールは、思わず目を逸らした。

確かに、今自分は、うっかり機密事項を喋ってしまった。

けれど、息子が自分の指示を守ってくれているなら、もう家に去解鏡はないはずだ。

だったら、今ここで話しても平気だろう。

「……実は以前、陛下が去解鏡を御創りになられてな……」

「はあっ?!」

さすがにフォリュシエアも、驚愕のあまりに目が飛び出そうな程に見開かれている。

「それで、私は真実を見た。今頃は、シャーウィンが――息子が、壊してくれているはずだ。去解鏡は、割れてしまえばただの鏡だからな」

「し、しかし……その、陛下が御創りになられたという去解鏡のことはさて置き、公式な去解鏡であれば、既に花鶯省が視ておるのではないか？」

「馬鹿を申せ。それならば、我らは既に釈放され、代わりにシユールが投獄されておるわ」

ノワールは舌打ちを洩らすと、盛大な溜息をついた。

「な、成る程……そうか……。しかし、先王陛下の暗殺未遂などと

いう大事、去解鏡が使用されないとは考えられぬが……」

「どうせ、花鶯省の人間を買収したのだろう。花鶯省は役職柄、貴族出身者が多い。勿論、去解鏡の担当者にも、シユールのウィレット家や、その縁戚がいることだろう。そうなれば、より操作は容易い」

ノワールは吐き捨て、長椅子に身を投げ出した。

「……大方、私の想像は当たっているだろうな。だからこそ、我らはここに閉じ込められたままだ。——恐らく、一生な。だからこそ、謀反を起こしたと思われておるにも拘らず、二人で三部屋も使える好待遇なのだろう」

「いや、しかし……ノワール殿。貴殿の言うことには、一理ある。一理あるが……確証はない。そうだろう？ 全て、状況証拠に過ぎない。貴殿は去解鏡を視たと言うが、私にその真偽を測ることもできぬ。それで、一体どうやって貴殿を信じろと？」

フォリュシエアに睨まれて、ノワールは苛立たしげに溜息をついた。

「何も私は、信じろとは一言も言っておらぬわ。ただ、私の言っていることは、あながち間違いないだろう。先王陛下が意識不明となられ、我らが捕らえられて、もう一年近くが経つだろう？ あの総票会が行われたのが五月、今は、もう年が明けて二月だ。いくら取り調べに時間が掛かって、これ程長い期間、一つ所に拘束するというのは可笑いだろう」

「それは……」

言い淀むフォリュシエアを見もせず、ノワールは卓に肘を付き、鉄格子の嵌められた小さな窓から外を眺めた。

「きつと、もう我らの刑はほぼ確定しているだろうな。そう遠くないうちに、結果が伝えられるはずだ。終身刑か、重くて——死罪か。どちらかだろうな。我らがここから出られる時は、死刑を受ける為か、死ぬ時だろう。……それか、先王陛下が御目覚めになり、我らの冤罪を晴らして下されば……」

その時、壁に埋め込まれていた端末が突如として起動し、二人とも驚いて身を起こした。

「何……？」

そして、そこに映し出された顔に、フォリュシアは困惑し、ノワールははつきりと顔をしかめた。

「一体何の用だ、シュール」

刺々しいノワールの言葉に、シュールは余裕の笑みを浮かべる。

『罪人風情が、仮にも宗賽大臣を呼び捨てにするとはな。身の程を知るがいい』

ノワールは鼻を鳴らすと、背もたれに寄り掛かって足を組んだ。

「身の程を知るのはそちらの方だ、シュール・リリーシャ・ウィレット。人の道を外れた極悪人が。先王陛下を暗殺しようと企んだ罪、そしてそれを隠す為に重ねた犯罪。それらの咎は重いぞ」

その言葉に、シュールはクックと笑声を洩らした。

『先王陛下？ 先王陛下は、行方不明になられておられるが？ ……：そうか、其方らは、ずっとそこに入っていたのだな。世俗のことは知るまい』

「シュール殿？ 一体、何を言っておられる」

フォリュシアが眉を寄せて抗議すると、シュールは嫌な笑みを浮かべる。

『富実樹先王陛下は、今年の五月に行方不明となられて以来、どこにおられるのか知れない。故に、六月、富瑠美殿下が第百五十四代花鶯国国王として即位なされた。今は富瑠美陛下の御代だ。花雲恭峯慶は、先王でなく先々王となった。クク……：本当に、面白いように邪魔者が消えよるわ。現陛下も、若い大臣ではなく私を頼ることもあり、真、操りやすく堪らぬわ。これからは私の世だ。この私の栄華、そこで指を咥えて見ておるがよい』

ノワールは立ち上がると、端末の埋め込まれている壁を殴った。

「貴様……富実樹に一体何をしたっ？！」

ノワールの剣幕に、シュールは怯える様子も見せずにただ笑う。

『おお、怖い怖い。あの「感動癖」を持つ前戦祝大臣^{せんしゅくだいじん}も、孫のこととなれば人格が変わるか。……まあ、御前が心配するようなことは、何もしてはおらぬぞ？ 私は、先王陛下のことには何ら関わっておらぬ。まあ、いなくなられて安心はしたが。これで、心置きなく地球連邦を攻められる』

「待てっ！ 総票会の結果では、話し合いによって連盟加盟を求めるとなったはずだっ！」

『しかし、それは地球連邦が加盟に応じた場合。応じなかった場合、武力行使となる』

そう言って上機嫌に笑うシュールに、ノワールの顔から表情が消えた。

「……そうか、御前が企んだのか？ わざと、地球連邦が応じないように話を持ち掛けたのだろうか？ 戦端を開く為に」

『は。何とでも言うがいい。……そうそう、御前の息子は優秀だぞ？ 新たな兵器の開発に、実に手際良く働いてくれる』

「貴様っ……！ 息子に――シャーウィンに何をしたっ！」

『別に、何も？ 私はただ、命じたただけだ。疚しいことなど何もない』

シュールはそう言うと、立ち上がって画面に近付いた。

『そうそう、言い忘れる所であった。貴様らは、残念なことに終身刑となった。そこで一生幽閉の身だ。……来年には、地球連邦との戦となっているだろう。そこで指を咥えて見ているがいい。獄中の貴様らには、何もできないのだからな』

「待てっ！」

『何、心配しなくてもよい。外は、貴様らがいなくても順調に回っている』

シュールのその言葉を最後に、通信が途切れた。

ノワールは、やり切れない怒りに支配され、手近な椅子の肘置きを殴る。

結果は、ただ自分の手が真っ赤になったただけだった。

「ノワール殿……」

事の深刻さを察してか、フォリュシアも顔が険しい。

「……謝罪する。貴殿の述べたことは、嘘偽りがなかったようだ」

「別に、信じなくてもよいと言った。……だが、謝罪は受け入れよう」

ノワールはそう言うと、はあと大きく溜息をついた。

「詰まる所、我らがここで何をして、意味がない。我々には、ここからでは何もできない。……斯くなる上は、先王陛下——いや、先々王か。峯慶陛下が、一刻も早く御目覚めになることを願うばかりだ。峯慶陛下が御目覚めになれば、シユールの悪事を暴くこともできようし、富瑠美殿下——いや、陛下の補佐もしてくれよう。そうなった時には、我らもここから出られようし、そうなった時こそ、我らの出番とも言える。それまでは……雌伏の時だ」

「……そうだな。しかし、それまでは、ノワール殿と二人きりか……。我が人生最大の宿敵である、貴様と」

その言葉に、ノワールは豎琴を取り上げてにやりと笑った。

「そうだ。だが、いがみ合いはなしにしようではないか。過去を蒸し返すのも。一体何ヶ月掛かるか、何年掛かるかも分からぬ。下手をすれば、十年、二十年……。そんな長い間、共に過ごすのだ。諍いは、ない方がよいであろう？　だから、私が豎琴をのんびり弾くのも見逃すがよい」

ノワールの都合のよい言葉に、フォリュシアは眉を上げる。

「何だどっ？！　この際だから言うが、貴様には緊張感という物がなさ過ぎる！　このような極限状態で、何ゆえ楽を奏でられるのだっ！」

「おお、怖い怖い。フォリュシア殿、私はたった今、いがみ合いはなしにしようと申したではないか。だと言うのに、早速いちゃもんを付けるのか？」

「いっ……！　何だどっ？！　貴様っ！」

「ああ、そのように切れていては、血圧が上がって脳の血管が千切

れてしまうぞ？ それでは長生きできぬではないか。ああ、恐ろしい。さて、私はそろそろ部屋に戻らせてもらおうぞ」

「なっ、だ、誰のせいだと思っておる！ 貴様っ！ おい、待て！ ノワール！ ノワール・エリア・スウェールっ！」

自分の寝室に充てている部屋の扉を開けたノワールは、部屋の中まで乗り込みそうな勢いのフォリュシエアの眼前に手を上げた。

「ここまでだ、フォリュシエア殿。それぞれの寝室の中には踏み込まないと言うのが、暗黙の了解。そうであろう？ フォリュシエア・アメリカ・シャリク殿」

顔を真っ赤にするフォリュシエアを尻目に、ノワールは扉を閉めた。

そして、寝台の上に腰掛けると、再び豎琴を奏で始める。

この狭い空間——情報すらも遮られた空間では、本を読むか、豎琴を奏でるか、フォリュシエアをからかうしかやることがない。

本当に暇な上に、外がどうなっているのかも分からないし、正直気が狂いそうになる。

けれど、今はそれを抑え、待つ時なのだ。

気が遠くなる程長い期間かも知れないし、そんな時は永遠に訪れないかも知れないが、それでもノワールは、臣下として待たなければならなかった。

真の忠誠を誓った王が目覚める時を。

（終）

―赦せない人―

以前より暖かくなった風が、富瑠美ふるみの執務室に吹き込んで来た。
富瑠美は思わず手を止め、開け放たれた窓から外を眺める。

緯度の高いシャンクランでは、この頃ようやく暖かくなって来た。
新緑の薫りが漂う柔らかな風に、富瑠美は思わず目を細める。

（御異母姉様……今、一体どこにいらっしゃるのですか……？
も
う、あれから、一年……）

富瑠美は唇を噛み締めた。

父が暗殺され掛けて意識不明となり、異母姉あねが失踪し、義母ははが王宮を追い出され――そして自分が王位に即いてから、もう一年が経つのだ。

けれど、父は未だに目覚めず、異母姉も見付からず、義母も王宮こしに戻って来ることはない。

父を暗殺しようとした犯人は、対外的にはもう捕まっていて、彼らには終身刑が言い渡されていた。

でも――

「違う……絶対に、違うっ……！」

あの二人が、そんな馬鹿なことを仕出かす訳がない。

「ノワール殿とフォリュシェア殿は――あの御二方は、決してあんなことをなさる方では御座いませんの……何故……」

ノワールとフォリュシェア――前戦祝大臣せんしゅだいじんと前政財大臣ぜんせいざいだいじんは、富瑠美の祖父であり、三代前の花鶯国かおうこく国王かうぎ花雲恭藤聯かうんきようとうれんによってその忠節を認められた人物であり、花雲恭癒璃亜ゆりあ、花雲恭藤聯、花雲恭峯慶ほうぎよう、花雲恭富実樹ふみきの四代の国王に仕えた人物でもある。

二人は政治家としてとても有能であり、特にノワールの方は富実樹の外祖父でもあった。

歳も近く、貴族としての地位も花鶯国で最高位に位置していることもあり、この二人は非常によく似通っていた。

けれど、それにも拘らず——いや、だからこそなのか、二人の仲はすこぶる悪く、互いを嫌った故の愚行こそ起こさなかったが、それ以外の所では徹底的に対立していた。

その様は、むしろ見事な程だ。

だから、その二人が先々王——花雲恭峯慶を暗殺しようとしたなんて、とても信じられない。

人格者と言われるような人間が凶悪犯罪に手を染める例など、それこそ古今東西、星の数程ある。

しかし、彼らは五十年もの長きに渡って貴族出身の官吏として王宮に勤め、ここ最近の約二十年は、それぞれ大臣に就任していた。

そんな長い間、本性を隠すのは無理があるだろう。

それに、この二人は犬猿の仲なのだ。

こんなことに協調するなんて、それこそあり得ないのだ。

でも、実際二人は捕まった。

その証拠は、『去解鏡』である。

去解鏡は、偽りを映し出すことができない。

扱いこそ難しいが、自在に操れるのであれば、それは最も有力な証拠となり得るのだ。

だから、二人は捕らえられ、義母は——マリミアンは、王籍からその名を抜かれ、王宮も追放されてしまったのだ。

富瑠美は、耐え切れずに立ち上がって、力強く窓枠を握る。

「こんなの……全部、嘘ですわ……。御二人が、あんなことをする訳がないっ……！ 全ては、あいつが——宗賽大臣が悪いのです！

全部全部、あのシユールのせいですわっ！」

つい先日、富瑠美はシユール達に呼び出された。

そして、そこで富瑠美は、父を暗殺しようとしたのがシユールだと確信した。

これは自分の直感でしかないが、シユールが開戦派だったということ、そして、今王宮で最も権力を握っているということを踏まえたら、辿り着く答えは一つしかないのだ。

（でも……一体、どうやってノワール殿とフォリュシア殿を、陥れたのかしら……？ 去解鏡は、真実しか映し出せない。ならば、そう、偽りを述べたのは、人間のはず……。でも、当時に誰が去解鏡を視たのか、そんな記録はないですわ……。もしそういう物があるのであれば、おうだいじん鶯大臣であつたわたくしが気付かない訳が御座いませんもの）

「でも……今わたくしが動いたとしたら、シユールに警戒されて、何も得られませんわよね……。一体、どうしたら……。嗚呼、せめて、御父様が御目覚めになって下されば宜しいのに。御父様であれば、きっと立ち所に解決なさって下さいますわ……」

——その言葉は、自らの無能と力のなさを示す物でしかない。

けれど富瑠美は、幼い頃から王になる気は皆無だった。

養母であるマリミアンに、異母姉の存在を事あるごとに聞かされていたからだろうか。

元々、富瑠美の役割というのは、いざと言う時の代用だったのだ。もし富実樹が戻って来なかった時に、杜歩とふや埜と結婚して王位に即く。

それが、富瑠美に期待されている役割だったのだ。

だから、帝王学や政治学、外交や経済、福祉、医療、環境問題に貿易——その他あらゆる国政に関わることを、徹底的に叩き込まれた。

王になるには相応しい教養はある。

けれど、富瑠美自身に王になる気がなかった為、国の最高位の立場になるという覚悟はなかった。

臣下としての部下の使い方は知っていても、王としての臣下の使い方、信じ方は分からなかった。

だからこそ、今こんな事態になっているのかと思うと、悔しさのあまり涙がにじむ。

異母姉よりも、自分の方が父という時間は長かった。

その間に、王として必要な立ち居振る舞いや心構えを盗んでおけ

ば良かったと、今更ながらに後悔が尽きない。

「せめて……せめて、証拠があれば……証拠さえあれば、きつと……」

けれど、そんな物はどこにもない。

富瑠美が鶯大臣のままであれば、もしかしたら何とかなったかも知れないが、今の鶯大臣は異母妹いもうとの麻笈華まみかだ。

麻笈華は紗羅瑳侍しゃらさじの娘であり、仲が悪いとは言わないが、腹の内を全て曝け出せる程には親しくもない間柄だった。

それに、同母の弟妹とは、麻笈華以上に気が合わないし、それ程親しくしたいとは思えない。

彼らの性格は、どこか傲慢で、意地っ張りで、人を見下して……富瑠美の大っ嫌いな、深沙祇妃みさぎひの性格と酷似しているのだ。

彼女とは、マリミアンが王宮を追い出された時に凄まじい大喧嘩をしており、富瑠美自身としてはもう親子の縁を切っていた。

それでも、深沙祇妃が富瑠美の産みの親である事実には変わりなく、彼女が王太后という地位に遇せられるのを止める術はなかった。だから、せめてもの抵抗策として、富瑠美は即位して以来、儀式の時にしか深沙祇妃と顔を合わせようともせず、会ったとしても必要最低限の言葉しか掛けなかった。

こんなことでしか反抗できず、本当に母と慕っている人物を呼び戻すこともできず、これでどこが王なのか、国の最高権力を握る者なのかと思うと憤ろしい。

そう、もうこの王宮で、富瑠美が心を許せるのは、二人しかない。

それは、異母弟おとうとの柚希夜ゆきやと、そして――

「富瑠美御異母姉様？　今、御時間は宜しいでしょうか」

滅多に本宮では見掛けない異母妹の姿に、富瑠美は思わず目を丸くした。

「あら、些南美さなみ？　いかがなさいましたの？　貴女が本宮に参るなど、本当に珍しいこと」

「まあ、富瑠美御異母姉様。わたくしは鶯大臣でも御座いませんし、ましてや王などでも御座いませんわ。用もないのにこちらから本宮へ赴くなんて、はしたないでしょう？」

「それはそうですね……それでは、些南美。わたくしに、何か用でも御座いますのかしら？ 杜歩埜とふやや璃枝菜りえなや鳳蓮ほうれんならば、こちらでもよく御見かけ致しますが、貴女は後宮からは滅多に出ては参りませんし……本当に、何が御座いましたの？」

富瑠美は、不安そうに眉を寄せて些南美を見詰めた。

富瑠美がここまで言う程に、些南美が本宮に来るのは珍しかったのだ。

些南美の他にもいるが、政治に対する興味関心の薄い者は、基本的に本宮に足を運ばない。

それこそ、総票会そうひょうかいなどの王族の出席を必要とする会議や、国賓が来ている時、王族の出席が必要なパーティーや晩餐会が開かれる時でない、彼らは本宮に来ないのだ。

些南美も、そのうちの一人だ。

「ええ、少し……富瑠美御異母姉様の御時間を、下さい。御願致しますわ」

些南美の真剣な表情に、富瑠美は笑みを消す。

「……それは、とても重要なこと？」

「はい」

間髪を容れずに答えた些南美に、富瑠美は眉を寄せて今日の予定を思い出した。

「そう、ですわね……本日は、これを片付けた後に、外務大臣との会談の予定がありましたけれど――」

富瑠美は、にっこりと笑った。

「外務省の人間は、何かと動きが遅いのですわ。特に、官封貴族かんぼうが。世襲で官吏になれるからと、少し怠けているのかも知れませんわね。貴族が大臣を務めていらっしゃるからかしら？」

その悪戯っぽい言葉と笑みに、些南美も強張った表情を和らげた。

「ええ……もしかしたら、怠け癖が付いているのかも知れませんがね。ですが、富瑠美御異母姉様。官封貴族だからと、皆が皆怠けていらっしやる訳では御座いませんわよ？　少なくとも、わたくしの知る限りでは、戦祝大臣という仕事を勤めていらっしやるシャーウィン伯父様や、前政財大臣殿の御嫡男であらせられるウォルト様は、立派に御勤めを果たされておいでですもの」

「ええ、そうですわね。御二人とも、大臣としては若輩の身ではありませんけれど、その仕事ぶりは高く評価できますわ。——ところで、些南美。今、スウェール大臣とシャリク大臣の名は挙げましたけれど、ウィレット大臣の名は、挙げておりませんわよね？」

些南美の和らいだ表情が、再び強張る。

「花鶯国の主な大臣として、まず挙げられるのは、戦祝大臣、政財大臣、宗賽大臣。代々世襲制の珍しい大臣職ではありますが、その歴史故に、逆に不正が難しい役職でもあります。そして、それぞれの貴族としての地位は、戦祝大臣、政財大臣、宗賽大臣となっておりますが、いずれも屈指の大貴族。……最初の二人だけを挙げ、うっかり宗賽大臣を含めるのを忘れた、という可能性もなきにしもありませんが……」

富瑠美は小さく溜息をついた後、穏やかに微笑んだ。

「やはり、そうでは御座いませんのね。——では、外務大臣との会談は、目眩が致しますので延期とさせて頂きましようか。実は、本日（きょう）の会談では、早く仕事を片付けるように促す予定でしたの。外務省からの書類待ちをする数多の省庁から、わたくしも貰っ付かれておりましたので」

「まあ。富瑠美御異母姉様がそこまでなさらなければならない程、外務大臣の怠慢は酷いのですか？」

顔を強張らせていた些南美も、『王からの勧告』が必要だという事態に呆れ顔だ。

「ええ。怠慢と申しますか……そうですわね、初動が遅いのですわ。だから、色々な物事がもつれ合って、結果的に怠惰な省にしか思え

なくなってしまうのです。大臣は……その、期限までに提出できればそれでいい、だったら期限の何時間か前までに提出すればそれでよいだろう、だからこの案件は先送りに——という考えで動いているようで……。書類の不備や、やり直しが起こるなどとは、考えてもいらっしやらないようですわ」

富瑠美は深い溜息をつくと、些南美に苦く笑った。

「ですから、本日の会談も、きっと遅刻して来ることでしょう。本当は時間通りに来る予定だったけれど、様々なことがあって結果的に遅れてしまったと、下らない言い訳をぶら下げて。ですから、わたくしが一身上の都合によって大臣との会談を延期しても、文句は言えませんか。もし言われたら、こちらにも様々な都合があると言い返せばよい話ですもの。なので、些南美。わたくしの私室で御待ち頂けませんか？ この残った仕事を片付けると……そうですね。二時間もあれば戻れると思いますので、五時頃に」

「はい、分かりましたわ。富瑠美御異母姉様」

執務室に入ってきた時よりも力が抜けた面持ちで頷くと、些南美は礼をして部屋を出て行った。

富瑠美は些南美が出て行った後、小さく溜息をつく、席に着いて重要書類が詰まったデスクトップを立ち上げた。

単純に入力すれば済む書類を手早く片付け、肉筆の署名が必要な書類には手書きで署名する。

二時間で終わらせると宣言したのだから、それ以内に終わらせなければならなかった。

慌ただしく書類に目を落とす富瑠美の顔は、どこか緊張していた。

……そう、とうとう、大事な異母妹が気付いてしまったのだ。

自分の父を殺そうと企てた上に、祖父と祖父の宿敵ライバルを追い落とし、冤罪を着せ付けたのがシニカルだと。

——一見、穏やかな宗教家にしか見えない宗賽大臣が、あんな酷いことをやったのだと。

富瑠美が適当に言い訳をして自室に戻ると、そこには既に些南美がいた。

唇はきつく引き結ばれて、顔色も悪い。

けれど、そこには堅い意志が現れていた。

「些南美」

「富瑠美御異母姉様……」

富瑠美の姿に気付いた些南美は、少し肩から力を抜く。

やはり、緊張しているのだろうか。

「些南美。……やはり、貴女は気付いたのね？」

主語のない言葉。

けれど、本当に気付いているならば、これで分かる。

「ええ……」

「宗賽大臣のことも、御父様のことも」

「ええ……富瑠美御異母姉様」

些南美は頷くと、震える声で囁いた。

「宗賽大臣が……御父様を暗殺しようと企て、そして、その罪を御祖父様達に被せたのですよね……？」

「……そうですわ。けれど——証拠が御座いません。彼が何をやったのかは、全て分かってはいるのです。でも……その証拠が、どこにもないのです。シユールが、去解鏡の結果を意図的に変えたのも、分かっております。ですが、誰にそれを指示したのかも分からずじまいで……。まあ、それが分かった所で、どうせその人物はシユールの味方。わたくしに、どうこうできる訳ないのですけれど……」

富瑠美は自嘲した。

「ですが……もしそれが分かって、その人物の弱みでも握ることができれば、いずれは、逆転できるのではありませんか？ 富瑠美御

異母姉様」

些南美の強い言葉に、富瑠美は俯いていた顔を上げた。

「些南美……」

「これを、富瑠美御異母姉様」

些南美に渡された紙には、花鶯省に勤めるある官吏の略歴が記されていた。

「オルフォース・テレーゼ・レイシャート？」

富瑠美がその名を呟くと、些南美はこくりと頷いた。

「ええ。深沙祇妃の後見役を務める、レイシャート家の次男ですわ。……次男ですから、大変難しい国家試験を受けて官吏になった人物です。けれど、彼の異母兄は、長男として難しい試験を受けずに官吏となっているので、オルフォース様は異母兄上様を大変恨んでおられるようです。それに、花鶯省は……このような言い方は申し訳ないのですが、魔族の力を御持ちではない方にとっては閑職のような扱いですし」

「成る程……。それで、立身出世が難しいと、異母兄を恨んだのですね」

「はい。けれど、恨むだけでは出世はなりません。何かをしようと自分の第一妻の父である、シュール・リリーシャ・ウィレットを頼ったのですわ。……そして恐らく、その見返りを要求された」

些南美の言葉に、富瑠美は瞠目した。

「些南美……この人物が……」

「はい。去解鏡の結果を書き換えた人物ですわ」

些南美は頷くと、もう一枚の紙を渡す。

「ここに纏めました。彼は元から、去解鏡に携わって来た人物です。そして、その付き合いから発展したのか、彼の娘の一人が、ジョゼフ・マティルデ・ルメールという名の、去解鏡を視る、特に強い力に恵まれた官吏と結婚しております。彼は、特にその能力を買われ、富実樹御姉様の失踪事件も、そして――御父様の暗殺未遂事件も、彼が去解鏡を視るのを担当致しましたそうです」

「そう、ですか……。わたくしは、当時鶯大臣でありましたが、それは知りませんでしたわ」

富瑠美は、悔しさに唇を噛む。

自分は、花鶯省の長官だったのだ。

けれど、異母兄を憎んでシユールと手を組んだというオルフォースのことも、優れた能力を持っているというジョゼフのことも、富瑠美は知らなかった。

だから、オルフォースがシユールの娘婿だったということも知らなかったし、ましてやそのオルフォースの娘婿がジョゼフだということも知りようがなかった。

「娘婿、という繋がりで、あの事件を起こしたなんて……。確かに、貴族は数が多いので、直系を辿るだけで精一杯ですわ。娘婿の娘婿なんて、辿りにくい関係なこと。……けれど、これは、まずわたくしが見付けなければならぬことでしたわ。いくらややこしい道筋でも。自分の妻に泣きつかれてもしたら、もしくは立身出世の為であつたら、権力のある義父ちちに従わない訳にはいかぬでしょうね」

「ええ。己の出世も掛かっているのですもの。二人とも、シユールの言うことならばその通りになさるでしょうね。……ですが、わたし、これに掛かりきりになって、もう半年以上が経っておりますの」

その言葉に、富瑠美は目を瞠った。

「まあ、半年も？ そんなに掛かったのです？」

「ええ。何しろ、オルフォースもジョゼフも、親戚関係を表沙汰にしていないのです。彼らとシユールの関係を浮き彫りにするのは、少々骨でしたわ」

「ですが、それにしたって、半年以上も……。よく氣力が続きましたわね」

富瑠美が感心したように言うと、些南美はくすぐったそうに肩を竦めた。

「だって、わたくしにできることなんて、これくらいしかありませんでしたもの。……わたくし、富実樹御姉様が何故いなくなられてしまったのか、御父様が誰に、何故殺され掛かったのか、ずっと知りたかったのです。富実樹御姉様のことを調べるのは、わたくしよ

りも国の方がやっておりますでしょう？　でしたら、わたくしはこちらに集中した方が宜しいかと思ひまして……」

「最高ですわ。些南美。これさえ分かれば、後は弱みを探すだけ……」

「……ですが、それが難しいのでは？　本当に、これには証拠がないのです。わたくしの、当てずっぽうと勘ですの」

そう言って視線を落とす些南美に、富瑠美は笑って首を振った。

「いいえ。些南美、『勘』はあまり侮れませんわよ？　わたくし自身、勘によって何度か救われてきておりますから。それに、証拠がないくらいは何です。適当な理由でもでっち上げて、信頼できる人物に去解鏡を視てもらえば、それで済む話ですわ。去解鏡の正しい結果こそが、わたくし達の証拠です」

「ですが……今、去解鏡を視ることのできる人は、皆シュールに属しているのです」

「何ですって？」

思わず、富瑠美の顔色が変わった。

「辛うじて、シュールに属していない方もおります。ですが、そういった方達は、花鶯省の中でも閑職においやられていて、到底去解鏡を視られない状態だとか。……恐らく、富瑠美御異母姉様を警戒してのことと思われませんが……」

些南美の言葉に、富瑠美は深い溜息をついた。

「何てこと……。やはり、わたくしがのんびりしていたからですわね。もっと早くに行動していれば……」

「いいえ、富瑠美御異母姉様。富瑠美御異母姉様は、今やこの花鶯国の国王。政務が多忙なのは、仕方のないことですわ。――それに、この情報が無益という訳でも御座いませんでしょう？　少なくとも、誰を問い詰めればよいのかが絞れたのですから」

「ええ、それはそうですわね……。ですが、どちらにしろ、その二人はシュールと縁が近いですわ。簡単には、こちらにも尻尾を掴ませないでしょうし、難しいことには違いありません」

富瑠美は断言すると、些南美に微笑んだ。

「ありがとうございますわ、些南美。このような情報を頂けて、本当に助かりました」

些南美も、富瑠美の微笑みを受けてにっこりと笑い返した。

「ふふ。富瑠美御異母姉様にそう仰って頂けるなんて、光栄ですわ。では、わたくし、これで失礼させて頂きます。柚希夜と夕御飯を共に頂くと、約束しているのです」

「まあ、そうだったのですか。では、柚希夜を待たせてはいけませんわ。早く御行きなさいな」

「はい。失礼致しました」

些南美が部屋から出て行っても、富瑠美の顔には笑みが浮かんでいた。

「さて……。わたくしも、動かなければなりませんわね」

富瑠美は、些南美が置いて行った二枚の紙を取り上げると、それを分厚くファイリングされた他の紙の間に挟み込み、紛れ込ませる。これは、富瑠美の趣味の野鳥について、多岐に渡って纏めてある。けれどこれは、わざわざ印刷してファイリングしなくてもいい。

実際、ここまで大量の資料を作らなくても、端末にデータとして入れている物もあるのだ。

——富瑠美がこうしているのは、こういった隠さなければならぬ書類を隠す為だ。

使用頻度はそれ程高くないが、木を隠すには森の中、紙を隠すには書類の山だ。

実際、こうしてカムフラージュしておけば、ほとんどの確率ではなかった。

「御異母姉様……。これで、正しいのでしょうか？ わたくし……。些南美まで、巻き込んでしまいました。こんなので……。これから先、国を率いてゆけるのでしょうか？」

（ああ、でも……。今、花鶯国の実権は、シユールが握っている……。そう、わたくしは、御飾りの王様でしかない。……。けれど、せめて、

被害を減らせれば……シュールを押し留められれば……!)

富瑠美は、自嘲の笑みを浮かべた。

「全部、希望でしかないわ……。わたくし、どうしたら、いいのかしら……」

富瑠美は、ぐっと唇を引き結ぶと、パンと両頬を叩いた。

「弱気では駄目ですわ。今、わたくしができることを、少しでもやる。『やりたい』では駄目。絶対に、やらなくては」

(オルフォース・テレーゼ・レイシャートと、ジョゼフ・マティルデ・ルメール。いくら何でも、絶対に弱みがあるはずですわ。少なくとも、世間に隠しておきたい失態の一つや二つは。だから、それを探す。探して、それをネタに二人を揺らがせて、こちらに寝返らせる。そして、シュールを揺らがせられれば……!)

いつの間にか、富瑠美は不敵な笑みを浮かべていた。

(時間は掛かるでしょうけれど……絶対にやりますわ!)

富瑠美は、深呼吸をして、背筋を凜と伸ばした。

こうすると、自然と気持ちも引き締まる。

遊び半分ではなく真剣に行動を起こすには、まず自分を落ち着け、冷静にならなければ何も得られないのだ。

どれくらい時間が掛かるのかも分からない。

でもそれこそが、娘として、王としてやらなければならないことだった。

——実際、彼女がシュールを揺らがす情報と、その確たる証拠を得るのは、これから半年近くも先のことである。

けれど、それは諦めなかったから、得られたのだろう。

絶対に、父を殺そうとした人を赦せない——赦さない。

ただ、その強い思いがあったからこそ。

(終)

―初めての訪い―

「由梨亜……やっぱ、怖いよ……」

「……じゃあ、やめる？」

穏やかな問い掛けに、千紗は大きく首を振った。

「ううん……やめない。絶対、やめちゃ駄目だから」

千紗の決意に満ちた言葉に、由梨亜はそっと笑みを浮かべた。

「そう！ それでこそ千紗よ！ 第一、もう最寄り駅に着いちやつてるんだし、後はタクシーに乗ってだけでしょ？ ここでやめちやったら、交通費が勿体ないわ」

あっけらかんと言う由梨亜に、千紗も何とかぎこちない笑みを浮かべた。

「うん……それは、分かってるんだけどさ……でも、やっぱり怖い。もう何年もお父さんのお墓参りに行ってないし、お母さんのお墓には、初めて行くし……」

「だから、今行くんでしよう？ 今やめたら、それこそ一生後悔するんじゃないかしら」

にっこりと笑いながら、有無を言わせぬ口調の由梨亜に、千紗は苦笑した。

「はは……うん、そうだね……。でも、さ」

千紗は顔を上げると、背後に佇む男達を睨んだ。

「何で、あんた達まで付いて来る訳？ 睦月、香麻」

「ん？ 何でって、これからお参りに行くの、お前の育ての両親なんだろう？ だったら、婚約者の俺と一緒に行くのは当たり前だろうが。一応、報告もしなきゃなんねえだろうし」

「そりゃ、そうだろうけど……睦月がそういうことを言い出すのって、何か不自然」

じろっと不審げに見上げると、睦月は若干引き攣り気味に笑った。「そ、そうか？ だって、俺の両親の墓にだって、婚約が決定した

時に行って報告してるだろう？ 墓参りがてらに」

「でも、それって睦月のお兄さんと妹さんとの顔合わせも兼ねてでしょ？ それに睦月、こんなことしても、あんま意味ないって言うてなかったっけ？ 矛盾してない？」

「あゝ……それはそれ、これはこれだっ！ な、香麻？」

突然話を投げ掛けられた香麻は、仰天して仰け反る。

「な、何でいきなり俺に話を振るっ？！」

「そうだ！ 香麻も香麻だよ。何で香麻も来るの？」

「いや、その……俺一人で留守番って、淋しいじゃねえかよっ！ 仲間外れにする気か？！」

自棄糞のように叫ぶ香麻に、さすがに千紗も目を逸らした。

「うん……ごめん、香麻に言うのは的外れだった。……あれ？ 由梨亜？」

千紗がきよろきよろと辺りを見回すと、既にタクシーへ乗り込もうとしている由梨亜の姿があった。

「あ、ちょっと、由梨亜！ 早いよ！」

「あれ？ 三人とも、まだそこにいるの？ 早く来てよ」

唇を尖らせる由梨亜に、千紗と睦月と香麻は顔を見合わせ、慌てて由梨亜を追い掛けた。

延々と続く山道に、早々に音を上げたのは香麻だった。

「なあ、何なんだよ、この山っ……！」

「何って、お墓への道だけど？」

香麻とは対照的に、千紗は全く息を乱していない。

「そんなにきついかな？」

「きつついぞっ！」

「ああ、これは、ちょっと……。千紗、本当にこの道で合ってるんだろうな？」

睦月にじろつと睨まれ、千紗は頬を膨らました。

「勿論！ さっき、お寺だってあったでしょ？ お父さんのお墓は、基本的にあのお寺が管理してくれてるから、お母さんのお墓だってやってくれてるだろうし。確か、永代供養で頼んでるんだっけかな？ あたしもお祖父ちゃん達も、滅多に来れないし」

千紗はそう言うと、一気に坂を駆け上る。

そこから更に坂を下ると、一面が墓地になっていた。

「えーっと、どこだったっけかな。確か、奥の方の……こっち」

少なくとも六年振り以上になるのに、千紗の足取りは確かだった。よっぽど父の墓参りに来ていたのか、それとも、父の死が重い何かを遺していたのか。

それは分からないが、とにかく千紗に何かが残っているのは疑いようがない。

けれど、ある区画に入った途端、迷うことなく進められていた千紗の足が止まった。

訝しく思っ由梨亜を見ると、その由梨亜も驚きにか目を瞠って硬直している。

睦月と香麻が、二人の視線の先を辿ると、ある墓の前に、一人の少年が座り込んでいるのが見えた。

居眠りでもしているのか、ぴくりとも動かない。

「墓場で、居眠り……？」

何と図太いのだろう。

『幽霊』や『心霊現象』は非科学的でしかないが、墓の下には遺骨が埋まっている。

そんな所で眠るのは、いくら科学万能主義者でもぞっとしないだろう。

「まさか……」

千紗は、ふらふらと足を進め、その少年の目の前に立った。

それを、慌てて他の三人も追い掛ける。

睦月の目に、その少年は同い年のように見えた。

「どうして、こんなところで……」

千紗の声が、微かに震える。

抑えようとしても、抑えられないのだろう。

その時、人の気配にか、千紗の声にか――少年の瞳が、ゆるりと開いた。

眞祥は、太陽が昇り切り、人々が活動が始める頃、一人墓前に佇んでいた。

そこに彫られているのは、『彩音家之墓』という文字。

その横にある墓誌には、義兄の両親や祖父母達といった祖先と並んで、義兄と姉の名が並んでいた。

「義兄さん、姉さん……。おはよう。久し振りだな。一ヶ月振りかな？ ……ここ、ちゃんとしたお寺で良かったな。一ヶ月来なくつても、ちゃんと手入れされてる。……今日は、姉さんの命日だもん？ 姉さん、ドルチェのシュークリーム好きだったろ？ 高いからあんまり買えないけど、今日は命日だもん。ほら、姉さんの大好きなアールグレイも持って来たぞ？ 父さんが選んだ奴だ。特別だからな？」

眞祥は頬を綻ばせると、そっと墓石を撫でた。

そして、墓の前に花を活けると、ふと空を見上げた。

早朝だからか、真夏だというのに空気が澄んでいる。

いや、ここが山に近いからだろうか。

むしろ、山の中の盆地と言った方が分かりやすいほどに、ここは自然が豊かだ。

眞祥は、墓の前に腰を下ろす。

目を閉じ、心持ち顔を上げると、爽やかな風が心地よい。

暖かな太陽は、早起きしたせいもあって、かなり眠気をそそる。

いつの間にか、眞祥は穏やかな眠りに落ちていた。

眞祥の目が開いたのを見て、千紗はびくりと身を震わせた。

千紗にとって、眞祥は叔父で、友達だ。

昔から、沢山迷惑を掛けて来たし、世話にもなって来ている。

けれど、今の眞祥にとって、千紗はただの友達——それも、小学校の五、六年生の時に仲が良かったというだけの存在なのだ。

千紗は、本当の記憶を取り戻してから、以前に親しかった人と会ったことはない。

だから……眞祥と会うのは、とても怖かった。

（何で……眞祥、ここにいるの？ 確かに、眞祥のお姉ちゃん夫婦のお墓だし、今日はお母さんの命日なんだけど、ここで寝てたって……何で？）

目を覚ました眞祥と目が合って、ただでさえも混乱していた千紗は、思わず後退った。

すると——目を瞬いた眞祥は、いきなり立ち上がって詰め寄る。

その勢いに、千紗は益々後退った。

「わっ、ちょっ……！」

「お前……千紗か？ 千紗なんだなっ？！」

激しく問い詰められて、千紗は顔を強張らせた。

「ゆ、由梨亜っ……！」

きっと眞祥は、どうしてここに千紗がいるのかと疑問に思っているのだろう。

それに、眞弥まやと櫻堵おうとの死を——特に眞弥の死に負い目を感じているのなら、たかが小学校の時の友達ごときに、墓に来てほしくはないだろう。

そう思ったから、由梨亜に眞祥の記憶を戻してもらおうと思ったのだ。

多分、そうしなければ収まりが付かないのではないだろうかと思えるほど、眞祥は鬼気迫った様子だったから。

「由梨亜っ?! どうしてお前までいるんだっ！」

眞祥の言葉に、由梨亜は不審げに眉を寄せた。

「待って、眞祥。それってどういうこと？ 私と千紗は双子の姉妹なんだし、一緒にいて可笑しなことなんて……」

「双子だって?!」

由梨亜の言葉に、眞祥は大きく目を瞠った。

「どういふことなんだ、千紗、由梨亜! 一体何なのか、俺に説明しろ! 六年前、一体何があったんだっ?!」

「六年前……?」

呆然と千紗が呟くと、眞祥に凄い形相で睨まれた。

「そうだ、六年前だっ! 六年前、お前は姉さんの所から消えた。

そして、由梨亜と入れ替わるようにして本条ほんじょうになった。でも、由梨亜はどこかに消えてしまった。……それは、一体何故なんだ? 一体、何があった? どうして何も言わずに消えたんだっ?!」

最初は努めて冷静に話していた眞祥は、話しているうちに感情が荒ぶって来たのか、最終的には怒鳴りながら千紗と由梨亜に詰め寄った。

「待って……待って、眞祥。貴方……忘れなかったの? 私のこと。千紗のことも、姪だって、そう憶えてたの?」

「そうだっ! 俺と姉さんは――俺と姉さんだけは、ずっと忘れなかったっ! だから、姉さんはっ……」

眞祥の声が震える。

「ほんつとに……一体、何がどうなってるんだよ……」
どさりと、眞祥は墓石の前に腰を下ろす。

本当に、力が抜けてしまったようだ。

「由梨亜……」

由梨亜を呼ぶ千紗の声も、堪えようがなく震える。

「何で……お母さんも眞祥も、忘れなかったんだろうね、あたしのこと……」

「それは……分からないわ。私にも、何でだか、全然分からない……。ねえ、眞祥」

由梨亜はその場に膝を付くと、眞祥の顔を覗き込んだ。

「貴方と彩音の小母様は、私達のことを忘れなかったのよね？ 本当のことを」

「……ああ」

眞祥は、まるで呻くような声で返事をする。

「じゃあ、どうやって、千紗が本条家に入ったって知ったの？」

「……母さんと、卒業アルバムだよ。姉さんから、千紗の存在その物が消えたって聞いて、父さんと母さんに聞いたんだ。千紗って憶えてるかって。そしたら……母さんが、千紗のことを本条家のお嬢様だって言い出して……だから、卒業アルバムを見たんだ。そしたら……由梨亜、お前はいなくなっていた上に、千紗の名字が本条に変わってた」

眞祥に睨まれて、由梨亜は思わず目を逸らした。

そして、眞祥が記憶を喪っていたということに勇気付けられたのか、千紗は大きく目を瞞って眞祥に詰め寄る。

「眞祥、そのこと、お母さんに言ったの？」

千紗に見詰められて、眞祥は目を逸らした。

「……………いや、言っていない」

「何で…………？」

「だって——言えないだろうか？ 自分の娘が勝手に他人の娘になっ
ていて、おまけに自分のことを憶えてないかも知れないなんて……」

「…………でも、せめて、あたしが今どこで何をしているのかさえ分かれば、お母さんだって、無茶はしなかったんじゃないかな…………？
最低でも、過労死するなんて、なかったんじゃないかな…………？」

千紗の瞞られた目から、つうつと涙が一筋零れる。

それを間近で見ざるを得ない眞祥は、耐え切れずに目を逸らした。

「ごめん…………」

「眞祥が謝っても、お母さんは帰って来ないんだよ…………？ 何で？
分かったのなら、言ってくれば良かったのに…………！」

「俺はっ！ そこまで勇気がねえんだよっ！ だから、姉さんの記

憶がなくなったお前に会う気力なんてなかったし、姉さんがお前と会って傷つく所を見る度胸もないんだよ！俺ができるのは、こうやって姉さんと義兄さんの墓の前で張ることぐらいなんだ。……ほんと、俺……弱虫なんだよ」

「……でも、あたし……一年近くは、憶えてたよ……？ お母さんのこと」

千紗の小さな声に、眞祥は息を呑んだ。

「だから……眞祥が早く言っていたら、あたし、お母さんと会えた……」

「じゃあ……憶えてたなら、どうしてお前から姉さんに会いに行かなかったんだっしょ！」

「だって、忘れてるって思ってたんだもん！ 由梨亜が——あたし以外の人の記憶はなくなるって言ってたし、あたしの記憶も徐々に消えてくって言ってたから……」

唇を噛み締めて俯く千紗に、眞祥もそれ以上は何も言えなくなる。無言になった二人に、由梨亜は小さく言った。

「二人とも、ごめんなさい。——彩音の小母様と眞祥の記憶が消えなかったのは、こっちの不手際だわ。……それに、そのせいで、彩音の小母様は亡くなってしまったんだし……本当に、ごめんなさい」そう言って頭を下げる由梨亜に、眞祥は静かに言った。

「由梨亜、千紗。……本当のことを教えてくれ。——これは一体、どういうことなんだ？ 一体何があった？ 俺に、全部教えてくれ。……嘘とか、隠し事は絶対にやめろよ。俺は、六年も待ったんだ。これ以上待つ気はない」

眞祥の声は静かではあったが、強い怒りが隠されていた。

確かに、訳も分からずに長い間を過ごして来たのだから、その怒りは当然の物だろう。

千紗は、一つだけ深呼吸をすると、ゆっくりと『本当のこと』を話し出した。

千紗が、櫻堵や眞弥とは血が繋がっていないくて、だから眞祥とも

叔父と姪の関係ではなく、本当の両親は本条耀太と瑠璃だということ。

そして、由梨亜は耀太と瑠璃の娘ではなくて、花鶯国の現王の異母姉——花雲恭富実樹であり、つい二年前までは花鶯国の国王であつたこと。

それを聞いた眞祥は、きつく目を瞑った。

「……それ、結構荒唐無稽な話だよな。完璧に、物語にしか思えないし」

「でも……ほんとのことなの」

「じゃあ……さ、何で、由梨亜はこっちに来て、千紗は姉さん達の娘ってことになったんだ？」

「その……花鶯国は、一夫多妻制で、御父様にも、后妃、妾、最貴、最侍、最女って六人の奥さんがいて……実際、私は十五人兄弟なの。それで、私はその一番最初の子供。でも、おんなじ日に生まれた異母妹の御母様に、私は生命を狙われて……安全策として、私をこっちに送ったのよ。そして、私が戻ったら、みんなの記憶を消すって……。だからまさか、貴方達の記憶だけ消えなかったなんて、思わなかったわ」

由梨亜の言葉に、眞祥は皮肉げに言った。

「ふうん？　よくありそうな陰謀劇じゃなか。でもさ、記憶消すって、一体どういうことだ？　そんなこと、勝手にできるとでも思ってるのか？　例えば、科学の発展で、そういった機械が開発されたとしても、お前らに関わった人物、全員をその機械に掛けなきゃ意味ないだろ？　それに、その方法だと、写真のことが納得できない。……どうやった？」

その言葉に、千紗と由梨亜は顔を見合わせた。

さすがにこればかりは……説明しても、納得するとは思えない。

「魔法……かな？」

「は？　ふざけてんのか」

「いや、その……えっと」

だんだんと不機嫌になっていく眞祥に、千紗は目を泳がせながら何とか説明しようとする。

「あのね？ 第六感って知ってる？」

「勘だろ。あんなの、所詮嘘っぱちでしかない。ただの運だ」

ぱつぱつと切り捨てられて、千紗は呻いた。

「その……嘘じゃないのよ。特に厳しい環境にいますと、その第六感が発達するの。そうして魔族が誕生したのよ。もう滅んでしまったけど。そして、花鶯国の人は、大抵彼らの血を引いているのよ。だから、魔法が存在する」

懸命に説明する由梨亜を、眞祥は鼻で笑い飛ばした。

「は？ そんなファンタジーな話、信じられる訳ねえだろ。魔法とか魔族とか……三流小説か？」

眞祥に蔑んだように睨まれ、由梨亜は俯いた。

眞祥は、千紗以上に現実主義者だ。

科学的ではないと、不可思議現象や幽霊現象の特集番組があっても、ただ鼻で笑っていたし、奇跡的に大事故から生還したとか大手術に成功したということがあっても、そんなことはただの確率と運の問題だと言って、てんで相手にしなかった。

だから……これだけは、多分信用してくれないだろうと思った。

「お前……好い加減にしろよ」

低く唸るような声に、由梨亜は思わず振り返った。

今まで口出しして来なかったから、半ば存在を忘れてはいたが、そう言えばこの場にはまだ二人がいたのだった。

香麻は、眞祥の前に進み出ると、怒りを籠めた眼差しで眞祥を睨み下ろした。

「お前から、全部説明しろと言ったんだろ？ だから、由梨亜も千紗も全部説明したんだ。なのに、それを端から切り捨てて、何だ？ その言い草は。お前の都合で説明してもらってんだから、せめて信じる努力ぐらいしたらどうなんだっ！」

香麻に怒鳴られて、眞祥は目を瞬く。

「……………えっと、まず、お前誰だ」

「藤咲香麻。由梨亜の彼氏——っつうか、婚約者だ」

「ふうん……」

「何だよ、その気の抜けた返事は」

香麻が顔をしかめると、眞祥は困ったように笑った。

「じゃあ聞けど、お前、最初にこの話を知った時、どう思った？
すぐに信じたか？」

「それ以前の問題だ。俺は、このことを知ったのは、体験した後だったからな」

「へえ。じゃあ、体験しなかった場合、すぐにその話を信じたか？
どうなんだ？ 俺だったら、信じられないな」

「それは……」

香麻は、それ以上言葉を重ねられずに黙り込む。

「ほんとに、すぐ信じられることだったら良かったんだけどなあ。
俺には、無理だ。そういうのを信じるのは。——でも、説明してくれて、ありがとな。俺には、どうしても由梨亜をこっちに連れて来た必要性が分からないけど、一通りは分かった。……で」

眞祥は立ち上がると、千紗に向かって、にっこりと——寒気がするくらいの笑顔で笑った。

「お前、最初は姉さんのことも忘れてたんだよね？ じゃあ、思い出したのはいつだ？」

「に、二年前……」

「じゃあ、その間に、姉さんと義兄さんの命日は、四回あったってことだよな？ それで、今日、ようやく姉さん達のことを思い出して、墓参りにでも来たって訳か？」

「だ、だって……申し訳なくって、来れなかったんだもん……。あたしのせいで、お母さんは死んじゃったんだし……むしろ、恨まれてると思った」

俯いて呟く千紗に、眞祥は溜息をつくど、こつんと手の甲で千紗の頭を叩いた。

「ばーか。姉さんが、そんなことを気にするとでも思ってたのか？
本気でそう思ってたんなら、お前はただの阿呆だ」

「はっ?!」

「むしろ、千紗が幸せに暮らしてるのを見て、ほっとしてんじゃねえか？　姉さん。義兄さんも、さ。……二人とも、そういう人だろ？　ったく……娘なんだから、それくらい分かっとけよ」

呆れたように言われて、千紗は唇を尖らせた。

「そんなこと言われたって……不安だったし、怖かったんだもん」

「お前なあ……。俺も大概弱虫だと思ってたけど、お前はそれ以上に意気地なしだな」

「何おうっ！」

思わず眞祥を睨み上げると、眞祥もふっと笑みを浮かべて千紗を睨み下ろす。

その時、後ろから腕を引っ張られて、千紗は仰け反った。

「あっ?!　ちょ、睦月！　いきなり引っ張らないでよ！」

「えっと……お前、もしかして、千紗の彼氏か？」

睦月はその問いに答えず、眞祥を睨む。

「おい。……千紗？」

「あ、うん……まあ」

思わず、千紗は目を泳がせた。

「ふうん……あーんなお子ちゃまだった千紗にも、彼氏ができたのかあ。意外だな」

「ちよっ……馬鹿にしないでよね！　あたしだって、彼氏くらいできますっ！」

「ま、どうでもいいけど」

「良くない！」

再び睨み合う千紗と眞祥に、睦月が盛大な溜息をついた。

「お前ら、好い加減にしろ。一体何の為に来たんだ？　千紗」

睦月に片腕を掴まれたまま睨み下ろされて、千紗は目を逸らした。
「お父さんとお母さんのお墓参りです……」

「じゃあ、いつまで下らないことで言い争ってる気だ？ ん？」

「や、えっと……あ！ お参りしなきゃ！」

千紗はわざとらしく話を逸らすと、養父母の墓前に膝を付き、手を合わせて目を閉じた。

睦月はそれを見て溜息をつく、眞祥と向き直った。

「あんたもさ……分かってて、千紗をからかってたんだろ？ あいつ、面白いように突っ掛かって来るからさ」

「それが、一体何か？」

眞祥はふっと笑みを見せた。

「俺は、あいつとちっちゃい頃から知り合いだ。だから、つい懐かしくってからかっただけだ。その、一体何が悪い？」

「お前は、もうただの友達だろう。親戚でも何でもなくなったんだから、必要以上に関わるな。見ていて気分が悪い」

その言葉に、眞祥はしばらく目を瞬いた後――にやっと、含み笑った。

「何だ、ただの嫉妬か」

「な、何だどっ？！」

突然の言葉に、睦月は顔を真っ赤にさせてしまう。

「ふうん、それは良かった。いいからかいのネタができた」

にやにやと笑う眞祥に、真っ赤になったまま硬直する睦月。

その二人を見ていた由梨亜は、堪え切れずに吹き出してしまった。おまけに、あまりに可笑し過ぎたせいで、香麻の肩に掴まって身をよじらせる。

「あゝ、可笑しい！ 睦月ったら、あんなにあっさりネタを提供しちゃうなんて……！」

「ああ、うん……ご愁傷様、睦月」

香麻はそう言うと、肩に由梨亜を掴ませたまま、睦月に向かって器用にも手を合わせた。

ふと千紗を見れば、どうやら真剣に祈っていて、こちらの騒ぎなど歯牙にも掛けていないようだ。

確かに、六年もの間、ずっと墓を訪れていなかったのだから、養父にも養母にも、報告したいことが山ほどあるのだろう。

やがて、千紗が合わせていた手を下げ、目を開けたその瞬間、眞祥が千紗の頭を押さえ付けた。

「わっ！　ちょ、え、眞祥？　どうしたの？」

押さえ付けられた時に首を痛めたのか、首を押さえながら涙目で見上げる千紗に、眞祥はにやりと笑って見下ろす。

「お前、大学どこだ？」

「どこって……アメリカ州の、レイメーア大学の経営学……」

「ふうん？　じゃあ、普段はこっちにいない訳だ？」

「そりゃ、そうだけど……」

千紗は、訝しげに眞祥を見上げる。

「んじゃ、せめて、義兄さんと姉さんの命日だけでいいから、墓参りに来いよ。あと、これ、俺の連絡先。こっちに来る時は、絶対に連絡入れる。お供え物が被ったりしたら気まずいだろ？　……彼岸にこっちに来るのは難しいかもしれないけどさ、せめて、命日にだけは、来てほしいんだ」

ふざけた口調とは裏腹の、眞祥の真剣な目に、千紗も笑みを消して真剣な顔で頷いた。

「うん。分かった。また、来るよ」

「何か用事があって、命日ぴったしには来れなくても、姉さんの七回忌と、義兄さんの十三回忌ぐらいには、命日に来い。両方とも三年後だ。いいな？」

「うん。……そう言えば、眞祥はこの大学に行ってるの？」

「ん？　地元の栄偵大学えいていの人文系。内容は何でもありだけど、教授が結構な個性派揃いでさ。地元の割には面白いんだ」

「そっか。……良かった。何か、安心した」

千紗がそう言って笑うと、何故か拳骨を落とされる。

「馬鹿か、お前は。それはこっちの台詞だ。お前が姉さん達のことを忘れてなくて、安心したのはこっちだったの」

「あ、そっか……」

千紗は、小さく笑い声を上げた。

「んじゃ、墓参りも終わったしなあ……。俺んち、寄ってくか？」

眞祥の言葉に、後ろで聞いていた由梨亜は目を輝かせた。

「え？ いいの？ やったあ！ とっても暑かったから、ちょうど涼みたかったんだよねえ」

「あ、うん、確かに……。って言うか、眞祥、あんたこの近くに住んでるの？」

「ああ。ここから徒歩で三十分も掛かんないところ。ついでに言うと、父さんも母さんも、まだインドだぞ。あ、でも……父さんの放浪癖、まだ治ってねえからなあ……。もしかしたら、またどこかに行ってるかも知れないな」

その言葉に、千紗は大きく目を瞠った。

「あれ？ でもお祖父ちゃんって、もう六十越えてなかったっけ？」

「ああ。確か六十五だったっけな」

「なのに、まだうろうろしてるんだ……」

千紗が呟くと、眞祥は目を逸らした。

「……俺が思うに、父さんの放浪癖は、一生治らねえ気がする」

「うん、そうだね……。眞祥の紅茶狂が治らないのとおんなじだよ。さすが親子。似なくていいとこまで似ちゃって」

千紗が背伸びをしようと、眞祥の目がきらりと光った。

「……ふうん？ 俺を『紅茶狂』呼ばわりするんだったら、俺の紅茶に対する情熱を、それこそ俺の気が済むまで聞いてもらおうか」その言葉に、千紗だけでなく由梨亜も顔を引き攣らせた。

「ちょ、千紗の馬鹿！ やんなくていいことまでやらかしてっ！」「え、あたしのせいっ？！」

「どっから見ても千紗のせいでしょ！」

由梨亜はそう言うと、派手に溜息をついた。

「ああもう、しょうがないから行きましょ？ 香麻、睦月も。……二人とも、覚悟しといた方がいいわ。眞祥に紅茶を語らせたら、優

に数時間は掛かるから」

「げっ……」

「マジか……」

二人は、同時に肩を落とす。

その四人の落ち込み具合とは対照的に、眞祥は上機嫌に言った。

「ああ、楽しみだな？ 何しろ、俺の周りには紅茶を分かってない奴らが多過ぎてな。語れなくなっとうんざりしてたんだ」

「……じゃあ、その八つ当たりじゃん……」

千紗は肩を落として言ったが、逆に眞祥は胸を張った。

「何とでも言え。……ほら、お前ら、さっさと行くぞ！ これからどんどん暑くなるんだ。早く家の中に入って涼みたいだろ？ 仕方ないから、昼食くらいは奢ってやる」

すると、項垂れていた千紗と由梨亜はぽつと顔を上げた。

「え？ ねえ眞祥。それって、眞祥の手作り？」

「ああ、そうだけど？」

「やったあ！ 眞祥のご飯、美味しいんだよねえ」

「……それは、お前が俺に作らせまくった結果だろうが！」

「えっ？ 何のこと？」

千紗は笑うと、ぱつと駆け出した。

「ほら、早く行こう！ あっついもん！ あゝ、久し振りの眞祥のご飯、楽しみだなあ！ ほら、由梨亜も、行こ！」

「はいはい。ほら、男ども！ さっさと来ないと置いてくわよ？」

あ、眞祥、道先案内宜しくね？」

「あゝ、はいはい。分かったってば。おい、お前ら、そんな走んなよ……。あ、睦月と香麻だっけ？ お前達も、早く来ないと置いてくぞ？」

「ああ……。ったく、あいつらといると、気の休まる時がない……」
睦月がぼやくと、香麻はそれを聞いてにやりと笑った。

「でも、そんな賑やかな奴らだからこそ、一緒にいて楽しいんだろ
うが。それに、そういう所も含めて、俺は由梨亜を好きになったん

だけど……睦月は、違うのか？ 千紗が、大人しくなきゃ嫌なのかな？

「冗談言え。千紗が大人しくなった所なんか、想像もできない。…
：第一、あいつが大人しかったら、今頃は俺と婚約なんかしてるか。
大人しく、親の決めた婚約者候補と婚約してるぞ」

不貞腐れて睦月がそっぽを向くと、香麻は大人びた笑みを洩らした。

「じゃ、そういうことなんだろう？ ……ほら、本気で俺ら、置いてかれるぞ？ ああいう奴らを好きになったんだから、覚悟くらいは持たなきゃな。じゃないと、心臓がいくらあっても足りない」

「……………ああ、そうだな。おい、千紗、由梨亜！ ちょっと待て！
俺らを置いてく気か！」

睦月は怒鳴ると、墓に背を向け、走り出す。

暑さを増して来た真夏の太陽は、今にも中天に懸かりそうだ。

綺麗に磨かれた墓石は、きらきらと光に反射して、少し眩しい。

眩い太陽に照らされて、子供から大人に差し掛かろうとしている彼らは、山の木々の間に吞まれ、紛れた。

後には、静寂に包まれた、穏やかな眠りばかりが残った。

（終）

—私の恋愛奇譚— 1

「……もう嫌、もう無理よ！ これ以上耐えられない！ いくら顔と性格と家柄が良くて、王族だって偉ぶらない希少価値な男の人でも、こんな規格外に常識外れな家族がいる人とはこれ以上付き合えないわ！」

まだ二十歳くらいの少女に指を突き付けられ、同じくらいの歳の青年は、言葉を失った。

「ごめんなさい、貴方が悪いんじゃないわ。それはよく分かってる。でも、私にはこれ以上は無理なの。私には、あんな規格外の人間と付き合えるスキルはないわ。だから、もう無理なの。さようなら」

少女に背を向けられて、青年は、慌てて腕を伸ばす。

「ま、待ってくれ！ ノーラ……レオノーラ！」

「ごめんなさい、さようなら、柚希夜^{ゆきや}。私達、いいお友達にならないれると思うの。いい同級生として、宜しくね。でも、恋人としては、さようなら」

最後通牒を突き付けられた青年は、がくりと膝を付いた。

青年の部屋から、少女は立ち去ってしまう。

けれど、彼にはこれ以上、少女を立ち止まらせる術はなかった。

「何で、こんなことに……」

少女の足音も聞こえなくなった頃、青年はぼつりとこぼす。

実際、振られた理由は青年自身にはなく、青年の姉達のせいにあるのだから、彼が理不尽さを覚えるのも、無理はなかった。

「何？ お前振られたの？」

柚希夜にとって最初の友人でもあるラルスにからかわれるように言われ、柚希夜は眉間の皺を深くした。

「で？ 理由って何？ お前、結構な優良物件だろうが。頭はいい

し、女の子にも優しいし、家柄だって、この国一番だろ？ 振られる理由なんかあるのか？」

柚希夜は飲み屋のカウンターに突っ伏したまま、呻くような声で言った。

「……姉が、暴走した」

「へ？」

ラルスは、きょとんと目を瞠る。

「だから、俺のブラコン過ぎる姉が暴走したんだよ！ 俺の彼女に向かってっ……！」

「えーっと、それは……どうも、お疲れ様」

ラルスは、微妙に目を逸らす。

けれど、柚希夜はそれに構わずに、拳を振り上げてカウンターをどんと叩く。

「そしたら、ノーラに無理だって……これ以上耐えられないって言われたんだよ……。ノーラ……」

ラルスは微妙に目を彷徨わせたが、何とか言葉を捻り出す。

「えっと……まあ、それは人選が悪かったんだよ！ レオノーラちゃん、偶々そういう耐性がなかったただけでさ！ まあ沢山付き合えば、大丈夫な子もいるって！」

すると、真っ赤に目を充血させた柚希夜は、ゆらりと顔を上げてラルスを睨む。

「お前はそれまで俺に振られ続けろって言うのかよっ！」

柚希夜はそう叫ぶと、ラルスの前に置かれていたグラスを取り上げ、一気に飲み干した。

「ああっ！ 俺の酒っ！ っつか柚希夜、お前まだ酒飲んじゃ駄目だろうが！」

「は？ 俺はもう十九だ」

そう言って睨む柚希夜に、ラルスは引き攣った笑みを浮かべる。

「そういや、この国の飲酒可能年齢って、成人年齢とおんなじ十八歳だったな……あはは」

「……ああ、そう言えばお前、留学生だったな。どこだった？　グルマジャ？」

「ああ、うん……。あそこだと、飲酒が大丈夫なのは二十一からなんだよ……」

「ふうん。固いな」

ぱつぱつと切り捨てられて、ラルスはがくりと肩を落とす。

「酒は身体に悪いんだよ！　だから禁止なんだろうがっ！　俺からしたら、色々と緩いんだぞ、花鶯^{かおうこく}国は！　お前みたいなのがおーぐっ！」

ラルスは、柚希夜に蹴られた向こう脛を押さえ、涙目で蹲る。

「これ以上言うな、ラルス」

柚希夜の低い声に、ラルスは無理矢理顔を上げる。

「お前は、この国のことを知らない。だから、そういうことを簡単に口にできる。……まあ、お前が共和国出身つてのもあるのかもな。でも、ここは王制の国だ。そういうことを、こんな場所で軽々しく口にするな」

「ああ……うん、俺が悪かった。酒のせいで、口が緩んでたのかもな。でもさ、普通は思わねえだろうが。お前がそうなんて。俺はしばらく気付かなかったぞ？　それに、周りの奴らだって、お前の名前を聞いて初めて分かったみたいじゃねえか。それでお前、本当にそうなのか？」

柚希夜は溜息をつく、手酌で酒瓶からグラスに酒を注ぐ。

「当たり前だ。俺は末っ子だし、メディアの露出は、それこそ一部の兄弟しかやってない。俺だって、そういうのに出たことは一度くらいしかないぞ。精々、産まれた時に名前が公表されたぐらいだ」

「へ、へ……そんなもんなの？　グルマジャの隣のアギリニ、民政なんだけど王族もいてさ。でも、アギリニにいた奴らの話とか聞いていると、普通に国王一家ってみんな顔知ってるみたいだけど？」

柚希夜は酒を呷ると、馬鹿にしたような目でラルスを見る。

「お前、正真正銘の馬鹿か？　俺は十五人兄弟だぞ。俺の父上だっ

て、十五人兄弟だ」

その言葉に、ラルスは目を剥いた。

「十五人っ?! そんなにいるのか!」

「ああ。男王の場合、大抵妻は六人だからな」

「奥さん、六人も……?」

ラルスの顔色は、どこか蒼い。

「そうだ。だから、全員がメディアに露出するのは物理的に無理だ。……まあ、その制度だって、もう廃止されたけどな。これからは、一夫多妻制は禁止だし」

「ああ……。そう言えば、何年か前に戦争があったんだよね? 何年前だっけ? 五年?」

「いや、四年前だ。……まあ、すぐに終わって良かったけどな。戦闘期間は二、三ヶ月で済んだし、死者もそんなにいなかったし」

「……そういや、戦争が始まったってニュースから、やけに早く和平条約調印ってニュースを見たような……」

柚希夜は鼻を鳴らして笑った。

「あの戦争、ほとんど出来レースに等しかったからな。死者がそんなにいなかったのも、互いに死者を出さないように気遣い合った結果だ。あれは戦争なんて呼べるもんじゃないさ。互いの国が抱え合った問題点を、和平条約にかこつけて解消し合っただけのことだ」

「お前、何でそんなの知って……そういや、お前あれだったな。うん」

「いや? それはあんまり関係ない。強いて言うなら、和平条約の調印の見届け役をやったからだな。まあ、その一回しか、俺はメディアに出たことはないけど」

「……………当事者だったのか?」

「ああ。それがどうした?」

一般庶民でしかないラルスは、柚希夜の返答に頭を抱え、ごつんとカウンターに突っ伏す。

「……………そう言えば、ラルス。お前、俺がまだ酒を飲めないって思っ

てたんだよな？」

「ああ、それがどうしたよ」

ラルスが突っ伏したまま、くぐもった声で答えると、柚希夜は不機嫌そうに言った。

「じゃあ、何で飲めないって思ってる奴を酒場に連れて来るんだ？
ん？」

ラルスは顔を上げ、にやっと笑う。

「んなの、失恋した奴の慰めは居酒屋って決まってるからだろう！
酒を飲んで憂さを晴らす！ ま、正直俺が飲みたかったってだけ
だけどな！」

その返答に、柚希夜は店員を呼ぶと、更なる酒を追加した。

「柚希夜ー？」

その声に、柚希夜は振り返ると、にっこりと笑う。

「俺を慰めるんだろ？ じゃあ、この酒代はお前持ちな」

「はっ？ って……え？ それ、お前頼んだの？」

「ああ」

柚希夜はそう言うのと、手早く酒瓶からグラスに酒を注ぐ。

「ちょ、おい待て！ そんな高いの頼みやがって！ いくらだ！」

「さあ……。ここにおいてる普通のビールの二倍近くかな？」

「おい！ 何勝手に高いの頼んだよ！ 俺に払えってか！ このドケチ！」

「いいだろう？ 俺だって、自由に金は使えないんだ。今は実家の財産で暮らしてるけど、俺らは基本的に、十八を越えた時から掛かった金は、将来返さなきゃならない。まあ、無利子だからいいんだけどな」

そう言って、柚希夜は注文した高い酒を飲む。

恨めしげな顔をしたラルスは、柚希夜が飲むのを勿体なさそうに見た。

「お前、よくそんなにぐびぐび飲むよな……。でも、何でそんな制度にしてる訳？」

「人数が多いから、自立策だろうよ、どうせ。そうでもなきや、ずっと実家に頼る奴がいるのは目に見えてるからな」

「でもさあ、そんな簡単に仕事に就けるのかよ。大学だって、落っこって浪人する可能性だってあるし」

「……その為の、宗教家だよ。取り敢えず聖職者になれば、教会から給料も出るしな。俺らの一族から宗教家になる奴が多いのは、信仰心集めだとかそんなじゃなくって、将来の目標がなかったり、楽しかったりする奴らが流れてるだけだ。取り敢えずの場繋ぎにもなるし、将来やりたいことができた時にも、聖職者だったってのは有利に働きやすい。実際、宗教家になってボランティアとか非政府組織に参加して、社会活動を行うって奴も大勢いるからな」

そう言う柚希夜の目は、どこか冷たい。

ラルスは、少し眉根を寄せた。

「お前さ、そういう聖職者に流れた兄弟とかに、何か恨みでもあるのか？」

「いや。ただ、何の目標もなく流れてるのがあると、腹立たしくなるだけだ。何か目標があって、そっちに流れるのならともかくな。

俺の同母の姉も、今年から宇宙連盟の職員になってるんだけど、受かるまでは教会に所属して、社会活動で貧困地域に行ったりしてたし。俺が嫌なのは、何にもしないでぐずぐず教会にいる叔父や叔母だよ。俺の兄弟で宗教家やってる奴らは、みんな別の目標があるかな。むしろ尊敬するよ。人の為に何かをやってるから。――俺には、無理だ」

柚希夜は吐き捨てると、ぐいっとなに残っていた酒を呷った。

「とにかく、飲ませてくれるんだろう？ 今夜一晩付き合えよ。いいな？ あ、すみません。これ、追加で。あと、つまみにこれも」

淡々と店員に注文をする柚希夜を、ラルスはじっと見上げる。

「お前なー、いくら何でも頼み過ぎだろ？ ちよっとは遠慮しろよー」

ぶうぶうと文句を言うラルスに、柚希夜はにやりと笑った。

「お前、確か向こうの大学出てからこっちに来てるんだよね？　だつたらもう二十四、五歳にはなってるよな？」

「そりゃそうだけど？」

「だったら、年上がケチ言ってるじゃねえよ」

その時、丁度柚希夜が注文した品が届いた。

それを、柚希夜はにこりと笑って受け取る。

その笑顔に、まだ若い女性の店員はぽつと顔を赤らめた。

「お前なあ……。内面と外面そとづらにギャップあり過ぎだろ」

「人に口出しすんな。素で喋って何が悪いんだよ」

「いや、そっちじゃなくてな……」

「――では、私に常にこの話し方で話せと仰るのでしょいか？　さすがにこれは無理があると存じますが。庶民の中でこのような話し方をしていれば、却って違和感が御座います。それに……」

「あーもう分かったつ！　やめろ柚希夜！　気持ち悪いっ！」

ラルスは総毛立った腕をさすり、顔をしかめる。

柚希夜は、その様子を見てくすくすと笑いながら言った。

「でも、この話し方が、俺のいた所だと普通なんだ。俺らの一族とか貴族が、滅多に庶民と関わらない理由が分かるか？　まず、話し方が違過ぎて、それで浮くんだよ。それに、正直言うと、俺はこっちの方が気楽だ」

「へーへー、秀才さんの言うことは違いますねえ。――おーい！

この店で一番安い酒とつまみっ！」

大声で怒鳴られた可笑しな注文に、店内は一瞬静まり返った後、どっと笑い出す。

「お前な……」

柚希夜が呆れた顔でラルスを見下ろすと、ラルスは拗ねたように顔を背けた。

「いーだろうが。お前がたっかい酒なんか頼むから、俺は節約しなきゃ駄目なんだよお。俺だってなあ、頑張って外国から来た留学生なんだぞ！　お前が奢れ！　このお坊ちゃまめ！」

「何でだ！ 俺の失恋を慰めてくれるんじゃないのか？ 俺もそも俺の私有財産なんて物はほとんどないぞ！」

「それとこれとは別問題だっ！」

「いや、違わない！」

「しつこい男は嫌われる——って、てめえはもててじゃねえかった！ 何でだ、理不尽だぞ！ 顔か、顔がいいのか！ 家柄がいいのかっ！ この腹黒野郎！！」

「……だから、振られてんだから今ここにいるんだろうがぁ！」

そうじゃなきゃ誰が野郎と飲みに来るかこの馬鹿！ ほんとだったら、今頃ノーラと一緒に夕飯でも食ってるはずだったのになぁ……」
柚希夜は勢いをなくし、再びカウンターに突っ伏す。

それを見たラルスは、呆れたように溜息をついた。

「やれやれ……。これじゃあお前、完璧な酔っ払いになっちまうぞ……」

「ほっとけ、俺のことなんて。……何で、家族が原因で振られなきゃなんないんだよ……」

結局、この居酒屋が閉店するまで、柚希夜は酒を飲み続け、そのお代はきつちりとラルスに回したのだった。

「あ、見付けた！ ん？ あれ、柚希夜？ どうしたの？ 頭痛？」

お昼時、大学の学食で昼食を摂っていた柚希夜は、ひょっこりと顔を覗き込まれ、思わず眉を寄せた。

「ただの二日酔いですよ、千紗^{ちさ}さん」

「ふん？ 昨日はお疲れ様」

にやにやと笑って言われて、柚希夜は眉間の皺を深める。

「……だったら、どうして昨日止めてくれなかったんですか？ 姉

上達の暴走」

じとつと暗い目で睨まれて、千紗は視線を泳がせた。

「いやぁ……だって、あの由梨^{ゆり}亜^あだよ？ あたしが止めれる訳ない

でしょうが。睦月も香麻もそれが分かったから、傍観に徹してたんだし」

「じゃあ、それが原因で俺が振られたのも別に関係ないってことですか?!」

さすがにそれには、千紗も気まずそうな顔になった。

「ふ、振られちゃったんだ? 柚希夜」

「そうですね! こんな規格外に常識外れな家族がいる人とは、これ以上付き合えないって……!」

大声を上げたのが頭に響いたのか、柚希夜は顔をしかめた。

「あゝ、確かに、由梨亜も些南美も、凄い暴走してたもんね。杜歩埜も富瑠美も止められてなかったつけ。……ん? 富瑠美も暴走しそうなもんだけど、そう言えば、傍観側に回ってたような……」

「ああ……富瑠美異母姉上は、そこまでブラコンじゃなかったんでしょうね」

「あはは、ブラコンって……確かに、由梨亜も些南美も、兄弟を大事にしてるもんねえ。振られちゃったのは、ご愁傷様。でもさ、自分のお姉ちゃん達が、そういう風に過保護だって分かってるんだったら、そういうのに耐性がある彼女を選ばないとねえ。そういう意味では、柚希夜の選択がまずかったってことでもあるかな」

ぱっさり切り捨てられて、柚希夜は情けない顔になった。

「選択が、まずいって……」

「ん、そう。ただの恋愛って言うか、遊びだったらいんだけどさ、それでも、やっぱりお姉ちゃん達にはばれないように気は遣うべきだったよ。特にその相手に本気だったなら」

千紗はそう言うと、手に持っていたお茶を飲んだ。

「本気、だったつもりなんですけどね……」

「うん……ま、そうだろうけどね。柚希夜って、真面目だからさ。特に、柚希夜って王子様でしょ? それだけで、結構大変だと思うんだよね。身分が高い分、周りからたかられるか、敬遠されるんだから。……ほら、今だってそうでしょ? あたし達の周りには、今

誰もいない。みんな遠巻きにしてる」

千紗の言葉に、柚希夜は眉を寄せた。

確かに、自分の『第七王子』という立場を意識してか、大学に入ってから、周りに寄って来るのは欲に目の眩んだ女ばかりで、友人だって、留学生のラルスくらいだ。

「千紗さん達の家も……確か、地球連邦だと身分が高いんですよね」「うん。全体だと、上の中くらいかな？　まあ、細かく見れば、上の中の中でも下の方なだけだね。うち、商売は成功してて身分はあるけど、王族とか貴族とか、そういう昔ながらの『血筋』って奴はないから。でも、特に日本州って限れば、うちより身分が高いのは、それこそ天皇家くらいじゃないかな？　でも、それがどうしたの？」

「その……千紗さんも富実樹姉上も、去年の終わりに、大学を卒業した後、結婚しましたよね？　でも、どちらの旦那さんも、元はと言えば庶民で……どうして、結婚できたんですか？」

その言葉に、千紗は目を伏せた。

「どうして、かあ……。まあ、諦めなかったから、かな。あたし達じゃなくって、向こうが。特に睦月なんて、両親がもういなくて……だから、余計に反対されるような境遇だったのね、絶対に諦めなかったの。香麻だってそう。お父様は、結構最後の方まで粘ってたんだけど、それにも負けなかった。……男女の違いって、あるのかも知れないけどさ。やっぱり、結婚って、一生の問題で、家族関係とも深く関わって来るでしょ？　だったら、そこで粘れるような人じゃないと、早々に破綻するのは目に見えてるよ。やっぱりそういう相手とは、恋人止まりが正解かなあ」

「恋人止まり、って……その恋人に、振られたんですけどね」

柚希夜が肩を竦めて言うと、千紗は苦笑した。

「そりゃそうだよ。そういう粘れない人だったから、柚希夜は振られたんだから。逆を言えば、そういう風に粘れる強い人を見付けたら、絶対に手放さない。そういう人を逃したら、もう一回の機会な

んて、回って来ないかも知れないんだから。だから、あたしも由梨亜も、それに睦月も香麻も、その機会をしっかりと掴んで、逃さなかったの」

くすくすと笑って言う千紗に、柚希夜は目を細めた。

「……お幸せそうですね、千紗さん」

「そりゃあねえ。だって、まだ結婚してから一年も経ってないし？
由梨亜だってそうだよ」

「じゃあ……その幸せな富実樹姉上は——些南美姉上もですけど、
どうして弟の恋愛を邪魔しようとするんでしょうね……」

遠い目をして言う柚希夜に、千紗は思わず目を逸らした。

「それ、は……うん、それはそれ、これはこれ、なんじゃないかな？
自分は自分、でも、弟が悪い女に引っ掛からないか、とか……
うん、なんか、説得力ないね」

柚希夜はしっかりとしているし、そんな変な人間に引っ掛かるような余地はないということは、由梨亜も些南美も、特にずっと一緒にいた些南美はよく知っているだろう。

「結局、俺は弟でしかないってことですよね。子供じゃないんですから、放っておいてくれたらいいのに。少なくとも俺は、些南美姉上よりはしっかりとっている自信はありますよ」

「あー、うん……。そうだねえ。でも、弟だから、やっぱり心配なんだよ。……大事に思われてる間は、まだいいって思わなきゃ。あたしには兄弟とかいないから、よく分かんないんだけど……でも、心配してくれる人がいるって、いいよ？ やっぱり」

「じゃあ、俺の恋愛はどうしたらいいんですか？」

情けない顔で、それでも真剣に訊いて来る柚希夜に、千紗は考え込んだ。

「うーん、そうだねえ……やっぱり、自立するしかないよ。お姉ちゃん達に過干渉されないように、自分は大丈夫だって示して。それと、徹底的な秘密主義かな？ それこそ、入籍するまでは隠し通すとか」

千紗は冗談めかして言ったのだが、本気で考え込む様子の柚希夜に、慌てて声を掛ける。

「あ、柚希夜？　今のは例って言うか、ただの冗談だからね？　そう本気に考え込まない方が……」

「でも、方法の一つではあるんですね？」

「まあ……。あ、あたしは知らないからね？　柚希夜、そのつもりで！」

「はい。ご教授ありがとうございます」

柚希夜が真面目くさった顔で言った後、二人ともそれが面白くて、顔を見合わせて吹き出した。

「あゝ！　王子様！　こんな所にいたんですかあ？」

やけに甲高い声を掛けられて、千紗は眉をひそめ、柚希夜はぴくりと頬を引き攣らせた直後、それを覚られないように笑みを顔に張り付ける。

「こんにちは。マリサ」

「やあん、かっこいい！」

柚希夜の挨拶に返事もせず、何故だか甲高い声を上げる女子達に、千紗は怪訝気な顔をして柚希夜を見る。

柚希夜が、横目で懇願するように千紗を見て来るのを見て、千紗は何となく事情を悟った。

「ねえ、王子様。どうして学食でご飯なんか食べてるんですか？」

目をきらきらとさせて訊ねて来る女子に、柚希夜は当たり障りのない言葉を返した。

「私が学食でお昼を食べていたら、可笑しいですか？」

「えー、だって、王子様でしょう？　おうちのシェフにでも、お昼を作らせてるのかと思ってえ」

「おや、私の家にはシェフなんておりませんよ？　それに、この後も講義があるのに、わざわざ家に帰る理由ありませんし」

「でも、ちょっとレストランに行って外食したりとかあ！」

「いえ、まさか。そんな時間はありませんし、御金も勿体ないです

よ」

「いやーん、庶民的!」

「え、じゃあじゃあ、おうちにシェフがいないってことは、いつつもご飯ってどうしてるんですかあ?」

「どうって……学食で食べたり、時間がない時はどこかに寄って買ったりしますが、基本的には自炊ですけれど」

「えー、やだ、家庭的ー!」

きゃあきゃあど盛り上がる女子達に、周囲の良識ある人達は眉を寄せる。

「ねえ、あんた達」

突然千紗に声を掛けられて、女子達はびっくりと身体を震わせた。

「な、何よ、あんた!」

「私達、今王子様と話してるのよ?!」

「邪魔しないでよね!」

口々に声を上げる女子達に、千紗は眉を寄せて言う。

「じゃあ言うけど、今、あたしが、柚希夜と話してたの。それを邪魔したのはあんた達でしょう? 人の邪魔なんかしないで、さっさとご飯でも食べたなら?」

「ちよっと、あんた生意気よっ!」

「邪魔したのはあんたでしょう?!」

「そもそも、王子様のことを名前で呼ぶなんて、不敬だわっ!」
ぎゃあぎゃあどやかましく喚かれて、千紗は片耳を押さえた。

「あー、煩い。だから、あたしが先に話してたって言ってるでしょ。それにあたし、友達の名前で呼ぶ主義なの。ついでに言えば、あたしはこの国の人間じゃないし、友達を名前で呼んで『不敬』って言われる理由が分からないわ。『不敬』って言うなら、そっちの方が不敬でしょ? 人の迷惑も考えないで、勝手にぺらぺらぺらぺらと」

「何ですって?!」

「そっちにそんなことを言われる理由が分からないわよ!」

「そうよ！　そもそもあんた、どこの学部の誰よ！」

やかましく騒ぎ立てられて、元々周囲には人があまりいなかったのに、更にその人数が減った。

「だから言ったでしょ？　あたしは外国人だって。ただの辺境出身の貴族よ。何か文句でもある？」

千紗に睥睨されて、女子達は詰まる。

恐らく彼女達は庶民出なのだろう、貴族だと言った千紗に、明らかに怯んでいる。

けれど、威勢を取り戻した一人が更に喚き立てた。

「ちよつと、あんた！　じゃあ何、王子様を狙ってでもいるの？！　辺境の貴族ごときが、この花鳥国の王家の血筋でも狙ってんの？！」

その言葉に、他の二人も勢いを取り戻し、ぎゃあぎゃああと喚かれる。

「煩い！　ちよつとは黙って人の言うことでも大人しく聞きなさいっ！」

立ち上がった千紗に怒鳴られて、彼女達は瞬時に黙り込む。

千紗の気迫に押されたのか、それとも碌に叱られたことがないのか、はたまたその両方か。

黙り込んだ三人を見渡し、千紗は溜息をついて言った。

「まず一つ。あたしと柚希夜はただの友人同士。二つ。あたしは既に結婚してる。……これで柚希夜を狙ってるとか、浮気になるから無理。あり得ない。そもそもあんた達、人に対する態度がなってないわ」

「で、でも……結婚してる証拠なんて！」

動揺がそのまま現れているように、その声は震えていた。

自分が結婚しているということすらも疑われ、千紗は既に溜息も出なかった。

「証拠、証拠ねえ……。まあ、見れば分かりそうなものだけど？」

千紗が首を傾げて言うと、少女達は顔をしかめた。

「な、何よ！ そんなの分かんないじゃないの！ ここは花鶯国なんだから、辺境の風習なんか言われても、分かりっこないし！」

「……そういうことじゃないんだけどなあ。あたし、今妊娠してるんだけど、見て分かんない？ お腹だって、もう出て来てるし」

その言葉に、少女達は凍り付く。

「だから、あたしが柚希夜を狙ってるとか、そういう見当違いの言い掛かり、やめてほしいのよね。ってことで、さっさとどっか行ったら？ あんた達、すっごい目立ってるけど」

少女達はそれで冷静になったのか、慌てて辺りを見回し、自分達がとても注目されていたことに気付くと、そそくさとその場を立ち去った。

少女達の姿が見えなくなってから席に着き直した千紗に、柚希夜は疲れたように声を掛けた。

「千紗さん、撃退ありがとうございます。俺だと、いくら言ってもまとわりついて来るばかりで。……それにしても、やっぱり赤ちゃんいたんですか？」

「え、うん、そうだけど……柚希夜も気付かなかったの？ 可笑しいな、もう六ヶ月になってるんだけど……」

「いや、その……マタニティドレスって言うんですか？ 凄いやつたりした服を着ているので、ちよっと分かりにくくて……」

「ふうん……もう元気に動くくらい、おっきくなってるのになあ……」

千紗が口を尖らせて言うと、柚希夜は苦笑して言った。

「妊娠してるのに、よくここまで来ましたね」

「ん？ ああ、条件付きだよ？ 勿論。ここには後で睦月が迎えに来てくれることになってるし。何も病気じゃないんだからさ。まあ、さすがにもっと後になったら、花鶯国にも来れなかったけど。でも、由梨亜に『千紗に先を越されるなんて！』って言われた時は、やつたって思ったけどね」

下らないほどに低次元の争いに、さすがに柚希夜も笑いを殺せな

かった。

「まあ……そうでしょうね。富実樹姉上は負けず嫌いですから。そう言えば、赤ちゃんの性別って、もう分かるんですか？」

柚希夜が訊ねると、千紗は愛おしそうに笑ってお腹を撫でた。

「うん。男の子だって。凄い元気だよ。まあ、会社にはちよつと申し訳ないけど。だって、入社したのは今年なんだよ？　なのに、すぐに産休取ることになっちゃったんだから」

「ええ、そうですね。それにしても……新入社員が、よくこっちに來れるくらいの休暇を取れましたね」

柚希夜に呆れたように言われ、千紗は頬を膨らませた。

「大丈夫だから來てるんでしょうが。あたし達は、夏休みを長くする代わりに、冬休みを短くしてもらったの！」

「でも、千紗さんの場合、冬休みって産休と被ってませんか？　今は八月だから、六ヶ月ってことは、十二月に産まれるんでしょう？」

「だから、産休に入るのがちよつと遅くなるの。産まれるのは十二月の頭の方だよ。柚希夜とおんなじ月だね。師走生まれ」

千紗の言葉に、柚希夜は首を傾げる。

「その、『師走』って何ですか？」

「ああ……えっとね、日本州の、むかしの月の数え方だよ。十二月は師走って言うの。確か……もう、千年以上も前に使われてたんだっけかな。今じゃあ知ってる人も少ないよ」

そう言って、千紗は肩を竦める。

「え、じゃあ……どうして、千紗さんは知ってるんですか？」

「あのね、『睦月』って、昔の月で『一月』って意味なの。何でも、睦月のお父さんとお母さんは、そういうのが好きだったみたいで。

睦月は、一月生まれだから睦月。睦月のお兄さんは、五月生まれだから『皐月』。睦月の妹さんは、三月生まれだから『弥生』。……でも、正直言って、『皐月』って女の子の名前なんだよね。だから、お義兄さんはからかわれて大変だったみたい」

千紗の言葉に、柚希夜は吹き出しそうになったのを懸命に堪えた。

「お、女の子の名前、ですか……？」

「うん。字は違うけど、『さつきちゃん』って、結構そこら辺にいるんだよね。女の子で『さつきちゃん』って子、あたしも二人くらい知ってるし」

さすがに、千紗も苦笑いだ。

「千紗さんって、八月生まれですよ。じゃあ、八月って何て言うんですか？」

「八月？ 葉月はづきだよ。ちょっと素っ気ないけどね」

千紗はそう言うと、一気に残っていたお茶を飲み干すと、にっこりと笑った。

「じゃあ、あたし、そろそろ行くね。多分、もう睦月が迎えに来てる頃だと思うんだ」

「そうですか……」

少し寂しそうな顔をする柚希夜に、千紗はくすくすと笑う。

「じゃあ、地球連邦に帰る前にでも、由梨亜達と一緒に寄るよ。……実は今日、これから柚希夜の実家に行かなきゃなんないんだ」

柚希夜の実家――

その言葉に、柚希夜は目を丸くした。

「え？ 実家って……あの、城に？」

「お城って言うか、後宮？ ……ほら、由梨亜のこと、今までは、富瑠美と些南美と柚希夜と、あとは由梨亜の両親しか知らなかったでしょ？ でも、もう社会人になったんだし、富瑠美が王様っていうのにも、もうみんな慣れたと思うんだよね。今更、由梨亜を――富実樹を復位させる、なんて話には、ならないと思うんだ。だからみんなに話すの。……まあ、何で今日これからかって言うのと、富瑠美以外の兄弟って、もうみんな王宮を出ちゃってるでしょ？ 臣おうだいの麻笈華まみかだって、後宮からじゃなくなって街から通いだし。そのみんなの都合が付く日が、今日これからなんだよね」

千紗の言葉に、柚希夜は眉根を寄せて沈黙し――静かな声で言った。

「私の都合は、付きませんけれど？」

「うん、だって、柚希夜はもう知ってるでしょ？ それに、昨日の今日で、由梨亜と顔を合わせるのも気まずいだろうし」

「どうやらこれは、千紗の気遣いだったようだ。」

「だったら、そんな気遣いは無用だ。」

昨日、気が済むまで飲んで友人に愚痴って、そしてここで、慰めているのだから現実を叩き付けているのだから惚気ているのだから分からないことを千紗に言われて、レオノーラとのことは、もう大体吹っ切れた。

「……もしかしたら、自分はそれ程、彼女に執着していなかったのかも知れない。」

そう思えるようになったのも、そう言えば昨夜、自分は彼女を追い掛けなかったなどと、冷静に考えることができたからだ。

「大丈夫ですよ。……これから、一緒に行きます。久し振りに、他の異母兄上や異母姉上達とも顔を合わせたいですし」

「え？ でも、これから講義があるんじゃないの？」

「ありますけど、別に出席が必要な物ではありませんし。後でいくらでも取り返せます」

「そう？じゃあ、一緒に行こっか」

千紗が立ち上がりながら言うのと、柚希夜も同じように立ち上がった。

「あ、そう言えば、柚希夜。二日酔いで頭が痛いっていうのは、由梨亜達に言わない方がいいかもね。ほら、過保護だからさ、あの二人。そんなこと言ったら、『今後お酒なんて禁止！』って言われるかもよ？」

冗談のように千紗は言ったが、これは紛れもない事実だ。

「……そう、ですね。できるだけ、気付かれないように頑張りますよ」

「うん、頑張って！ 大変だねえ、自立心旺盛の末っ子君は」
千紗に茶化されて、柚希夜はがくりと肩を落とした。

「あ、そう言えば、柚希夜」

歩き出し掛けていた柚希夜は、怪訝そうに眉を寄せて千紗を見る。
「その喋り方——似合ってるよ。完全敬語より、人間味があって」
千紗はそう言っにやっとなうと、柚希夜を置いて歩いて行く。

柚希夜はしばし呆然と突っ立っていたが、不意に照れ臭そうな笑みを洩らすと、千紗の後を追って行った。

——その後、王宮を訪れた千紗が、元深沙祇妃^{みさぎひ}である妃^ひのミアン・ストールと、全く意思の疎通ができなかったのは、また別の話である。

（続）

—私の恋愛奇譚—1（後書き）

すみません、まだ続きますm
（
m

—私の恋愛奇譚—2

「おう、柚希夜ゆきや！ 今いいか？」

ノックも何もなしに突然扉が開け放たれて、柚希夜は顔をしかめた。

「ラルス、人の部屋に入る時くらい、ノックしろよ。お前が学生じゃないかって、ほんと焦ったからな」

柚希夜はぶつくさ文句を言うと、手早くコンピューターの電源を落とした。

「あ？ お前、何かやってたのか？」

「ああ、次のテストの最終確認。全く、俺が若手だからって、こんなにこき使わなくてもいいだろうに……俺はまだ二十七だぞ。それに、俺は助手じゃなくて助教だ」

「ん？ 何？ レイヴェル教授、そんなに人使いが荒い訳？ あー良かった、俺、普通に就職して。つつうかお前、何が楽しくて院まで進んで、修士取った挙句に博士まで進んだんだ？ 結局、博士号取って学生じゃなくなったのって、つい去年じゃねえか。二十代のほとんどを食われてんだぞ」

ラルスに顔をしかめて言われ、柚希夜は苦笑した。

「そんなの人の勝手だろう？ 博士課程やりながらも、充分二十代は満喫できるさ。それに俺は、お前みたいにジャーナリストになるよりは、大学に残ってマクロ経済でもやってた方が気楽なんだよ」

「だうから、マクロの何が面白いんだよ。ミクロの方が楽しいだろう？ 細かく細かく見てって、金がどうやって動いて、世界を動かしてるのか見るのが醍醐味だろうが」

「は？ ミクロだったら、ちっこい所からの出発だろ？ 全体に行きつくまで時間が掛かる。それよりは、全体を俯瞰するマクロの方が絶対に楽しい！」

「分かってないねえ。そのマクロを動かしてるのがミクロの集合体

なんだよ！ このわくわく感、どうして分かんないのかなあ？」

「そっちこそ、足元ばかり見てると頭をぶつけるぞ。マクロが分かってこそ、ミクロに人の意識は向くんだよ！」

二人は同じ大学の同じ経済学部出身なのだが、片やマクロ経済学、片やミクロ経済学を専攻していたこともあり、この意見で二人が一致したことは一度もない。

「あの……」

突然若い女性の声がして、柚希夜は怪訝そうにラルスの背後を覗き込む。

「貴女は？」

「あ、初めまして。私、経済ジャーナリストのフェミニア・キャメロンと申します。花雲恭助教かうんきょうですか？」

名刺を差し出された柚希夜は、不思議そうにその名刺を受け取る。

「はい、確かに、私ですけれど……」

「実は私、経済ジャーナリストではあるんですけど、今度の特集で、高校生向けの大学特集を組むことになりました。私は、その経済学部・学科担当なんです」

確かに、それはよくありそうなことではある。

「そうですか。では、広報の方へ行かれた方が宜しいのでは？ 宣伝ということならば、こちらも断らないでしょうし」

「いえ、そちらの許可は既に頂いております。私がお願いしたいのは、花雲恭助教に、インタビューさせてほしいってことなんです」
「……………はい？」

突然の言葉に、柚希夜の思考は停止し、間抜けのようにぽかんと口が開いてしまう。

「ですから、どうかインタビューを、お願い致します。花雲恭助教は、院を卒業してすぐに、若くして助教となられていますし、大学から院、そして助教になるまで、一貫して同じ大学に属していらっしゃると思いますよね？ それに、学生時代からとても有能でいらっしやうったと、教授方の間でも評判だったとか。そういう方のインタビュー

「いや何かが載れば、学生達のやる気も増すと思うんです」

彼女はまだ若手なのだろう、自分で思い付いた企画の実現に向けてやる気がみなぎっていて、恐らく断られるとは思ってもいないのだろう。

……もし、彼女が、柚希夜のことを『花雲恭助教』と呼ばなければ、柚希夜は断っていただろう。

それに――彼女のやる気は、柚希夜にとって、とても心地よかった。

「私はあまり、メディアに露出する気はないのですけれどね……」
取り敢えず、これだけは言っておきたかったからそう言うと、途端にフェミーマの顔がさっと曇った。

「ご迷惑……でしたか？」

「ええ……そう、ですね。学会以外では、あまり目立ちたくはないのですけれど……」

柚希夜は、ほんの少しだけ、微笑した。

初対面の人間では、分かるか分からないか程度に。

「貴女の熱意に負けました。インタビュ程度なら、いいですよ。ただ、名前は曖昧にばかりしてくれると助かります。あと、写真とかも、できればない方が」

「略歴のような物は？」

「大学以降の経歴程度なら、構いませんよ。……正直、初めて通った学校が大学なので」

柚希夜が苦笑して言うのと、ぱっとフェミーマの顔が明るくなった。そして、すぐに不思議そうな表情に取って代わる。

「あ、でも……最初の学歴が大学って、じゃあ、大学にはどうやって入ったんですか？」

どうやらこれは、彼女の純然たる興味のようなだ。

ころころ変わる感情豊かな彼女の表情は、見ている面白い。

柚希夜は笑いを噛み殺して答えた。

「高卒程度の学力を有していると証明できる、試験と言うか、資格

のような物があるのです。それさえ受ければ、年齢や国籍などは関係なく、大学入学試験を受ける資格を得られるのですよ。だから、私のように学校に通ったことのない人でも、大学から通うというのは可能ですし、逆にその制度を利用して、飛び級のように大学に入学する中学生くらいの子もおりますよ。確か、この大学にも、そうやって飛び級して来た学生が在籍しているはずですよ。……まあ、大抵の大学の募集要項にも、書いていることではありますが」

「あ……そ、そうだったんですか。ありがとうございます」

途端に赤面して頭を下げるのは、自分の無知が恥ずかしかったのだろうか。

「いえ、貴女が知らないのも無理はないことです。大抵の人は、普通に小学校から高校まで通って、大学に入学しますからね。私のような人は、圧倒的に少数派です。それに、貴女の専門は経済であって、学校や教育ではないでしょう？　でしたら、知らないと言うのは当たり前のものであって、仕方のないことです」

「あ、はい……。でも、花雲恭助教って、どうして大学まで学校に通わなかったんですか？」

あまりに直球の質問に、柚希夜は目を剥いてラルスを凝視する。けれど、そのラルスは引き攣った顔で目を逸らした。

彼にしても、このフェミニアの質問は予想外だったようだ。

「その……安全上の問題、とでも言いましょうか……」

「安全上？」

「ええ、何て言うか……その、習慣でもあるような……」

「習慣？？」

益々きょとんと目を瞠る彼女に、柚希夜は目を泳がせた。

「……えっと、色々と面倒臭いので、そういう家系だって考えてもらえれば……」

「そんなにお偉い家なんですか？」

「……さすがにこれは、『無知』とは言えない。」

柚希夜は、身体中の力が抜けてしまった。

ラルスを見ると、どうやら笑いを堪えているようで、手近な壁に額を付け、身体が震えている。

こうして見ているだけで、全身に力が入りまくっていることが分かるのだから、彼は今まさに腹筋との戦いの最中だろう。

「その……キャメロンさんは、外国のご出身で……？」

「いえ、シャン克蘭出身です」

その返答に、益々柚希夜の身体から力が抜ける。

シャン克蘭とは、花鶯国かおうこくの首都である。

つまり、生粋の花鶯国出身な上、王のお膝元である王都出身者なのだ。

ラルスの身体の震えも、最早痙攣の域にまで達していて、彼の腹筋が崩壊しないかどうか心配になって来る。

「あの……？ 私、変なこと言いましたか……？」

「ええ……。気付いてなかっただけなんですネ……」

柚希夜は、何だか頭痛がして来て、眉間を指でぐりぐりとほぐす。そう言えば、ここしばらくは問題の作成とその校正で、ずっとコンピューターに釘付けだった。

そのせいもあるのだろうか。

いいや、しかし、彼女の言葉は決して幻聴ではない。

その証拠に、ラルスは立っていることもできなくなって、とうとう床に横たわってしまった。

身体は震え続けているから、知らない人が見たら、痙攣を起こしているとか勘違いされて、すぐに救急車が呼ばれることだろう。

「あの、ですね……。私の名字は、何でしょうか？」

「え……花雲恭、ですよネ？ 花雲恭助教って……」

「じゃあ、私のフルネームは？」

「えっと……花雲恭柚希夜さん、ですよネ？」

……終いには、『さん』付けた。

とうとう、ラルスはげらげらと声を上げて笑い出した。

ひいひいと、聞いているととても苦しそうな笑い声だし、涙まで

「ええ。そして、最後に、末っ子である花雲恭柚希夜が来ます」

その言葉に、フェミールがぼかんと口を開ける。

「……花雲恭、柚希夜……？」

咄然としているフェミールに、柚希夜は苦笑して訊ねた。

「貴女は、国王の名字を聞いたことはなかったのですか？」

「……………意識したこともありませんでした……」

確かに、花鶯国の王位は完全に世襲制であるので、一々名字は憶えないのかも知れない。

だから、外国人が『知らない』と言うのは仕方がないとは思っていたが、まさか同国人に『意識したこともない』と言われるとは思ってもみなかった。

「……では、私の名前に不自然さを覚えはしなかったのですか？
普通は名前の方が先に来ますが、私は名字が先ですし、音だって普通の名前と違います」

「えっと……ラルス先輩みたいに、外国人だと思ってました」

柚希夜は、あまりのことに頭を抱えたくなった。

実際、何だかずきずきと頭が痛んでくる。

何なのだろう、この天然は。

「え、ってことは……もしかして、国王陛下ってお姉様なんですか？！」

……今更、気付いたらしい。

「ええ、そうですよ。腹違いの姉です。それに、先王である富実樹姉上とは、母も同じです」

柚希夜の血筋が、実はとんでもなく高いということを理解したのか、フェミールの顔が蒼くなる。

「え、わ、私……」

がたがたと震え出すフェミールに、柚希夜が声を掛ける前にラルスが先に声を掛けた。

「だーいじょうぶだって、フェミール！ こいつ、そういうの気にしない奴だから！ むしろ、王子扱いされるの嫌がる奴だし。そも

そも、こいつが目立ちたくないって言ったり、名前をぼかしてほし
いって言ったりするの、王族だって言うのが必要以上に広まりた
くないだけなんだからさ」

……どうやら、いつの間にか復活していたらしい。

「ラルス、お前な……」

「だって、事実だろ？ それに、何てったつけ？ 名前忘れたけど、
大学時代の女の子達からきゃあきゃあ言われまくってんのにさ、お
前はずうっと仏頂面か作り笑顔だったろ？ あれじゃあこっちも分
かるっつうの」

「……皆が皆、お前みたいだったら、どんなに楽だったろうな」

柚希夜は、聞き取れないくらいの小さな声で漏らす。

「ん？ 何か言ったか？」

「いや、何も」

ラルスも、姉やその親友達も、同じような人間なのだ。

相手を身分や姿形で見ない。

けれど、大多数の人間は違った。

ほとんどの人間——特に女達は、柚希夜の『王子』という身分で
盛り上がり、整った顔立ちに歓声を上げた。

もし、柚希夜がただの庶民だったら——そして、ここまで顔立ち
が整っていなかったら、こんなに人が近付いて来ることも、必要以
上に遠巻きにされることはなかっただろう。

それを思うと、自分の血筋さえ苦々しく思う。

けれど、それは仕方のないことなのだ。

今、柚希夜は自分の収入で暮らしているが、子供の頃に国でも最
上の生活ができていたのは、王室の財産の為ではあるが、それは回
りまわって国民の血税であったのだから。

「んじゃ、取材大丈夫ってことでいいよな？」

少し思索に耽っているうちに、ラルスとフェミリアの間で話がま
とまったらしい。

「あ、ああ。構わない。ラルス、俺の連絡先を彼女に教えておいて

くれ」

「ああ、分かった……って、お前、名刺は？」

「面倒臭いから刷ってない。こういうのを、特に女に渡せば、どこに洩れるかも分からないんだからな」

柚希夜が吐き捨てるように言うと、ラルスは顔を引き攣らせた。

「……お前、それでよく今までやってこれたよな……」

「別に、俺はただの助教だし、大して問題はない。それに、どうしても必要な時は、大学名と俺の名前だけ入れた名刺を刷ってる。但し、連絡先は一切入れてはいないから、今ここで渡したって何の意味もないだろう？」

あっさりと言い切った柚希夜に、ラルスもフェミニアも絶句した。

「……随分と、徹底してるんだな」

「当たり前だ。お前、一度くらいストーカーされてみれば、俺の言ってることが分かるだろうよ。ああいう女の執念は、本当に怖いんだからな。しかも、一人いなくなったと思ったら二人増えてる、なんてのが日常茶飯事だし。ゴミですら拾い集めるんだから、おちおちゴミも捨てられない上に、抜けた髪の毛の処理まで気に掛かって来る。それに、俺が何度か引っ越したのも、そういう奴らに家を付き止められて、しかもそいつらが集団で、徹底的なストーキング体制を敷いたからだ」

その壮絶な言葉に、ラルスは目を逸らした。

「あゝ、やけに神経質だと思ってたら、そんな裏事情があった訳か……？」

「ああ。ついでに言うと、お前にやたらとたかかった女達。あれ、お前目当てじゃなくなって俺目当てだったぞ。あわよくば、お前から俺の情報や連絡先が洩れて来ないかって狙ってた」

「……………マジ？」

「ああ」

柚希夜が断言すると、ラルスはその場に崩れ落ちた。

「俺のモチ期……………」

「残念だったな。純粹にお前目当てに近付いた女を、遺憾ながら俺は知らない。……用事は済んだだろう？ とつとと帰れ。――キヤメロンさん。では、また」

「あ、はい。失礼しました。後でご連絡させていただきますので、宜しく願います」

フェミニアはぺこりと頭を下げると、そそくさと部屋を出て行った。

「全く……お前は帰らないのか？」

柚希夜が呆れたように睨んでも、どこ吹く風でラルスは飄々としている。

「ああ、うん。後で、教授陣に挨拶でもしようかなって思ってたからさ。ついでに今夜、飲みに行かないか？」

「何だ、お前、帰らなくてもいいのか？」

「おう。今日は直帰で大丈夫って許可もらったからな。……この世界で有名な若手のお前と繋ぎを取れたんだ、これでも俺、結構部内の評価は上がってるんだぞ？」

「はあ……友人を売るのか？ お前」

「何とでも言え！ 俺は、俺の評価を上げる為には手段を選ばない！」

ほんと胸を張って宣言するラルスに、柚希夜は苦笑する。

『手段を選ばない』とは言っても、ラルスが連れて来たのは、柚希夜の身分や顔で一喜一憂する子ではなかった。

いくら計画の発案者でも、そんな少数派の子をわざわざ連れて来たのだから、大分柚希夜に気を遣っているというのは分かっている。う。

だが、それをわざわざ言うほど、柚希夜は幼くもなかったし、自尊心も低くはなかった。

だから、別のことを言った。

「それにしても、どうしてお前がわざわざ連れて来たんだ？ 敢えてお前が来なくても、彼女にやらせれば良かっただろうに。俺より

も若いだろうけど、入社したてではないんだろう？ 企画を任せられるくらいなんだから」

わざと呆れたように言えば、ラルスは胸を張って柚希夜を見下ろした。

「勿論、俺の評価を上げる為に決まってる！ この世界、文章力と人脈さえあればのし上がれるんだからな。ここで俺の人脈力を示しておいて、損はないだろう？」

「そんなことかよ……」

柚希夜は額を押さえた。

「だってなあ、いいか？ 王子のお前と知り合いつてことは、もしかしたら、俺とお前を通した上で、他の王族に独占取材できるかも知れねえじゃねえか！ 俺、お前と知り合いだーって言った時から、芸能関係の部長から勧誘が掛かりまくりだし！」

柚希夜は、胡乱気な目でラルスを見上げる。

「……お前、そっちに移籍する気か？」

もし、彼がそのつもりなら――

「まっさかあ！ 俺は今まで、経済一本でやってきたんだぞ？ 今更畑違いに移っても、失敗するのは目に見えてるさ。特に、『経済』と『芸能』なんて、全く別物だろう？ まだ環境系なら分かるんだけどなあ。俺に芸能は無理さ」

「……そうか」

どうやら、ただの自分の杞憂だったようだ。

もし、誰かが自分を利用して、兄姉達に繋ぎを取ろうというのであれば、柚希夜は袂を分かť覚悟があった。

一体何が、彼らの害になるのかも分からないのだ。

特に、二番目の異母姉である富瑠美は、国王ということもあり、彼女に繋ぎを取ってくれと言い出す人間は、冗談半分の者も含めれば数え切れない。

「何だ？ 俺、そんなに信用ないのかよ。確かにお前が警戒すんの、仕方ないっちゃあ仕方ないけどさあ。それにお前、もしフェミ

「アだけが来て俺が付いて来なかったら、取材受けようとしなかったろ？　どんなに善人に見えたって、中までそうとは限らないしさ。お前が、見ず知らずの人間を簡単に信用するとも思えない」

やけに真剣な顔に、柚希夜は思わず顔を逸らした。

確かに、自分は用心深い。

それは、足元を掬われたくないからだ。

自分の父の仇とも言える男に騙されたというのも、そのきっかけの一つであろうか。

それに、それが他人から見れば『神経質』に見えるのも、柚希夜は知っていた。

けれども、直そうとは思わない。

だって、それがなければ、自分はただ利用されるだけの存在に成り下がるだろうから。

だったら、自分は、他人に良く思われたい方を選ぶ。

それが、柚希夜の自衛手段であり、兄姉達を護る手段でもあるのだ。

「……別に、その何が悪いんだよ」

不貞腐れたように呟くと、ラルスは可笑しそうに笑った。

「いいや？　別に悪くなんかないさ。お前みたいに女にもてる奴は、自己防衛も必要だろう？」

その言葉に、柚希夜は渋面を作った。

確かにその通りではあるのだが、他人に言われると、何故か気に食わない。

「さて、と。んじゃ、久し振りに飲みに行かか？」

脈絡のない言葉に、柚希夜は哑然とする。

「……何だよ、いきなり」

「だってさあ、久し振りだろ？　こうして会うのも。だから、飲みに行かかえか？　フェミィアも呼ぶし。ほら、親交を深めた方が、よりインタビューがやりやすくなるだろ？」

「……何でそうなる」

顔を引き攣らせる柚希夜に、ラルスはにやりと笑った。

「いいじゃんかよ。とにかく楽しめればそれでいいんだ！　じゃ、お前の仕事が終わるまで、俺はちよっと教授達に挨拶でもしてくるかなあー。あ、じゃあ飲み会は決定でいいよな？　フェミミアには俺から連絡するからな。確か、報告で戻ってるはずだから、まだ会社かな？」

ラルスはぶつぶつと呟きながら部屋を出て行ってしまった。

柚希夜は、しばらく呆然とそれを見送っていたが、自身の机に目を戻した時、やりかけの仕事を思い出して真っ蒼になった。

レイヴェル教授は、柚希夜に仕事を押し付けて来る上に、それが完璧でないと勘ねるのだ。

いい大人——どころか、既に老齢に差し掛かっている年齢なのに、彼は一度勘ねると機嫌を取るのがとても大変で、柚希夜も何度かお菓子を買いに走らされた。

そして、それが気に入らないと言われ、何度も駄菓子屋やスーパ―を往復したのは、今でも苦い思い出だ。

唯一ましなのは、柚希夜が買って来たお菓子は、全てレイヴェル教授の自費になったということだろうか。

柚希夜は冷や汗を掻きながら深い溜息をつく、再びコンピューターを立ち上げて、ミスをしないよう慎重に、けれども素早く仕事を進めていった。

「柚希夜、おめでとう。乾杯」

フェミミアにっこりと微笑まれながら言われて、柚希夜も頬を緩めた。

「ありがとう、フェミミア」

「ふふ、どう致しまして。でも、凄いいじゃない。まだ三十歳になったばかりなのに、准教授って」

「そんなに凄くないよ。俺よりも若くして准教授になった奴なんて、

それこそ世界中に沢山いるさ」

柚希夜が肩を竦めて言うと、フェミミアは頬を膨らませた。

「それでも！ 私が柚希夜を褒めたいんだから、大人しく受け取ってよね？ それにしても、今日ラルスが来れなかったのは残念だわ。折角のお祝いなのに」

不貞腐れたように言うフェミミアに、柚希夜は苦笑した。

「いや……俺は、どっちゃって言うとか、あいつには来てほしくなかったな。今日は、フェミミアとお祝いだから。あいつがいたら、台無しになるだろう？」

「そうかも知れないけど、お祝いは大人数で楽しい方がいいじゃない。ラルスだって、きっとそう言うはずだわ」

「……まあ、あいつが言いそうなことだな……」

柚希夜は呟くと、フェミミアと顔を見合わせて吹き出した。

その笑いが一通り落ち着くと、柚希夜はふと首を傾げた。

「そう言えば、フェミミア。ラルスのこと、この前まで『ラルス先輩』って呼んでなかったか？ 何で、いきなり呼び捨てに？」

「え？ だって私、昇進してラルスと同じポジションになったんだもん。いくら向こうの方の入社が早くっても、地位で見れば同僚でしょ？ それに、ラルスは友達だし、『先輩』って付けるのが馬鹿らしくなっちゃったの」

そう言ってくすくすと笑うフェミミアは、欲目を差し引いても可愛らしい。

いつもは利用しない少し高級なレストランだから、ここの客層はそこそこ上であるはずなのに、ちらちらとこちらを窺う視線を感じるのだ。

柚希夜は、可愛らしく笑うフェミミアを見て、益々頬を緩めた。他人とは違って、柚希夜だけは、いつまでも彼女を見ていたって咎められることはない。

何故なら、フェミミアは、自分の彼女なのだから。

柚希夜は、フェミミアと付き合いだした当初を思い出して、思わ

ず遠い目をした。

取材を切っ掛けとして、柚希夜とラルスとフェミニアの三人は、頻繁に出掛けていた。

出会ったきっかけはよく憶えてはいるが、恋に落ちたきっかけは、よく憶えていない。

いや、むしろ、少しずつ積もったような感じだから、具体的なきっかけなどはないのかも知れない。

強いて言えば、彼女の言動や行動、仕草なのだろうか。

そして、それは向こうも同じだったらしく、二年ほど前から付き合うようになった。

だから、こうやって二人が出逢うきっかけを作ってくれたラルスには、口に出して言えば調子に乗るのが分かっているから言えないが、本当は感謝していた。

けれど、それを見てやけににやにやしているラルスを見て、柚希夜が不審に思っ**て**強く問い詰めた所、

『いやあ、だってお前、何年彼女いないんだよ！ フェミニアだったらお前と気が合うかなあって思ったただけだって！ 上手く行けば彼女になるし、駄目でもいい友達になるだろう？ むしろ、きっかけを作った俺様に感謝しろっ！』

と言われたので、問答無用でぶっ飛ばしたのだが。

「柚希夜……柚希夜、どうしたの？」

フェミニアに顔を覗き込まれて、柚希夜ははっと目を瞬いた。

「あ、いや、何でもないよ。……でも、お前が昇進したなんて、俺一言も聞いてないぞ？ 何で言ってくれないんだよ」

「え？ だって驚かせたかったから――て、あ！ 私、今言っちゃったよね？ あゝ、驚かせたかったのになあ。柚希夜は昇格したけど、私も昇進したんだよって」

唇を尖らせて唸るフェミニアに、柚希夜はくすくすと笑う。

「そういうのが、お前らしいよな」

「もう、折角驚かせたかったのにい。あゝ、失敗。今日、あんなの

聞いちゃったから、色々飛んじやったのかなあ」

フェミミアの言葉に、柚希夜は首を傾げた。

「あんなのって？」

「ん？ あのね、私の後輩の女の子が、でき婚で寿退職するんだって。もうそんな年齢なのかなあって思ったら、ちょっと落ち込んだじやった」

そう言っ肩を竦めるフェミミアに、柚希夜は苦笑した。

「そんな年齢って、フェミミアは二十七歳だろう？ まだ充分若いじゃないか」

「だから、その私よりも若い二十五歳の子が結婚するんだよ？ ちよつとショックだったなあ」

「――じゃあ、俺らも結婚する？」

言葉としては短く、語調も気軽だ。

けれど、その短い言葉を言うだけで、柚希夜の背に多量の汗が流れた。

「え……？」

驚いたフェミミアは、大きく目を瞪る。

柚希夜は、手に冷や汗を握って、真剣な顔でフェミミアの言葉を待った。

……こんな時なのに、何故か、千紗ちさの言葉が思い出される。

そう、あれは、確か自分が大学生で、最初の彼女と別れた直後。

好きになった人と結婚でき、子供までできた千紗が羨ましくて、そして、その時の言葉が印象的だったから、今でも憶えている。

『――逆を言えば、そういう風に粘れる強い人を見付けたら、絶対に手放さない。そういう人を逃したら、もう一回の機会なんて、回って来ないかも知れないんだから――』

そう、フェミミアは、千紗の言葉を借りれば強かった。

付き合った時は、そこまで踏ん張らなくても、彼女を手に入れることができた。

けれど、それと結婚はイコールではない。

付き合っただけで結婚しなかった相手なんて、一体この世界にどれくらいいるのだろうか。

恐らく、一国どころか一つの地方に限ったとしても、数えるのも馬鹿らしくなるほどの人数がいる。

だから、柚希夜は必死だった。

嫌になることに、自分の好みはラルスもよく分かっている。

彼女は、見事にそこへ合致したのだ。

もう逃したくないと、真剣に願った。

フェミアを、『彼女』として捕まえることはできた。

二年間――友達でいた期間も含めれば、三年間も一緒にいたから、互いのことはよく知っている。

その長い付き合いでも、柚希夜は彼女と別れたいとは思わなかった。

だから、粘らなくてはならない。

手放してはいけない。

何故なら、その機会は、もう二度と来ないかも知れないのだから。

「柚希夜……あのね、私……そういう、ノリって言うか、乗せられて結婚するの……嫌だな……」

「ノリなんかじゃない。俺は、真剣だよ」

間髪を容れずに畳み掛けた柚希夜に、フェミアはたじろぐ。

「元々今日は、そのつもりで逢おうと思ったんだ。……俺は、まだまだ若いし、大学の中でもそんなに力はない。社会人になった境目も曖昧だし、自分の母校だから、教授達も、遠慮はないけど俺に甘い所がある。――こんなんじゃない駄目だ。だから、もっと力を付けたいと思ってたんだ。今更大学を移るなんて、現実的じゃない。だから、上に行こうと必死だった。……それで、准教授に昇格して、これでようやくお前にプロポーズできるって思った。だから、フェミア。……俺と、結婚して下さい」

柚希夜は、深く頭を下げる。

……沈黙が、長かった。

「……でも、私……柚希夜の家に入る自信なんて、ないよ？ 私、ただの庶民だもん。荷が重過ぎるよ。……そりゃあ、昔までの制度の最女は庶民から選ばれてたけど、それでも、大抵は学者の娘とか、官吏の娘とか……庶民の中でも、上の方の人でしょう？ 私の両親は、普通の勤め人だし、私だってただのジャーナリストでしかないのに、……重過ぎるよ」

柚希夜は、ゆっくりと顔を上げ、真剣な顔でフェミリアを見据える。

「それなら、入らなきゃいい。……他の国ならともかく、花鶯国は夫婦別姓だろう？ 例外は、王家に入って、王籍に名を連ねる女性だけだ。俺は……この名前を——花雲恭の姓を、自分の子供にまで受け継がせたいとは思わない。だから、お前も、子供も、王籍には入れたくない。……こんなのは、ただの足枷なんだ。要らないよ。」

……俺には、必要なんてないんだ。子供には、キャメロンの姓を名乗らせればいい」

真っ直ぐに目を見据えて言う柚希夜に、フェミリアは泣きそうに顔を歪めた。

「だって……それで、許されるの？ 私が会った、柚希夜のお姉さん達……とっても優しくかったけど、それって、私が柚希夜の『友達』だって紹介したからでしょ？ お姉さん達にとって、柚希夜は大事な弟なんだよ。そんな簡単に、許される訳ないでしょ？」

俯いて口早に言葉を重ねる彼女に、柚希夜は途惑う。

「フェミリア？」

「……私、聞いたんだ。ラルスに。柚希夜が初めて付き合った人と、どうなったのか。……多分、私と結婚するって言って、更に王籍にも入らないなんて言ったら、一体どうなると思う？ ……柚希夜は、自分のお姉さんなんだから、知ってるよね？」

柚希夜は、思わず息を呑んだ。

まさか、ラルスがそんなことまで話していたなんて、思わなかったのだ。

「……確かに、俺が最初の彼女と付き合った時、姉達が暴走したのは事実だ。でも、それは二人だけだし、その二人だって今は結婚していて、一人は九歳と六歳の娘が、もう一人は四歳と一歳の息子がいる。……姉達だって、もう結婚して家庭を持ってるんだ。俺が結婚したいっていう気持ちを理解してくれるはずだし、ごねたって俺が必ず説得する。……それに、俺は元々末っ子だ。王位が回って来る可能性なんてほとんどないし、俺の子供が王になる可能性だって低い。だから、お前が王籍に入る必要もないんだ」

静かに、けれど力強く断言する柚希夜に、フェミミアは目を泳がせた。

そう、もう少しだ。

あと、何か一手はないだろうか。

そう思って真剣に思考していた柚希夜は、あることを思い出してぱつと顔を輝かせた。

「フェミミア。どうしても、姉達が反対するのが気に掛かるって言うのなら、そしてお前が順番を気にしないのなら、俺に一つ提案がある」

「何……?」

「さっさと入籍してしまえばいい。そして、その手続きが完全に済んでから、姉達には報告する。それから了承を取って、結婚式を挙げればいい」

暴挙とも取れる柚希夜の言葉に、フェミミアはぽかんと口を開けた。

「勿論、お前の両親や親戚には、入籍する前にちゃんと挨拶に行く。……隠すのは、俺の方の家族だけだ。これなら、いくら王族でも手出しはできない。どうしても姉達が許さないと言うのなら、俺が縁を切ればいいだけの話だ。……それでも、駄目か?」

柚希夜は、真剣にフェミミアを見詰める。

……今度の静寂は、先程よりもずっと長かった。けれども、柚希夜はじれなかった。

結婚を簡単に決めてしまうような相手だったら、柚希夜は決して選ばなかったから。

長い時間の後、フェミニアは、ようやく口を開いた。

「……不束者ですが、宜しくお願いします」

そう言ってぺこりと頭を下げるフェミニアに、柚希夜はぽつと顔を明るくした。

「じゃあ、フェミニア……！」

「うん、柚希夜と、結婚する。……でも、ちゃんとうちの両親には挨拶に来てね？　そしたら、結婚式の前に入籍してもいいから」

「分かった。じゃあ、すぐに両親に予定を聞いてくれないか？　向こうの都合が付く一番早い日に、挨拶に行くよ」

「うん、分かった。帰ったら聞いてみるね」

そう言って笑うフェミニアに、柚希夜は心底安堵する。

そして、千紗に感謝した。

実は、実力行使と言うか、問答無用で入籍して、兄妹達には隠してしまえというのは、千紗が『絶対に手放すな』と忠告した時に、一緒に言っていたことなのだ。

本人は、

『あたしは知らないからね？』

と慌てて言っていたが、柚希夜もそれを告げ口するほど野暮ではない。

だって、千紗のお蔭で結婚できそうなのだ。

千紗に対する感謝を表す為にも、このことは口を噤んでいた方が無難だろう。

「じゃあ、フェミニア。食べようか。……もうすっかり冷めてしまってる。勿体ないな」

「ふふ、うん、そうだね。でも、冷めても美味しいよ。やっぱり、一流レストランは違うね」

「お前な……比較基準、そこら辺のファミレスだろ？」

「えへ。ばれた？」

「当たり前だ。一体何年付き合ってると思ってる？ お前のお財布事情なんて、完全に筒抜けだよ」

照れて笑うフェミニアに、愛しさが益々込み上げて来る。

「フェミニア。確か、明日も休みだよな？」

「うん、そうだけど？」

「じゃあ、何か記念品でも見に行こう？ 一生使えるのがいいな」
花鶯国では、結婚する時に、何かお揃いの物を揃えるのだ。

それは、人によってアクセサリーだったり、雑貨だったりするのだが、柚希夜には今一つしっくりこない。

「そうね……。一生使える物って、結構難しいわね。うん……。そう
だ、じゃあ、香水は？」

「香水？」

予想外の返答が来て、柚希夜は目を瞬く。

「そう、香水！ あのね、この前見付けたお店なんだけど、自分で好きな匂いをブレンドできるんだって。種類は何百通りにもなるから、どんな人にも合う香水を作れるって評判なの。……。香水って消耗品だけど、特別な日にちょっと付けたりするだけにして、おっきい瓶で買えば、一生保つ気がするの。それか、香水として身体に付けるんじゃないかって、蓋を開けて匂いを楽しめばいいんじゃないかな？ それに、何かロマンチックな気がして……。駄目？」

そう言って小首を傾げるフェミニアに、柚希夜は相好を崩した。

「勿論、大丈夫だ。じゃあ、明日はそれを一緒に見に行こうか。：

：一生物にするんだから、慎重に選ばなきゃな」

「うん。……。私、すごい楽しみ。ねえ、柚希夜。どんなのに仕上がるのかな？ そのお店、結構サービスが良くて、こっちが納得するまでテストも出して来てくれるし、匂いもしつこくないし、成分も天然素材の物だからお肌にもいいんだって！ その分値段は跳ね上がるけど、いいよね？ 結婚の記念なんだもん」

「ああ。俺だって、今までの分の給料があるからな。……。あ、でも、結婚式とか、新居にも金が必要だよな。……。いくらくらい掛かるん

だ？」

首を傾げる柚希夜に、フェミーマも難しい顔をする。

「うーん、私もよく分からないわ……。じゃあ、後で聞いてみるね？ 私の同僚で、確かブライダル関係の記事担当の子がいたはずだから……。その子に訊けば、多分相場が分かるところ」

「ああ、頼むな」

「分かった、頼まれた！」

ふざけて答えるフェミーマに、柚希夜もフェミーマも吹き出した。ふと、柚希夜は思った。

自分は、子供の頃から、どれだけ成長したのだろうと。

産まれてから今までの三十年間で、自分はどれだけ『大人』に近付けたのだろうと。

けれど、それは考えても無駄だとすぐに気づき、苦笑する。

大事なのは、この『今』だ。

彼女との『今』を大事にして、『未来』を創りたい。

勿論、その元になっているのは『過去』だが、今はそれを思う必要性なんてない。

今、この時が、楽しいのだから。

たとえば、自分が大して成長もしていなくて、中身が『子供』のままだったとしても、彼女と結婚できるのは、そのまさに今の『自分』なのだ。

だから、精一杯、彼女と今を、そして未来を生きていきたい。

……そんな簡単なことに気付くまで、三十年も掛かった。

けれど、気付けたのだから、それでいいのだ。

「フェミーマ。……俺、多分不甲斐ない夫になるだろうけど、見捨てないでくれ」

「うん。……私だって、不甲斐ない奥さんにしかなれないよ。でも、それって釣り合いが取れてて丁度いいんじゃない？ それに……。私、柚希夜にプロポーズされて、とっても嬉しい」

そう言って頬を赤くして微笑むフェミーマに、柚希夜も気持ちが

和んだ。

そして、暖かな空気に包まれた二人は、実に幸せそうに微笑み合
った――。

（終）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3881s/>

時と宇宙（そら）を越えて～番外編～

2011年10月8日17時24分発行